

海外果樹農業情報 No.135

2017-3

# 海外の果樹産業ニュース

## 2017年度下期版

2018年3月

公益財団法人 中央果実協会

[JAPAN FRUIT ASSOCIATION]

本書の内容について、ご質問やお気づきの点がありましたら、  
下記あてにご連絡下さるようお願ひいたします。

**公益財団法人 中央果実協会 情報部**

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

【電話】03-3586-1381 (代)

【FAX】03-5570-1852

## はしがき

果樹農業を取り巻く国際化の進展に伴い我が国の果樹産業は、外国産果実及びその加工品等との競争が激化している状況にあります。このような我が国の果樹産業を取り巻く環境の変化に対応して、当協会では関係機関・団体等からの海外果樹関係の情報ニーズを踏まえ、海外における果実及びその加工品等の生産・流通事情等に関する情報の収集・提供を行うことにより、我が国果樹産業の活性化・振興及び果実の需給・価格の安定のほか輸出の振興にも資することとしております。

当協会では、これまで特定のテーマを対象とした調査報告書、果樹全般についての FAO（国連食糧農業機関）の生産・貿易統計データをもととした報告書を取りまとめ、刊行してきました。

加えて、海外の果樹産業を扱う雑誌、新聞、ウェブサイトから我が国果樹産業に密接に関係する記事や公表資料を翻訳し関係者に提供していますが、この度 2017 年度下期に提供したニュースを取りまとめ刊行することといたしました。

本書が最近の世界の果樹産業事情を理解する上で少しでもお役に立てれば幸いです。

なお、本書の翻訳責任は当協会にあることを申し添えます。

2018 年 3 月

公益財団法人 中央果実協会

理事長 弦間 洋



# 目 次

1	好調なワシントン州のリンゴ販売	1
2	世界のリンゴ市場(2)	2
3	中国のリンゴ輸出業者が抱えるジレンマ	5
4	オーストラリアのリンゴは上位等級割合が減少	6
5	ワシントン州東部の1月のリンゴ園	7
6	フランスが新たな販売規制を計画	8
7	2017年、中国のリンゴ貿易統計	9
8	イタリアの卸売業者、小売業者が「yello」に感謝	10
9	スペインのマンダリン新品種「マンダノバ」	11
10	米国のリンゴ新品種エバークリスピ	12
11	2017/2018年世界のカンキツ市場と貿易動向	13
12	米国で販売が好調なリンゴ品種パザス(Pazazz)	20
13	世界のブルーベリー市場	21
14	スペイン産カキのシーズン後半販売状況	25
15	海外市場を目指すカリフォルニアのマンダリン	26
16	2017年のチリの果実輸出は9%減少	27
17	EUのカンキツ事情	28
18	中国のカンキツ事情	34
19	オーストラリアのカンキツ事情	41
20	世界のマンダリン市場(2)	44
21	フロリダ州のカンキツ生産予測さらに減少	47
22	世界のレモン市場	48
23	スペインのカキが霜による被害	50
24	欧州のファイブ・ア・ディ	52
25	エジプトのカンキツ事情	53
26	ブラジルと米国の研究者がカンキツグリーニング病で成果	58
27	チリのアボカド事情	59
28	サクランボ新品種 Frisco	62
29	カリフォルニアのブドウ輸出減少	63
30	メキシコのアボカド事情	64
31	世界のバナナ市場	66
32	ニュージーランド政府がキウイの研究開発を支援	70

33	タイの果実貿易この1年	71
34	韓国のベトナムへのナシ輸出が急拡大	73
35	リンゴ品種 KIKU®のシーズン始まる	74
36	米国における輸入果実の割合は増加	75
37	カリフォルニアのレモンは減収	76
38	カリフォルニアのカキは需要が強いが供給は少ない	77
39	世界のアボカド市場	78
40	カリフォルニア産ネーブルは供給量が減少の見込み	82
41	2017年の中国のリンゴ市場分析	83
42	パナマ病 TR4に耐性のあるバナナを開発	84
43	米国リンゴ協会は供給量が豊富との報告	85
44	中国産シャインマスカット市場で最高評価	86
45	中国の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情	87
46	フロリダのカンキツ生産量予測はさらに減少	93
47	世界のパインアップル市場	94
48	世界のリンゴ市場	98
49	台湾の落葉果樹(リンゴ)事情	101
50	チリの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情	103
51	ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ、ナシ)事情	111
52	米国の人一人当たり果実消費量が増加	116
53	フィリピンが日本にバナナ等の関税の引き下げを要請	117
54	ペルーの生食ブドウ事情	118
55	EU28カ国(ヨーロッパ)の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情	120
56	世界のカキ市場	130
57	フランス政府が食品価格決定の仕組みの変更を提案	133
58	Kissabelブランドによる果肉の赤いリンゴ新品種	134
59	米国ワシントン州のリンゴ生産情勢	135
60	中国のクリ輸出価格は下落	138
61	カキ、カリフォルニア州で生産拡大、スペインでは減収	139
62	2016/17年産の米国(USA)のカンキツ生産見通し	141
63	世界のザクロ市場	143
64	台湾、ベトナムに輸出を目指すイタリア産リンゴ	146
65	中国で「日本アオモリリンゴ」が消費者に美味しさを提供	147
66	ハリケーン・イルマでカンキツに7億6千万ドルの被害か	148
67	米国食料品小売市場の将来見通し	149
68	中国のクリ 北南市場での大きな違い	150

69	スペイン産のカキのシーズンが始まる	151
70	米国今シーズンの果樹生産見通し、カキの輸入	152
71	リンゴ新品種アンブロージア収穫始まる	153
72	ハリケーン「イルマ」によるカンキツ被害	154
73	韓国のリンゴ事情	156
74	褐変しない遺伝子組換えリンゴ米国で販売	159
75	アジア市場を狙うニュージーランドのリンゴ2品種	160
76	世界のキウイ市場	161
77	チリの果実貿易	164
78	世界のマンダリン市場	167
79	フロリダ州のカンキツ被害、カリフォルニア州のオレンジ生産予測	171
80	米国が日本からのカキの輸入を認可	172
81	リンゴのクラブ制の功罪	173
82	オーストラリアでのリンゴ品種 Kanzi の販売	177
83	米国で開発中の火傷病対策技術	178
84	中国から米国に有機モモを輸出	179
85	フロリダのカンキツに新たな脅威	180



# 1. 好調なワシントン州のリンゴ販売

ASIAFRUIT 電子版 (2018年2月15日)



「インドが中国産リンゴに対して輸入禁止措置を講じたことにより、南アジア地域においてワシントン州のレッドデリシャスに対する需要が増大している」とワシントン州リンゴ委員会の Fryhover 会長は表明している。

加えて、先頃インドネシア政府が輸入許可証を発行したことにより、同国においては果実輸入が急増している。

「こういった状況を受け、ワシントン州産のレッドデリシャスの他市場への出荷量は減少し、価格が上昇している」と2月7日、ベルリンで開催されたフルーツ・ロジスティカで Fryhover 会長は関係者に語った。

「今シーズンはインド及びインドネシアでレッドデリシャスに対する非常に大きな需要がある。インドでは既に昨年の輸出量を上回っている。中国からの輸入が停止しているため、インドに対する関心は大変大きい。同時にインドネシアでは輸入許可が出されたところであり、同国市場への供給を目指している」と会長は述べている。

一方、ベトナムはレッドデリシャス以外の品種に対する需要が根強く、成長を遂げている市場である。「6年前はワシントン州からの輸出量は40万箱であったが、今シーズン(2017/18年)は130万箱の輸出が見込まれる」とワシントン州リンゴ委員会では説明している。「ベトナムにおける小売業のインフラは素晴らしい発展している。新しいタイプの果実小売店も登場し、プレミアム品種が販売されている。需要が大きいので価格は天井知らずだ。ベトナムでは様々な品種を受け入れてくれる。品種の多様性はワシントン州のリンゴ業界の動きと符合する」と Fryhover 会長は語っている。

コズミッククリスピはハニークリスピとエンタープライズを交配して生まれた新品種である。この品種はワシントン州内の協力生産者及だけに栽培が許可されている。2017年には70万本が植栽され、今年中には310万本が植栽される。2019年までには500万本が植栽される予定だ。

「慣行栽培による新品種の生産だけでなく、ワシントン州では有機栽培の拡大にも力を入れている」と Fryhover 会長は語っている。「今年の有機リンゴ生産量は150万箱を見込んでいる。来年には200万箱に達するだろう」とのことだ。「特に、英国市場では、今年は欧州で不作であることから、ワシントン州産の有機リンゴの輸入が『驚異的に』増加している。主な品種はガラである」とも付言している。「既に英国へ6.6万箱の有機栽培のガラを輸出した。昨年に比べると326%増である。ワシントン州の有機リンゴは益々成長を続けるだろう」と締めくくった。

## 2. 世界のリンゴ市場(2)

FreshPlaza 電子版 (2018年2月16日)



欧州のリンゴシーズンは例年より早く終わろうとしており、業者は南半球からの仕入れに目を向けています。南半球では収穫が始まっていますが、欧州からの需要が多い。問題は、南半球から十分な量を供給できるかである。世界リンゴ・ナシ協会(WAPA)の生産予測によると、南半球の生産量は前年と同程度のようだ。南半球諸国は、近年アジアを有望な市場と捉えており、欧州への供給はタイトである。このため、欧州の業者は新しいリンゴ供給国を模索している。例えば、スウェーデンの業者は、初めてウクライナからの輸入を行った。ウクライナでは今シーズンの生産が例年並みであったことが幸運であった。スペインの業者は、特にゴールデンデリシャスが高値で販売できた。スペイン以外の欧州各国ではゴールデンデリシャスは霜害のため収量が少なかったためだ。

WAPA の最新予測によると、南半球のリンゴ輸出量は1,645,848トンとなっており、前年に比べて約2万トン多いと見込んでいる。生産量は前年と同程度の530万トンと予測している。

### ニュージーランド:例外的に良いシーズンを迎える

早生リンゴの収穫は既に始まっている。生産条件は「例外的」に良好のことだ。産地では降雨があり、灌漑水は十分な量が確保されている。専門家によると、日射量と気温も1998年以降で最高の条件がそろったとのことだ。このため品質は素晴らしい、生産量も前年をやや上回っている。ドイツが最大の輸出先で、次いで英国、米国、台湾の順である。輸出先は80カ国に上る。

ニュージーランド・リンゴ・ナシ会社によると、新規植栽、選果施設や冷蔵施設の整備のために投資が引き続いているようだ。栽培面積は前年より3%増加している。ブレイバーンのような従来型の品種に代って、ジャズ、エンヴィ、パシフィックなどの新品種が増加しており、これら新品種に対する需要は大きい。

2005年にはロイヤル・ガラとブレイバーンが輸出量の77%を占めていたが、現在では40%に減少している。この理由の一つは、多くの新品種を幅広く生産しているからだ。2005年にはアジア向け輸出の割合は13%に過ぎなかったが、近年は50%に達している。ニュージーランド・リンゴ・ナシ会社によると、この急激な増加はアジア諸国における経済発展のお蔭のことだ。

### 南アフリカ:生産量は減少するも北半球からの需要は多い

収穫は既に始まっている。生産量のシェアは低いもののフリーステート州から収穫が始まり、西ケープ州が続いている。春先の気温が冷涼で開花が遅れたために生育はやや遅れている。ブレイバーンの収穫は始まったばかりであるが、パノラマ・ゴールデンについては、既に収穫作業が終了した生産者もいる。早生品種の品質は良好であるが、日焼け果が今後の課題である。果実サイズは小さいと見込まれている。

シーズンの始まる前に Hortgro が公表した予測では、生産量は前年を8%下回ることである。この予測に基づくと12.5kg入りの箱で3,100万箱の収穫量となる。業者の見解では、5~10%生産量が減少することだ。

通常、この時期には冷蔵スペースは既に予約で一杯であるが、今年は余裕がある。これは、生産量が減少すると見込まれているからだ。この週末までに既に550万箱が主にアフリカ、アジア諸国を対象に輸出された。業者は北半球からの需要は大きいと期待している。

## アルゼンチン

アルゼンチンでは急速に生産コストが上昇しているため、危機的状況に直面している。このため、政府と業界は協力して、可能な限り影響を回避するための努力を払っている。輸出業者は、この危機に対応するため、欧州への輸出拡大を進めている。アルゼンチンの主な輸出先は欧州と米国であり、この他、ブラジル、メキシコ、カナダ、東欧、中東、極東へも輸出を行っている。国内市場でも相当程度の販売が行われている。

## インド:ニュージーランドによる技術協力

ニュージーランドの業界は、インドのヒマチャル・プラデーシュ州の農民を支援するための協定に署名した。同州はインド北部に位置し、リンゴ生産量の85%を占めている。ニュージーランドの業界は同州におけるリンゴ生産の振興を支援することとしている。

## 米国:東海岸では市場は好調

東海岸におけるリンゴの供給は順調である。業者によると販売は計画通り進んでいるという。供給の過剰ではなく、需要の大きい品種もある。ニューヨーク州のリンゴ生産量は前年に比べて多く、「収穫は順調でサイズも大きく、昨年とは大きな違い」とのことだ。

伝統的な品種であるエンパイア、マッキントッシュ、ジョナゴールドは供給も需要も安定している。その他の品種である、ガラ、ふじ、ハニークリスピ、コルでは需要が伸びている。ニュージーランドからの輸入リンゴは高値で販売されている。

## ポーランド:遠方への輸出向けには品質は不十分

春先と初夏に被った霜害により、業者としては難しい状況にある。ある業者によれば、「生産者にとっては高価格で販売できるため、今年の状況は良い」と言うものもいる。「供給量が昨年より30%少ないため、価格は倍となっている。様々な市場からの引き合いが多い。しかし、遠距離輸出に当たっては品質的に問題があるため、欧州市場に注目を絞っている」とのことだ。

現時点では市況は良好であるが、いつ何時状況が変化するか分からぬ。ポーランド産のリンゴの供給は、ここ3~4ヶ月は十分に確保されているが、冷蔵貯蔵庫から出荷される時期に品質がどうなっているか予測が困難であるからだ。霜害ではジョナゴールドとジョナゴレッドの被害が多くいたため、両品種が最も早く出荷が終了すると見込まれる。アイダレッド、ゴルスター、リゴール、ガラ、ゴールデンデリシャスの供給余力は十分にあるので、その後の供給ギャップは埋められると見られる。

「貯蔵庫に収納されているリンゴの品質が悪かったとしても、生産者にとって大きな問題にはならない」と業者は語っている。「既に生産者に支払われた価格は高く、昨シーズンの赤字を埋め合わせる支払いを受けた場合もある。従って生産者にとってリスクは小さい」とのことだが、販売業者にとっては、この先課題の多い年になりそうだ。

## スウェーデン:新たな輸入先を求める

生産量が減少したため、価格は上昇している。輸入業者は南半球産に代る輸入先を求めており、ある輸入業者は、今年、初めてウクライナから輸入を行ったが、品質は満足いくものだったそうだ。輸入業者によると、今年のポーランド産リンゴには品質的に失望しており、他の輸入市場を開拓する必要があったとのことだ。ウクライナ産のガラ、ゴールデンデリシャス、グラニースミス、ふじ、フロリナは満足いく水準であったようだ。

## **オランダ: リンゴ市場は引き締まる**

霜害の影響を受け、オランダ及びベルギーでは供給量が減少している。このため、価格は高値で安定しており、需給ギャップは来シーズンの収穫が始まるまで続きそうである。その一方で、欧州外からのリンゴの輸入が期待されるが、市場のギャップを埋めるには十分ではなさそうだ。ここ数週間の価格動向を見ると、オランダ産のエルスターのドイツ卸売価格はキロ当たり1.45ユーロで15セント上昇している。

## **イタリア: シーズンの終了は早い**

シーズンの約半分が経過し、流通業者はこれまでの結果に満足している。シーズン当初に予測された好調な販売傾向が持続している。業者によると、「過去10年間見たこともないような例外的な年」だそうだ。とはいえ、これは「生産者が損失に対処しなくても良い」ことを意味するものではない。実際に、生産量は25%減少し、品種別に見ると、ロイヤル・ガラ(15%減)、レッドデリシャス(26%減)、ブレイバーン(34%減)、ゴールデンデリシャス(45%減)、ふじ(4%減)、ピンクレディー(15%減)で減収であった。その他の品種には順調なものがあり、グラニースミスは前年と同程度、カンジとエンヴィは新植が進んだことから増加し、他の品種の減収分を幾つかでも補っている。

特にドイツとイタリアでは主力品種(ゴールデンデリシャス、ジョナゴールド)が減収したため、価格は高い。

販売は順調に推移しており、年末までは確かに好調であった。しかし、今シーズンは早い時期に終了することが見込まれている。2月1日現在の貯蔵量は、前年よりも33%減少している。中でもゴールデンデリシャスは、前年よりも50%少ない。また、ロイヤル・ガラは3月の上旬に販売が終了すると見込まれる。一方、クラブ制品種のカンジ、ピンクレディーの販売は4月下旬又は5月上旬まで続くようだ。いずれにせよ、シーズンの終了は、昨年よりも1ヶ月早まりそうである。デッドデリシャスは5月までで終了し、エンヴィは今月末まで、アンブロージアは今後数週間で終了しそうだ。別の業者によると、本来は春に販売されるピノバの販売を既に開始したことだ。

アジア市場、特にインド、スリランカ、モンゴル向けの輸出アクセスの改善に向けた努力が現在進行中である。しかし、輸出業者は品不足に対処しなければならない。ある業者によると、昨年の10%しか輸出できないと話している。

## **フランス: 霜害で売上は減少**

2017春の霜害は大変に厳しく、この影響で、中部及び北部欧州では需要が供給を大きく上回っている。フランスの生産者もこの霜害を免れることができなかつた。果樹園の中には、これまで凍結を経験したことがなかったものもあるそうだ。品質が低下したリンゴの販売を望まず、大量に処分されたものもあり、販売数量は計画量よりもさらに減少したようだ。収穫量が減少すれば、南半球から輸入しなければならないが、問題は欧州の需給ギャップを埋める量のリンゴが調達できるかどうかである。業者は、十分な量を輸入できないと見込んでいる。

## **スペイン: 欧州市場の不足で恩恵**

欧州の大部分の国で生産量が減少したことから、減収の影響を受けなかつた国は恩恵を受ける。それがスペインである。スペインでは平年作であったことから、生産者や販売業者、特に大量のリンゴを販売する者は高価格を享受している。ゴールデンデリシャスの場合は記録的な高値であり、その他の品種も押し並べて高価格である。特に、果実サイズの大きいリンゴは高値である。収穫が始まった8月は前年と同程度の価格であったが、その後、数ヶ月で価格は上昇した。現在ゴールデンデリシャスはキロ当たり70セントで取引されている。バラ売りでの需要はイタリアで強く、イタリアで梱包されてものが同国内で販売されている。スペインでは、通常、消費量の半分はイタリアからの輸入であるが、業者は「今年のような年はシェアを奪還したい」と述べており、次期収穫シーズンは在庫ゼロからスタートできそうだ。「高価格を受け、生産者は売り急いでいる」とのことだ。

著者: Rudolf Mulderij

### 3. 中国のリンゴ輸出業者が抱えるジレンマ

FreshPlaza 電子版 (2018年2月15日)



リンゴはいつも心配の種になっている。中国のリンゴ輸出量は、2016年には世界で最大であったが、2017年に入って減少している。

陝西省は中国で最大のリンゴ産地であるが、2016年からは初めてマイナス成長を示している。

ここに至った要因は様々で、例えば、リンゴ生産者の収入の減少、古い園地が改植を必要としていることなどである。

また、市場は供給過剰に陥っている。

ここ数年、リンゴ市場は極端な価格変動と多くの苦難を経験してきた。

わずか1年前はリンゴの価格は安定しており、価格水準も合理的なものであった。しかし、中国がリンゴを輸出する相手国は、中国に比べれば経済発展が劣っているため、輸出による収益は大きいものではなかった。

以下は、リンゴの輸出が困難になっている理由である。

1. 通貨に対する再評価が行われ、人民元が高くなった。このため、輸出による利益が出なくなつた。
2. 出荷用の段ボールの価格が50%値上がりした。
3. 人件費が毎年上昇している。
4. 最大の中国産リンゴの輸入国であったイン

ドが、昨年5月以来、中国からの輸入を禁止している。

5. 検疫証明を要求されるため、中国産リンゴの輸出がいつでも止められる可能性があるという心配がある。

実際、国内向け出荷量に比べれば、輸出量の割合は大きいものではない。しかし、こういったリスクが心理的な影響を与えるため、誰もがパニックに陥り、市場に対して不安定な作用をもたらしている。

情報源:iFresh

## 4. オーストラリアのリンゴは上位等級割合が減少

FreshFruitPortal 電子版（2018年2月8日）



今週公表された2018年のリンゴ、ナシの予測では、生産量は前年に比べて3%増加するものの、上位等級であるクラス1のリンゴの割合は7%減少するとのことである。

豪州リンゴ・ナシ会社(APAL)の2018年予測によると、リンゴ及びナシの生産量は413,082トンであり、前年の400,902トンを上回るとしている。

このうち、リンゴの生産量は296,941トンで前年をわずか1%下回るだけであるが、クラス1の出荷量は7%も減少すると見込んでいる。

2017年の出荷量に占めるクラス1の割合は

72%であったが、2018年は67%に低下するとの見込みだ。

一方、ナシは対照的で、2018年の生産見込量は116,141トンと前年を14%上回り、クラス1の割合は6.5%としている。

「2018年は、生産者にとって厳しい年であり、リスクが多くかった。地域によっては生産が順調であったが、地域によっては雹害が甚大で、忘れてしまいたいほどだろう。クラス1の割合が下がるのは、南オーストラリア州のアデレード・ヒルズを10月下旬に襲った雹害のせいであり、95%の地域で被害があり、70%の果実に何らかの影響があった。損害はかなり深刻であるが、影響のあった70%の果実のうち、約半分はクラス1かクラス2に分類されて救済されると見込みだ。ただし、小売が損傷を許容レベルと認めるかにかかっている」とAPALは述べている。

ゴールバーン・バレー(ビクトリア州)、ビクトリア州南部、バットロー(ニューサウスウェールズ州)、クイーンズランド州、タスマニア州などの多くの地域でも何らかの降雹があったが、品質基準に影響を与える程ではなかった。

雹害は生産予測に影響を及ぼしたが、他にも品種構成や各産地の変化が生産予測に関わっている。

生産量トータルでは大きな変化はなかったが、詳細を見てみると、オーストラリアのリンゴ、ナシ業界が大きな変化を遂げていることが分かる。

### 品種構成の変化

クリップスピンク(商標名ピンクレディーの品種名)の生産量が最も多く、全体の1/3を占めており、(栽培と販売が)管理された品種が引き続き増加していることが読み取れる。「その他」のクラブ制品種は28%増加し、31,075トンに達した。これは、リンゴ生産量全体の10%を占める量であり、昨年の8%から増加している。

ガラの占める割合は22%で、2017年の20%よりも増加している。グラニー・スマス2017年の19%から1.5%に減少しているが、2019年には回復が見込まれる。

一方、Sundowner™として販売されているクリップス・レッドは、国内の小売業者の人気がなく、引き続き減少し、2018年は3,856トンと2015年には16,604トンあった生産量に比べると77%減少する見込みだ。ゴールデンデリシャス、レッドデリシャスも減少を続けているが、クリップス・レッドほど減少の割合は大きくない。

クリップス・レッド、ゴールデンデリシャス、レッドデリシャスの減少の代わりに増加しているのはクラブ制品種である。利用可能なデータが少ないため、「その他」品種として公表されているが、この中にはクラブ制品種のジャズ、カンジ、ブラボ、エンヴィ、Modi、Smitten、Rockitなどが含まれている。

## 5. ワシントン州東部の1月のリンゴ園

FreshPlaza 電子版 (2018年2月5日)



冬も半ばにさしかかり、主任園芸専門家で果樹園のリームリーダーである Gleason は2018年のリンゴ生産の準備に追われている。この時期、チームは剪定、整枝作業で忙しく、果実をならせる芽の選別作業を進めている。

Gleason は適正に果実を実らすため、どの程度の剪定をすれば良いかを議論している。「1樹当たり100～150、大木の場合は350～400の果実は着くようしている。果実が十分な大きさに育ち、形状も良く、太陽光を十分浴びるようにするために、完璧な場所に芽を配置しなければならない」と語る。

Superfresh Growers 社は、近代的な作業台車(プラットフォーム)を使うことによって、作業の効率化、安全性を高めることができるとしている。「ハシゴを使っていた時代には、十分な技能を持ち、安全に作業できる人材は限られていた。プラットフォームを使うことによって、遙かに良い仕事ができる。誰もが作業に取り組むことができ、慎重に注意深く仕事を進めることができる。

結実させる芽を離して配置するために、どの枝を取り除くかを考えながら作業が行われている。「1つの芽から5～7つの花が咲くので十分なリンゴを確保することは可能だ」と Gleason は説明する。訪れる春を想像しながら、1月の作業を振り返り、「温暖で素晴らしい春を期待している。満開の時期には香しい花で満たされる」と語った。

情報源:[www.superfreshgrowers.com](http://www.superfreshgrowers.com)(動画が掲載されている)

## 6. フランスが新たな販売規制を計画

EUROFRUIT 電子版 (2018年2月1日)

今週、フランスは全国の食料品店で、「一つ買ったら一つおまけをする」という取引を禁止する計画であることを発表した。これは、所得に苦しむ農家の収益を保証するとともに、先週の出来事である「ヌテッラの暴動（訳注：値引き販売のために消費者が購入を争った事件）」のような醜い騒ぎを回避するためでもある。

この動きは、食料や農業に関するより広範な法律が狙いとする、最低価格を引き上げ、値引き販売を抑制しようとする一環であり、同時に食品廃棄をなくすことも目指したものである。

この新たな手法は2年間の試行期間を設けて実施を目指すとしており、スーパーによる34%以上の値引きを禁止することを意図している。従って、「二つ買ったら一つおまけをする」という取引は引き続き許可されることになる。

消費者選択センター（CCC）は規制反対派で超保守的な億万長者 Koch 兄弟と繋がりがあるロビーグループであるが、同センターの欧州担当マネージャーの Bertoletti 氏によると「こういった手法は農業分野や農家を助けることになるかも知れないが、低価格を願っている消費者を傷つけるものだ」と反論している。

また、「これはフランスの農民の利益をその他の市民の利益よりも上に置こうとする現れのもう一つの事例だ」とも語り、「『一つを買うと一つをおまけする』ことを違法とするのは、農家を豊かにするかも知れないが、家族のために安い食料品を手に入れようとする市民を犠牲にするものだ」と話している。

一方、農業大臣の Travert 氏は、この動きは、「食料品以外の商品のマージンを削って農業生産者により多くの利益を与えようとするものであり、小売業者に新たな風を送るものだ」と発言している。

なお、2016年に英国の政府系金融支援センターが行った調査結果によれば、誤解を招くような誘惑的な取引により、消費者は平均して1週間に21%の計画外の出費をしているという。

## 7. 2017年、中国のリンゴ貿易統計

FreshPlaza 電子版 (2018年1月31日)

中国の2017年における中国の生鮮リンゴの輸出量は133万トンで、輸出額は14.6億ドルであった。これらの数字は前年と同程度である。一方、輸入量は6.8万トンで、前年を2%上回ったが、輸入金額は1.10億ドルで、前年に比べて7%下回った。

12月だけで見ると、2017年の輸出量は17.4万トンで、前年同月の輸出量を3.12%下回ったが、輸出金額は1億9,150万ドルで、前年同月を8.02%上回った。

2017年の輸出量が133万トン、輸出金額が14.6億ドルであったことは、引き続き世界で最大のリンゴ輸出国の位置づけを維持したと言え、2016年の輸出量は130万トンをやや上回った。中国からの輸出先上位5カ国は、バングラデシュ、フィリピン、インド、タイ、インドネシアであった。

省別の報告書によると、3大輸出産地は、山東省、陝西省、遼寧省である。山東省の輸出量は前年に比べて5.91%減少した。陝西省の輸出量は前年を2.28%上回った。遼寧省の輸出量は前年から13.74%減少した。

2018年の輸出に関しては、インド、インドネシアが輸入規制を行っていることから、楽観的な観測を行うことは難しい。

一方、2017年の輸入に関しては、最大の輸入先は米国であり、2.9万トンでトン当たりの価格は1,539ドルであった。次いでニュージーランドが2.2万トンでトン当たり2,135ドル、チリが1.3万トンでトン当たり1,319ドルであった。ポーランドからの輸入の拡大も予想されたが、通関統計によると輸入量は1,130トンにとどまり、輸入金額は102万ドル、トン当たりの価格は905ドルであった。ポーランド産からの輸入は、価格は好調と言えたが、輸入量は期待に比べて多くはなかった。

情報源: Shanghai Fruit Industry Association/Fruit Branch of the Chamber of Commerce

## 8. イタリアの卸売業者、小売業者が「yello」に感謝

FreshPlaza 電子版 (2018年1月30日)



リンゴのブランド yello®は大変に高い評価を受けた。昨年12月にまとまった量の販売があり、様々な流通経路を通じて絶賛する声が寄せられた。

2017年の終盤に南チロル果物生産者協同組合(VOG)はイタリアの主だった都市であるミラノ、ベローナ、トレヴィーゾ、ボローニャ、パガーニの卸売市場で数多くの販売試験を行った。その後、イタリア中央部の流通チェーンを通じて販売を行った。何れも、消費者からは、yello®の持つ甘さ、ややエキゾチックな風味、歯ごたえに対して高い評価が寄せられた。

「まだ流通量は少ないが、将来性は極めて有望だ。この超甘いプレミアムブランドに投資したことに関し成功を確信している」とVOGのディレクターのGerhard氏は語っている。

yello®は日本で育成された品種で、イタリアのアルト・アディジエ地域で栽培が行われている。欧州では(訳注:長野県とライセンス契約を行った)VOGとヴァルヴェノスタ協同組合(VI·P)のコンソーシアムが独占的に販売を行う権利を持っている。日本での品種名は「シナノゴールド」で、yello®というブランド名で60カ国において商標登録がされている。この品種は「ゴールデンデリシャス」と「千秋」を交配して育成されたものであり、欧州では2016年11月にデビューした。

イタリアに加えて、オランダ、ベルギー、スペイン、ドイツでも販売試験が行われている。VOGとVI·Pのコンソーシアムはその他の欧州各国にもサンプルを送っているが評判は上々だったとのことだ。

「人々は風味と優れた貯蔵性を賞賛している。生産量が増える来年への期待は大きい」とVI·Pの販売マネージャーのZanescoは語っている。

(訳注)英語の「yellow(黄色い)」と「hello(こんにちは)」を組み合わせた造語「yello」を商標として登録したとされている。

## 9. スペインのマンダリン新品種「マンダノバ」

FreshPlaza 電子版 (2018年1月29日)



「この品種の最大の特徴は種無しであることであり、マーケティングに当たって最も基本となる特性を有し、生産者にとっても歓迎される」と植物品種オペレーター協会(ASOVAV)の会長は語っている。「マンダリンは子供が多く消費する果実であり、種無しであるということは、食べやすく、種で窒息する心配もなく商業的価値が高い」と述べている。

マンダノバの収穫と販売時期は11月から1月下旬にかけてである。「皮は厚く赤みがかったり、剥きやすい。さらに、同じ時期に収穫されるマンダリンやクレメンティンと違って降雨に耐性があり、過剰な水分があつても問題にならない」と Agrupación de Viveristas de Agrios (AVASA)の技術部長は説明している。「唯一の欠点はアルテナリア菌に対する感受性が高いこと」だそうである。

専門家によると、この品種は生産性が高く、あまり密植栽培をしなくとも良いとのことだ。「気象条件に適合するかは更に注意深く観察しなければならない。最初の商業的生産までには未だ4年は必要だ」と技術部長は説明している。

保護された品種であることから、栽培や商品の表示を管理するためにクラブ制を導入することが考えられている。「ロイヤリティーの支払いを通じて秩序ある苗木の販売を行うことで、過剰な生産を防ぐことができ、関係者に適切に収益を分配することができる。このような経営モデルがカンキツ生産でも始まろうとしている。マンダノバはそれを可能とする品種である」と会長は語っている。



# 10. 米国のリンゴ新品種エバークリスピ

FreshPlaza 電子版 (2018年1月25日)



最新のリンゴ品種の供給量は限られるものだ。新品種は偶然にできたものであれ、十分に計画されて育種されたものであれ、最初はポジティブにとらえられる。しかし、成功するか否かは、生産者、流通業者、さらには自然のなせる技にかかっている。

## 「ふじ」と「ハニークリスピ」の交配品種

育成者のBill Dodd氏によると、エバークリスピ(EverCrisp)は特別な計画の下で育種したものではなかったそうだ。しかし、大変な成功を納めた。「リンゴを育種するときは誰でも育成しようとする品種の特性に数多くを期待する。だから、普通は望ま

しい特性を持った品種を親にして、両親の有用な特性が引き継がれることを祈りつつ交配する」と彼は言う。このリンゴはふじとハニークリスピを両親として誕生した。何故なら、ふじは秀でた貯蔵性と風味を持ち、ハニーハニークリスピは望ましいパリパリした歯ごたえがあるからだ。

## 最初の食味試験で人気を得た

2005/06年のシーズンには果実を生産するに十分成熟した樹となっていた。このリンゴは既存品種と食味を比較するため、クリーブランドのフード・ショーに出展された。「驚いたことに、何千人の人がこのリンゴを評価して採点した。我々は4日間で250人程度から評価を得れば十分だと思っていたのだが、2千人から評価をもらった。大成功だった」と当時を振り返った。

## 販売が増加

昨年は少量ではあるがリンゴを販売することができた最初の年であった。いくつかの小売業者から約2千ケースが販売された。今年は2万ケースが販売され、来年は10万ケース以上が販売される見込みである。「販売に力を入れているが、これまで順調」とのことだ。

## ミシガン州、ニュー・ヨーク州、オハイオ州で生産

新品種を増産する際の制限要因は、穂木の数である。より多くの苗木を生産するためには穂木を沢山作出しなければならない。2013年までには2千本程度の樹しかなかった。しかし、2014年には3万本、2015年には23.5万本の苗木が販売された。Dodd氏はこの品種が繁殖プログラムの一つとして採用され、広く普及することを望んでいる。現在はミシガン州、ニュー・ヨーク州、アイオワ州で大半が生産されているが、全米32州に広がっている。ワシントン州で栽培されるかどうかは大きな関心事項だ。興味はあるようだが、同州にはコズミック・クリスピという新品種がある。



## 優れた貯蔵性

何時から販売を始めるかは流通業者の判断による。「非常に貯蔵性が良いので、何時販売を開始するかは流通業者の戦略次第だ」とDodd氏はエバークリスピの貯蔵性、日持ちの良さに驚いている。「長期間貯蔵しても歯触りの良さは衰えない。だから、販売時期を遅らせようとする人もでてくる」と考えている。

## オープン品種

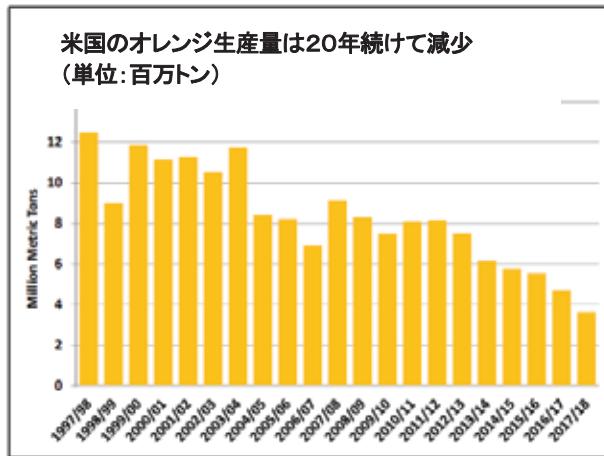
(クラブ制品種でなく)オープン品種であるということも成功をもたらす要因だ。消費者に対してはファーマーズマーケットでも販売できる。「消費者が望めば、様々なルートで販売できることは有利な点だ。加えて、日持ちが良いため何時でも消費者に提供できる。他の品種に比べれば遙かに扱いが良い品種だ。市場と消費者は今後の成り行きを注目しているが、この品種の持つ優れた特性は大きなチャンスをもたらしてくれると思う」とのことだ。

著者:Rebecca D Dumais

## 11. 2017/2018年世界のカンキツ市場と貿易動向

米国農務省海外農業局ホームページ（2018年1月25日）

<オレンジ>



**世界**の2017/18年のオレンジ生産量は、前年より400万トン減少し、4,930万トンになると予測される。中国ではやや生産が増加するものの、悪天候によりブラジル、EU、米国で生産量が減少するためである。加工仕向量はブラジル、米国を中心に370万トン減少し、オレンジジュース生産量は前年を16%下回る170万トン(65度ブリックス換算)になると見込まれる。輸出量は前年と同程度であり、生産量の減少は専ら加工仕向量に影響する見込みだ。

**米国**の生産量は23%も減少し、1997/98年に比べると1/3の水準に落込むと予測される。これはフロリダ州を2017年9月に襲ったハリケーンによる落果、カンキツグリーニング病による生産量の減少、カリフォルニア州を襲った熱波の被害によるものである。フロリダ州産は大部分が加工に向けられ、カリフォルニア州産は生食向けである。輸出量、国内生鮮消費量、加工仕向量はいずれも減少すると見込まれる。

**ブラジル**の生産量は裏年に当たることから、前年を15%も下回る1,730万トンと予測される。また、天候が不順であったことから開花量が少なく着果も悪かった。生産量は大きく落込むものの、2年前に比べれば生産量は多いと予測される。加工仕向量は290万トン減少し、1,230万トンと見込まれ、オレンジジュース生産量は120万トン(65度ブリックス換算)と予測される。なお、生産量の減少は国内生鮮消費量の減少にはあまり影響しないと見込まれる。

**中国**の生産量は、天候に恵まれたことから、前年を30万トン上回る730万トンと予測される。国内生鮮消費量は、生産量の増加、高級品及等に対する輸入需要の拡大から増加すると見込まれる。

**EU**の生産量は、干ばつ等の影響があったことから、前年を8%下回る630万トンと予測される。生産量の減少から加工仕向量及び域内生鮮消費量は減少すると見込まれるが、輸出量及び輸入量は同程度と予測される。

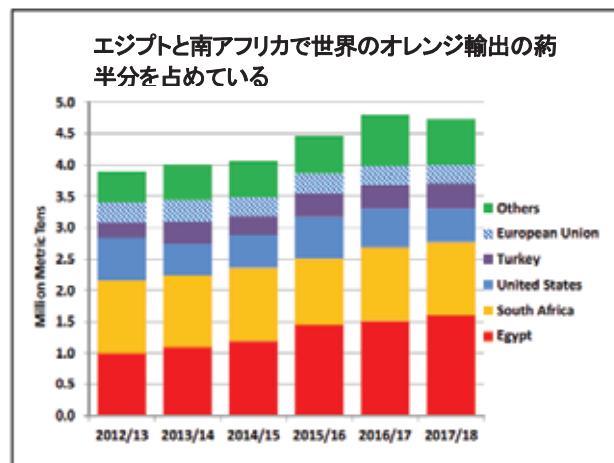
**エジプト**の生産量は、前年を6%上回り、過去最高の320万トンと予測される。輸出量も5%増加し、過去最高の160万トンと見込まれる。2016年11月に行われた通貨切り下げの2年目に当たることも輸出が増加した要因である。エジプトは世界の輸出量全体の1/3を担っている。

**南アフリカ**の生産量は、前年を2%上回る140万トンと予測される。輸出量は過去最高の120万トンと見込まれ、世界の輸出量の25%を占めている。

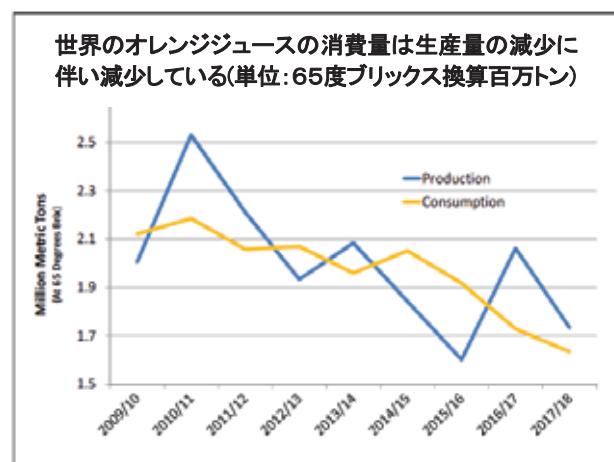
**トルコ**の生産量は、前年を3%上回り、過去最高の190万トンと予測される。国内生鮮消費量及び輸出量も過去最高と見込まれる。

**メキシコ**の生産量は前年をやや下回ると予測される。これに伴い、国内生鮮消費量、加工仕向量も減少が見込まれる。輸出量は、米国向けの拡大が期待できることから、7%増加すると見られる。

**モロッコ**の生産量は、天候が不順であったため、前年を10%下回る93.5万トンと予測される。輸出量は品質が伴わなかつたため、前年より約4割減少すると見込まれる。一方、国内生鮮消費量は若干の減少に留まる見込みである。



### <オレンジジュース>



**世界**の2017/18年のオレンジジュース生産量は、前年を16%下回る170万トン(65度ブリックス換算)と予測される。主にブラジルで昨年の反動から生産量が減少するためである。消費量は米国及びEUを中心に減少が見込まれる。ブラジルと米国の生産量減少から、輸出量と在庫量はそれぞれ8%、9%減少が見込まれる。

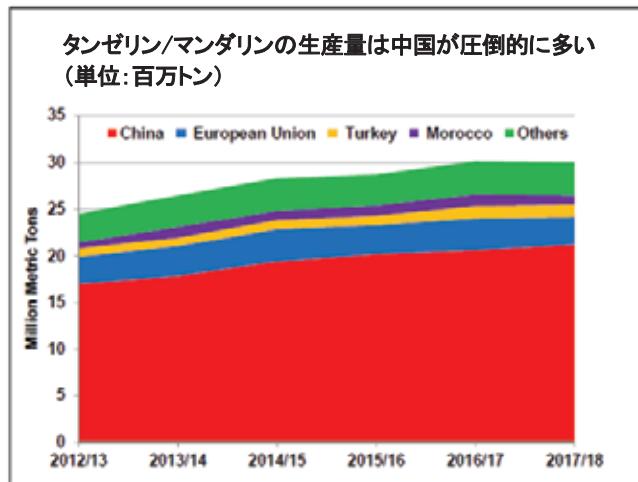
**米国**の生産量は、加工仕向量が減少することから、前年より9.7万トン減少し21.5万トンと予測される。一方、輸入量は10%増加し33万トンと見込まれる。国内消費量は長期に渡る減少傾向が続いている。

**ブラジル**の生産量は、加工用の果実取引契約が大きく減少することから、前年を16%下回る120万トンと見込まれる。連動して輸出量も減少すると見られる。最大の生産国であるブラジルは、世界の輸出量の3/4を占めている。

**メキシコ**の生産量は前年と変わりなく、輸出量も微増と見込まれる。

**EU**の生産量は、オレンジの生産量が熱波及び干ばつにより減少し、加工仕向量が減少することから、前年を12%下回ると予測される。輸入量は前年と同程度であることから、域内消費量は減少が見込まれる。

## <タンゼリン/マンダリン>



**世界**の2017/18年の生産量は、中国で増加するもののEU及びモロッコで減少するため、前年をやや下回る2,990万トンと予測される。生鮮消費量は前年と同程度であるが、輸出量は6%下回ると予測される。

**中国**の生産量は、天候に恵まれたことにより、前年を60万トン上回る2,120万トンと予測される。これに伴い、国内生鮮消費量も増加が見込まれる。中国は世界の70%の生産量及び生鮮消費量を占め、輸出量の1/4を担っている。

**EU**の生産量は、スペインで悪天候に見舞われたことから、前年を13%下回る300万トンと予測される。域内生鮮消費量及び加工仕向量はこれに伴い減少するが、輸入量は変わらないと見込まれる。

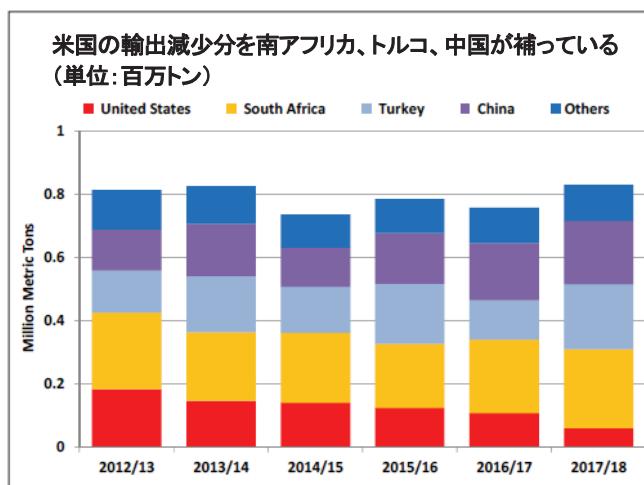
**トルコ**の生産量は前年に比べてやや増加し、過去最高の130万トンと予測される。連動して国内生鮮消費量は4%増加するが、輸出量の増加には結びつかないと見込まれる。

**モロッコ**の生産量は7月・8月に高温に遭遇したため、前年より20%減少し、100万トンと予測される。このため、輸出量も減少が見込まれる。

**日本**の生産量は、天候に恵まれなかつたため、前年を7%下回る99万トンと予測される。国内生鮮消費量も同様に減少が見込まれる。

**米国**の生産量は、カリフォルニア州で天候が不順であったことから、前年を14%下回る77.9万トンと予測される。国内生鮮消費量及び輸出量も減少が見込まれる。

## <グレープフルーツ>



**世界**の2017/18年の生産量は、中国で天候に恵まれ増加したことから、前年を1%上回る660万トンと予

測される。米国ではカンキツグリーニング病及びハリケーンにより減収するものの、これを補う増収があつたためである。輸出量及び生鮮消費量も連動して増加が見込まれる。中国の生産増がなければ、生鮮消費量は減少したと見られるが、輸出量の増加はトルコによりもたらされたものである。

**米国**の生産量は前年から20%以上減少し、48.1万トンと予測される。これは、フロリダ州を2017年9月に襲ったハリケーン・イルマによる落果及びカンキツグリーニング病により減収するためである。生産量の減少により、輸出量、国内生鮮消費量、加工仕向量も減少が見込まれる。

**中国**の生産量は、天候に恵まれたことから、前年を4%上回る480万トンと予測される。国内生鮮消費量及び輸出量も過去最高を記録する見込みである。

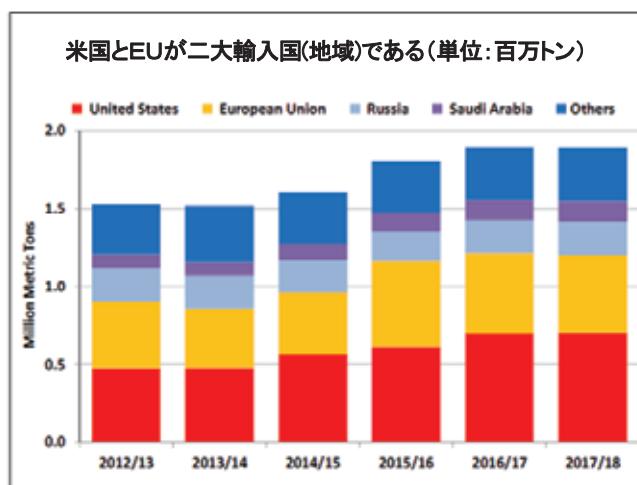
**メキシコ**の生産量及び国内生鮮消費量はわずかに減少し、それぞれ44万トン、33.5万トンと予測される。輸出量もほぼ変わりないと見込まれる。

**南アフリカ**の生産量は、栽培面積が増加したことから、前年を9%上回る40万トンと予測される。これに伴い輸出量も増加し、過去最高を記録すると見込まれる。

**トルコ**の生産量は、前年を5%上回り、過去最高の26.5万トンと予測される。国内では消費が少ないことから、生産量の約80%が輸出されると見込まれる。

**EU**の生産量は、スペインで開花が不順であったことから、前年を16%下回る8.8万トンと予測される。域内生鮮消費量は、中国からの輸入が拡大することから増加が見込まれる。

## <レモン/ライム>



**世界**の2017/18年の生産量は、前年をやや上回る750万トンと予測される。トルコで減少するものの、アルゼンチン、メキシコで生産量が増加するためである。世界の輸出量は、メキシコで増加することから、やや増加し、過去最高となる見込みである。加工仕向量は前年を3%上回ると見られる。

**米国**の生産量は、アリゾナ州で減少することから、前年を2%下回る78.9万トンと予測される。これに伴い輸出量は減少するが、国内生鮮消費量には変化ないと見込まれる。

**EU**の生産量は前年をやや下回る150万トンと予測される。域内生鮮消費量及び輸入量は2%以上減少すると見込まれる。

**メキシコ**の生産量は、栽培面積が増加していることから、前年を8万トン上回る260万トンと予測される。このため、国内生鮮消費量及び輸出量は過去最高を記録すると見込まれる。

**トルコ**の生産量は、高温と降水量の不足により開花及び着果に支障を來したことから、前年を10%下回る6.75万トンと予測される。このため、国内生鮮消費量及び輸出量も減少が見込まれる。

**アルゼンチン**の生産量は、前年の霜害から回復したことから、10万トン上回る140万トンと予測される。このため、加工仕向量及び輸出量も増加が見込まれる。

世界のオレンジの需給

(単位 : 1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18 1月予測
生産量						
ブラジル	16,361	17,870	16,714	14,414	20,400	17,340
中国	7,000	7,600	6,600	6,900	7,000	7,300
E U	5,890	6,550	5,954	6,038	6,779	6,258
メキシコ	4,400	4,533	4,515	4,603	4,640	4,600
米国	7,501	6,140	5,763	5,523	4,685	3,618
エジプト	2,450	2,570	2,635	2,930	3,000	3,180
トルコ	1,600	1,700	1,650	1,800	1,850	1,905
南アフリカ	1,659	1,723	1,645	1,275	1,400	1,430
モロッコ	784	1,001	868	925	1,037	935
アルゼンチン	550	800	800	800	620	850
ベトナム	521	590	566	637	635	635
オーストラリア	435	430	430	455	480	480
コスタリカ	326	315	220	335	322	325
グアテマラ	152	154	161	177	175	175
イスラエル	73	69	86	86	81	90
その他	160	191	145	159	161	161
合計	49,862	52,236	48,752	47,057	53,265	49,282
国内生鮮消費量						
中国	6,405	6,865	6,043	6,446	6,717	7,070
E U	5,382	5,549	5,333	5,406	5,988	5,631
ブラジル	5,421	6,035	5,196	4,940	5,124	5,010
メキシコ	2,887	3,312	2,947	2,929	2,887	2,852
エジプト	1,365	1,385	1,350	1,380	1,380	1,480
トルコ	1,290	1,284	1,310	1,366	1,397	1,450
米国	1,492	1,357	1,263	1,346	1,259	1,008
モロッコ	642	820	688	811	824	800
ベトナム	559	661	602	695	680	680
アルゼンチン	360	524	450	469	330	490
ロシア	511	467	438	470	426	436
サウジアラビア	274	274	448	435	350	350
イラク	261	305	247	262	260	260
オーストラリア	218	206	175	235	210	210
グアテマラ	203	185	185	211	210	210
その他	1,663	1,532	1,475	1,543	1,422	1,432
合計	28,933	30,761	28,150	28,944	29,464	29,369
加工仕向量						
ブラジル	10,935	11,832	11,506	9,466	15,259	12,322
米国	5,470	4,420	4,133	3,684	2,999	2,290
メキシコ	1,510	1,200	1,550	1,650	1,710	1,700
E U	1,069	1,474	1,251	1,286	1,491	1,322
中国	600	715	650	600	580	570
アルゼンチン	113	200	278	270	212	280
コスタリカ	240	220	136	220	225	240
南アフリカ	369	471	403	142	161	185
エジプト	85	85	85	100	100	100
トルコ	95	100	80	100	100	98
その他	196	200	200	129	141	135
合計	20,682	20,917	20,272	17,647	22,978	19,242
輸出量						
エジプト	1,000	1100	1,200	1,450	1,520	1,600
南アフリカ	1162	1,144	1,160	1,064	1,170	1,180
米国	678	506	522	657	609	520
トルコ	244	349	305	371	393	405
E U	322	346	297	319	293	295
オーストラリア	127	126	156	161	230	230
香港	45	49	74	107	172	160
モロッコ	82	111	130	89	163	100
アルゼンチン	77	76	72	65	80	80
メキシコ	31	47	44	56	75	80
中国	83	108	53	74	60	60
ブラジル	20	20	28	24	33	24
シンガポール	7	9	8	8	6	6
イスラエル	7	6	6	6	5	5
マレーシア	3	3	2	2	4	4
その他	1	2	2	3	4	4
合計	3,889	4,002	4,059	4,456	4,817	4,753

輸入量						
E U	883	819	927	973	993	990
ロシア	512	469	440	473	430	440
中国	88	88	146	220	357	400
サウジアラビア	274	274	448	435	350	350
香港	217	230	256	286	305	300
アラブ首長国連邦	201	220	230	222	200	210
米国	139	143	155	164	182	200
カナダ	199	183	190	204	188	190
イラク	169	189	180	189	185	185
韓国	152	100	111	154	143	130
マレーシア	104	100	102	101	100	100
日本	113	87	83	100	92	89
ウクライナ	133	106	69	76	74	75
スイス	68	63	67	71	68	70
コスタリカ	91	77	56	35	52	65
トルコ	29	33	45	37	40	48
ベトナム	38	71	36	58	45	45
シンガポール	45	48	46	44	42	42
グアテマラ	51	31	24	34	35	35
ノルウェイ	38	34	36	38	35	35
メキシコ	28	26	26	32	32	32
オーストラリア	20	16	16	18	20	20
ブラジル	15	17	16	16	16	16
南アフリカ	0	13	13	1	3	10
モザンビーク	35	7	11	5	5	5
その他	0	0	0	4	2	0
合計	3,642	3,444	3,729	3,990	3,994	4082

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

## 世界のオレンジ果汁の需給

(1,000トン(65°Brix換算))

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18 1月予測
生産量						
ブラジル	980	1,230	1,006	859	1,372	1,152
米国	607	476	438	390	312	215
メキシコ	151	126	159	166	171	171
E U	83	114	97	100	116	102
中国	45	55	50	46	45	44
南アフリカ	39	48	55	19	22	26
トルコ	8	9	8	9	9	9
その他	21	25	31	13	16	15
合計	1,934	2,084	1,843	1,601	2,062	1,733
国内消費量						
E U	844	799	937	826	735	717
米国	733	700	674	670	578	510
中国	115	111	99	83	97	96
カナダ	99	94	87	93	86	82
日本	70	68	80	78	72	70
ブラジル	45	35	35	38	38	40
オーストラリア	41	40	40	40	38	38
その他	123	112	100	90	85	81
合計	2,070	1,960	2,051	1,918	1,728	1,634
期末在庫						
米国	384	347	360	294	270	260
ブラジル	334	329	147	6	85	60
E U	15	15	15	15	15	15
日本	15	11	18	13	12	10
韓国	2	1	3	5	5	6
その他	20	30	32	11	7	5
合計	771	733	574	343	394	357
輸出量						
ブラジル	1,110	1,200	1,153	962	1,255	1,137
メキシコ	143	121	153	158	163	164
E U	54	57	50	52	63	65
米国	114	113	81	66	57	45
南アフリカ	22	31	45	35	24	26
その他	29	30	32	32	32	32
合計	1,472	1,552	1,514	1,305	1,594	1,468
輸入量						
E U	815	742	890	778	682	680
米国	302	300	330	280	299	330
カナダ	103	98	91	97	90	85
日本	65	63	86	73	71	68
中国	59	57	49	40	55	55
ロシア	47	45	38	37	35	35
オーストラリア	34	32	32	32	32	32
その他	61	53	47	54	47	48
合計	1,486	1,391	1,563	1,391	1,311	1,332

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

## 世界のマンダリン／タンゼリンの需給

単位：1,000トン

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18 1月予測
生産量						
中国	17,000	17,850	19,400	20,200	20,600	21,200
E U	2,927	3,213	3,474	3,081	3,432	2,975
トルコ	876	880	960	1,040	1,300	1,310
モロッコ	662	1,160	1,003	1,065	1,278	1,020
日本	846	1,124	1,040	933	1,070	990
米国	660	700	810	861	937	799
韓国	667	672	697	635	600	560
アルゼンチン	300	370	350	350	250	400
イスラエル	178	139	205	190	243	265
南アフリカ	171	195	203	226	252	230
その他	202	171	152	154	153	153
合計	24,489	26,474	28,294	28,735	30,115	29,902
国内生鮮消費量						
中国	15,650	16,524	18,053	18,910	19,413	20,060
E U	2,493	2,848	3,206	2,983	3,274	2,905
日本	780	1,041	959	860	989	918
ロシア	789	852	782	724	841	790
米国	642	720	759	769	867	779
トルコ	479	364	368	487	609	634
モロッコ	355	659	657	600	763	600
その他	1,869	1,839	1,743	1,714	1,654	1,654
合計	23,057	24,847	26,527	27,047	28,410	28,340
加工仕向量						
中国	660	600	630	660	650	640
E U	347	385	348	271	372	270
米国	130	131	221	288	308	270
アルゼンチン	63	82	97	110	75	155
日本	81	90	90	87	98	91
イスラエル	30	24	45	40	55	55
韓国	56	93	159	85	56	50
その他	17	20	24	12	15	24
合計	1,384	1,425	1,614	1,553	1,629	1,555
輸出量						
トルコ	406	532	610	575	710	700
中国	702	744	736	658	587	550
モロッコ	307	501	346	465	515	420
E U	404	349	287	250	236	250
南アフリカ	133	153	157	190	211	180
イスラエル	78	78	93	87	120	140
アルゼンチン	87	88	53	50	45	45
その他	48	38	48	42	40	34
合計	2,165	2,483	2,330	2,317	2,464	2,319
輸入量						
ロシア	789	852	782	724	841	790
E U	317	369	367	423	450	450
米国	154	182	212	232	274	280
カナダ	143	117	141	146	155	145
ウクライナ	185	202	125	126	140	140
ベトナム	144	149	158	116	118	110
タイ	135	139	130	149	116	105
フィリピン	57	51	54	68	70	70
インドネシア	77	109	87	60	70	65
マレーシア	76	65	70	69	64	60
その他	40	46	51	69	90	97
合計	2,117	2,281	2,177	2,182	2,388	2,312

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

**世界のグレープフルーツの需給**

(単位 : 1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18 1月予測
生産量						
中国	3,370	3,717	4,050	4,350	4,600	4,800
米国	1,092	950	826	728	619	481
スキシコ	425	424	424	438	444	440
南アフリカ	437	413	387	315	366	400
トルコ	200	235	238	250	253	265
イスラエル	208	236	186	163	149	150
E U	110	92	109	106	105	88
その他	0	0	26	25	25	24
合計	5,842	6,067	6,246	6,375	6,561	6,648
生鮮消費量						
中国	3,257	3,578	3,957	4,224	4,460	4,640
E U	408	417	415	438	395	409
スキシコ	324	328	323	331	339	335
米国	376	346	325	287	274	251
ロシア	141	133	101	117	107	105
日本	134	109	125	105	106	92
トルコ	72	63	96	62	130	62
カナダ	43	42	40	39	38	38
ウクライナ	30	27	15	18	16	16
イスラエル	12	24	8	10	8	8
その他	21	20	17	17	17	19
合計	4,818	5,087	5,422	5,648	5,890	5,975
加工仕向量						
米国	545	470	370	333	262	195
南アフリカ	189	203	168	111	129	147
スキシコ	85	84	84	87	88	87
イスラエル	117	134	117	92	80	79
E U	18	16	18	20	19	14
その他	0	0	1	1	1	1
合計	954	907	758	644	579	523
輸出量						
南アフリカ	242	217	221	203	232	250
トルコ	132	177	145	190	125	205
中国	130	165	124	159	180	200
イスラエル	79	78	61	61	61	63
米国	184	147	141	124	108	60
スキシコ	18	14	19	22	19	20
E U	21	19	15	13	15	15
その他	7	8	10	12	17	17
合計	813	825	736	784	757	830
輸入量						
E U	337	360	339	365	324	350
ロシア	141	133	101	117	107	105
日本	134	109	100	82	84	71
中国	17	26	31	33	40	40
カナダ	43	42	40	39	38	38
米国	13	13	10	16	25	25
香港	15	16	15	16	19	20
ウクライナ	30	27	15	18	16	16
スイス	7	7	7	7	7	7
南アフリカ	0	12	7	4	1	4
その他	6	7	5	4	4	4
合計	743	752	670	701	665	680

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

**世界のレモン／ライムの需給**

(単位 : 1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18 1月予測
生産量						
メキシコ	2,120	2,187	2,326	2,416	2,500	2,580
E U	1,179	1,308	1,597	1,331	1,537	1,515
アルゼンチン	1,350	780	1,450	1,350	1,300	1,400
米国	827	748	820	822	804	789
トルコ	680	760	725	670	750	675
南アフリカ	245	312	339	308	397	420
イスラエル	51	64	65	60	67	70
その他	58	55	83	89	95	77
合計	6,510	6,214	7,405	7,046	7,450	7,526
国内生鮮消費量						
E U	1,336	1,275	1,538	1,568	1,687	1,650
メキシコ	1,268	1,332	1,358	1,383	1,377	1,414
米国	926	926	1,004	1,137	1,231	1,229
ロシア	212	209	206	184	212	222
トルコ	258	277	238	200	218	199
サウジアラビア	88	85	103	121	128	135
カナダ	100	99	87	102	97	100
アラブ首長国連邦	80	87	96	93	90	92
アルゼンチン	75	60	70	70	70	70
日本	57	58	75	74	75	69
その他	180	189	172	158	177	185
合計	4,580	4,597	4,947	5,090	5,362	5,365
加工仕向量						
アルゼンチン	996	570	1,195	1,003	992	1,080
メキシコ	330	339	360	374	386	399
E U	192	312	353	243	284	285
米国	269	176	265	190	159	155
南アフリカ	58	80	79	56	81	93
日本	3	3	27	29	31	25
イスラエル	1	3	2	2	4	2
その他	55	60	57	40	40	0
合計	1,904	1,543	2,338	1,937	1,977	2,039
輸出量						
メキシコ	523	519	610	662	740	770
トルコ	369	426	433	434	495	480
南アフリカ	175	220	246	237	300	310
アルゼンチン	280	150	185	280	240	250
米国	110	127	114	110	112	105
E U	77	101	105	69	79	80
香港	7	33	18	17	20	20
その他	11	15	11	14	19	15
合計	1,552	1,591	1,722	1,823	2,005	2,030
輸入量						
米国	478	481	563	615	698	700
E U	426	380	399	549	513	500
ロシア	212	209	207	186	215	225
サウジアラビア	88	85	103	121	128	135
カナダ	100	99	87	102	97	100
アラブ首長国連邦	78	85	94	91	88	90
日本	51	51	51	51	53	55
ウクライナ	63	54	44	41	48	50
香港	26	66	48	37	45	45
トルコ	2	3	3	4	3	4
その他	2	4	3	7	6	4
合計	1,526	1,517	1,602	1,804	1,894	1,908

年産は、北半球は11月→10月、南半球は翌年

## 12. 米国で販売が好調なリンゴ品種パザス(Pazazz)

FreshFruitPortal 電子版 (2018年1月23日)



ミネソタ州に拠点を置く育種会社 Honeybear Brands によると、同社の米国の小売パートナーはパザス(Pazazz)を記録的な売上の下で新年を迎えたとのことだ。

同社によると、11月、12月の販売では、全米でプレミアムリンゴの分野において「比類なき」シェアを獲得し、小売業者に大きな収入をもたらしたとのことだ。

Honeybear Brands 社のマーケティング担当の Roper 副社長によると、「我々は、小売パートナーと消費者のために2ヶ月早くパザスの販売を行った」とのことだ。

「消費者の注目を集め、購買意欲が高まっている。早い段階から販売が好調であったことは印象的であり、2018年の販売はこれまでの記録を破ることになるだろう」とも語っている。

副社長は、小売業者は今年の第1四半期の販売促進のため1月時点で強力に売込を行っており、育種会社としてもパザスが脚光を浴びことになるだろう、と付け加えている。

また、「我々のチームは、現在全米で何百ものデモンストレーションを開催しているが、パザスを購入した顧客からは素晴らしい反応が返っている」と述べている。

副社長は、「消費者に人気があるハニーフルーツ、Kiku、アンブロージア、ジャズに対抗してパザスを販売しているが、一貫してこれらの品種よりも優れている」と誇っている。

(訳注)パザス(Pazazz)は片親がハニーフルーツで、片親は不明とされている。ハニーフルーツよりも晩生の品種である。別の紹介記事の中にはハニーフルーツの後継品種であるとの宣伝もある。クラブ制品種の一つでもある。

## 13. 世界のブルーベリー市場

FreshPlaza 電子版 (2017年1月19日)



ブルーベリーは欧州だけでなく、北米、中国でも市場規模が拡大している。南米諸国は中国への輸出を目指している。東欧諸国は生産に投資を行っており、可能性を見出している。イスラエルでは価格が上昇しているが、消費は衰えていない。スペインでは生産者が懸念を始めている。同国のウエルバでは既に収穫が始まったが、市場環境が4月には厳しくなりそうだ。昨年と同様に、この時期は過剰が生じ、価格が低下すると見込まれるからだ。

### 豊作が見込まれるニュージーランド

昨シーズンは収穫量が少なかったが、今シーズンの販売に関しては楽観的である。天候の影響で品質が悪化する恐れは残っているものの、これまでのところ大変に順調のようだ。業者によると、「今年は温暖な天候の影響で収穫が早まった」とのことだ。収穫された果実は直ぐにパックされるが、収穫は3月末まで続く。温暖な天候の影響で、国内市場でも海外市場でも出荷が早まった。最近の降雨で収穫は幾分遅れたが、影響は最小限に留まっている。業界では面積の拡大のみならず、品種改良の面でも成長を見込んでいる。

隣国のオーストラリアでは、昨年は6,000トンの収穫があった。オーストラリアの業界では、昨年、中国への輸出の優先品目としてブルーベリーを指定して以降、輸出に向けた投資を行っている。

### 中国では消費が引き続き拡大

近年輸入が増加しており、価格も上昇している。1月から3月までは、ペルー、チリ、メキシコから輸入される。昨年からアルゼンチン産の輸入も解禁された。ペルーからの航空便による輸入に支障が生じており、中国の業者によると、昨年よりも品質はやや劣ることだ。また、チリ産も今シーズンは厳しい状況に見舞われた。6月以降は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州産が出回る。

このような中で、需要と国内生産は拡大を続けている。生産者にとって大きな課題は、国内市場への出荷時間が長くかかることと、中国の消費者が糖度の高い果実を望んでいることである。

## **高価格でも消費が衰えないイスラエル**

国内生産量が不足していること需要が拡大していることから、価格は急上昇している。この状況は過去3年間継続している。生鮮果実の価格はキロ当たり20ユーロで推移している。このような高価格にも拘わらず消費者はブルーベリーの購入を続けており、スーパーでの売上は2014年以降上昇している。

イスラエルはブルーベリーの生産に適しているとは言えないため、生産者は成長する販売環境にあって利益を得られないでいる。ブルーベリーの生産には低い夜温と熱波の襲来がないことが必要であるため、国内での生産は同国北部地域に限定される。生産は大部分がガラリア高地とゴラン高原で行われている。しかし、水不足と水利費が高いために生産の拡大が制約されている。新品種の開発を通じて国内生産を拡大する努力が進められているが、成果を出すまでには未だ数年を要するとみられる。

## **イタリア:限られた栽培面積**

業者によると、国内の需要量は欧州東部諸国の需要量に遅れをとっていると考えている。国内では販売されている量はロットが小さい。これはひとえにイタリアではブルーベリーの栽培が容易でないためである。イタリアの主な産地は、トレンティーノ、アルプス、アペニン地域である。卸売価格は年により変動はあるが14~16ユーロで推移している。トリノでは18ユーロ(1クラス、トレイ入、ペルー産)、ローマでは16ユーロ(同)、ベローナでは14ユーロ(1クラス、トレイ入、産地は区々)である。

## **ウクライナ:品質向上のために投資**

生産者は規模の拡大だけでなく、品質向上のためにも投資を行っている。例えば凍結防止装置の導入や同国の栽培に適する品種の探索などが進められている。生産者としては土壌条件と気候が品種決定の鍵を握ると考えている。生産者は供給過剰に対する不安は持っていない。「需要は急速に拡大しており、供給と需要のバランスはとれている」と考えている。「ウクライナでは、中国でみられるように国内市場も成長しており、生産を拡大している」そうだ。現在の輸出先は主に欧州であり、英国が最大の輸出市場で、その他の欧州諸国が続いている。加えて、国内市場も大変に重要である。

## **ポーランド:収穫労働者の不足**

ポーランドでは収穫労働力が益々不足している。生産方式はリンゴを真似て設計されてきたが、収穫に必要な労働力は、現状の2倍とのことだ。さらに、生産者は事務労力が必要なことにも不満を持っているようだ。(労働力としての)ウクライナ人は、オランダやドイツの賃金が高いために、ポーランドに留まる数が益々少なくなっている。ポーランドでは、最近経済状況が良いことから、自ら収穫作業に従事したがらない状況にある。

昨シーズンは、英国市場で価格の変動があったために厳しい状況下に置かれた。生産者は面積の拡大よりも生産性の向上に向けた投資を進めている。

## **ドイツ:東欧の生産事情により問題が発生**

ドイツでは、現在チリからの輸入が多く、他にもペルー、ウルグアイから輸入している。購入価格はキロ当たり2.5ユーロで推移している。カナダ産のブルーベリーもあるが、主に冷凍物で加工業者が購入している。市場では、125g入のパック包装の人気が益々高まっている。レッドベリーとクランベリーは競合品とはなっていない。クランベリーは国産品が出回る時期には人気がある商品だ。

貿易業者は、昨年の夏の東欧産のブルーベリーの生産事情が悪かったため、大変な目に遭遇した。このため、現在貯蔵ものはほとんど存在せず、価格もキロ当たり3.5ユーロと比較的高い。カナダ産は2016年の大豊作の後、昨年は通常の生産レベルに落ちていたため、最低価格は許容可能なレベルまで上昇している。

## **ポルトガル:世界市場での評価はこれから**

シーズンは5月から9月まで続く。生産者によると、毎年栽培面積を拡大しているそうで、これにより輸出量も増加が可能のことだ。業者によると、主な販売先はスペイン、オランダ、ベルギー、スカンジナビア諸国、英国である。品質は良いと業者は語っているが、国際市場でのポルトガル産の評価はまだ定まっていない。

## **スペイン:4月の市場は厳しいと予測**

ウエルバでは今シーズンの最初の収穫が進んでいる。シーズンは7月中旬まで続く。このように早く収穫できるのは品種「スノーチェイサー」のお蔭である。しかし、この品種の生産量は限られている。加えて、現在はペルー、チリからの輸入品があり、年中供給が可能となっている。スペイン産のブルーベリーの収穫のピークは3月/4月である。

業者は、国産品の方が輸入品よりも新鮮であることから、国産品の出回りが早くなることは良いことだと主張している。現に、市場は現時点では好調で、価格は高い。需要と供給のバランスもとれている。しかし、生産量が30%増加する4月には、市況は厳しくなると見られている。昨年はウエルバ産の生産物に過剰が生じ、価格は低下した。こういったことから、一部の生産者はイチゴ栽培に戻ることを選択し、イチゴの栽培面積が9%増加した。ブルーベリーに関しては、その生産の増加は、新規植栽によるものではなく、最近植栽された果樹園が成園に達していることによっている。業者によると、ブルーベリーの「ゴールド・ラッシュ」があり、専門家ではない生産者も栽培に加わったという。明るい側面を取り上げると、需要は引き続き増加しており、栽培面積は急速に拡大している。また、パッケージの改良や光センサーによる選果ライン導入のための投資が進められている。

## **ベルギー:難しい市場**

過去2年間、買収等を通じて市場は拡大してきた。特に、例えば AH 社による Delhaize 社への影響力の強化などである。ベルギーでは、フランスに比べ比べ一人当たり消費量が多いことから、フランスよりも需要が大きいとされる。

ベルギーとフランスでは、主にチリとペルーから輸入されている。スペイン、モロッコは遅れて市場に参入する。メキシコから空輸されるものもある。

価格は品質に問題があることから、低く抑えられている。つまり、現在市場には大変に品質が良いものと大変品質の悪いブルーベリーが混在している。消費者価格は125g入りのトレイで0.99~1.25ユーロとなっている。

## **ペルー:輸出が拡大**

政府は、米国市場へのアクセス改善に全力を挙げている。米国の代表団が主産地の Ica を訪問したことはこの件で大いに役立つことになるだろう。2017年の輸出量は41,329トンで、2016年の輸出量26,327トンから57%増加した。昨年は米国への輸出も増加し、金額で46%増の3億5,000万ドルに達した。このように米国は最重要の輸出市場であるが、輸出に占める割合は2016年の56%から昨年は44%に低下した。輸出先第二位は英国(シェア11%)、第三位は中国(同10%)である。しかし、数年以内に中国が第二の輸出先となることが見込まれる。

主要市場で需要が増加していることから、今後4年間で輸出は12%増加すると見込まれる。また、単位面積当たりの収量は増加しており、栽培面積を拡大するための投資も進んでいる。

## **メキシコ:中国への輸出**

初となるブルーベリーが中国に到着した。目標は収穫後48時間以内に中国の店頭で販売されることである。

## **拡大を目指すアルゼンチン**

ブルーベリーの国内市場が大きく拡大している。シーズンは6月に始まり1月まで続く。国内需要は250%増加した。これは、ここ数年、幾つかのプロモーション活動が行われたため、消費者の間で人気が出てきたことによっている。

栽培面積は1,900haから2,100haを前後している。生産地は、主に北部(トукマン、サルタ)、沿岸部(コリエンテス、エンツレ・リオス)、ブエノスアイレス近郊である。有機栽培も増加しており、現在600haであるが、有機栽培への転換園も相当程度存在する。このように、アルゼンチンは近隣諸国に対して差別化を狙っている。

昨年10月には雹害があったことから、生産量の6%に被害があったとの報告があった。

国内市場は成長を続けているが、生産の大半は輸出に向けられており、米国は65%を占める最大の輸出先である。英国も大きな市場であるが、貿易業者はアジアを狙いとしている。今年の初めに、中国はアルゼンチンに対し、他の品目を差し置いて、ブルーベリーの輸出を解禁した。その他の輸出先は、ロシア、イスラエルなどである。今シーズンの輸出量は前年と同程度であった。近年、輸出業者は海上輸送による輸出を推進しており、2017年は、前年に比べ20%、2015年に比べ40%増加した。輸出市場は全ての輸出先で拡大している。

### チリにとっては好調な市場

年初の報告によると、チリの輸出量は8,032トンで、このうち406トンは有機であった。この数字は当初の見込みであった6,200トンを上回った。業者の境界によると、「主産地において理想的な天候であったことが幸いした」とのことである。南部地域で降雨があり、収穫に支障があったが、輸出にはほとんど影響がなかったとのことである。南部の生産の割合は、収穫が本格化する1月以降増加する見込みだ。上位輸出先は北米が58%を占め、次いで欧州(17%)、極東である。

出荷シーズンはやや遅れて始まったが、これは市場販売においては好結果につながった。冷涼な気候のために着色が思うように進まず、収穫は11月の下旬に始まった。航空便での輸出にはやや問題があったようだ。

### ウルグアイ：雹による被害

昨年10月の雹害でサルト地区の多くの生産者が被害を受けた。最も被害が大きかったのは2つの果樹園で、ほぼ壊滅した。「この時期は都市部からバスで観光客が訪れて果実を収穫するのだが、台無しになった」と生産者は雹害の直後に語っていた。

### 米国：需要は引き続き増加

ブルーベリーに対する需要は大きいが、供給は低迷している。南米からの供給は、「少々タイト」であるとのことだが、徐々に増加している。輸入業者によると、今年の南米産の品質には満足しているとのことだ。毎年輸入量が増加しているが、今年も例外ではない。しかし、需要もこれまで以上に増加しているとのことだ。ある業者によると、「ブルーベリーは、バナナなどに似た商品になっており、陳列棚には欠かせない」とのことだ。一部の小売業者は、ブルーベリーを販売促進活動の商品としているが、価格は高いレベルで安定したままである。

### 南アフリカ：間もなくシーズンが終了

2月末には今シーズンの出荷が終了する見込みだ。2017/18年シーズンの輸出量は6,380トンで前年よりも2,200トン増加した。しかし、当初の見込量の8,000トンよりも少ない量であった。これは、干ばつの影響で果実のサイズが小さかったことによる。とはいえ、最終数字は未確定である。今年の総生産量は1万トンから1.1万トンと見込まれている。

大部分の果実は航空便で輸出されるが、空路で輸出されるのは約4,280トンで、船便は約2,100トンである。欧州への輸出に当たり、最適な時期は第37週から第47週までの期間である。輸出先は英国が60%、英國以外のEU諸国が30%、アフリカが6%、極東が3%、中東が1%である。業界にとっては、中東向けに輸出に際しての植物検疫上の課題解決が求められている。

著者:Rudolf Mulderij

## 14. スペイン産カキのシーズン後半販売状況

FreshPlaza 電子版 (2018年1月19日)



スペインの主要なカキの産地であるバレンシア州の Ribera del Xúquer では販売の終盤を迎えている。比較的新しい生産会社である Oka Fruits Export の Cifre 氏によると、今シーズンはたびたび価格の低下に見舞われ、また、霜害に遭遇したことで販売方法の変更を余儀なくされたそうだ。同社では霜害により12月上旬には樹上にあった果実を放棄せざるを得なくなつたそうだ。

「数年前はカキに対する見通しは大変明るいものがあったが、現在は市場で競争に晒されている。出荷初年度の価格は、キロ当たり

1.70~2.00ユーロであったが、今シーズンはキロ当たり0.3ユーロという時期もあった。生産者の中には販売ができなくて樹上に放置しているものもいる。生産量が大幅に拡大したが、これはスペインだけでなく、ポルトガルやイタリアでも同様だ」と若い経営者は語っている。

その後、12月の第1週に寒波に襲われ、状況は180度転換した。Oka Fruits Export のある Ribera del Xúquer では、まだ収穫されていない30%の果実が被害を受けた。「降霜により樹上に残されていた果実がダメになってしまった。価格は急上昇したが、我々は利益を得ることができなかつた。ただ、幸いにも作物保険から保険金を受取ることができた」と Cifre 氏は語っている。



同社ではネーブルオレンジの生産も行っている。幸いネーブルの販売は今年順調であった。「オレンジの価格は良かったため、収穫することなく果樹園の果実を直接販売することができた」そうだ。

カキに関しては、「量がそれ程多くないので品質で勝負している。会社が独自の選果・梱包施設を持っており、雇用者により手作業で箱詰めを行っている。大部分は4.5キロ入のケースを使用し、サイズは12から24まである」とのことだ。

Oka Fruits Export では当初は英国の市場だけを狙いとしていたが、その後、オランダ、フランス、ドイツの卸売市場及びシンガポールへも販売し、多様化を進めている。「特にアジア市場に興味を持っている。アジアでは高品質果実は適切に評価される。アジアのバイヤーはビジネスの面では真剣で誠実だ」と語っている。

「次年度の販売に向けては、パッケージのイメージを変更して商取引のネットワークを拡充しようと考えている。我々はどんな相手とも取引を行う。2月7~9日に開催されるベルリンでの見本市(フルーツ・ロジスティカ)に出展を予定している」と締めくくった。

情報源: [www.okafruits.com](http://www.okafruits.com)

## 15. 海外市場を目指すカリフォルニアのマンダリン

ASIAFRUIT 誌 (2017年12月・1月合併号)

カリフォルニア州のマンダリン生産は、毎年拡大を続けている。州のカンキツ産業全般を見渡すと、皮を剥きやすいマンダリンの生産拡大が最も進んでいる。

米国農務省のデータによると、マンダリンの栽培面積は2006年から2016年にかけて97%増加し、21,400haに達したことだ。この間の他品種の動向を見ると、グレープフルーツは6.5%の増加、ネーブルは5%の増加、レモンは4%の増加に留まっており、バレンシアは24%減少している。

フロリダ州でも一時期はマンダリンを拡大する姿勢がみられたが、病害の影響と度重なるハリケーンの被害により、初期のレベルまで生産は縮小している。フロリダ州の現状とカリフォルニア州におけるマンダリンに対する熱意を踏まえ、米国農務省では全米のマンダリンのうちカリフォルニア州の割合は94%に達すると推計している。

カリフォルニア州で広く栽培されているマンダリンは、クレメンティンとアフォーラ(注:マーコットの仲間とされる)である。後者は2006年に交配品種であるタンゴが導入されて以来、急速に生産が拡大している。タンゴは大変に種が入りにくいことから、新規植栽面積の多くを占めるようになっている。2016年現在では、カリフォルニア州のマンダリンのうち、40%以上がアフォーラ又はタンゴとされている。

クレメンティンは最も早く熟す品種であり、11月上旬には収穫が始まる。しかし、州のカンキツの最大の产地であるサン・ホアキン・バレーでは夏に猛暑があったため、収穫は7~10日遅れて始まった。しかし、報告によると品質は良好とのことで、糖度が高く、果実サイズもこの品種に最適とされる「サイズ24」~「サイズ28」にあるという。クレメンティンの収穫は年末まで続き、出荷は1月まで行われる。

アフォーラとタンゴの収穫時期はやや遅く、1月末まで本格的な出荷を待たなければならぬ。州のマンダリン生産の大手である Sun Pacific Shippers 社の Evans 氏によると、「12月の段階ではアフォーラ、タンゴの品質もサイズも上々である。『サイズ28』が最も多く、次いで24、32である。昨年に比べるとやや小ぶりである。しかし、冬に適度な降雨があれば、果実サイズは丁度良くなる」そうだ。

氏によると、「着果数は昨年に比べると10~15%少ないが、昨年は豊作であった。この先の出荷量は十分確保されている」とも語っている。

マンダリンの生産が将来に向けて順調に拡大すると見込まれることから、カリフォルニアの出荷業者は、国内価格を維持するためにも、海外市場に打って出ようと考えている。現在、クレメンティンに関してはカナダが最大の輸出先ではあるが、環太平洋諸国への輸出に期待を寄せている。北アジアの市場ではウンシュウミカンが根付いており、年末までは出荷が多いが、カリフォルニアからの輸出の過半はアフォーラ、タンゴであるからだ。

Halos ブランドで知られる Wonderful Citrus 社の Russo 氏は、「今年は日本のウンシュウミカンの生産量が少ないことから、クレメンティンの輸出も可能性がある。もし、そうなれば、アフォーラ、タンゴの輸出にも弾みが付く」と語っている。

米国農務省のデータによると、2016/17年シーズンの米国マンダリンの輸出量が最も多かった国は日本であり、約4,500トンであった。オーストラリア、ニュージーランドもコンスタントな輸出先として期待している。

## 16. 2017年のチリの果実輸出は9%減少

FreshFruitPortal 電子版 (2018年1月9日)

2017年(暦年)のチリ生鮮果実の輸出金額は、主要な品目であるブドウ、サクランボ、ブルーベリーで数量面、価格面で振るわなかつたことから9%減少した。

チリ農業研究政策局(ODEPA)の最新統計によると、総輸出額は47億6,000万ドルに減少したとのことで、輸出額の1/4はブドウによりもたらされているとのことだ。

輸出量は全体で265万トンとなり、前年を2%下回り、1/3は米国向け輸出であった。

生鮮ブドウの輸出は、量では僅かにリンゴに及ばず第2位の地位を占め、輸出額では最大の12億ドルを稼いだ。量は僅か1%減の704,236トンであったが、輸出金額は12%減少した。

リンゴは輸出量(716,060トン)、輸出金額(6億6,190万ドル)ともに前年を6%下回った。しかし、この減少率は第3、第4の輸出品目であるサクランボ、ブルーベリーに比べるとましな方であった。

サクランボの出荷量は前年を31%下回る81,539トンであったが、輸出量は更に前年を42%下回り、輸出額は4億9,100万ドルであった。また、ブルーベリーの出荷量は前年を23%下回る88,058トンで、輸出量は前年を29%下回り、輸出金額は4億5,900万ドルであった。

第5位及び第6位のアボカド、カンキツについては好調で、輸出額はそれぞれ20%上回る4億4,600万ドル、12%上回る3億3,000万ドルであった。この2品目に関しては、価格は高値で推移し、輸出金額の増加割合よりも輸出量の増加割合の方が同等か低いという結果であった。

キウイに関しては、出荷量が3%減少して175,933トンとなったにも拘わらず、輸出額は18%増加して2億100万ドルに達した。一方、ナシの輸出は、金額では16%増加し1億4,100万ドル、輸出量は18%増加して151,622トンであった。スマモに関しては、輸出量は16%減少して97,221トンとなったが、輸出金額は8%減の1億3,800万ドルに留まった。

### 主要市場

チリの輸出先は、米国が群を抜いて第一位であり、輸出量は828,365トンである。この数字は第2位、第3位の中国、オランダを数量で60万トン程度引き離している。なお、中国への輸出量は244,846トン、オランダへの輸出量は222,207トンであった。

米国への輸出量は3%の減少に留ましたが、輸出金額は19%減少し14億ドルとなった。しかし、この金額は、中国への輸出額(7億6,800万ドルで前年を30%下回った)の2倍に相当し、オランダへの輸出金額(3億7,400万ドルで前年を8%下回った)の4倍に相当する。

第4位の輸出先国は英国で、2億2,000万ドル(前年を7%下回った)であり、第5位のイタリアは輸出金額が18%増加して1億6,500億ドルとなった。

輸出量に関しては、概ねこの順位と似ているが、唯一コロンビアへの輸出量が5%増加したことから、英國を抜いて第4位の地位を占め、輸出量は114,450トンであった。

## 17. EUのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2017年12月21日公表)

注)このレポートの「年産」及び「年」は11月から翌年10月までである。

### <オレンジ>

EUのオレンジ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	287,239	287,229	284,494
収穫面積(ha)	274,508	269,131	267,666
生産量(千トン)	6,038	6,779	6,258
輸入量(千トン)	973	993	990
総供給量(千トン)	7,011	7,772	7,248
輸出量(千トン)	319	293	295
域内生鮮消費(千トン)	5,406	5,988	5,631
加工仕向量(千トン)	1,286	1,491	1,322
総出荷量(千トン)	7,011	7,772	7,248

### 生産

EUにおけるオレンジの生産は主に地中海諸国で行われ、スペインとイタリアで全体の80%が生産されている。残り20%はギリシャ、ポルトガル等である。2016/17年産の生産量は、約620万トンと見込まれ、前年産に比べる7.7%下回る。これは、スペイン、イタリアにおいて春及び夏の期間に、干ばつ、高温、降水量不足に見舞われたためである。

スペインはEU最大のオレンジ生産国で、同国農業環境食料省の公式発表によると、2017/18年の生産量は320万トンと予測され、前年に比べると11%減少の見込みである。これは、干ばつに見舞われたためと、栽培面積が減少したためである。果実の品質及びサイズは、秋に降雨があったため良好と見られる。スペインのオレンジの産地は、主にバレンシア州、アンダルシア州で、この2州で全体の90%を占めている。生産者は、早生及び晩生種を組み合わせて長期の販売を目指している。主な栽培品種は Naveline、ネーブル、Navelate、Salustiane、バレンシア、Sanguinello である。ここ数年、スペインのカンキツ産業は経済的苦境に立たされていることから、カンキツ園から他の高収益作物に転換する動きがある。

EU主要国のオレンジ生産量(単位:トン)

	2015/16	2016/17	2017/18
スペイン	3,086,800	3,654,800	3,247,900
イタリア	1,753,000	1,915,000	1,725,000
ギリシャ	920,072	916,697	960,000
ポルトガル	246,000	266,000	299,000
キプロス	32,800	26,450	26,000
合計	6,038,672	6,778,947	6,257,900

米国農業省海外農業局

イタリアの2017/18年の生産量は、夏の干ばつにより前年を10%下回ると予測される。9月の降雨により、主産地では干ばつの影響が緩和され、高品質な果実が生産される見込みである。果実のサイズは中程度である。イタリアでは、高品質な新品種や台木の導入により、出荷期間の延長に努めている。ギリシャ、ポルトガルの生産量は、前年に比べて、それぞれ4.7%、11%増加する見込みである。

### 消費

EUではオレンジは主に生鮮果実として消費される。ただし、晩生品種は生鮮とともに加工にも向けられる。生産量が減少するため、2017/18年は生鮮とともに加工向けも減少が見込まれる。スペインでは一人当たりのオレンジ消費量は、約20kgである。同国では主に生鮮果実として消費され、特に消費量の多い品種は Navelina と Navelate である。晩生品種のバレンシアは主に加工に向けられる。イタリアでは晩生品種(Ovale と バレンシア)は生鮮とともに加工に向けられる。ギリシャの2017/18年のオレンジ消費量は、前年と同程度と見込まれる。同国では大部分の果実はオープンマーケット及び青果店を経由して生鮮として消費される。ギリシャの国内市場の需要は夏場に増加する。これは観光客の生鮮果実に対する需要が増加するためである。

### 貿易

EU28カ国全体では、オレンジの純輸入地域である。2016/17年の輸入量は993,081トンで前年を2%上

回り、輸入額は7.36億ドルで前年を10.6%上回った。南アフリカ、エジプトが最大の輸入先であり、次いでモロッコ(前年を68%上回った)、アルゼンチンである。2014年5月27日、欧州委員会の植物検疫委員会は、南アフリカ産の輸入規制を強化することを決定した。この結果、南アフリカからの輸入量は過去2カ年で減少傾向にある。一方、エジプト、モロッコからの輸入が増加傾向を示している。2017/18年のEUのオレンジ輸入量は増加が見込まれる。

2016/17年のEUのオレンジ輸出量は293,225トンと前年を8%下回った。輸入額は2.32億ドルで前年を5%上回った。主な輸出先は、スイス、セルビア、ノルウェイ、中国である。中国への輸出量は前年を83%上回った。主な輸出国はスペインである。サウジアラビア、アラブ首長国連邦等の中東向けもスペインからの輸出が増加している。ロシアによる輸入禁止措置の影響で、EUは代替市場を中国、サウジアラビア、アラブ首長国連邦等に求めている。カナダ向け輸出も引き続き増加傾向にある。2017/18年の輸出量は、前年と同程度と見込まれる。

スペインはEUにおける最大の生産国であり、輸出国でもある。2016/17年の輸出量は160万トンに達するが、主な輸出先はEU域内であり、91%を占めている。スペインから中国への輸出は、過去3カ年で急速に増加しており、2016/17年は18,300トンと前年を81%上回った。この他、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、カナダ向けの輸出も増加している。

イタリアはオレンジの純輸入国であり、輸入先は主にスペイン、南アフリカである。一方、ギリシャは純輸出国であり、2016/17年には298,419トンを輸出した。ただ、この年の輸出量は、過去10年で最高であった前年に比べると32.8%減少した。主な輸出先はEU域内である。ギリシャの輸入量は2016/17年で5,762トンであり、南アフリカ(1,526トン)、エジプト(1,140トン)が主な輸入先である。

EUのオレンジ輸入量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
南アフリカ	461,835	431,961	386,061
エジプト	192,925	266,829	284,394
モロッコ	83,297	69,888	117,827
アルゼンチン	40,875	46,346	41,630
その他	148,769	158,842	163,169
合計	927,701	973,866	993,081

Grobal Trade Atlas

EUのオレンジ輸出量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スイス	61,226	66,208	63,066
セルビア	38,163	41,252	29,485
ノルウェイ	27,931	32,411	29,213
中国	2,893	10,010	18,297
サウジアラビア	7,148	9,678	16,580
その他	159,467	159,468	156,611
合計	298,828	319,027	293,225

Grobal Trade Atlas

## <オレンジジュース>

EUのオレンジ果汁統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
加工仕向量(トン)	1,286,000	1,491,000	1,322,000
初期在庫量(トン)	15,000	15,000	15,000
生産量(トン)	99,693	115,585	102,484
輸入量(トン)	778,020	682,357	680,000
総供給量(トン)	892,713	812,942	797,484
輸出量(トン)	52,043	63,429	65,000
域内消費量(トン)	825,670	734,513	717,484
期末在庫量(トン)	15,000	15,000	15,000
総流通量(トン)	892,713	812,942	797,484

加工仕向量(青果)以外は65° ブリックス換算

## 生産

2017/18年のオレンジジュース生産量は、102,484トンと前年を11%下回ると予測される。これはオレンジの生産量が減少するためである。加工に仕向ける量は、国内及び国外の生鮮市場に向けられるオレンジの量と質に依存する。

## 消費

オレンジジュースは EU の中で最も人気があるが、他の非アルコール系飲料や果実ジュースと競合しており、ここ数年で消費量は減少している。2017/18年のオレンジジュース消費量も減少が見込まれる。とはい

え、オレンジジュースの利便性は、現代の生活の中で、生鮮オレンジを消費するよりも優っているといえる。EU28カ国の中で、スペインを含む14カ国は、「フルーツ・ジュース・マターズ」(www.fruitjuicematters.eu)という果実ジュースの消費拡大、認知度向上のための運動を展開している。スペインでは、スペイン果汁協会が資金を提供して、「本当のオレンジジュースを」という名でキャンペーンを実施している。

## 貿易

EU28カ国はオレンジジュースの純輸入地域である。2016/17年の輸入量は682,357トンで、輸入額は約14億ドルであった。ブラジルが最大の輸入先であり90%を占めており、次いでメキシコ、米国、南アフリカである。米国からの輸入量は全体の2%を占めており、金額では3,250万ドルで、前年を13%下回った。

2016/17年の輸出量は63,429トンで、輸出額は1.59億ドルであった。主な輸出先はサウジアラビア、日本、スイス、アルジェリアである。ロシアと中国は2016/17年の輸出が大きく増加した。また、米国への輸出は2,609トンで、800万ドルであった。

2017/18年のオレンジジュースの輸入量は減少傾向が続き、輸出量は増加すると見込まれる。

EUのオレンジ果汁輸入量(単位:トン65° ブリックス換算)

	2014/15	2015/16	2016/17
ブラジル	811,594	699,669	591,065
メキシコ	19,507	21,548	34,373
米国	17,760	17,184	15,070
南アフリカ	11,826	12,074	6,280
その他	28,925	27,544	35,568
合計	889,614	778,020	682,357

Grobal Trade Atlas

EUのオレンジ果汁輸出量(単位:トン65° ブリックス換算)

	2014/15	2015/16	2016/17
サウジアラビア	5,448	6,522	5,981
日本	5,448	5,781	5,250
ロシア	2,196	2,628	5,071
スイス	3,420	3,515	4,086
アルジェリア	3,732	3,105	3,317
中国	1,872	2,230	3,263
その他	27,754	28,262	36,460
合計	49,870	52,043	63,429

Grobal Trade Atlas

## <タンゼリン/マンダリン>

EUのタンゼリン/マンダリン統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	158,957	156,474	157,116
収穫面積(ha)	146,708	142,448	143,296
生産量(千トン)	3,081	3,432	2,974
輸入量(千トン)	423	450	450
総供給量(千トン)	3,504	3,882	3,424
輸出量(千トン)	250	236	250
生鮮生鮮消費(千トン)	2,983	3,274	2,905
加工仕向量(千トン)	271	372	269
総出荷量(千トン)	3,504	3,882	3,424

## 生産

2017/18年のタンゼリン、マンダリンの生産量は、前年を13%下回る300万トンと予測される。これは主産地であるスペイン、イタリアで春及び夏に発生した干ばつ、高温に見舞われたためである。

スペイン農業環境食料省によると、2017/18年の生産量は、干ばつの影響で前年を18%下回る200万トンと予測している。ただし、秋の降雨により果実の肥大が回復する可能性がある。スペインの主産地は、バレンシア州、アンダルシア州、カタロニア州である。これら地域では新たな早生、晩生品種が植栽されており、供給時期が拡大している。

EU主要国のタンゼリン/マンダリン生産量(単位:トン)

	2015/16	2016/17	2017/18
スペイン	2,018,422	2,382,073	1,938,237
イタリア	818,000	829,000	787,550
ギリシャ	161,502	145,709	175,000
ポルトガル	39,000	41,000	40,000
キプロス	44,000	34,000	34,000
合計	3,080,924	3,431,782	2,974,787

米国農業省海外農業局

イタリアでは80%が種無しのクレメンティンで、20%がマンダリンである。主要な産地はカラブリア州、シチリア州、プッリヤ州である。Comune(別名 Oroval)、Monreal が主なクレメンティンの品種である。マンダリンの主要品種は、Avana、Tardivo di Ciaculli である。2017/18年の生産量は、干ばつの影響で前年を5%下回ると予測される。果実のサイズは中程度と見込まれる。

ギリシャの生産量は、着果が順調であったことから、前年に比べて20.1%増加すると見込まれる。ペロポネソス地方が主要な産地であり、主にクレメンティンが生産

されている。Nova、Page、Ortaniqueなどの新しい品種の植栽も進んでいる。

ポルトガルでは前年と同程度の生産量が見込まれる。

## 消費

タンゼリン、マンダリンは主に生鮮果実として消費される。2017/18年の消費量は、生産量が減少したため、生鮮も加工品も減少が見込まれる。スペインはEUの中でタンゼリンの消費量が生鮮、加工とも最も多い。イタリア、ポルトガルもクレメンティン、マンダリンの消費量が多い。ギリシャも西海岸では生鮮のクレメンティンの消費量が多い。

## 貿易

EU28カ国は、タンゼリン、マンダリンの純輸入地域である。2016/17年の輸入量は450,929トンで前年を6.5%上回った。輸入額は5.16億ドルであった。モロッコ、南アフリカが引き続き最大の輸入先国であり、次いでイスラエル、ペルー、トルコである。米国からの輸入量は前年を16%下回り、500万ドルであった。

2016/17年の輸出量は236,193トンで前年を5.5%下回った。輸出額は1.98億ドルであった。主な輸出先はスイス、ウクライナ、ペラルーシ、ノルウェイである。EUから米国への輸出は、主にスペインからで、2016/17年は前年を27%下回る17,000トンであったが、近年減少傾向である。新たな輸出先として、カナダ、中国、アラブ首長国連邦、サウジアラビアは引き続き重要な市場である。

スペインはEUで最大の生産国であり、輸出国でもある。2016/17年の輸出量は1,374,384トンで、前年を8%下回った。このうち93%はEU域内への輸出である。スペイン産のタンゼリンの米国への輸出は、2010年以降、モロッコ産との競合及び物流上の問題から減少傾向にある。代って、スペインは中東、中国等のアジア、カナダへの輸出を増加させている。

EUのタンゼリン/マンダリン輸入量(単位:トン)			
	2014/15	2015/16	2016/17
モロッコ	98,442	140,373	157,545
南アフリカ	96,871	116,216	113,375
イスラエル	56,326	48,801	74,723
ペルー	46,958	47,092	54,094
トルコ	40,958	48,417	34,400
ウルグアイ	10,313	6,354	4,318
米国	6,347	3,906	3,260
その他	11,073	12,074	9,214
合計	367,258	423,233	450,929

Grobal Trade Atlas

EUのタンゼリン/マンダリン輸出量(単位:トン)			
	2014/15	2015/16	2016/17
スイス	39,418	41,626	40,927
ウクライナ	34,872	32,867	35,768
ペラルーシ	45,535	28,121	27,737
ノルウェイ	24,349	23,666	23,277
セルビア	21,971	17,514	19,324
ボスニアヘルツェゴビナ	17,842	14,591	19,032
米国	32,487	23,302	17,007
カナダ	18,122	16,545	13,817
その他	52,050	51,689	39,304
合計	286,646	249,921	236,193

Grobal Trade Atlas

## <レモン>

EUのレモン統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	73,353	73,504	72,817
収穫面積(ha)	62,740	63,765	63,396
生産量(千トン)	1,331	1,537	1,515
輸入量(千トン)	560	513	500
総供給量(千トン)	1,891	2,050	2,015
輸出量(千トン)	68	79	80
生鮮生鮮消費(千トン)	1,580	1,687	1,650
加工仕向量(千トン)	243	284	285
総出荷量(千トン)	1,891	2,050	2,015

## 生産

2017/18年のレモン生産量は、前年を1.4%下回る150万トンと推測される。これは最大の生産国であるスペインで生産量が減少するためである。

スペイン農業環境食料省によると、2017/18年の生産量は、前年を2.8%下回る967,000トンと予測している。品種Finoは過去数カ年で新植が進んだことから、前年を12%上回ると見込まれる。しかし、品種Vernaは開花期の5月、6月に高温に遭遇したことから、前年を40%下回ると見られる。スペインは、欧州の中で、

品質、衛生保証の面において確固たる地位を不動のものとしている。アルゼンチンに次ぐ世界で第2位のレモン生産国で、生鮮果実の輸出に関する世界的リーダーであり、生産の効率化を図っている。果実の品質は良好と予測される。レモンの生産はムルシア州、バレンシア州、アンダルシア州のマラガ、アルメリアの集中している。品種 Fino と Verna が主要品種で、前者が70%、後者が30%のシェアを占めている。加工に向かられるのは主に Fino である。

**イタリア**はEUの中でスペインに次ぐ第2のレモン生産国である。シチリア州が主要な産地で、国内生産の86%を占めている。Femminello Commune (F. Zagara Bianca, F. Siracusano, F. S.Teresa)、Monachello、Interdonato が主要な品種である。2017/18年の生産量は、前年と同程度と予測される。

**ギリシャ**の2017/18年の生産量は前年を8.6%上回ると予測される。これは着果が良好であったためと、

EU主要国のレモン生産量(単位:トン)

	2015/16	2016/17	2017/18
スペイン	775,800	995,900	967,900
イタリア	456,000	448,000	447,650
ギリシャ	68,500	69,083	75,000
ポルトガル	16,000	16,000	16,000
キプロス	15,000	8,000	8,000
合計	1,331,300	1,536,983	1,514,550

米国農業省海外農業局

新植園が結果樹齢に達するためである。主な産地は、南部ギリシャに位置するアカイア県、コリントス県、クレタ島、ラコニア県である。主要な品種は、芳香性が優れ果汁に苦味がある Maglini である。早生品種の Interdonato、ユーレカも栽培されている。

キプロスとポルトガルの2017/18年の生産量は、ユーロスタッフ、ポルトガル政府公式資料によると、前年と同程度であり、果実サイズ、品質も平年並みと見込まれる。

## 消費

レモンはEUでは主に生鮮果実として消費される。2017/18年の生鮮果実の消費量及び加工仕向量は前年と同程度と予測される。一人当たりの年間消費量は約2.7kgである。スペインはレモンの加工においても世界で第2位の地位を占めている。ギリシャでは、需要の強い飲料用向けの果汁は主に輸入に依存している。

## 貿易

EU28カ国はレモンの純輸入地域である。2016/17年の輸入量は512,913トンで前年を8%下回った。輸入額は5.9億ドルで前年を30%下回った。主な輸入先は、アルゼンチン、トルコ、ブラジルであり、次いで南アフリカ、メキシコである。

2016/17年の輸出量は78,965トンで前年を15%上回った。輸出額が1億ドルで前年を2%上回った。主な輸出先はスイス、カナダ、ノルウェイ、ベラルーシである。米国への輸出は増加基調であり、2016/17年は5,260トンに達した。主な輸出国はスペインである。

2016/17年のスペインの輸出量は、生産が増加したことから、前年を28%上回る670,000トンであった。この内、94%はEU域内へ輸出されている。EU域外のスペインの輸出先は、スイス、カナダ、米国、アラブ首長国連邦、ブラジルである。

EUのレモン輸入量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
アルゼンチン	130,648	198,154	157,088
トルコ	78,839	115,296	102,117
ブラジル	75,949	80,096	81,941
南アフリカ	40,787	61,979	77,568
メキシコ	42,950	49,909	54,020
その他	29,928	55,264	40,179
合計	399,101	560,698	512,913

Grobal Trade Atlas

EUのレモン輸出量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スイス	18,888	18,532	21,229
カナダ	10,878	5,674	7,381
ノルウェイ	6,112	6,375	7,289
ベラルーシ	17,477	6,968	6,482
米国	4,882	1,854	5,260
その他	47,356	29,096	31,324
合計	105,593	68,499	78,965

Grobal Trade Atlas

## <グレープフルーツ>

2017/18年のグレープフルーツの生産量は、前年を16%下回る88,579トンと予測される。これは最大の生産国であるスペインで生産量が大きく減少するからである。スペインの業界によると、同国の生産量は前年を24%下回るとしている。これは開花が不揃いであったことが原因であるとのことだ。スペインの主な産地は、

マルシア州、アンダルシア州、バレンシア州である。主な栽培品種はルビーレッドである。

スペインに次ぐ生産国はキプロスであり、主にホワイト・マーシュ・シードレスが栽培され、主産地はリマソールである。2017/18年の生産量は、スペイン以外のEU諸国と同様に、前年と同程度である。

EUのグレープフルーツ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	3,045	3,037	3,047
収穫面積(ha)	2,435	2,773	2,716
生産量(千トン)	106	105	88
輸入量(千トン)	365	324	350
総供給量(千トン)	471	429	438
輸出量(千トン)	13	15	15
生鮮生鮮消費(千トン)	438	395	408
加工仕向量(千トン)	20	19	15
総出荷量(千トン)	471	429	438

	2015/16	2016/17	2017/18
スペイン	74,442	72,236	55,000
キプロス	24,000	25,000	25,000
イタリア	4,700	4,900	4,860
ギリシャ	4,060	3,319	3,500
ポルトガル	200	200	210
合計	107,402	105,655	88,579

米国農業省海外農業局

## 消費

EUでは生鮮果実としての消費が中心であり、消費量が生産量を大きく上回っている。2017/18年の消費量は408,000トンと推測される。加工仕向量は、生産量が減少するながら縮小すると見込まれる。加工はスペインとキプロスが主体である。

## 貿易

EU28カ国はグレープフルーツの純輸入地域である。2016/17年の輸入量は324,654トンであり、前年を11%下回った。輸入額は3.09億ドルであった。主な輸入先は南アフリカ、中国、トルコ、イスラエルであり、米国はその次である。米国からの輸入額は3,000万ドルで、前年を21%下回った。

2016/17年の輸出量は、15,015トンで前年を11%上回った。輸出額は1,500万ドルであった。主な輸出先はスイス、ペラルーシ、ウクライナである。

EUのグレープフルーツ輸入量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
南アフリカ	90,406	91,327	96,011
中国	76,639	86,203	95,732
トルコ	70,864	95,730	60,982
イスラエル	38,755	35,212	28,604
米国	38,270	31,422	23,868
その他	24,432	25,510	19,457
合計	339,366	365,404	324,654

EUのグレープフルーツ輸出量(単位:トン)

	2014/15	2015/16	2016/17
スイス	2,319	3,781	3,722
ペラルーシ	3,405	2,536	2,314
ウクライナ	1,276	1,404	1,743
その他	7,742	5,815	7,236
合計	14,745	13,536	15,015

Grobal Trade Atlas

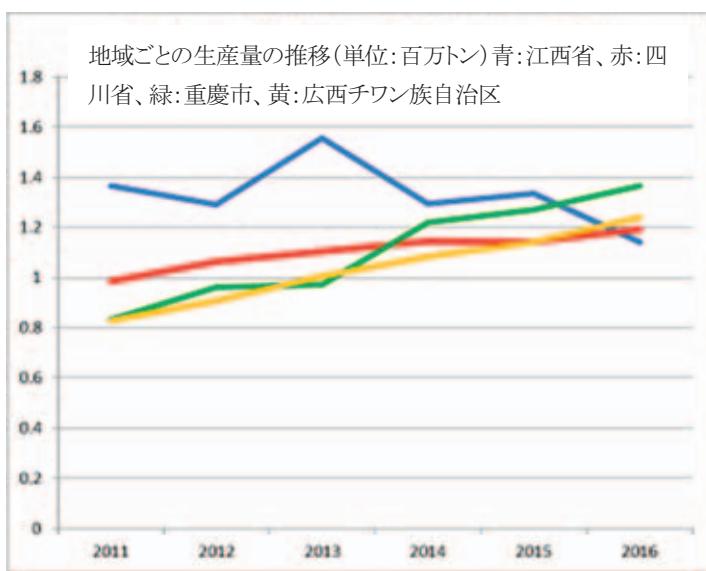
## 18. 中国のカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年12月20日公表)

### <オレンジ>

#### 生産

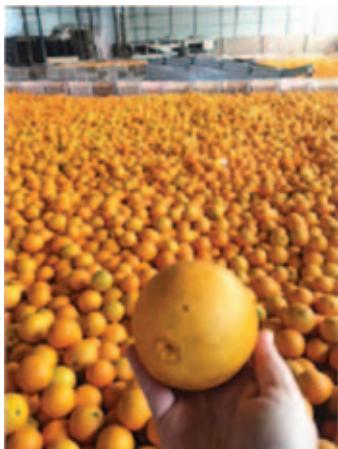
近年、中国のオレンジ生産地域は徐々に西部に移動している。伝統的に江西省が最大の生産地であるが、過去5年間で生産は停滞している。一方、同時期に四川省、重慶市、広西チワン族自治区では生産が順調に拡大している。実際に、昨年はこれら3地域の生産量は江西省を上回った。消息筋によると、西部の3地域の増加要因は単位面積当たりの収量の増加と面積の拡大によるものであり、江西省などの南東部の減少要因はカンキツグリーニング病によるものである。



2017/18年(11月→10月)の生産量は730万トンで、前年を4%上回ると予測される。四川省、重慶市、広西チワン族自治区では、面積が拡大し、植栽後5~10年の若い果樹園が生産量を増加させているため、着実に生産量が増加している。江西省では、前年の生産量が異常な気温、カンキツグリーニング病による被害、裏年に当たったことから大きく落込んだが、2017/18年は回復すると見込まれる。業界筋によると、江西省や他の温暖な産地(広西チワン族自治区、湖南省等)ではカンキツグリーニング病が依然として問題とはなっているが、今年は、感染樹の伐採や改植が行われ、被害が抑制されているとのことだ。江西省では、適度な降雨と昨年に比べて気温の変動が少なか

ったことにより、果実サイズは小さいものの、今年の生産は順調のことである。

江西省では、過去数カ年で何百万ものカンキツグリーニング病に罹患した樹が伐採されたが、生産者によると、伐採された樹に見合った植栽が行われているとのことである。ただし、植栽は省の中でより冷涼な北部地域で行われている。四川省、重慶市、広西チワン族自治区では面積の拡大が継続していることから、2017/18年の栽培面積は緩やかに増加すると見込まれる。



四川省のネーブルオレンジ選果・梱包施設



重慶市のネーブルオレンジ果樹園



生産コストの増大は、一層深刻な課題となっている。選果・集出荷業関係者によると、2003年の江西省の労働費は一日当たり20元であったものが、現在では120元(17.4ドル)に上昇しているとのことだ。このため、業界筋によると、生産性向上のためには、加工施設、貯蔵施設、流通インフラへの投資が不可欠であると話している。しかし、高品質なオレンジに対する消費需要の拡大に伴い、カンキツ業界に対する公的及び民間投資が急速に進展しており、前述の課題に対応しているようだ。最近行った重慶市と四川省の視察では、複数の新しいブランドや大規模な選果施設、貯蔵施設を目にした。さらに、多くの大手業者や選果場では、農業者団体と緊密な連携を図り(個別農家による対応とは対照的であるが)、新たなブランド創出や品質確保に努めているとの報告を受けている。

## 価格

南部江西省の生産者によると、2017年12月のネーブルの価格は、キロ当たり6元(0.9 ドル)であり、2016年の価格(キロ当たり6.8元(1ドル))よりも若干下回っているとのことだ。しかし、流通業者によると、2017年12月の江西省卸売価格は、上質のサイズが大きいオレンジの価格は、前年をやや上回っているとのことだ。主要な業界関係者によると、高品質品の卸売価格の上昇は、サイズの小さい果実が多いいためだと語っている。この他の価格上昇要因は、労働コスト、貯蔵その他のコストの上昇と、価格上昇を市場が受け入れているためとのことだ。

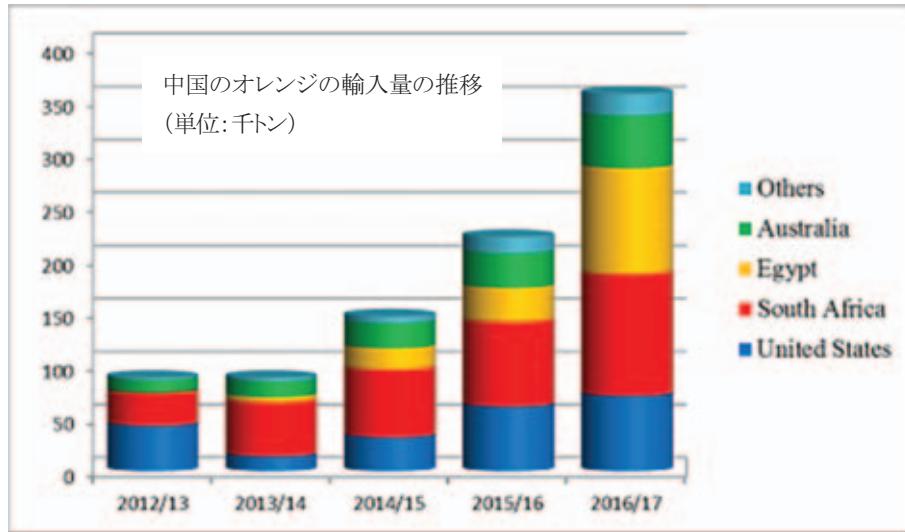
## 消費

2017/18年のオレンジの消費量は、生産量が増加することと、消費者の高品質果実に対する需要の拡大により、増加すると見込まれる。さらに、物流の改善、冷蔵施設、流通インフラの整備により、広大な中国全土にオレンジが流通することが可能となり、今後数年間は消費需要の拡大は続くと見込まれる。

## 貿易

2017/18年のオレンジの輸入量は、40万トンであり前年を12%上回ると予測される。これは、高品質果実に対する強い需要と、国産品が出回らない時期における南半球産への需要が増加するためである。2016/17年の輸入先は南アフリカが最大で32%のシェアを占めた。

2017/18年のオレンジの輸出量は、前年と変わらず6万トンと予測される。輸出先は主に東南アジア諸国である。



中国のオレンジ (米国農務省在中国農務官調べ)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	780,000	790,000	800,000
収穫面積(ha)	-	-	-
生産量(千t)	6,900	7,000	7,300
輸入量(千t)	220	357	400
出荷量(千t)	7,120	7,357	7,700
輸出量(千t)	74	60	60
国内生鮮仕向量(千t)	6,446	6,717	7,070
加工仕向量(千t)	600	580	570
総出荷量(千t)	7,120	7,357	7,700

注)年度は11月→10月

## <オレンジジュース>

### 生産

2017/18年(10月→9月)のオレンジジュースの生産量は、前年をやや下回る43,800トンと見込まれる。業界筋によると、消費者のストレート果汁に対する需要が増加しており、濃縮還元果汁よりも2倍の価格で販売できるようになったとのことだ。さらに、濃縮果汁の生産量は、消費需要の減退により、次第に減少を続けているようだ。主要なオレンジジュース工場は、重慶市、四川省にある。

### 消費

2017/18年のオレンジジュースの国内消費量は、前年と同程度の96,200トンと予測される。

### 貿易

2017/18年のオレンジジュースの輸入量は、前年と同程度の55,000トンと予測される。

輸出量は、前年よりやや増加し、2,600トンと予測される。

中国のオレンジ冷凍濃縮果汁(米国農務省在中国農務官調べ)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
原料果実(t)	600,000	580,000	570,000
期初在庫(t)	0	0	0
生産量(t)	46,000	44,500	43,800
輸入量(t)	40,156	54,957	55,000
総供給量(t)	86,156	99,457	98,800
輸出量(t)	2,801	2,525	2,600
国内消費量(t)	83,355	96,932	96,200
期末在庫(t)	0	0	0
総供給量(t)	86,156	99,457	98,800

注)年度は10月→9月

## <マンダリン/タンゼリン>

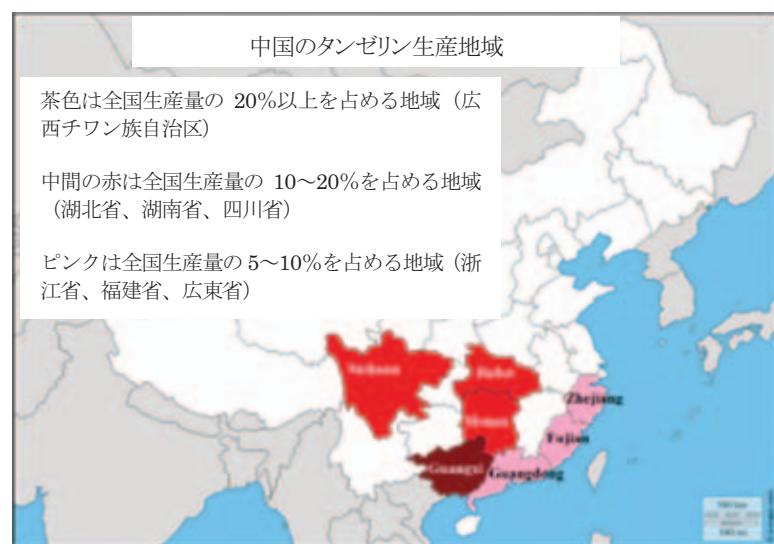
### 生産

2017/18年(10月→9月)のタンゼリン/マンダリンの生産量は2,120万トンで、前年を3%上回ると予測される。江西省の生産者によると、降雨量が少なく、気温が安定しており、カンキツグリーニング病が幾分抑制されたため、前年に比べて品質も良く、果実のサイズも大きいとのことだ。四川省の生産者も、若齢の果樹園が成園化するため、生産量が増加すると見込んでいる。

複数の情報筋によると、四川省ではタンゼリンの栽培面積が増加しているとのことだ。これを踏まえ、2017/18年の栽培面積は、前年をやや上回る85万haと推測される。



四川省のタンゼリン生産果樹園



## 価格

業界筋によると、江西省の早生種のマンダリンは、現在キロ当たり5~7元(0.76~1.06ドル)で、晩生種は6~8元(0.91~1.21ドル)であり、昨年よりも高く、値段の幅も小さい。昨年は早生種が4~12元であり、晩生種は2.2元と安かった。四川省では、晩生種のタンゼリンは、現在キロ当たり10元(1.51ドル)のことだ。

## 消費

2017/18年の国内消費量は、前年を3%上回る2,000万トンと予測される。これは生産量が増加することと、高品質果実に対する需要が増加しているためだ。

2017/18年のマンダリンの缶詰の需要は、前年(65万トン)と同程度と予測される。缶詰の大部分は輸出されており、最大の輸出先は米国である。

## 貿易

2017/18年の輸入量は、前年と同じ5万トンと予測される。卸売業者によると、高品質な輸入マンダリンに対する需要は引き続き堅調のことだ。主な輸入先はオーストラリア、南アフリカである。

2017/18年の輸出量は、前年を約6%下回る55万トンと予測される。専門家の分析によると、多くの生産者は輸出向けから価格が高い国内市場向けに徐々にシフトをさせていることだ。主な輸出先は、東南アジア諸国及びロシアである。



中国のタンゼリン・マンダリン(米国農務省在中国農務官調べ)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	820,000	830,000	850,000
収穫面積(ha)	-	-	-
生産量(千t)	20,200	20,600	21,200
輸入量(千t)	28	50	50
出荷量(千t)	20,228	20,650	21,250
輸出量(千t)	658	587	550
国内生鮮仕向量(千t)	18,910	19,413	20,060
加工仕向量(千t)	660	650	640
総出荷量(千t)	20,228	20,650	21,250

注)年度は10月→9月

## <グレープフルーツ/ポメロ(文旦)>

### 生産

2017/18年(10月→9月)の生産量は、前年を4%上回る480万トンと予測される。福建省と広東省の生産者によると、今年は降雨が少なく、温暖な気候に恵まれたため生育は良好のことだ。四川省と重慶市の生産者も、今年は昨年よりも生産量が多いとのことだ。

## 価格

福建省の農場出荷価格は、現在、果肉が白いポメロでキロ当たり3.5元(0.53ドル)であり、前年12月の価格である3元(0.44ドル)を上回っている。

## 消費

2017/18年の国内消費量は、前年を4%上回る460万トンと予測される。これは、生産量が増加するためと、カンキツに対する需要が増加しているためである。



四川省の新しい選果・梱包施設におけるポメロの山と冷蔵施設



## 貿易

2017/18年の輸入量は、国内生産量が増加するものの、高品質果実に対する需要が強いため、前年と同程度の4万トンと予測される。2016/17年の輸入先は、南アフリカが最大で67%のシェアを占めている。

2017/18年の輸出量は、生産量が増加することから、前年を10%上回る20万トンと予測される。主な輸出先は欧州、ロシア、香港である。

中国のグレープフルーツ・ポメロ(米国農務省在中国農務官調べ)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	-	-	-
収穫面積(ha)	-	-	-
生産量(千t)	4,350	4,600	4,800
輸入量(千t)	33	40	40
出荷量(千t)	4,383	4,640	4,840
輸出量(千t)	159	180	200
国内生鮮仕向量(千t)	4,224	4,460	4,640
加工仕向量(千t)	-	-	-
総出荷量(千t)	4,383	4,640	4,840

注)年度は10月→9月

## <レモン>

2017/18年(10月→9月)のレモンの生産量は、前年を15%上回る48万トンと予測される。業界筋によると、中国の主要な産地である四川省の安岳県では、天候に恵まれたことと、3年前に植栽された果樹園(伝えられるところによると、4,000ha 植栽された)で結果が始まるために、大幅に生産量が増加することである。レモンに対する国内需要が急速に拡大していることから、今後2年間はレモンの植栽がさらに進む見通しだ。



## 政策

中国政府農業部は2014年8月に園芸部門に関するアクションプランを策定し、新品種の拡大、品質向上、生産物のブランド化を掲げた。この計画により、政府は以下を重点化するとしている。

- 1) 果樹品種の多様性を拡大するための育苗ほの拡充
- 2) 品質向上のための技術基準の改善
- 3) 生産拡大と円滑な市場流通のための協同組合の育成
- 4) ブランド力確立のための基盤の整備

中国南部の地方政府レベルでは、カンキツ産業育成のための具体的計画を樹立している。この中で、技術の平準化、実証ほの設置のための財政的、技術的支援を行っている。また、樹園地の改善、品種の多様化も支援している。加えて、多くの地方政府はアグリビジネスの育成、生産の協同化にも力を入れている。

## マーケティング

特に北京、上海、深圳、広州などの1級都市では、ハイパーマーケット、スーパーチェーン及び果物専門店が輸入カンキツを販売する場となっている。しかし、中国では冷蔵貯蔵管理及びインフラが著しく進展しており、2級、3級都市でもスーパーが輸入カンキツを販売する場となりつつある。オンラインによる輸入カンキツの販売は物流やインフラが整備されつつあることから拡大を続けている。多くのアナリストは、中国におけるe-コマースを通じた輸入カンキツの販売に対し、明るい将来を予見している。

中国の小売業者は差別化を目指しており、消費者により良いサービスを提供することを志している。多くの業者はオンライン販売用のウェブサイトを設け、各家庭にデリバリーサービスを行うよう努めている。また、多くの業者が新ブランド、有名ブランドの商品の取扱いに熱心であり、スーパーチェーンは大手供給業者と契約を結び品質保証やより良いサービスの提供が受けられるよう努力している。加えて、生鮮果実販売に特化したチェーン店では、顧客の求めに応じて即座にギフト用の詰め合わせを提供できるよう工夫している。

中国の消費者の購買動機は、鮮度、味、外観、品質に対する信頼及び価格である。増大する中間層は食品の安全性に対して強い関心を持っており、高品質な農産物に対しては支出を惜しまない。このため、中国全土において有名ブランドに対する需要がますます高まっている。こいった潮流に応えるため、多くの国内カンキツ供給業者は、今までに無い独自のブランドを確立する努力を行っている。

2016/17年には、米国産のカンキツは、中国南部の深圳、黄浦、公平、広州等の港を通じて輸入された、過去2カ年で米国産カンキツを輸入した港には、この他、大連、天津、北京などがある。通関された後は、一般に広州の江南(Jiangnan)、上海の惠山(Huizhan)、北京の Xinfadi などの主要卸売市場に移送される。その後、米国産のカンキツは中国全土に流通している。

## 19. オーストラリアのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年12月18日公表)

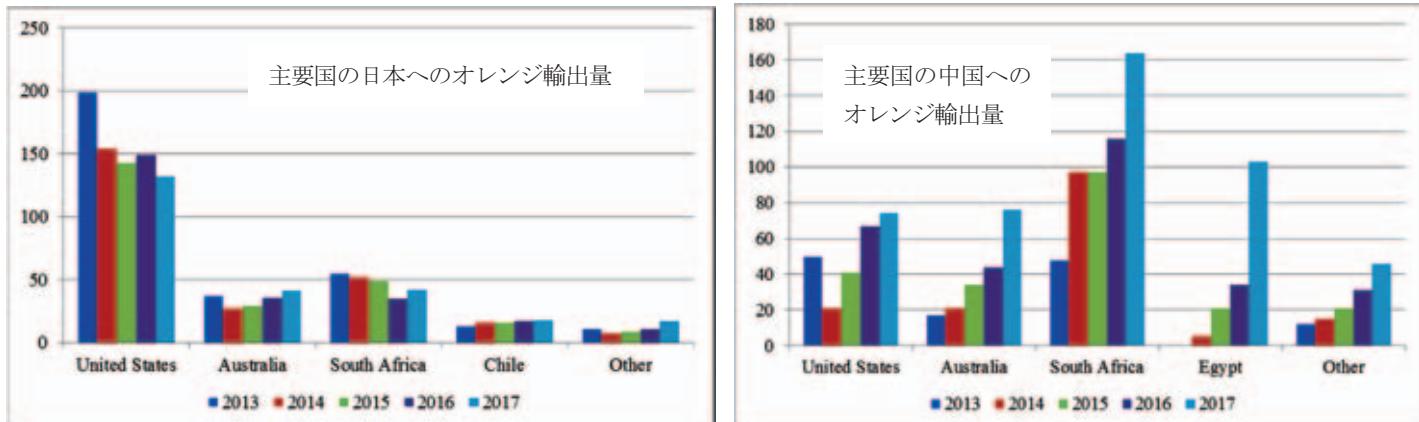
### <オレンジ>

#### 生産

オーストラリアのカンキツ産業は園芸の主要部門であり、世界的にも重要な輸出国である。中でもオレンジが抜きんでており、産地は、マランビジー川、マレー川に沿ったニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、南オーストラリア州にまたがるリベリナ(Reverina)、サンレーシア(Sunraysia)、リバーランド灌漑地帯に集中している。この一帯では生食用のネーブルオレンジと果汁向けのバレンシアオレンジが生産されている。また、クーンズランド州の中央バーネット(Burnett)地方では、マンダリン、レモン、ライムが生産されている。この他、西オーストラリア州、北部準州でもカンキツ栽培が行われている。

2017/18年のオレンジの生産量は、今後平均的な気象条件が続き、灌漑用水の利用料金が適切な価格であるとすれば、48万トンと予測される。オーストラリアのオレンジの栽培面積は2万ha以上あり、うち1.2万haはネーブルで、残りはバレンシアである。バレンシアは主にジュース用であり、ネーブルは生食用であり輸出需要は強い。バレンシアの3/4はジュースに加工され国内市場に向けられる。

ネーブルは幾つかの品種があり、異なる地域で生産されているが、収穫は4月に始まり、ピークは7・8月で10月まで収穫は続く。オレンジは植栽後3~4年で結果樹齢に達するが、成園となるには6~8年を要する。特に大規模化樹園では、剪定、局所施肥等の栽培技術はスペインから導入された。とはいえ、単位面積当たり収量の格差は大きい。



ネーブルの栽培面積は増加しているが、バレンシアは減少傾向にある。新植のスピードは比較的緩やかである。というもの、育苗に2~3年必要とされ、加えて苗木を輸入するに当たり、植物防疫上の規制があるからである。オレンジの生産量は、生育環境、灌漑用水の利用可能性、生育期間中の温度変化により左右される。オーストラリアでは、他の栽培国で生産に影響を及ぼしているカンキツグリーニング病の清浄国である。

近年、近代的な選果施設への投資が行われ、生産の効率化が進んでいる。輸出に焦点を置いた選果施設は、トレーサビリティーの機能を備え、品質を保証するシステムを持ち、品質を確保するための冷蔵施設と配達施設を備えている。選果過程における選別技術も向上しており、外観、果皮色、傷を判別することができる。

さらに、最適な水分と肥料を施用するための点滴灌漑システムの利用も増加している。また、天敵昆虫を利用して、農薬の散布を極力抑える努力を行っている生産者もいる。

#### 消費

2017/18年の国内生鮮果実消費量は、前年と同じ21万トンと推測される。ネーブルは一般に果実のサイズが大きく、種無しで、他のオレンジよりも早く熟す。栽培は、寒冷地よりも亜熱帯の地中海性気候の土地に適している。また、加工すると苦味が出るために、ジュースには不向きであることから、主に生食向けに利用さ

れる。ネーブルには多くの品種があるため、収穫期間は長い。

オーストラリアの消費者は、Leng や Fisher のような古い品種から、より甘く、種がなく、皮を剥きやすい品種であるワシントンネーブル、Cara Cara、プラッドオレンジ等に嗜好が移っている。国内向けの販売に当たっては、直接大手のスーパーや中央市場に出荷される。カンキツの消費は通常6月から8月にかけて増加する。

## 貿易

2017/18年のオレンジの輸出量は、約23万トンと予測される。現在、最大の輸出先は中国であり、これまで最大の輸出先であった日本を追抜いた。2017年11月には中国との間で輸入条件に関する協定が改定され、更に輸出が拡大する道が拓かれた。新しい輸入条件によると、南オーストラリア州のリバーランド地域はミバエが生息しない地域とされ、オーストラリアの輸出業者としては低温処理により害虫を駆除することが可能となった。

オーストラリアのカンキツの輸出のうち、オレンジは80%を占め、残りはマンダリン、レモン、グレープフルーツである。ネーブルの輸出は6月に始まり、10月まで続く。オレンジを輸出する際は、18kg入の繊維製の箱に梱包される。出荷単位は、1,260箱で22トンに相当する。オーストラリアから中国の輸出に当たっての輸送日数は3週間であり、南半球の輸出国の中では最短である。

2017/18年のオレンジの輸入量は2万トンであり、前年と同程度と推測される。輸入は自国産の出荷がない夏の時期に行われる。輸入先は米国が最も多い。カリフォルニア産オレンジのオーストラリアへの輸出に当たっては、アザミウマに関する植物検疫の制約がある。

## <オレンジ果汁>

### 生産

2017/18年の加工に仕向けられるオレンジの量は、6万トンと予測される。また、2017/18年のオレンジ果汁の総生産量は7,000トンと見込まれる。

2017年には国内のジュース向けオレンジが不足したため、加工業者は国産のストレート果汁と混合するために、濃縮果汁を輸入した。その際、一部の加工業者は濃縮果汁の利用を明示するために、瓶にラベルを添付した。2018年にはこの表示規定を厳格化し、全ての製品に対して原産地表示を行い、輸入果汁か国産果汁かを明示することとしている。

近年では単年度の契約が一般的となっているが、伝統的には生産者と加工業者との間では3ヵ年契約を締結してきた。加工業者から提示される契約価格は低いため、生産者はバレンシアから収益のより多いネーブルやマンダリンの生産に切換えつつある。バレンシアの減少傾向のお蔭で、加工業者は影響を受けている。2017年にはバレンシアの国際価格が上昇したため、果汁向けのオレンジの仕向量はさらに減少した。

### 消費

オレンジ果汁の消費量は過去10年間減少しており、2005/06年の4.9万トンから、2012/13年には4.1万トンとなっている。この傾向は継続しており、2017/18年の消費量は3.8万トンと予測される。一人当たりのカンキツ系果汁の消費量は、アイスティーやスポーツドリンクとの競合により、過去5年間で減少している。消費者の健康志向の影響で、糖含量の多い飲料や輸入の濃縮果汁の消費量は減少する傾向にある。

オーストラリアの果汁市場ではオレンジ果汁とリンゴ果汁が最も人気がある。しかし、近年新たな競争相手が市場に出回っている。例えば、果実と野菜のミックス果汁、有機果汁、コールドプレスジュース、ココナッツ水、他の飲料との混合果汁などである。バレンシアの収穫期は冬であるが、果汁として消費されるのは夏である。このため、加工業者では冷凍保存の他、様々な方法で保存を行っている。例えば低温殺菌された果汁を1,000リットル入の容器で貯蔵し、年間を通して供給する等の方式である。

## 貿易

輸出量は大変少なく、2017/18年の輸出量は500トンと推測される。加工業者は国内需要を満たすために輸入を行っている。2017/18年の濃縮果汁の輸入量は、前年と同程度の31,500トンと予測される。プラ

ジルが主な輸入先であり、ストレート果汁から水分を除去した冷凍濃縮果汁の形で輸入される。

**オーストラリアのオレンジ統計(在豪 米国農務省 農務官)**

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	20,600	20,600	20,600
収穫面積(ha)	20,600	20,600	20,600
結果樹数(千本)	9,350	9,350	9,350
未結果樹数(千本)	85	85	85
果樹数合計(千本)	9,435	9,435	9,435
生産量計(千トン)	455	480	480
輸入量(千トン)	18	20	20
総供給量(千トン)	473	500	500
輸出量(千トン)	161	230	230
国内消費仕向量(千トン)	235	210	210
加工仕向量(千トン)	77	60	60
総出荷量(千トン)	473	500	500

2017/18年産は2018年4月→翌年3月

**オーストラリアのオレンジジュース(在豪 米国農務省 農務官)**

	2015/16	2016/17	2017/18
加工仕向量(トン)	77,000	60,000	60,000
期首在庫(トン)	614	614	614
生産量計(トン)	8,100	7,000	7,000
輸入量(トン)	32,200	31,500	31,500
総供給量(トン)	40,914	39,114	39,114
輸出量(トン)	800	500	500
国内消費量(トン)	39,500	38,000	38,000
期末在庫量(トン)	614	614	614
総出荷量(トン)	40,914	39,114	39,114

2017/18年産は2017年7月→2018年6月

## 20. 世界のマンダリン市場（2）

FreshPlaza 電子版（2017年12月15日）



北半球ではマンダリンの販売は始まっている。スペインの生産者は早生品種の販売に当たって、南半球産と販売時期が重複した。スペインでは、モロッコ、イタリアと同様に生産が減少している。3カ国とも熱波による影響を受けたためである。このため、イスラエルの生産者は輸出の好機ととらえている。米国も生産量が減少すると見込まれているが、現在のところ不足しているという報告はない。中国では、従来にも増してカンキツグリーニング病による減収が大きく、価格は上昇している。

### 米国: カンキツの中で伸びるマンダリン

業者によると、モロッコ産、スペイン産が広く市場に流通しているという。入荷量は前年と同程度である。価格は数週間前に比べて安く、25~26ドル前後である。これは、2、3週間前に比べると10ドル安い。スペイン産の Clemenules は既に販売時期が終わっている。モロッコ産の Nour マンダリンは、昨年に比べると少ないようだ。この先、輸入品とカリフォルニア産の出回り時期にギャップが生じるために、業者は価格が上昇すると見ている。2月以降は、イスラエル産のオリーが入荷すると業者は予測している。

とはいって、カリフォルニア州産のマンダリンが市場を優先するため、輸入品は独自の地位を築いてはいない。生産者としては、他のカンキツと同様に、今シーズンのマンダリンの生産量も当初見通しから下方修正されると考えている。マンダリンのシーズンは温州ミカンからスタートし、クレメンティン、マーコットと続き、シーズンが終わる2月まで継続する。カンキツの中ではマンダリンは多く栽培されるようになっている。近年、Halo と Cuties のブランドが急速に拡大している。

### オーストラリア: 輸出拡大を狙う

今シーズンはカンキツの輸出に成功したが、マンダリンも例外ではない。9月までの輸出量は前年に比べて38%増加し、64,755トンに達した。この数字は、年間を通した数字が明らかになると、さらに増加すると見られる。最も量が多い輸出先は中国である。輸出のピークは年の半ばに当たる。シトラス・オーストラリアによると、生産者は収益性の高いマンダリンに作付けを転換しているという。この理由の一つは、アジア市場で輸

出が拡大しているからだ。加えて、米国市場へのアクセスの努力を続けている。

国内では、クイーンズランド州が最大の産地である。ここ数年では、マーコットの生産が伸びている。最近、冷蔵処理を要件とされていた輸出プロトコルの見直しが行われた。南オーストラリア州のリバーサイドでは、ミバエが最早検出されないことが確認され、植物検疫要件が変更された。これらを受け、生産者はアジア向け輸出がさらに拡大することを期待している。

### **中国: カンキツグリーニング病の影響で価格が上昇**

カンキツグリーニング病と天候不順による影響を受け生産量が減少し、価格が上昇している。一方、電子商取引と販売チャネルの拡大を通じて、地元のカンキツ生産会社は、国内での市場シェアを拡大しようとしている。価格上昇の一因は、輸送費や包装経費を含む労働コスト及び資材費が高騰しているからだ。カンキツグリーニング病は、中国南部の広東省、甘肃省で猛威を振るっているが、同病による生産の減少の一部は、中国中部及び北部の湖北省、湖南省、四川省における生産の増加により、相殺されている。

マンダリンの輸入量は急速に拡大している。2015/16年の輸入量は21,000トンで、前年を10%上回った。人気が高いのは、イスラエル産のジャファー・オリー、オーストラリア産のエンプレス、南アフリカ産のクレメンゴールドである。

### **パキスタン: キノーに対する強い需要**

キノーマンダリンの輸出業者によると、同品種に対する需要は旺盛のことだ。顧客はロシア市場、ウクライナ市場で人気が高い大きいサイズの果実を求めているという。しかし、着色が依然として不十分であることから、供給量は限られている。収穫は残り10日前後で終了し、出荷のピークはその直後に続く。

湾岸諸国は成長を続ける輸出市場の一つである。その理由について、輸出業者は2つの理由をあげている。一つは、これら諸国の消費者は、気温が高い時期にマンダリンを多く消費するからであり、もう一つは、同地における人口構成の多くがパキスタン出身であるからだそうだ。

### **イスラエル: 早期の出荷が不可欠**

クレメンティンを欧州市場に大量に輸出するには数週間かかるが、国内では既に収穫が始まっている。降雨のために収穫作業が数日遅れたものの、欧州向けのコンテナには既に荷が積み込まれている。昨シーズンは生産量が豊富であったが、今シーズンは気象条件の影響と裏年に当たることから、生産量は減少が見込まれている。

輸出業者にとっては、早期の出荷が不可欠である。というのも、他の輸出国に先んじる必要があるからだ。数年前までは、欧州市場での出回りが少なかったため、イスラエル産のクレメンティンの輸出の成功は保証されていた。しかし、近年、他の輸出国が早期に欧州市場へ出荷を行うため、成功は約束されていない。

需要は旺盛で、特に欧州市場はクレメンティンの70%を受け入れている。輸出業者は、北米市場へも参入努力を続けていますが、輸送時間がかかるために、欧州市場が第一の選択肢となっている。輸出による利益が出て10年を経過し、生産の潮流が変化している。栽培面積が700ha 増加し、従来からの7,000ha に比べて拡大傾向にある。

輸出業者によると、オリーの地位は今後も変化がないと見込んでいる。オリーが市場に出て数年が経過しているが、市場での人気は高く、マンダリンの需要の拡大を後押ししている。

### **モロッコ: 生産は減少見込み**

熱波の影響で、生産量は大きく減少する見込みだ。輸出業者によると、前年に比べて15~20%減少し、収穫量は200万トン程度と予想している。オリエンタルの東部地域とマケラシュ周辺の生産量が大きく減少するようだ。モロッコでは輸出用のマンダリンに対して厳しい規格を設けているため、輸出量は少なくなる見通しだ。シーズンは10月から12月中旬まで続くが、この時期の高温のため、品質は良くない。クレメンティンの主な輸出先は、米国、カナダ、ロシアである。

## **イタリア: クレメンティンの生産量は減少**

クレメンティンの収穫は10月に始まった。夏の干ばつで糖度(ブリックス)は2度ほど高いものの、生産量は減少する見込みだ。生産者は、前年よりも20%減収すると見込んでいる。しかし、生産者の中には、減収幅が30~50%に達すると見るものもいる。

11月下旬、業者は、生産量の減少のため需要が供給を上回っていると報告している。このため、高値が続いているが需要を冷ます恐れもある。国際市場の中では、とりわけスペインと競合している。

## **スペイン: 難しいシーズンの開始**

主産地であるカステリオン州、バレンシア州では、生産量は前年に比べ30%減少すると見込まれる。シーズン当初は南半球産と競合するため、価格動向を懸念したが、昨年に比べて大きく値を上げてシーズンが始まった。価格上昇は早生品種である興津温州、岩崎温州で顕著であり、これに続く Clemenrubi、Oronul、Loretina、Arrufatina、Orogrande でも高価格であった。これらの品種は品質が良く、欧州市場で需要が高かった。

Clemenules の収穫は現在進行中であるが、生産は熱波と降水量不足により減少する見込みだ。昨年の Clemenules の市況は、豪雨のために惨憺たるものであったが、今年は入荷量の減少で、通常よりも1~2週間早く終了すると見込まれる。産地価格はキロ当たり0.36ユーロであり、生産者にとっては朗報である。

ウエルバが最大の産地であるアンダルシア州では、生産量は安定している。既に最も出荷が早いクレメンティンは市場から姿を消している。市場関係者によると、早生品種の Clemenrubi、Oronules、Orogross の品質は良くないとのことである。加えて、主に南アフリカ等の南半球産の晩生品種との競合もあったことも災いした。この結果、シーズン開始時には価格は下落した。しかし、この地域における生産者の頭痛の種は収穫労働力の不足である。これは当該地域で成長が著しいソフト・フルーツ(ベリー類)に人手が奪われるためである。

## **ベルギー: 価格は安いが市場尾は安定**

業者によると、クレメンティンの品質は「素晴らしい、甘い」とのことである。現在時点の輸入先はモロッコ、スペインであり、ベルギー市場だけに向けて出荷されたものである。業者としては、毎週どのくらいの量が入荷するか気にしているが、現時点では価格は昨年よりも安いそうだ。価格は幾分安いものの、市場は安定していることだ。

## **オランダ: 量は少ないが、需要はそこそこ**

今年はマンダリンの入荷が遅れているそうだ。市場の入荷量が少ないので、需要を満たすには十分な量だという。現在、主流はスペイン産の Clemenules が市場に出回っており、2~3週間で販売は終了する見込みだ。続いて、Clemenvillas、その次はナーダコットが入荷する。モロッコからは現在 Clemenules が入荷しており、Nour マンダリンは1月に入荷する見込みだ。輸入業者は、1月には市況は改善し、価格は上昇すると見込んでいる。

## **ドイツ: 葉付きのマンダリンに需要**

業者はマンダリンに対する需要に満足していることだ。例えば、クリスマスシーズンは葉付きのクレメンティンに対する需要が旺盛だ。ただ、1月以降の需要は徐々に減少する。現在は、熱波等の影響で生産量の減少が見込まれるものスペイン産が主流である。生産の減少による価格への影響は限られており、クレメンティンも他のマンダリンも昨年より少々値が高い程度である。

市場にはイタリア産、モロッコ産も出回っている。品質は総じて良好である。クレメンティンの中では、Clemenules の人気が最も高い。Clemenvilla の人気もある。1月中旬からは、次第に Hernandina クレメンティンの入荷が増加する。

著者: Rudolf Mulderij

## 21. フロリダ州のカンキツ生産予測さらに減少

The Packer 電子版 (2017年12月12日)

米国農務省の「作物生産報告」によると、フロリダ州のオレンジの生産量は11月時点の予測から更に減少することだ。

12月12日に公表された報告書によると、フロリダ州のオレンジ生産量は4,600万箱(1箱90ポンド)で、11月の予測からさらに8%減少し、昨年よりも33%減少することだ。

このうち、ネーブルの生産量は1,900万箱で、11月予測から10%減少、昨年よりも42%減少するとしている。一方、バレンシアは2,700万箱で、11月予測から7%減少、前年よりも24%減少するとの見込みだ。

グレープフルーツに関しては、465万箱(1箱85ポンド)で、11月予測とは変更がなく、前年に比べて40%減少するとしている。

ハリケーン・イルマの来襲から3ヶ月経ったが、フロリダ州カンキツ局によると、生産者支援のために連邦政府に対して緊急支援を要請しているとのことだ。今回の生産予測の見直しは、ちょうどそのタイミングで公表された。「二度にわたる生産予測の下方修正は、連邦政府による災害支援の必要性を強調するものだ。フロリダのカンキツ生産者は、来シーズンに向けて何をなすべきか決定する時期にある。アメリカの象徴であるカンキツを後生に残すためにも、生産者は支援を必要としている」と同局の事務局長はプレスリリースの中で述べている。

生産者団体のフロリダ・シトラス・ミューチュアルの副会長 Sparks 氏は、「フロリダ全体の被害の実態が明らかになるにつれ、何が起ったのか分かってきた。残念なことに事態は益々悪くなっている。2017/18年の生産量は収穫が終わってみるまで判明できない」とプレスリリースで語っている。

同氏は、「最新の予測は、まさに、フロリダの生産者の再建を図るために、議会はカンキツに関する救済策をパッケージとして採択する必要があることを物語っている」とも語っている。

今回の12月予測では、カリフォルニア州、テキサス州の数値に変更は加えられなかった。フロリダ州のオレンジ生産量は、少しだけではあるがカリフォルニア州よりも上回っている。12月予測を換算すると、2017/18年のフロリダ州のオレンジ生産量は207万トンで、カリフォルニア州の184万トンを抑えている。

### 価格は上昇

12月11日現在のニューヨーク市場におけるフロリダ産グレープフルーツの価格は、サイズ36で1箱28ドルであり、前年の16~18ドルを上回っている。フロリダ産ネーブルの価格は、サイズ56で1箱22ドルと前年の18~20ドルを上回っている。

## 22. 世界のレモン市場

FreshPlaza 電子版 (2017年12月8日)



レモン市場は現在平穏である。需要と供給はバランスをとれているが、そうでない場合は業者による調整が必要となる。例えば、スペインの生産者は、Fino(品種)レモンの後半の販売に注目している。カリフォルニア州ではレモンの収量は少ないが、当面は大きな問題は生じていない。アルゼンチンでは米国向け輸出に適合できる果皮色ではないため、輸出が止まっている。中国では、これまでの好調な販売を受け栽培面積が増加したため、価格は下落傾向である。

### 米国: カリフォルニア州のレモンの生産量は減少

メキシコ産とチリ産の出荷が終り、米国産のレモンが市場に出回っている。生産量は減少したが、需要は安定しており、十分な量が供給されている。価格も安定している。国内市場における堅調な需要に加え、東アジア、東南アジアからの需要も多い。カリフォルニア州では州内の気象条件が地域により異なることから、年間を通して需要に対応できる。

カリフォルニア州とアリゾナ州の生産量は少ない。生産者によると、今年初めに遭遇した熱波が減収の要因であるとのことだ。しかし、業者はこの状況に対して楽観的であり、東海岸の業者は、「昨年のような供給のギャップは生じないだろう」と話している。昨年は、メキシコ産の出回りとカリフォルニア州産の出回りの時期にギャップが生じたが、今年に関しては問題ないとしている。加工向けレモンについても小売サイドの要求に対応できているようだ。

### アルゼンチン: 果皮色の問題で米国向け輸出ができます

米国市場はアルゼンチンのレモンに開放されているものの、米国が求める果皮色に適合したいため、米国への輸出は行われていない。というのも、両国は「レモンは黄緑色でないとならない」と合意しているからだ。収穫のピークは4月から9月までで、90%を占める。残りの10%はその他の時期に収穫されるが輸出には適さない。

アルゼンチンの業者は、「今シーズンは両国合意に適合するレモンは存在しないため、どの業者も米国に

は輸出できない」と語っている。果皮色は収穫時に決まってしまう。米国が要求する果皮色に関するプロトコルでは、今シーズンはどうしようもできない。

米国市場へは輸出できないが、その他の国へは輸出が可能である。メキシコは昨年7月に市場を開放した。また、なにより欧州はアルゼンチンにとって最大の市場である。

### **中国:栽培面積の増加で価格は下落傾向**

レモンの栽培は、重慶近郊の潼南、四川省の安岳、海南省、雲南省の徳宏で行われている。現時点ではが安岳から入荷するレモンが80%を占めている。近年、需要の高まりから安岳のレモンは高騰した。4年前の安岳のレモン価格は、キロ当たり10~20元(1.51~3.02ドル)であった。この結果、栽培面積が急速に拡大し、昨年に比べてもさらに増加している。天候は安定しており、生育状況は良好である。昨年は裏年であったが、今年は豊作が予想される。レモンの輸入が増加していることから、雲南省と重慶市でもレモン栽培への投資が行われ、面積が拡大している。このような状況であるため、近い将来、価格は下落傾向を示すと見られる。

### **スペイン:サイズが小さい Primofiori(品種)レモン**

Primofiori レモンの出荷が始まったが、昨年よりやや数量が多い。しかし、降雨が少なかったため果実の大きさに影響があった。果実のサイズが小さく、このことが価格低下をもたらしている。価格は全般に低下傾向であるが、当面サイズの大きい果実は高値で取引されている。とはいえ、業者は Primofiori レモンに関してはさほど心配はしていないようだ。輸出は、大部分がベルギー、ドイツ向けである。次いで、フランス、スイス、オランダ、イタリア、ポーランドに輸出されている。

スペインのレモンは、トルコ産が不作であったため、欧州市場では支配的地位を占めている。キロ当たりの平均価格は0.36ユーロである。Fino(品種)レモンのシーズン後半は12月に始まる。生産者は慎重に販売の動向を見て収穫を行っている。レモンの場合は、果実を収穫しないで樹に放置しておいても問題が生じないので生産者にとっては有利である。

### **ベルギー:レモンの需要は少ない**

業者によると、現時点ではレモンの取引は活発ではないようだ。供給量と品質は通常レベルを維持している。現在のレモンの価格は、1.20ユーロ前後であり、販売している果実は全てスペイン産である。毎週、10~20トンのレモンが入荷している。輸入業者によると、レモンの需要は少ないとのことだ。

### **ドイツ:レモン市場は安定**

他の欧州諸国と同様、スペイン産のレモンが市場を支配している状況だ。卸売市場で人気のある品種は、Fino、Misstonic、Severa である。トルコ産のレモンも人気はあるが、今年は不作であるため量は限られている。業者の話では、需要と供給はバランスがとれているそうだ。ただ、一部の業者は、やや供給過剰だと述べている。価格は安定しており、キロ当たり0.32から0.40ユーロの間を前後している。スペイン産のカンキツ類の価格は、昨年よりもやや高値で取引されており、10~20%上回っている模様だ。

### **オーストラリア:良好だったシーズンが終了**

レモンの生産者は成功裏に冬シーズンを終了した。これは、中国への輸出が好調であったためだ。カンキツの輸出は、今年3.77億ドルを記録した。これは昨年を31%上回る数字で、2011年以降では際立っている。

業界団体によると、今後10年でレモンの栽培面積は50%増加することだ。健康志向の消費者が、ビタミンCが豊富なレモンを購入するため、需要が高まっているためだ。夏の期間は国産レモンが出回らない。そのため、国産レモンが市場に出荷される2月までは、米国、エジプトから輸入される。

著者:Rudolf Mulderij

## 23. スペインのカキが霜による被害

FreshPlaza 電子版 (2017年12月7日)



先週、スペインのバレンシアにある Frutas Inma 社は、他の輸出業者と同様にカキの最盛期を迎えていた。果実は良好で、収穫の準備が整っていたが、数日に渡り霜害に遭い、状況は大きく変化した。「収穫が残っていた30%のカキのうち、90%を廃棄しなければならない。これは災害だ」と同社の技術マネージャー Ernesto 氏は被害果を示しながら語ってくれた。

「通常、1月、2月には降霜はあるのだが、12月に起ったことはない。全くお手上げだ。既に果実には黒点が出ている。10日もすれば果実は柔らかくなつてスポンジのようになるだろう。カキの場合は、例えはジュースにするようなこともできない。生産者にとっては災難というだけではすまされない。生産者のうち保険に入加入しているのは70%しかいない。利益は出ないが新たにスタートしなければならない。この地域では経済の大部分が、直接的又は間接的にカキの栽培と関係している。収穫労働者や選果場の労働者にも厳しい状況だ。しかし、既に起つたことだから、この事態に対処しなければならない」とのことだ。

さらに、「既に顧客には通知している。価格上昇は避けられない。しかし、数日内に価格が跳ね上がるということではない。生産者は出荷可能な果実は直ぐにでも販売しようとしているからだ」と続けた。降霜による被害は地域により大きく異なる。とはいえ、バレンシアでは全般的に被害を受けた。「スペインのカキ栽培面積は2.5万haだが、このうちバレンシアが2.3万haを占めている。このため、市場に与える影響は大きい。今年は30万トンの生産があると見込んでいた。既に植栽された果樹園が成園に達すれば、3年以内に50万トンの生産量が期待されるのだが」と語っている。

多くの輸出業者は欧州市場に目を向けていますが、Frutas Inma 社は7年前から遠くの市場に焦点を当てている。「生産量の半分は遠方の市場に出荷している。輸出業者の中では他に例がない。我々にとっては、カナダ、ブラジル、ウルグアイ、香港、シンガポール、マレーシア、アラブ首長国連邦、ヨルダン、カタールなどはお得意先だ。欧州の中ではドイツとフランスが最大の輸出先だ。スペインではカキのことは広く知られているが、自分の樹を持つ人が多いのは少々残念だ」と話している。

近年、バレンシアではカキの生産は急速に拡大している。しかし、Ernesto 氏は市場の伸びを上回る拡大だと考えていません。「今年の生産量は昨年に比べると10%少ないだろう。しかし、カキ市場の潜在規模はかなり大きい。益々多くの消費者がカキに興味を寄せている。通常、特定の民族が興味を抱いて、その後に市場が拡大するものだ。中国は多くの果物を輸入している。仮に中国が市場を開放されたなら、スペインのカキに大きなチャンスが訪れるだろう。ロシアにしても、輸入禁止措置を講じる前は、我々のカキの30%を購入してくれていた。輸入禁止が解除されたなら、カキが不足する事態になるだろう。問題は量ではなく、売り方にある。我々は品質の良いカキを供給しているが、一括して販売されている。これは業界で広く行われていることだ。しかし、海外の品質が劣るカキも同じ価格で販売されている。小売業界の方式に安易に身を委ねすぎている」と述べている。

消費者は年間を通してカキを求めている。Frutas Inma 社では様々な品種を試験しているが、顧客は未だに Rojo Brillante(品種)を求めている。「顧客に何を求めているか尋ねたところ、スペイン産のカキのシーズンを



延長して欲しいということだった。しかし、これは Rojo Brillante だけでは解決できない」という。しかし、同社ではペルーとウルグアイでジョイントベンチャーを立ち上げた。両国でカキを生産すれば、顧客にカキの提供期間を延長することは可能だ。「まだまだ課題は多いが、5年以内にカキを提供する期間を10ヶ月に拡大することは可能だ」と話している。

Frutas Inma 社は、過去数カ年でアボカドにも手を伸ばしている。「カキと同様、アボカドもエキゾチックな果物に分類される。カキの顧

客にアボカドも提供したい。バレンシアではアボカドの生産は容易ではないが不可能ではない。ペルーでも 200ha の農園にアボカドを栽培している。これで年間を通してアボカドを供給することが可能になる。勿論、ザクロなども有望な果実だ。しかし、当社としてはカキとアボカドに焦点を当てることにした。全ての分野で専門家になるというのは不可能だからだ」と付け加えた。

著者:Izak Heijboer

関連情報:[www.frutasinma.com](http://www.frutasinma.com)

## 24. 欧州のファイブ・ア・デイ

EUROFRUIT 電子版 (2017年12月7日)

欧州の7カ国を対象とした調査結果によると、英国のファイブ・ア・デイの実施率が最も高いことが判明した。

調査はノルウェイ果実・野菜マーケティング協議会が調査会社 Kantar TNS に委託して行ったもので、ノルウェイ、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、英国、フランス、スペインの消費量を対象に行われた。

この結果、毎日5ポーション以上の果実、野菜を摂取する消費者の割合は英国が最も高く、39.7%であった。2番目はフランスで34.8%、次いでスペイン(29.3%)、ノルウェイ(23.9%)、フィンランド(22.9%)、スウェーデン(19.3%)、デンマーク(18.2%)の順であった。

しかしながら、英国は良いことだけではなく、悪いことも最高を記録した。一週間、一日1ポーションも果実、野菜を摂取していない消費者の割合も最高で、14.5%に達したからだ。

この報告書では、個人の教育水準が摂取量に影響を与えることも判明した。つまり、高等教育を受けた消費者ほどより多くの果実・野菜を摂取しているのだ。また、女性は男性よりも摂取量が多いことも判明した。

Kantar TNS 社による調査は、各々ごとに成人1,000を対象に面談形式で行われた。この他の特徴的な結果としては、フランスとスペインでは果実はランチやディナーのデザートとして摂取されている割合が多いのに対し、その他の国では一日を通じてより均等に摂取されていることも分かった。

また、野菜は主にディナーやランチで摂取され、ジュースは朝食の飲み物とされている。また、店で購入するスムージーはスペインと英国で多く消費されていることも明らかにされた。

## 25. エジプトのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年12月6日公表)

### 栽培面積

2017/18年のオレンジの栽培面積は、前年を5%上回る154,200haと予測される。国内及び海外市場でエジプトのオレンジに対する需要の高まりが、面積の増加を後押ししている。このうち収穫面積は、前年を4%上回る142,100haと予測される。収穫面積の増加は暴風雨に遭遇した2016年の後、2017年の気象条件が順調であったためであり、2018年も引き続き好天が見込まれる。

過去10年に渡り、国内及び海外市場においてエジプト産のオレンジに対する需要は増加している。国内におけるオレンジの価格は、他の国産果実に比べると手頃であることから国内需要は増加している。また、エジプト政府と民間部門による海外の新市場開拓の努力と、エジプトの通貨(ポンド)の切り下げにより、海外市場での需要が高まっている。2017年には、農業国土開拓省(MALR)は、中央植物検疫所(CAPQ)による交渉を通じてオーストラリア、ベトナムに対する輸出が解禁されたと公表した。このような内外の需要拡大を踏まえ、生産者は着実に栽培面積を拡大しており、拡大のテンポは他の作物よりも大きい。2006年の栽培面積104,383haに対し、2016/17年の栽培面積は41%(42,567ha)増加し、146,950haとなっている。



カンキツのうち、オレンジが最も多く栽培されている。これは、海外からの需要が強く、生産者の利益も大きいからである。サプライチェーンが発達しているため、単独では輸出ができる小規模生産者も輸出業者や大規模生産者への販売を通じて生産物の輸出を行っている。オレンジはエジプト全土で栽培されているが、デルタ地帯の行政区であるQalyoubia、Beheira、Sharqiya、Ismailia、Menufia が主産地である(左図の緑色の部分)。オレンジの収穫は4~5ヶ月にわたって行われる。品種の中ではネーブルが最も多く生産され、オレンジの60%を占めている。

### 生産

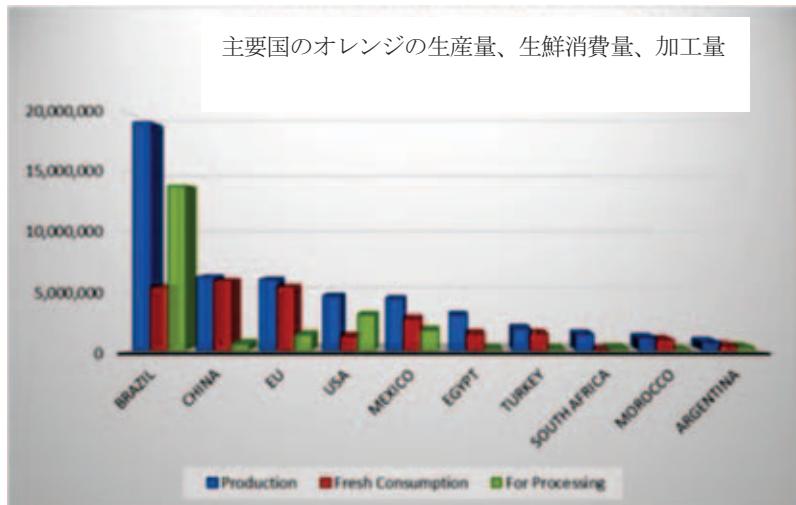
2017/18年のオレンジの生産量は、前年を6%(18万トン)上回る318万トンと予測される。生産の増加の要因は、栽培面積が増加すること、気象条件が良好であること、新たに結果樹齢に達する果樹園が増加することである。結果樹数は180万本増加し、1,230万本と見込まれる。過去10年間で生産量は大きく増加し、2006/7年の183万トンから、2016/17年には64%(117万トン)増加し、300万トンとなった。

米国農務省の統計によると、エジプトは世界で第6位のオレンジ生産国であり、ブラジル、中国、米国、EU(スペインを除く)、メキシコに次いでいる。46%が生鮮果実として国内で消費され、51%が輸出され、3%が加工に向けられる。なお、世界第1位の生産国であるブラジルでは、生鮮で消費されるのは28%で、加工に向けられるのは78%である。

エジプトのオレンジ生産は、灌漑水を用いて行われる。ナイル川が運ぶ肥沃な土壌と、年間を通じた日照により、単位面積当たりの収量が多く、品質も良好である。エジプトのオレンジ産業の経済的活況は、人件費の安さと主要な大市場に近接していることによりもたらされている。果樹園の中には25年生産を続ける場合もあるが、エジプトの気象条件の下では最も生産力が高いのは4~15年生の果樹である。

エジプトで生産されている品種はいくつかある。主に生産されているのは6品種であるが、バレンシアとネーブルは主に輸出され、その他の品種は主に国内市場向けである。

エジプト南部ではオレンジの植栽は2月に行われ、北部のデルタ地帯では3月に行われる。植栽後、4年で収穫が始まり、樹木は50年間生存するが、20年を超えると生産力が低下する。開花は品種によるが、8月と9月の暑い時期を除き、年間を通じて見られる。輸出は11月中旬に始まり、冷蔵貯蔵されるため8月下旬まで長く続く。



#### 主要なオレンジ品種

Baladi オレンジ	種無と種のある2品種が存在する。ジュースに用いられる。
バレンシアオレンジ	収穫期は夏にかけてであり、遅い。主にジュース用であるが生食もされる。
ブラッドオレンジ	味が良く、種無で、主にジュースに用いられる。
ネーブルオレンジ	早生の品種は国内で消費され、晩生品種は輸出される。
Khalily オレンジ	ジュースに用いられる。
スイートオレンジ (Sukkari)	生食用であり、種がある。

地中海ミバエは経済的な損失をもたらす害虫である。政府は、害虫の拡散を防ぎ、輸出果実の品質管理を行うため、「ミバエ対策プロジェクト」に資金を提供している。エジプト輸出は拡大しているが、いくつかの輸入国(ロシアとウクライナ)はミバエの侵入に関して苦情を提起している。ミバエの侵入を防ぐため、いくつかの輸入国からは低温処理が求められている。エジプトには、この他モモミバエ(peach fruit fly)も存在する。

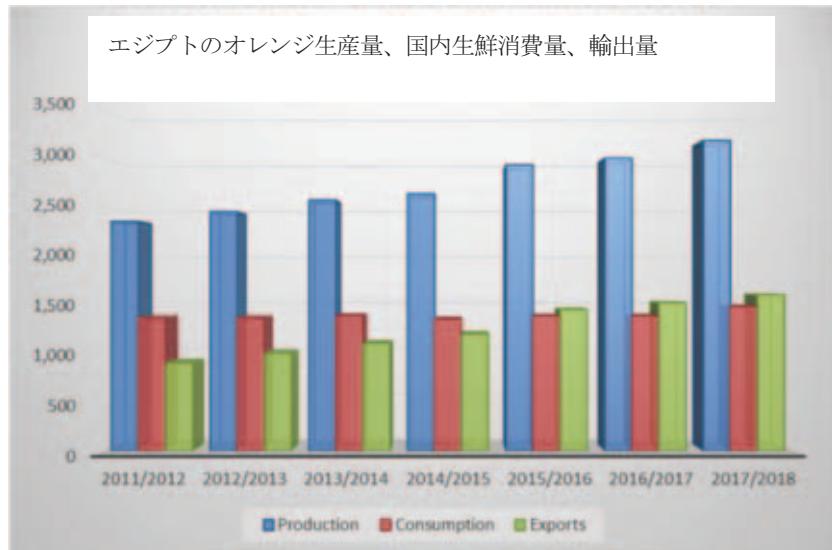
オレンジは主要な輸出品目であるため、エジプト政府は地域の生産者、輸出業者とともに品質向上にも熱心に取り組んでいる。品質向上は海外からの需要に応え、競合国との競争に打ち勝つ上で重要である。

2017年10月、輸出果実と野菜の残留農薬、病虫害に係る品質向上を図るために特別の措置を講じた。エジプト農業輸出評議会とMALRは、オレンジ生産農場に対して新たな食品安全システムを遵守させることを発表した。新たなシステムでは、栽培管理方法を規制し、農薬使用を管理するため、輸出に携わる農場を登録し、コード化することとしている。昨シーズン、農業輸出評議会はブドウ、イチゴ、ピーマンを生産する農場の登録を行った。この動きは、最近いくつかの輸入国が残留農薬を理由としてエジプト農産物を排除しようとしていることに対抗するためである。評議会は、このシステムの実施に備えて、生産会社や特定の農場に対して、生産データを提出するよう要求することになると見られる。評議会メンバーは、2018/19年のカンキツ輸出シーズンから、正式にこの新しいシステムに移行させることを期待している。

オレンジの品質改善という意味では、今回の措置が初めてというわけではない。2016年11月、MALRは園芸産品の国際市場への参入を推進するため、農業生産工程管理(GAP)に取り組むべく全国運動を展開した。園芸産品生産者・輸出業者組合(UPEHC)が主体となって実施したこの運動は、地域の小規模生産者の農業慣行を国際的な基準に適合させることに重点が置かれている。

#### 消費

2017/18年の国内生鮮果実消費量は、前年を7%(10万トン)上回る148万トンと推測される。オレンジは冬の間は人気の高い果実である。



2016年11月に政府はエジプト通貨のポンドを固定制から変動相場制に移行した。この結果、2016年3月から適応されていた固定レートの1ドル8.88ポンドから13ポンドに下落した。その後もポンドは下落し、2017年11月10日現在では17.59ポンドとなっている。下落のスピードが速いため、生鮮オレンジを含む全ての商品で物価の上昇が見られる。エジプト中央銀行(CBE)によると、果実、野菜のインフレ率は、2016年11月の13.898から2017年9月には34.628と上昇している。

2017年11月のキロ当たり生鮮オレンジの価格は7ポンドであり、通貨切り下げ前の3.50ポンドに比べると高騰している。しかし、他の果実との対比で見ることが必要であり、比較をすればオレンジの価格は比較的安いといえる。例えば、バナナの2017年11月の価格はキロ当たり20ポンドで通貨切り下げ前は11ポンドであった。同様に、リンゴは20ポンド、15ポンド、グアバは10ポンド、8ポンドである。

大部分のオレンジの輸出業者は、政府から輸出に際しての認可を受けた梱包施設を備えた生産者もある。これらの業者は、生産量が輸出需要に満たない場合は地元の生産者から果実を買受けしている。この他、自らは生産を行わず、梱包施設だけを持ち、生産者から果実を買受けしている輸出業者もいる。生産者は、通常農場に近い認可された梱包施設に果実を納入し、対価を受取っている。多くの輸出業者は、生産者から果実を丸ごと購入する契約を結んでおり、この場合は、梱包施設まで果実を搬送する経費は輸出業者が負担している。

業者による買取り価格は、毎年、エジプト輸出審議会のカンキツ委員会が定めている。委員会は収穫が始まる前に招集され、果実のサイズ、外形に基づき、等級別に適切な価格が設定されている。こうした公的な価格取引以外にも、一部の輸出業者の中には、高い価格を提示して生産者から果実を買取る者がいる。これは品質が良い果実に対して行われることが多い。この他、収穫時前に契約を結び、収穫作業を助け、果実を梱包施設に移送する業者も存在する。

## 貿易

2017/18年の輸出量は、前年を5%(8万トン)上回る160万トンと推測される。これは、通貨切り下げにより、価格面で競争力が強いエジプト産オレンジに対する需要が増加すると見込まれるからである。輸出業者は、スペイン産、モロッコ産など競合国よりも安い価格を提示することで取引を拡大し、有利な為替レートを受けて利益を得ている。

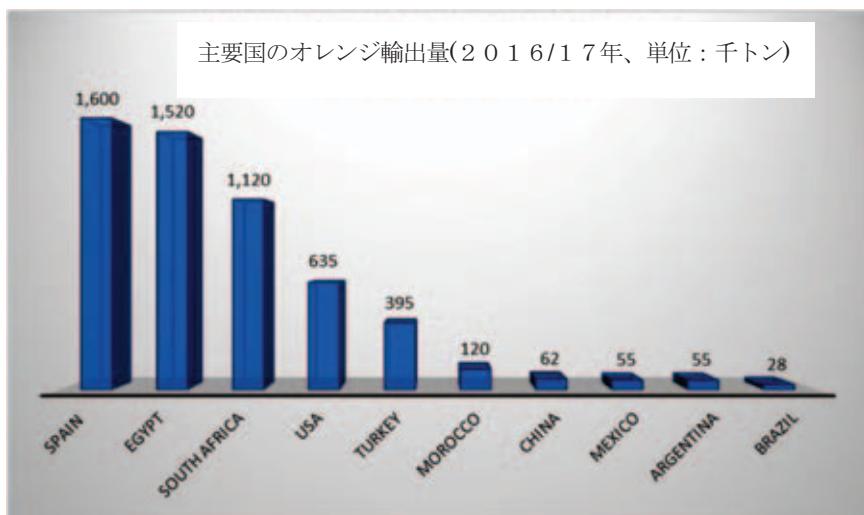
2016/17年の輸出先トップ10は、ロシア、サウジアラビア、オランダ、中国、アラブ首長国連邦、バングラデシュ、英国、クウェイト、イラク、ウクライナであった。このうち、ロシアとサウジアラビアだけで全輸出量の43%を占めた。2017/18年の輸出先も大きな変動はない見込まれる。

2016/17年の輸出に当たっては、特定の市場において大幅な増加があった。中国向けの輸出は前年より204%(67,117トン)増加し、99,930トンとなった。香港は123%(24,433トン)増加し、44,228トンであった。

この他、目立ったところでは、イラクが1314%(28,113トン)増加し、30,252トン、トルコが932%(23,506トン)増加し、26,026トン、イタリアが222%(13,243トン)増加し、19,205トンであった。

ロシアは2014年8月、西欧諸国に対し、クリミア侵攻に対する経済措置の対抗策として、果実を含む食料品の輸入禁止措置を講じた。また、2016年1月には、前年の11月にシリア領内でロシア機が撃墜されたことへの対抗策として、トルコに対して輸入禁止措置を講じた。この二つの輸入禁止措置により、エジプトからのロシアへのオレンジの輸出は2シーズンに渡り大幅に増加した。それまでのロシアの大手輸入先であったスペイン、ギリシャ、イタリア、トルコからのオレンジの輸入が禁止されたからである。

米国は、2013年8月にエジプト産のオレンジとタンゼリンの輸入を承認した。しかし、輸入許可の前提となるエジプト側検査官、輸出業者に対する「冷蔵処理に係る訓練」は未だに行われていない。



## マーケティング

海外の市場では、スペイン、南アフリカ、トルコ、モロッコが主なエジプトとの競合国である。この他、米国、中国、オーストラリア、アルゼンチンとも競合している。

**ロシア市場:** 南アフリカ、トルコ、モロッコが競合国である。しかし、エジプトの輸出量は群を抜いている。2016/17年のロシアへの輸出量は217,988トンで、トルコの96,397トン、南アフリカの70,711トン、モロッコの13,353トンを引き離している。トルコは、前年より39%(26,957トン)増加したが、これはロシアの輸入禁止措置の中で、オレンジが適応除外となったためである。この除外措置は2016年10月に講じられた。2015/16年はトルコからロシアへの輸出が禁止されていたため、エジプトは最も恩恵を受けた。

**サウジアラビア:** 南アフリカが主な競合国である。しかし、エジプトの輸出量が最も多く、2016/17年は164,741トンであった。これに対し、南アフリカは79,599トン、スペインは16,039トンであった。

**オランダ:** スペインと南アフリカが競合国である。2016/17年は、南アフリカが283,963トン、スペインが140,647トンに対し、エジプトは120,655トンであった。

**中国:** 南アフリカ、米国、オーストラリアが競合国である。2016/17年は、南アフリカが106,284トンであるのに対し、エジプトは99,930トンであった。また、米国は70,852トン、オーストラリアは44,069トンであった。過去2カ年で中国のオレンジ輸入は増加している。中国はカンキツグリーニング病の被害を受け、国内生産量が急速に減少し、国産のオレンジ価格が上昇している。中国の国産オレンジが出回る時期とエジプトの輸出の時期が同時であることから、この恩恵を享受している。そして、中国市場における需給ギャップを埋めることに貢献している。

**アラブ首長国連邦:** 南アフリカが競合国である。2016/17年は、南アフリカが80,594トンであるのに対し、エジプトは69,998トンであった。

エジプトのオレンジ輸出に当たって関税は制約要因となっていない。むしろ、輸送コスト、輸出市場との輸

送距離、季節性が制約要因となっている。EU市場ではスペインの方が優位な条件にある。輸送距離が短いために、輸送コストが安く、輸送時間も短いからである。南アフリカが有利な点は、出荷時期が異なることによる。バレンシアオレンジの場合、エジプトの収穫時期が12月であるのに対し、南アフリカは7月から9月である。エジプトが収穫を始める前に、南アフリカ産で市場が飽和しているといった状況が生まれることもある。

**エジプトのオレンジ統計(在エジプト 米国農務省 農務官)**

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	139,950	146,950	154,200
収穫面積(ha)	133,200	136,475	142,100
結果樹数(千本)	10,200	10,500	12,300
未結果樹数(千本)	9,000	9,250	9,000
果樹数合計(千本)	19,200	19,750	21,300
生産量計(千トン)	2,930	3,000	3,180
輸入量(千トン)	0	0	0
総供給量(千トン)	2,930	3,000	3,180
輸出量(千トン)	1,450	1,520	1,600
国内消費仕向量(千トン)	1,380	1,380	1,480
加工仕向量(千トン)	100	100	100
総出荷量(千トン)	2,930	3,000	3,180

年産は10月→9月

## 26. ブラジルと米国の研究者がカンキツグリーニング病で成果

FreshPlaza 電子版 (2017年12月6日)

「voanews」の報道によると、カンキツグリーニング病を媒介する昆虫を誘引する分子を研究者が同定したことである。この研究により、ブラジルと米国の生産者に恐れられている病害を制御することが期待される。

この画期的成果は、カンキツグリーニング病を媒介する昆虫であるミカンキジラミに関する6年間の研究の末に成し遂げられたものである。この分子は、ブラジルの生産者やオレンジジュース業界が資金提供する研究施設である Defesa da Citricultura (Fundecitrus)により発見された。この研究は、米国カリフォルニア大学デイビス校、サンパウロ農業大学との提携により進められた。

次なるステップは、この分子からフェロモンを合成し、媒介昆虫を引き寄せてトラップする資材を作り出すことである。ブラジルでは、2005年以降、約半数のオレンジの樹が被害を受けているが、研究者は病気の拡散を制御することに期待を寄せている。

今回の技術はカンキツグリーニング病の治癒を行うものではないが、生産者が媒介昆虫と戦うことを可能にするものである。この技術は1年以内に実用化されると見込まれている。

ブラジルの主要産地であるサンパウロ州とミナスジェライス州では41.5万haの農地に1億7,500万本のカンキツが植栽されているが、このうち3,200万本が病気に感染しているといわれている。カンキツグリーニング病は治癒ができない病気であり、世界のカンキツの中で最も深刻な病気の一つである。感染した樹のほとんどは数年以内に枯死するといわれている。

## 27. チリのアボカド事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年12月5日公表)

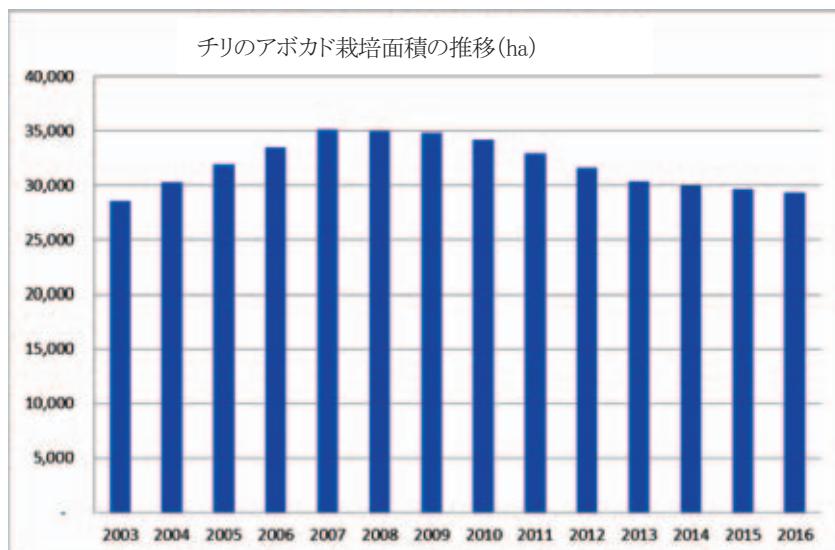
### 生産

チリのアボカド栽培面積は2007年以降減少している。しかし減少幅は栽培面積が30,330haに達した2013年以降小さくなっている。

2016年の栽培面積は29,319haで、州別に見ると、バルパライソ州が65%、首都圏州が15%、コキンボ州が15%を占めている。栽培面積の88%はハスアボカドであるが、この品種は低温と霜害に弱い。このため、栽培面積に制約があり、霜害のリスクが少ない地域、平地よりも気温が高い丘陵地域に生産が限られている。この他の栽培品種は、主に国内市場に向けられている Edranol、Negra de la Cruz、Fuerte である。

過去8カ年は、干ばつによる水不足が生産量を減少させる要因であったが、2016/17年(7月→6月)、2017/18年には降雨があったため灌漑用水が確保できた。このため、栽培面積の減少にもかかわらず、生産量は増加している。

チリアボカド委員会によると、2016/17年の生産量は21.5万トンであり、2017/18年は22万トンが見込まれている。



アボカドの地域別栽培面積(ha) 2016/17年		
州名	栽培面積	割合
バルパライソ	19,135	65%
首都圏	4,494	15%
コキンボ	4,416	15%
オイギンス	1,090	4%
アタカマ	133	0%
ビオビオ	38	0%
アイカ・イ・パナコータ	10	0%
マウレ	3	0%
合計	29,319	100%

### 消費

チリの人々はアボカドを好んでおり、様々な料理を通じて摂取している。実際、アボカドは自国で生産され、消費される新しい果物の一つである。というのも、大部分の果実は主に輸出用として生産されるからである。アボカドは、チリ、ペルーでは「バルタ」と呼ばれ、スペイン語圏では「アグアカテ」と呼ばれている。チリ国内の価格は国際市場価格に近く、生産量の45~50%は国内で消費される。国内消費量は約6.5万トンである。なお、2016/17年は生産量が増加したため、国内で消費された割合は30%であった。

## 貿易

2017年1月から9月までの輸出量は、数量では前年を42.9%、金額では61.7%上回り、90,985トン、1億9,70万ドルに達した。

主な輸出先は、米国、オランダ、アルゼンチン、中国、英国である。2017年1月から9月までの米国への輸出は、数量で158.5%、金額で219.1%増加し、23,070トン、5,880万ドルであった。2016/17年はメキシコの生産量が20%減少し米国への輸出も減少したため、チリの米国への輸出機会が大幅に増加したためである。

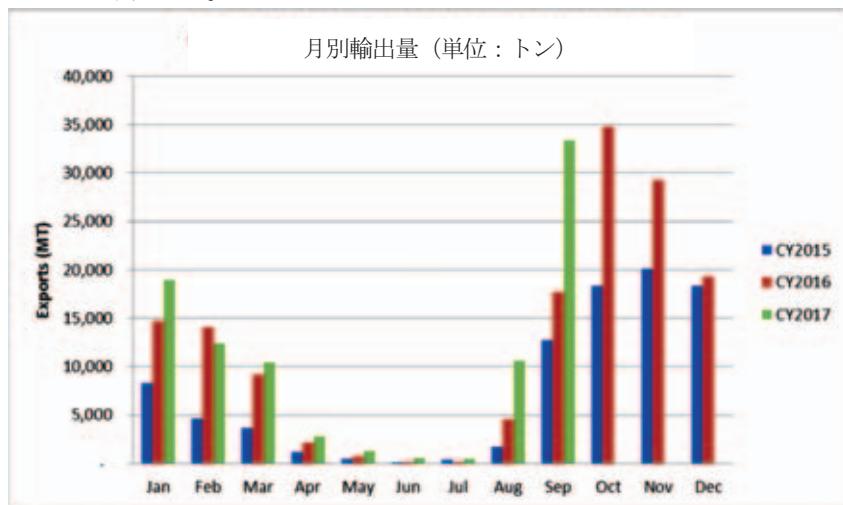
同じ期間におけるスペインへの輸出は、数量で37.7%、金額で40.5%増加、英國への輸出は数量で3.4%、金額で13.5%増加、オランダへの輸出は数量で0.7%、金額で6.7%増加した。欧州各国のチリのハスアボカドに対する需要は根強い。

アルゼンチンへの輸出は、数量で50.5%、金額で64.25増加した。同国では消費量が増加し、経済が回復してきたので消費の増加は継続すると見込まれる。

中国への輸出は数量で76.5%、金額で88.1%増加した。今後とも増加が見込まれる。

中国におけるチリ産のアボカドに対する需要は拡大しており、チリのアボカド業界は中国に焦点を当てたプロモーション活動を進めている。チリ・ハスアボカド協会によると、食料品店や果実専門店での店頭販売活動が中心のことである。さらに、ソーシャルメディアを活用したプロモーション活動も実施しており、消費者にアボカドの食べ方を啓発している。また、フード・ホテル・チャイナ(FHC)にも出展し、チリ産のハスアボカドを用いた料理を試供した。2016/17年には、チリはメキシコを抜いて中国におけるアボカドの最大の供給国となった。

2017/18年の輸出量は、生産量が5%増加すると見込まれること、国内消費量が6.5万トンであることを勘案すると、15.5万トンと予測される。



アボカドの輸出量(各年とも1月から9月まで) 単位:トン、米ドル

	輸出量			輸出金額		
	2016	2017	対比	2016	2017	対比
合計	63,664	90,985	42.90%	122,169,835	197,545,169	61.70%
米国	8,923	23,070	158.50%	18,441,105	58,843,099	219.10%
オランダ	29,345	29,556	0.70%	49,001,860	52,275,584	6.70%
アルゼンチン	7,486	11,270	50.50%	14,951,756	24,555,385	64.20%
中国	4,536	8,005	76.50%	10,240,898	19,265,019	88.10%
英国	6,563	6,784	3.40%	15,208,951	17,266,378	13.50%
スペイン	2,585	3,559	37.70%	5,875,968	8,257,098	40.50%
コスタリカ	2,291	2,342	2.20%	4,689,070	7,080,526	51.00%
フランス	706	1,960	177.60%	1,315,718	2,866,003	117.80%
ドイツ	197	1,721	773.60%	321,254	2,646,484	723.80%
スイス	245	850	246.90%	391,365	1,170,364	199.00%
ベルギー	334	968	189.80%	668,929	1,136,544	69.90%
香港	122	298	144.30%	300,627	808,417	168.90%
ウルグアイ	203	277	36.50%	448,066	611,243	36.40%
その他	128	325	153.90%	314,268	763,025	142.80%

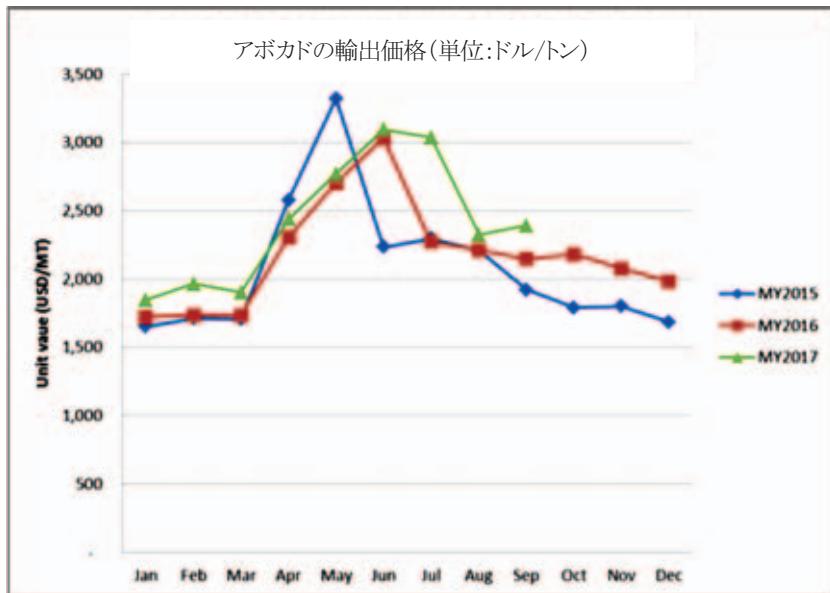
アボカドの輸出量(暦年) 単位:トン、米ドル

	輸出量			輸出金額		
	2015	2016	対比	2015	2016	対比
合 計	90,010	147,125	63.50%	161,881,229	297,325,622	83.70%
オランダ	42,005	57,733	37.40%	66,492,794	98,534,287	48.20%
米国	10,174	26,278	158.30%	18,758,969	61,719,518	229.00%
英国	14,520	17,887	23.20%	28,592,949	43,226,733	51.20%
中国	2,716	11,598	327.00%	6,378,910	27,158,391	325.80%
アルゼンチン	10,688	12,498	16.90%	23,284,681	23,215,445	-0.30%
スペイン	4,935	8,121	64.60%	9,837,950	18,613,739	89.20%
コスタリカ	1,547	3,445	122.70%	2,965,287	8,033,655	170.90%
フランス	1,485	3,377	127.40%	2,059,582	5,913,316	187.10%
ドイツ	-	2,258	-	-	3,511,430	-
スイス	331	1,571	374.60%	492,066	2,420,183	391.80%
ベルギー	416	1,147	175.70%	569,477	1,850,184	224.90%
日本	100	175	75.00%	227,498	744,637	227.30%
香港	625	260	-58.40%	1,149,521	703,485	-38.80%
その他	468	777	66.00%	1,071,545	1,680,619	56.80%

チリは国産の出回りが少ない時期(4月から8月)にペルーとメキシコから輸入を行っている。2017年1月から9月までの輸入量は、前年に比べて数量で49.1%、金額で42.5%減少した。これは2016/17年のアボカド生産量が増加したためである。

## 価格

2017市場年度(2016/17年産)の価格は前年を上回った。世界的に需要が供給を上回っているため高価格は継続すると見込まれる。



## 政策

チリは米国、中国、EUと自由貿易協定を締結しており、アボカドの関税は0%である。

2017年4月にインドとの間でアボカド輸出に関する協定を締結し、臭化メチルの使用を避けるための「システム・アプローチ」を講じることとした。

韓国との間では輸出交渉を継続しており、決着まで最長で3年間を要するとされる。

## 28. サクランボ新品種 Frisco

FreshFruitPortal 電子版（2017年12月4日）



カリフォルニア州で育成されたサクランボの新品種 Frisco がチリで試験栽培され、期待が寄せられている。初となる収穫が行われたのを機会に研修会(フィールド・デイ)が開催された。

サン・フェルナンドに拠点を置く Fundo La Diana 農園では、11月20日から Frisco の収穫が始まり、Fresh Fruit Portal 社がこの催しに参加した。

チリでは育苗会社の A.N.A. Chile が同品種の権利を2014年に取得した。2016/17年シーズンに早くも収穫が可能であったものの、量的に少なかったため、品種特性を確実に把握するため、研修会は1年延長された。

農園では、研究者が Frisco の最適な栽培方法を確立するために、広範囲にわたる管理技術に関する試験を行っている。A.N.A. Chile 社によると、最も生育条件が良いのは、台木に Colt を用いた場合だという。この場合、1樹当たりの結実数は1,080果で、ヘクタール当たりの生産量は12トンに達するという。初の収穫となる今回の果実サイズは30.8mmで、糖度(ブリックス)は15.9から18.7であったとのことだ。

果実の固さは良好であるとされ、収穫物のうち裂果等で輸出基準に達しないものの割合は2%以下であったという。

A.N.A. Chile 社の総支配人によると、味、サイズとともに、このサクランボの最大の特徴は収穫時期が早いことと収穫後の特性が優れていることだという。また、欧州での栽培にも適しているとも語っている。「6ヶ月前に300ha の栽培ライセンスを与えた。2017年には40～50ha が植栽され、その後は毎年50ha ずつ植栽を増やす予定」とのことだ。

A.N.A. Chile 社のサクランボ及び仁果類担当マネージャーによると、この品種はアジア市場に向いているという。アジア市場はチリのサクランボの最大の輸出先である。というのも、果実の固さが輸送時間の長いアジア向けに丁度適しているからだそうだ。

## 29. カリフォルニアのブドウ輸出減少

FreshFruitPortal 電子版 (2017年12月4日)

米国農務省海外農業局は、2017年1月から9月までのカリフォルニア州の生食ブドウ輸出量は前年に比べて6%減少し、155,500トンであったと報告した。

報告によると、輸出先トップ10のうち、メキシコと日本だけが前年に比べて増加した。第2の輸出先であるメキシコは概ね倍増し15,500トンであった。一方、日本は16%増加し、5,000トンであった。

最大の輸出先であるカナダは、前年に比べて7%減少し、53,500トンであった。

この他、香港向けは27%減少し8,500トン、オーストラリア向けは1%減少し11,500トン、台湾向けは17%減少し8,500トン、インドネシア向けは21%減少し6,000トン、中国向けは42%減少し3,500トンであった。

過去3四半期の平均FOB価格は、2016年に比べて僅かに下がり、キロ当たり2.35ドル(2016年はキロ当たり2.41ドル)であった。

輸出量、FOB価格とも前年を上回ったのは日本だけで、FOB価格は前年の2.72ドルに対し、今年は3.04ドルであった。

また、中国向けのFOB価格も大きく上昇し、前年の2.58ドルから今年は2.82ドルとなった。

一方、カナダ向けのFOB価格は、前年と同じ2.16ドルであった。

米国内での貯蔵量は、11月15日現在で、前年を2%上回る1,110万箱であるとしている。

## 30. メキシコのアボカド事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年12月4日公表)

### 生産

市場関係者の情報によると、2017/18年(7月→6月)の生産量は180~190万トンと予測される。気象条件が良好であったため、生産の増加が見込まれる。情報筋によると病虫害防除計画が実施されたことも生産の増加につながったようだ。公式データによると、2016/17年の生産量は170万トンのことだ。生産者によると、この年は隔年結果の裏年に当たったことと、冬期に激しい降雨に遭遇したことが生産量の減少につながったようである。このため、2015/16年に比べて20%生産量が減少した。なお、2015/16年の生産量は188万トンであった。

メキシコアボカド生産・輸出協会(APEAM)は、生産者と協力して、ミチョアカン州において病虫害及び残留農薬をなくす技術的取組を進めている。ミチョアカン州はアボカドの最大の生産州で、全国の80%の生産を担っている。

ミチョアカン州では5~10ha 規模の小規模生産者により生産が担われている。多くの生産者は SAGARPA による食品安全プログラムを実施しており、実施に必要な経費は長期的な投資と考えている。情報筋によると、生産コストは、基礎的技術だけに頼る70,043ペソ/ha(3,763ドル/ha)から、機械や灌漑施設などの先進技術を用いた90,000ペソ/ha(4,836ドル/ha)までとなっている。ドルに対するペソの下落により、生産コストは上昇を続けている。ヘクタール当たりの収量は8~10トンであり、導入技術により差が出ている。生産者によると、過去3年間の平均単収は9.15トン/ha であった。なお、2016/17年は裏年であったため、9.0トンであった。

地元紙によると、ミチョアカン州では違法に森林が伐採され、アボカドに転換されているという。環境天然資源事務局や国立森林農業畜産研究所などはこれらの行為を非難している。情報筋によると、アボカド生産、輸出による収益性が高いことが、違法伐採の原因だといふ。

連邦環境保護局では、違法伐採と違法地目転換の防止を進めている。こういった事態に対応し、APEAM は、ミチョアカン州で2010年以降、50万本以上の松を植林する計画を進めている。2017年に28万本、2018年に32万本の植栽を行う計画である。

アボカドの栽培面積は2016/17年に220,334ha であり、前年を7.3%上回った。2017/18年の栽培面積は引き続き増加すると見込まれる。ハスアボカドに対する国内外からの需要が強いため、その他の州でも植栽意欲が旺盛であるからだ。

メキシコの州別栽培面積(単位:ha)

州名	2015/16(推計)	2016/17(予測)	増加率(%)
チアパス州	3,024	3,284	8.5
ゲレロ州	4,470	4,489	0.4
ハリスコ州	19,637	21,022	7.6
ミチョアカン州	148,423	159,328	7.0
メキシコ州	8,876	9,946	12.0
合 計	205,250	220,334	7.3

### 消費

生鮮果実の国内消費量は、輸出量によって決まる。輸出価格の方が高いために、生産者は極力輸出を行うとするためだ。2016/17年の国内消費量は、価格が高かったために65.6万トンであったと推計される。2017/18年の消費量は、生産量が増加することから76万トン以上と予測される。ただし、この数字は供給量と価格により変動すると見込まれる。アボカドはメキシコの家庭料理の中で主要な食材ではあるが、生産者は輸出を第一に考えることから、残りの部分が国内消費に向けられる。一人当たりの年間消費量は、輸出量の増加と国内価格の上昇から、6.5~7.0kgである。2016/17年の価格は、前年に比べて高価格で始まり、生産量が少なかったことから、高値が続いた。2017年6月から8月にかけても、国内市場供給量が少なかったことから高値で推移した。2017/18年の価格は、生産量が増加するため、昨年ほど高い価格にはならないと

見込まれる。

ほとんどの州では、貯蔵性が優れ、海外市場での需要が多い品種ハス(Hass)を生産している。その他に栽培されている品種は、量は少ないが、Fuerte、Criollo、Bacon、Pinkerton、Gwen、Reed.である。

アボカドには抽出オイルを用いて製造する化粧品のように食用以外の用途もあるが、生鮮品で利益がえら得ることから利用されていない。消費者がアボカドの副産物は高価であると考えているため、化粧品業界はアボカドを利用する機会を逃している。なお、アボカドオイルは少量が食用に用いられている。

## 貿易

2017/18年のアボカドの輸出量は、国際的な需要が大きいことから100万トンに拡大すると見込まれる。ドルに対するペソ安も輸出の増加を後押ししている。Global Trade Atlas (GTA)によると、2016/17年の輸出量は873,963トンと前年の960,362トンから9%減少した。これは気象条件が悪かったことと裏年に当たったことによる。APEAM のデータでは輸出量は894,713トンで、この内、米国向け輸出量は761,927トンであった。一般的には、国際的な需要の高まりと、米国50州に年間を通じて供給できることから、輸出は増加する傾向にある。また、カナダ、日本、欧州への輸出も増加している。2016/17年は、生産量が減少したことから、年度を通じて輸出価格は高価格で推移した。

アボカドの輸出金額は、2015/16年が15億ドルであったのに対し、2016/17年は25億ドルに達した。2017/18年のアボカドの米国内の価格は、APEAM によると、サイズ48で7月に1箱40.50ドルで始まり、9月には87.50ドルまで上昇したが、10月末には41.50ドルに下落している。

米国はメキシコのアボカドにとって、最大の輸出先国であり、77~79%を占めている。日本、カナダも戦略的な輸出市場であるが、輸出に占める割合は、日本が8~9%、カナダが6~7%となっている。ミショアカン州では37の業者が米国への輸出資格を持っている。一方、その他の州は日本、カナダ、フランス、スペインへの輸出に重点を置いている。

業界によると、アボカドを加工処理したグアacamole(アボカド等をペースト状にしたもの)の輸出量が概ね17万トンあり、米国、欧州、中東、アジアで販売されているという。しかし、公式な統計データは存在したい。

輸出の大部分は出荷業者が直接行っており、大部分の業者には米国資本が投入されている。ミショアカン州の生産者は、スポット市場で出荷業者にキロ当たりペソの支払いを販売している。他の果樹と同様に、出荷業者の主な業務は、果実を洗浄し、品質(サイズ、外観だけでなく乾物重を含む)に応じて選果をし、契約仕様に応じて箱詰め(ラベル添付、バッグ詰め、ばら積み等)を行うことである。一般に、輸出契約仕様を満たさない製品は国内市場に回される。

メキシコでは国内の生産量が多いため、ほとんど輸入はない。少量がカリフォルニア州から輸入されているだけである。2015/16年には18トンで、2016/17年はゼロであった。

## 政策

メキシコから米国へ輸出する際には、出荷や認証に当たっての所定の手続きを遵守することが条件付けられている。現在、ミショアカン州が唯一米国にハスアボカドの輸出を行える州となっている。また、ハリスコ州も米国への輸出認証要件を満たすよう手続きを進めている。その他の州は、米国以外の市場を目指している。

## 関税

メキシコのハスアボカドに対して米国は関税を課していない。しかし、ハスアボカド理事会と米国農務省農業市場局によるプロモーション活動費として1ポンド当たり2.5セントが徴収される。また、生産者は輸出する際、APEAM に1ポンド当たり5セントを支払い、米国農務省による検疫費用に充当されている。

## 3 1. 世界のバナナ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年12月1日)



11月は新年度の契約を締結することが多いことから、通常忙しい月に当たる。新パナマ病(TR4)とブラック・シガトカ病が業界の繁栄の中にあって危険をもたらす脅威となっている。新パナマ病に対しては打つ手がないが、ブラック・シガトカ病に対しては防除の強化が求められている。この2つの病気への対応が、今後数年間における業界のイメージを形作ることになるだろう。ここ数ヶ月で、研究者による新たな進展が報告されている。オーストラリアの研究チームは、遺伝子操作技術を用いて新パナマ病に耐病性のあるキャベンディッシュ系統を作出した。また、ブラック・シガトカ病の耐病性遺伝子も発見された。業者にとっては、現在の市場はまずまずといったところだ。中南米が悪天候であったことから、供給が少くなり、ここ数週間で価格は上昇している。とはいっても、ポーランドを除くと、深刻な不足状態にあるという報告はない。

### エクアドル: 価格が上昇

エクアドルは依然としてバナナの輸出が一番多い国である。キャベンディッシュに加え、レッドバナナ、ミニバナナ、プランテン(料理用バナナ)も輸出している。輸出業者によると、プランテンはエクアドル料理には欠かせないものであるが、国際的にも需要が伸びているそうだ。エクアドルの輸出先は、米国、フランス、アルゼンチン、スペインが主である。キャベンディッシュ以外のバナナの輸出にも力を入れており、レッドバナナは米国、カナダ、ロシア市場に輸出され、ミニバナナはアルゼンチン、韓国で人気がある。

とはいっても、キャベンディッシュに対する需要が最も多い。エクアドルでは第48週までは気象条件が悪かったため、生産量が15%減少した。輸出業者によると、通常通りに回復するのは、来年の第28週だろうとしている。年末の休日に向け、ロシアを含む幾つかの市場からは強い需要がある。中米の国では悪天候により生産に影響があったため、エクアドル産に対する需要は一層強まっている。キャベンディッシュの不足から、輸出業者はベビーバナナに対する需要が高まっているという。

価格は第40週から48週にかけて上昇している。このため、15週間続いた価格の低迷から脱した。この高価格は気象条件が好転し、生産が増加するまで続くと見込まれる。

## **ブラジル: プラタバナナの供給量が減少**

12月は多くの産地でバナナの供給量がやや減少すると見込まれ、生産者は価格の上昇を期待している。10月には天候の影響から収穫を早めたため、供給量が増加した。このため、価格は生産コストを33%下回り、平均キロ当たり0.80レアル(0.24ドル)となった。このような低水準は2015年11月以来である。

今年の輸出量は、昨年をやや下回っている。ほとんどの地域で、輸出量が最も多い Nanica バナナ(品種)の供給量が少ないためだ。このため輸出価格は上昇すると見込まれる。昨年の輸出先はほとんどがエクアドルであった。

## **世界市場で足場を固めたいメキシコ**

通常年では年末に向かい日照時間が短くなり、夜温が下がると収量が低下するが、業者によると生産は順調のことだ。とはいえ、この先、生産量が減少するため、米国等の市場からの需要がある中、短期間で価格が上昇することを期待している。輸出業者によると、メキシコ産バナナはグアテマラ、ホンジュラス産とは競争に打ち勝てるとしている。

## **フィリピン: 2018年は回復を期待**

生産量は安定している。価格は再び低下傾向であるが、2018年に向けては高値を期待しており、1月、2月に向けて上昇すると見ている。クリスマスまでは変化はない模様であるが、その後の上昇を期待しているからだ。輸送に関しては、輸出業者は選択肢が増えることを期待している。現在、中国へ輸出している業者もいるが、これらは「非常に積極的な行動」と見られている。

政府は、来年に向け、韓国、日本、中東に対して関税の引き下げを要請している。業界としては、この政府の努力が継続することを期待している。国内市場は、生産されている品種に消費者が馴染んでいないため、業界にとっては魅力が乏しい。

## **南アフリカ: 輸入に対して懸念**

市場に対する意見は地域により分かれており、生産量が少ないとするものから、多いとするものまである。ほとんどのバナナは国内市場向けである。輸入は限られており、隣国のモザンビーク、ジンバブエからである。モザンビーク北部では、恐ろしい新パナマ病(TR4)が見つかり、病原菌の拡散が心配されている。南アフリカが輸入している産地は南部モザンビークである。南アフリカのクズワール・ナタール州では、ウイルス病の bunchy top virus.による病害に直面している。

大手スーパー・チェーンでは、しばしまエクアドル産のバナナを輸入することがあり、国内生産者の不満につながっている。輸入バナナは国産に比べて大幅に安値ではないものの、市場に圧力をもたらすと見られているからだ。

## **スペイン: カナリア諸島のバナナの可能性**

スペイン領カナリア諸島では年間を通してバナナの生産が可能である。今年は天候に恵まれたことから、前年に比べて生産量が増加した。一方、需要は少ないとから価格は低迷しており、クリスマスを前に下落傾向である。

カナリア諸島のバナナは中南米産と競合しており、近年はアフリカ産も販売促進活動が行われている。過去25年間、スペインが最大の市場で、次いでポルトガルである。輸入バナナとの価格差から、これまで(スペインでの)市場シェアを25%失ってきたが、輸出には期待を寄せており、潜在的な市場として、ドイツ、スイス、英国、モロッコを想定している。いずれにせよ、カナリア諸島のバナナの課題は、中南米等からのバナナとの違いを説明し、価格面での競争力を持つことである。

## **フランス: 安値で推移したこの1年**

輸入業者は、2016年の第4四半期の段階では2017年に価格が回復すると期待したが、第14週まで価格の上昇は見られなかった。その後、業者によると、「5月中旬までは市場は好調であった」そうだが、4月、5月

とも輸入品で溢れたため、価格は急落した。暑くなる6月の市場は悲惨な状況であった。業者は、「6月以降、人々はバナナの輸入と流通にかける金を失った。市場はポーカーのように当てにならないものだ」と語っている。この業者は、ニカラグア、エクアドル、コロンビア、コスタリカ、メキシコ、アフリカ、アジアからバナナを輸入している。

### **ベルギー:オランダから大量の輸入**

ベルギーではバナナは2番目に多く消費される果物である。ベルギーにおけるバナナ市場は長期間安定している。驚くべきことに、益々多くのバナナがオランダ経由で輸入されている。過去4カ年で(オランダ経由の)総輸入量は実に700%増加した。ドイツからの輸入量も記録的に増加しており、2012年から2016年にかけて300%増加した。英国が唯一の例外で、同国経由の輸入量は70%減少した。

### **ドイツ:バナナ市場は安定**

ドイツではバナナ市場はここ数週間安定している。現時点では供給と需要は均衡している。ミュンヘンだけは他の地域に比べて幾分価格が高い。Aクラスの価格は10kg当たり13.30ユーロであり、昨年の同時期には14ユーロであった。昨年との比較はBクラスでも同様で、昨年の10.60ユーロに対し、今年は9.90ユーロである。おしなべて品質は満足いく状況である。

業者によると、エクアドル、コロンビア等の評価の高い国の生産が低迷しているそうだ。これはラ・ニーニャによるものであり、海水面の温度差変動を引き起す。多くの西欧諸国と同様に12月は販売が伸びない月である。というのも、この月はスターフルーツやライチのような特殊な果実が多く消費されるからだ。ドイツでは、バイオトレードやフェアトレードの割合が増加しており、Aldi のようなディスカウント業者でも、差別化の手段としてこれらを活用している。

### **ポーランド:供給量が少なく高価格**

ポーランドの業者によると、熱帯の悪天候の影響を受け、北部欧州ではバナナは不足しているそうだ。「輸入業者は、「中米では9月、10月の収穫量が多かったため、生産者が一部を廃棄した」と話しており、その結果、10月と11月の供給量が少なくなったとしている。業者によると、寒さのため品質が低下すると見ており、供給量は少なく、価格は上昇すると予測している。「産地の価格が上昇しており、多くの輸入業者はリスクを回避するために輸入量を抑えている」とのことだ。

### **米国:健康志向のため消費量は増加を予測**

12月を前に、バナナの販売は好調である。通常、熱帯地域では日照時間が短くなり、夜温が低下するこの時期は生産量が減少するものだが、米国におけるバナナの供給量には変化がない。バナナは人気が高い果物であり、ここ数年間販売量は安定している。業者によると、電子商取引がより身近になったことが理由の一つだとしている。この業者は、このトレンドに対応しようとしているそうだ。また、健康志向が益々高まっていることから、バナナ市場は拡大すると見込まれている。米国におけるバナナは、主にエクアドル、グアテマラ、コスタリカから供給されている。

### **オマーン:供給過剰気味**

輸入業者によると、市場は供給量が多すぎる状態であるが、今後3週間程度で改善されるそうだ。オマーンでは、バナナはエクアドル、インド、フィリピンから輸入される。2ヶ月前にこれら諸国の生産量が増加したため、輸入量が増加したそうだ。価格面では中南米産とアジア産には1ドルの開きがある。フィリピン産のバナナの方が価格は高い。

### **オーストラリア:夏を迎えて需要が減少**

主な産地での生産は順調である。生育条件は良好であり、暴風雨による被害は多少あったものの、大部分の生産者は雨期を待ち望んでいる状態だ。価格は過去2カ年に続き安値で推移している。

他国と同様に、夏は消費が減少する。学校の夏休みがあるためと夏果実が出回るためだ。しかし、バナナの人気は高く、ニールセン調査によると、全国民の97%がバナナを購入し、一人当たり年間消費量は16kgとのことだ。2016/17会計年度におけるバナナ生産量は41.4万トンで、販売額は6億ドルであった。

7月にクイーンズランド州で新パナマ病(TR4)発生が報じられたが、その後の発生の報告はない。最後の大流行は2015年に同じ地域で起った。7月に発生したバナナ生産会社は、多くの予防措置を講じてきた会社として知られており、他の生産者にとって模範となる優良事例である。

著者:Rudolf Mulderij

## 32. ニュージーランド政府がキウイの研究開発を支援

ASIAFRUIT 電子版（2017年11月30日）

ニュージーランド政府ビジネス・イノベーション・雇用省(MBIE)は、ゼスプリ社との間で新たなパートナーシップ協定を締結し、キウイの新品種、育種技術の開発を行うと発表した。ゼスプリは歓迎している。

この協定によると、今後7年に渡り、MBIEは670万ニュージーランドドル(以下「ドル」)を支出し、ゼスプリ社は1,570ドルを投入する。ゼスプリ社の公表によると、このパートナーシップにより、2030年までに少なくとも1つの全く新しい品種を創出し、2045年まで、輸出収益を毎年2億ドル増加させたいとしている。

ゼスプリ社の技術担当ゼネラルマネージャーによると、このパートナーシップはMBIE及びこの協定に参画する植物・食品研究所(研究開発会社)が積み上げた過去の実績の上に成り立っているとのことだ。これまでの成果の中には、2016/17年の単年だけで6.86億ニュージーランドドルの輸出額を稼いだサン・ゴールドの育種が含まれる。

ゼスプリ社と植物・食品研究所は、ニュージーランド政府の支援を得て、2009年に世界最大規模のキウイ品種開発計画を樹立した。過去7カ年の計画では、最先端の育種技術、スクリーニング、評価技術などの開発が行われ、総額3,570万ドルが投入された。

「ゼスプリ社としては政府が育種計画への支援策を刷新してくれたことを歓迎する。今回の措置により、世界規模の技術を有する植物・食品研究所の力を得て、更なる新品種の開発を目指すことができる。技術革新に焦点を当てることで、生産者や消費者に、より価値のあるものを提供し、地域経済にも貢献したい」と表明している。

植物・食品研究所の最高執行責任者も、キウイはニュージーランド経済を支える旗艦であり、研究への投資は将来の成功のために不可欠だとしている。「ゼスプリ社とのパートナーシップは過去20年の歴史があり、未開の領域の研究でも成功を納めた。例えば、2010年のキウイかう病(Psa)の研究だ。鍵を握る市場へ新たな品種を投入し、ニュージーランドのプレミアム輸出产品であるキウイの評価を上げることに貢献したい」と語っている。

ASIAFRUIT誌が最近行ったインタビューによると、ゼスプリ社のCEOは、植物・食品研究所及びニュージーランド政府との共同育種計画を通じ、新品種の開発に重点を置いた研究を進めており、「我々は10万を超える実生を育成している。これは、ニュージーランドの第1次産業の中で最大規模だ」と語っている。

育種計画における最優先の一つは、より甘く、簡便で食べやすい緑色系のキウイを育成することにあるという。「近い将来、新しい緑色系のキウイが商品化されることを願っている」とCEOは語っている。

また、新しい赤色系のキウイの開発も間近に迫っている。「我々は沢山の赤色系の系統を持っている。2~3年のうちには、味、貯蔵性、サイズの面で商品化できる品種を得ることに自信を持っている」とも語っている。

## 33. タイの果実貿易この1年

ASIAFRUIT誌（2017年11月号）

品質が一定でなかったこと、(国産果実による)価格の圧力があったこと、消費者が喪に服したことでタイの果実貿易は辛い1年を経験した。

多くの業界が、2016年10月に亡くなったプミポン国王による試練を経験した。

Cititex Group社の執行役員は、「(国王の死は)最も大きな損失であり、タイの国民感情に大きな衝撃をもたらした。国王の逝去後の数ヶ月は生鮮食品業界に大きな影響があった」と語っている。

輸入の観点からすると、多くの多国籍企業やその流通パートナーは、国王の死を悼み、尊敬の念を持って販売促進活動を取り止め、規模を縮小した。国として公式に1年間喪に服すとしたからだ。

「お祝いの贈答品は商品の販売に重要な位置をしめるが、お祝いやお祭り自体がキャンセルされ、販売に大きな影響があった」とT&G Global社の東南アジア地域マネージャーは話している。

今や公式な喪の期間が終了し、新年に向けて輸入に勢いが出ている。新国王の戴冠式も控えているからだ。

とはいっても、2017年に直面した障害は、タイの王宮でそれ以前に起った事象よりも遙かに深刻で、市場の安定化に取り組むことが不可欠である。

「2月以降、市場は大変冷え込んだ。多くは果実の供給過剰による。例えばインド産、ペルー産のブドウだとタイで最大手の輸入業者 Vachamon Food の管理部長は語っている。「その後、5月から6月にかけ、国産の果実が流通し例年よりも長期間出回った。このため、輸入業者としては停滞を余儀なくされた」と続けた。

経済上の問題、品質問題が合わさって複合的な影響を及ぼした。

先の執行役員の話では、「今年の第1四半期、輸入果実市場は比較的良好であったが、その後、国産の熱帯果実が大量に安い価格で出回った。いくつかの果実では品質が一定していなかったことも購買意欲を低下させた要因であった。経済全般で見ると輸出は減少し、低所得者層の購買力が低下した」と語っている。

執行役員によると、「8月以降の輸入市場は活発化している。例えば、中国産のブドウ、ニュージーランド産のリンゴ、オーストラリア産のマンダリンは地元消費者から好感を持って迎えられている」と語っている。

今年は果実貿易に混乱はあったが、消費者が輸入果実に求めるトレンドは見て取れる。「特定の品目では品種の交替が見られる」と Super Fresh Import Export 社は語っている。「例えば、ブドウやリンゴでは、レッドグローブ、レッドデリシャスはここ数年人気が低下し、味、風味、外観が良い品種がタイの消費者に浸透している」とのことだ。タイでは伝統的に消費されていなかった品目も比重を増している。「オンラインによる情報が広く行き渡ることで新しい品目が登場しているのだ」と執行役員は語っている。健康に良いとされるアボカドやブルーベリーの人気が高まっている。また、国際的なブランドであるDriscoll's(イチゴ)やAvanza(アボカド)なども収益が上がっている。

### 輸入実績

2017年1月から7月までの果実輸入は、前年同期に比べて17%減少した。リンゴ、ブドウ、カンキツが輸入の70%を占めている。この3品目とも最大の輸入先は中国である。輸入全体が減少したため、中国からの輸入も減少した。

#### リンゴ

リンゴの輸入は17.9%減少した。中国からの輸入の割合は68%であるが、23.5%減少した。ニュージーランドからの輸入の減少はわずか4.7%であったため、シェアは19.2%に上昇した。フランスからの輸入は急拡大し、85%増加したが、シェアは3.9%である。米国からの輸入は過去5カ年減少し、シェアを低下している。中国を除いた輸入リンゴの減少率は2.9%となる。

#### ブドウ

ブドウの輸入は19.8%減少した。中国からの輸入は36.6%減少した。1年を通じた中国産のシェアは7

9%であるが、1月から7月までのシェアは45%である。これは中国からの輸入が時期的に少ないからである。中国を除いた輸入実績は3.5%増加した。ペルーは第2の輸入先国であるが、この期間に6.7%増加した。オーストラリアは新記録を達成した2016年に比べると23.8%減少した。オーストラリアからタイへの輸出が減少した分、中国への輸出が増加した。インドは45%増加し、シェアは10%となった。

### カンキツ

カンキツの輸入は34.8%減少した。中国からの輸入は36.8%減少した。年間を通じた中国のシェアは90%であるが、大部分は1月から7月までに輸入される。中国を除いた輸入実績は15.8%減少した。オーストラリアは第2の輸入先国であるがシェアは5%である。今年の輸入は12%減少した。オーストラリア自体の輸出量は11%増加しているため、減少要因はタイにあり、オーストラリアに問題があったわけではない。カンキツの中ではマンダリンが中心で、85%を占めている。

**タイの生鮮果実輸入量 2017年と2016年の1月から7月 (単位:トン)**

品 目	2016 年 1 月～7 月	2017 年 1 月～7 月	対前年比(%)	シェア(%)
リンゴ	103,089	84,597	-18	34.0
ブドウ	56,460	45,268	-20	18.2
マンダリン	58,312	38,003	-35	15.3
ナシ	27,473	23,372	-15	9.4
マンゴー・マンボスティン	9,817	19,291	97	7.8
ドラゴンフルーツ	13,622	11,368	-17	4.6
メロン	7,028	5,002	-29	2.0
オレンジ	6,829	4,315	-37	1.7
バナナ	8,754	4,219	-52	1.7
タマリンド	659	4,214	540	1.7
キウイ	1,982	2,293	16	0.9
カキ	1,317	2,156	64	0.9
サクランボ	1,935	1,755	-9	0.7
レモン・タイム	866	1,032	19	0.4
イチゴ	772	1,007	31	0.4
スマモ	149	235	72	0.1
ブルーベリー	186	203	9	0.1
モモ・ネクタリン	138	170	23	0.1
アボカド	125	137	10	0.1
その他	727	170	-77	0.1
合 計	300,242	248,914	-17	100.0

### 3.4. 韓国へのベトナムへのナシ輸出が急拡大

ASIAFRUIT 電子版 (2017年11月29日)



韓国の Singo ナシ

ベトナムニュースに掲載された韓国農産物貿易協会の統計によると、2011年から2016年にかけて、韓国からベトナムへのナシ輸出が急拡大している。2011年の輸出額は5.2万ドルであったが、2016年には496万ドルに急増した。また、リンゴについてもこの間に6.6万ドルから67.9万ドルに増加している。

米国農務省が最近公表した資料によると、2016/17年に韓国からベトナムに輸出されたナシは3,432トンで、前年を161%上回った。

同資料によると、今シーズン(2017/18年)の韓国のナシ輸出量は全体で27,000トンに達し、前年を900トン上回る見通しだ。これは、ベトナム及び米国からの需要が増加しているためだとしている。

「ベトナムでは、日本、タイ、韓国から輸入される高品質果実の需要が高まっており、韓国からのナシ輸出の急速な拡大につながった。ベトナムでは、近年、贈答用として高品質な輸入果実の人気が高まっている」と米国農務省のGAINレポート(韓国のナシ事情)は述べている。

Lâm Khai Hoàn 社の部長がベトナムニュースに語ったところによると、ベトナムの消費者は、韓国のナシに対して「高品質で価格がリーズナブル」という理由で人気があるそうだ。

アンザン省ティヤウドック(メコンデルタの河川港湾都市)のスーパーTuý Sơn の副部長は、「2年前から韓国産のナシとリンゴの販売を始めたが、特にナシの人気が高い。旧正月に販売するリンゴとナシの詰め合わせ商品に当てる果実を供給してくれる相手を探したい」と語っている。

## 35. リンゴ品種 KIKU®のシーズン始まる

FreshPlaza 電子版 (2017年7月28日)



(訳注:KIKU®はふじ系の品種である)

収穫は終了したが、豊作であったため、KIKU®ブランドのリンゴは小売での販売拡大が見込まれる。ワシントン州、ミシガン州、ペンシルバニア州の生産者は好調な一年を期待しているそうだ。

CMI Orchards 社の副社長 Harter 氏は、「小売での販売拡大の準備はできている」と語っている。同社はKIKU®の出荷量は49%増加すると見込んでいる。

「KIKU®は小さなブランドではあるが、消費者から支持を得ている。生産が増加することで興奮している。この人気を見たなら、消費者がKIKU®の記憶を残すことは明らかだ」と語っている。

Harter 氏によると、ニールセンの調査ではリンゴのベルトセラーランキングでは、昨年は第6位で、前年の5位から一歩後退したそうだ。「昨年は消費需要を拡大しようとしたが、生産量が少なかった。しかし、KIKU®の生産が拡大した今年は小売での販売促進活動を進める準備ができている」とのことだ。

ほ場での生産者の分析によると、糖度(ブリックス)が最も高いリンゴである。ガラが13%、ハニークリスピが14%、ふじが約15%であるのに対し、KIKU®は17%、時にはそれをも上回るという。つまり、超甘い味で消費者を引き寄せている。

ペンシルバニア州では、Rice Fruit 社の許諾を受けて栽培が行われている。同社の副社長によると、夏の後半に遭遇した雹害で被害はあったが、生産量は確保できると期待しているそうだ。「昨年よりも生産は上回っている。喜ばしいことに非常に甘い果実が今年も期待できる。消費者からは、早くKIKU®を購入したいとEメールが寄せられている。小売店からも熱い期待がもたらされている」と語っている。

中西部でKIKU®の生産を行っているのは Applewood Orchards 社であるが、同社の副社長によると、ミシガン州で栽培したリンゴの中でKIKU®は最高だそうだ。「今年の出来は素晴らしい。味も色も際立っており、サイズも最適だ。小売パートナーのニーズに十分に応える準備ができている」と語っている。

Harter 氏によると、急成長と人気の鍵は、米国の3つの地域で強力な生産者が存在することだそうだ。同時に、夏の時期にはニュージーランドから輸入が行われる。「KIKU®は年間を通して小売業者に供給できるブランドとなっている。昨年は12,500店以上のスーパーが販売を行い、成功を収めた。今年は供給が増加するため、より多くの消費者に提供できることに興奮を覚える」と語っている。

参考情報:[www.cmiorchards.com](http://www.cmiorchards.com)



## 3 6. 米国における輸入果実の割合は増加

The Packer 電子版 (2017年11月27日)

米国における生鮮果実の消費に占める輸入果実の割合が増加している。バナナを除く生鮮輸入果実の消費のうち輸入果実の割合は、2016年で38.5%である。2015年は37.7%であり、2010年は23.3%、2000年は20.1%であった。

バナナを含めた全ての果実で見ると、2016年の割合は53.1%であり、2010年の49.1%、2000年の42.4%よりも増加している。

これらは米国農務省が公表したデータである。品目別に見ると、アボカドの輸入の割合は、2016年に85.9%であり、2010年の73.4%、2000年の25.7%から増加している。生鮮オレンジは、2016年に12.2%であり、2010年は7.8%、2000年は3.1%であった。グレープフルーツは、2016年に5.7%であり、2010年は3%、2000年は0.9%であった。

主な果実における、国内で消費された生鮮果実のうち輸入の割合は以下の通りである。

- ・リンゴ:6.3%
- ・ブルーベリー:57.2%
- ・サクランボ:7.7%
- ・ブドウ:49.8%
- ・キウイ:82.1%
- ・モモ及びネクタリン:11.1%
- ・ナシ:18.1%
- ・スモモ:22.5%
- ・ラズベリー:48.4%
- ・イチゴ:14%
- ・グレープフルーツ:5.7%
- ・レモン:13.4%
- ・オレンジ:12.2%
- ・タンゼリン:30%

## 37. カリフォルニアのレモンは減収

FreshPlaza 電子版 (2017年11月24日)



メキシコとチリからの輸入が終わり、米国内で供給されるレモンは全て国産となる。需要は堅調であり、収量が少ないにもかかわらずサイズは適正である。価格は全ての品種、サイズで底堅い。

Limoneira社のCarter氏によると、「国産の生産量が減少し、メキシコ産、チリ産の販売が終了したお蔭で価格は堅調に推移している。現時点では米国内のレモンは全て国産である。サイズは収量が減少するにもかかわらず平均的である。収量が減少する時は特定のサイズに偏るのものだが、それがない。この結果、価格は全ての等級、サイズに渡り堅調である。米国産レモンに対する需要は、東アジア、東南アジアから急速に拡大しているが、北米における需要も良好である。カリフォルニア州では様々な気象条件下で生産が行われているため、年間を通して供給することが可能だ」と語っている。

### 特に砂漠地帯で減収

カリフォルニア州、アリゾナ州の砂漠地帯では減収するものの、セントラルバレーの減収は僅かのようである。生産者によると、減収の要因は年当初に遭遇した高温によるものだ、としている。

Carter氏は、「今年は、カリフォルニア州からアリゾナ州にかけての地域(D3地帯)で減収した。セントラルバレー(D1地帯)でも減収はあったが、砂漠地帯ほどではない。砂漠地帯の減収は30%に達すると主張するものもいる。いずれにせよ、自然現象が減収の要因である。今年発生した何回かの高温現象の中でも、生育に悪影響を及ぼした高温があったからだ」と説明している。

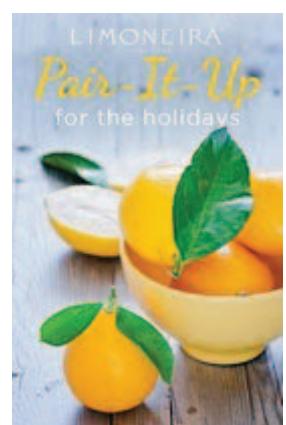
### Meyer lemonに焦点を当てた販売促進活動

Limoneira社では、甘いレモンである Meyer lemon の販売促進活動を進め、感謝祭などにおけるディナー やデザートとしての消費拡大を図ろうとしている。Carter氏によると、Pink lemon も1ヶ月以内には店頭に並ぶと述べている。

「Meyer lemon にはちょうど良い季節であり、11月から1月まで供給することができる。この品種は普通のレモンとマンダリンを交配したものであり、標準的なレモンに比べると際立って甘い。このため祝祭日のレシピの一つとして販売促進活動を行うのに適している。例えば、七面鳥料理の詰め物にし、デザートとしても提供できる。また、最近では、他の产品とペアで販売することも進めている。Limoneira社では、ワインと食べ物のように、レモンと他の食品とペアで食することを宣伝している。レモンの様々な品種には特有のフレーバーがある。レモンをこれまでとは違った側面でとらえ、食事の中に取入れるようにすることで、小売業者は販売を伸ばすことができる。加えて、Pink lemon の収穫が12月に始まる。間もなく販売することができるだろう」と Carter氏は語っている。

著者:Dennis M. Rettke

参考資料:[www.limoneira.com](http://www.limoneira.com)



## 38. カリフォルニアのカキは需要が強いが供給は少ない

FreshPlaza 電子版 (2017年11月24日)



今シーズンのカリフォルニア州のカキは、需要が強く価格も高い。

カリフォルニア州 Reedley に本拠を置くBrandt Farms 社の Reimer 氏は、「カリフォルニア州のカキの取引量は減少しつつある。恐らく、数週間後の12月中旬には取引は終了するだろう。過去のシーズンに比べるとやや早い」と語っている。

今シーズンは約1週間早く始まったが、終わりも早く訪れた。Reimer 氏によると、供給量は昨シーズンに比べて少ないと

指摘しており、「前年の供給量に比べると70~80%だろう」と語っている。

### サイズは大きい

結果量が少ないことでボーナスもあった。「樹に負荷がかからなかったために、果実のサイズは望ましいものになった。果実サイズの分布は大きい方に重心が移った。ただし、果樹園ごとに様相は異なっている」と語っている。

一方、カキに対する需要も増加している。「蜂屋と富有に対する需要は増加しており、これまでの年に比べて旺盛な需要だ。カキ自体、とりわけ富有に対する認識が増している。以前は蜂屋の方が人気はあった。しかし、富有は料理に使用でき、リンゴのように手で食べることができ、スライスしてサラダにもの使え、多目的に利用できる果実だと評価されるようになったと思う」と Reimer 氏は語っている。

### 価格は上昇

こういったことから価格は上昇し、Reimer 氏によると15~20%高いと見込んでいる。

この先はクリスマスまでシーズンは終了するようである。「クリスマス休暇までには蜂屋と富有を相当量供給することができる。蜂屋の収穫は今後10日で終わり、富有はもう少し長くまで(恐らく3週間)続くだろう」とのことだ。

著者:Astrid van den Broek



## 39. 世界のアボカド市場

FreshPlaza 電子版 (2017年11月24日)



世界アボカド組織は、11月を世界アボカド月刊として指定した。オランダは首都をこのイベントの中心都市としたため、アムステルダムは「世界のアボカドの首都」となっている。世界のアボカドのトレンドを見ると、とりわけプロモーション活動が必要な状況とは思えない。世界的に需要は拡大している。価格は安定しており、若干上昇傾向にある。幾つかの国では、この傾向の恩恵に浴そうとして、大幅な新植を進めている。そういう中でも、欧州では2018年にプロモーション活動を行うことが計画されおり、試食品の提供に焦点を当てようとしている。

### メキシコの輸出は減少

今年の1月から10月までの輸出量は77.2万トンであった。昨年の同時期の輸出量は78.4万トンであったことから、10%減少している。この減少で、主要な輸出先である米国、日本、カナダ、欧州、中米市場に影響があった。

メキシコから中国、日本、欧州への輸出はここ数ヶ月止まっており、この結果、他の生産国はこのチャンスを利用している。業者によると、とりわけペルー、チリが市場に参入し、「はるかに良い価格」で販売を行っているそうだ。この状況はメキシコの業界によって常時監視されているという。「メキシコは世界のハスアボカドで支配的な地位を占めたい」と考えているので、今回、競争力を失った原因について適切に対処しなければならない。

コロンビアは米国におけるメキシコの競争相手である。コロンビアは、ペルー、チリとともにメキシコの競争相手となりつつある。

### コロンビア：アボカド市場の新星

コロンビアの輸出業者は、中国を皮切りにアジアへの輸出交渉を始めている。最終的には、マレーシア、日本、韓国などへの輸出を目指している。輸出業者によると、コロンビアのアボカドは、アジアで人気のあるメキシコ産に似ているという。「この点はペルー産、チリ産よりも有利な点」だそうだ。コロンビアとしては、中国の輸入業者が興味を示しており、中国政府の最終的な検証作業が行われるのを待っている状況だ。

伝統的に、コロンビアのアボカドはスペイン、フランス、英国、ドイツ、オランダ等の欧洲へ輸出されてきた。ここ数年で生産量が増加し、その傾向は今後も続くと見られる。このため、輸出業者としては新規市場に期待をしている。また、今年は新規市場であるドバイに初輸出が行われた。数量は24トンと少ないものの、輸出業者は期待を寄せている。中東はますます有望な市場となっている。さらに、香港へも初輸出が行われた。コロンビアには1.5万haの新植間もない果樹園がある。出荷のピークは10月から12月である。

## 成長を目指すペルー

ハスアボカドに対する世界的な需要の拡大に応じ、ここ数年生産量が増加している。最新のデータによると、ペルーでは毎年1,500haの植栽が進められている。現時点の栽培面積は2.8万haであり、若齢の果樹園が多い。この面積の増加により、輸出は拡大すると見込まれる。主な生産地は、ランバイエ県のオルモスである。エルニーニョによる被害の恐れはあったものの、今年の輸出量は23万トンと予測される。次期シーズンを予想するのは時期尚早ではあるが、生産量は今シーズンよりも15%増加すると見込まれている。

中国への輸出は昨年に比べて倍増し、来シーズンも倍増すると予測される。さらに、韓国への市場アクセスも進められている。米国への輸出は、通常は全輸出量の20%であるが、今シーズンは25%を占めた。また、インドへも初輸出が行われた。

## 中国市場にかけるチリ

2016/17年の中国への輸出量は1.3万トンであった。輸出業者によると、中国への輸出量第一位の座をメキシコから奪ったそうだ。中国では、数年前までアボカドは知られていなかったが、需要が急速に拡大している。輸出業者によると、来年の中国への輸出量は1.8万トンに増加することだ。

## コスタリカ：メキシコからの輸入を解禁

メキシコからのアボカド輸入に関する問題は間もなく解決される見込みだ。2015年5月以降、メキシコからのアボカド輸入は禁止されていた。これはアボカドのサンブロッチ病(Sunblotch disease:ウイロイドによる病気)の侵入を抑えるためである。輸入禁止措置は、他にも米国、オーストラリア、スペイン、ガーナ、グアテマラ、イスラエル、南アフリカ、ボリビア、ベネズエラに対してもとられている。新たに提案されたプロトコルによると、コスタリカはリスクの高い産地からの輸入阻止を求めるとともに、原産国で検査を行うことを要件としている。

## ドミニカ共和国：緑色種が中心

生産量は多いものの、輸出量のトップ10の中には入っていない。従って、生産物は主に国内市場で販売されている。ドミニカ共和国では果皮が緑色の種が全体の85%を占めている。アボカド市場は96%がハスアボカド(黒色腫)で占められているが、緑色系の品種を生産しているため、米国市場では強い立場にある。というのも、カリブ海諸国からの移民が多い米国東海岸では、緑色種の人気があるためである。米国市場における緑色種に占めるドミニカ共和国産のシェアは98%に達している。フロリダ産のシーズンが終わる3月以降は(米国の緑色系については)ドミニカ共和国産が独占状態になる。

## 米国：フトボールのシーズンは需要が増加

メキシコからの供給量は十分にある。「チリ、ペルーからのアボカドはまだ市場に出回っていない。2018年初頭まではメキシコ産により占められるだろう」と輸入業者は語っている。この業者によると、今年の入荷量は前年よりも若干多いそうだ。それはメキシコでの栽培面積が増加しているためだという。輸入業者によると、メキシコでは、毎年6.5~8.5万本のアボカドが植栽されているそうだ。毎年、フトボールの時期には需要が増加する。市場にはまだ1.8万トンを受け入れる余地があるという。

カリフォルニア州産のアボカドの生産量は残念な結果に終わった。このため、ペルー産が市場を埋める余地が残されている。

## **オーストラリア:見通しを修正**

当初の見通しでは生産量は7.5万トンであったが、この数字は下方修正されるようだ。暴風雨のシーズンが例年に比べて早く始まったことと、着果が悪かったためだ。アボカド・オーストラリアでは今後数ヶ月にわたる安定した入荷を期待しているが、2018年の第1四半期は減少が見込まれる。需要の高まりを受け、価格が低下するとは考えられない。

## **ニュージーランド:大幅な生産増を記録**

ニュージーランドの業界はここ数年大幅な生産増を記録し、(今年は)2.003億ドルに達した。1年前の生産額は1.339億ドルであった。生産量は780万箱(1箱5.5kg)であり43,375トンである。この内、470万箱が輸出され、210万箱は国内市場に向けられる。ニュージーランドは中国との間で輸出協定を締結し、プロトコルも策定されていることから、今後さらなる輸出増が期待される。とはいっても、現時点での最大の輸出先はオーストラリアで、390万箱が輸出されている。アジアでは、日本、韓国、シンガポール、タイが主な輸出先である。

アボカドの樹園地は高い価格で取引されており、新植を待つ土地も多い。こういった状況は同国の北部で見られる。

## **ケニア:コーヒー園からアボカドに転換**

ケニアではアボカド生産のために多額の投資が行われている。コーヒーと茶のプランテーションから、アボカドへの転換が見られる。生産者がアボカドの苗木を入手することに関しては問題ないが、課題は適期に収穫することと、コールドチェーンを維持することにある。

## **南アフリカ:新シーズンに期待**

今シーズンは1,100万箱を輸出したが、上出来とは言えなかった。市場は堅調であったが、出荷量が少なく、利益をあげることができなかつたからだ。今年は裏年にあたったため、生産量が少なかつたのである。加えて、干ばつによる影響が大きかつた。来シーズンは表年に当たり、生産量の増加が期待される。生産量は1,500～1,600万箱を予測している。収穫は未だ行われていないが、生産者は自然災害のないことを願っている。また、栽培面積拡大のための投資が行われており、大規模生産者は、今後4～5年の間に毎年200～300haの面積拡大を見込んでいる。

## **モロッコ:世界市場への足場作り**

北アフリカにおけるアボカドと言ってもピンとこない。収穫シーズンは1月から4月までである。生産者によると、「今年は生産量、品質とも期待をしている」そうだ。生産には幾つかの課題がある。一つは降雨量が少ないことで、もう一つが霜害に襲われる可能性があることだ。世界市場での他国との競争を考えると、その中に足場を作るのは容易ではない。

## **イスラエル:生産量が減少の見込み**

収穫シーズンは未だ本格化していない。まず緑色系のアボカドの収穫が始まり、ハスマボカドへと続く。1月以降は両方のアボカドが出回る。11月現在ではEttinger(品種)が市場に出ており、価格は5ユーロ(昨年の同時期は7ユーロ)である。輸出業者によると、Pinkerton(品種)が出回るようになると、価格は10ユーロに上がることだ。

## **スペイン:生産の安定を望む、果実サイズは大きい**

スペインの業界では、昨年と同程度の生産量である4.5～5.0万トンを望んでいる。ただ、果実サイズは大きいと見込んでいる。Fuerte(品種)は高値で出荷を終わろうとしている。ハスマボカドは数日で収穫が始まるとのことだ。

現時点では、輸入業者は、チリ、メキシコ、コロンビアから集荷をしている。コロンビアは様々な国によりアボカドへの投資が行われていることから、主要な輸入先となりつつある。

今年の価格は堅調で安定している。年末が近づくにつれ需要が増加すると見込まれる。今後数年で、ア

ボカド市場はさらに成長を続け、リンゴやオレンジのような商品になると見込まれる。輸出業者によると、「イタリア、フランス、ベルギーでの売上高は驚異的な伸びを記録している」とのことだ。

### **オランダ:年間を通じて流行しているが12月がピーク**

アボカドの流行は年間を通して見られるものの、やはり12月が需要のピークである。ここ数ヶ月間、市場は安定して発展を続けおり、この傾向は続くと見込まれる。現在、小さいサイズの価格は13.5ユーロで、大きいサイズは最大14.5ユーロである。

チリ産のアボカドは今後約1ヶ月で終了し、コロンビア産、スペイン産は出始めたばかりである。ペルー産は1月下旬に入荷する見込みだ。今シーズンはコロンビア産の果実の欧州への出荷が増加している。スペインの生産量はそれほど多くないと予測されている。コロンビア産は品質面でも改善が進んでおり、今後、アボカド市場で重要な輸出国となると見込まれる。

### **ドイツ:11月の市場は平穏**

ドイツではハスアボカドが主流である。現時点ではチリ産、ペルー産、南アフリカ産が出回っている。また、メキシコ産、コロンビア産も見られる。卸売価格は安定しており、4kg箱で14~16ユーロで推移している。

業者によると、11月は9月、10月に比べると平穏な月だそうだ。過去2週間で、市場は飽和状態にあることから、価格は低下している。

ドイツではアボカドの人気が全国的に拡大している。年間一人当たり消費量は、過去二ヵ年で250gから640gに增加了。しかし、周辺諸国に比べればまだ低い水準である。フランスでは1.6kgであり、オランダやスカンジナビア社告では約2kgである。有機アボカドも頻繁に見られるようになり、全体需要と同程度に増加している。

### **ベルギー:高価格**

現時点ではアボカドの価格は高い。9月段階では幾分安かったが、現在は1箱当たり12~14ユーロである。品質には問題はない。ごく一部のチリ産アボカドに品質上の問題があったが、全体の中では重要ではない。

現在、スペイン、コロンビア、メキシコからも一部輸入されているが、大部分はチリ産である。業者によると、予期せぬ事態が生じない限り、年末の休暇まで需給は安定を続けるとのことだ。従って、価格は高いままのようである。その中でも緑色系のアボカドは不足しており、価格はやや高い。この結果、これを埋め合わせるためにハスアボカドの輸入量が増加している。

### **ロシア:需要は少ない**

ロシアでのアボカドの需要は少ない。輸入先はケニアや他のアフリカ諸国であるが、過去には品質上の問題が生じたことがある。また、品質は良いものの出荷時期が限られているイスラエルからの輸入もある。現時点では、経済情勢から、また、冬に向けて急速に気温が低下していることから、ロシア国民は「サバイバルモード」に入っていると言えよう。

著者:Rudolf Mulderij

## 40. カリフォルニア産ネーブルは供給量が減少の見込み

ASIAFRUIT 誌 (2017年11月号)

2017/18年産のカリフォルニア州ネーブルオレンジの出荷量は、過去10年で最小となる見込みだ。カリフォルニア州食品農業局(CDFA)の予測によると、出荷量は7,000万箱であり、このうち6,800万箱はサン・ホアキンバレーが占めている。同局の予測が正しいとすれば、昨シーズンよりも10%少なく、2年前に比べると25%少ない数字だ。

減産の原因是、シーズン初めの気象条件によるものと考えられる。しかし、同州の業界では様々な原因が挙げられている。ある人は、春先の開花期に襲われた豪雨が原因だとしている。一方で、4月の熱波で落果が多くなったことが原因だとするものもいる。とはいえ、ネーブルオレンジの栽培面積が減少していることが、減少の要因の一つとなっていることは疑いない。

LoBue Brothers Citrus 社のWollenmam 氏は、10月の段階で、「今年のサン・ホアキンバレーのネーブルオレンジは15%の減収になるかも知れない。減収の理由は天候によるものが大きいが、最近、栽培面積が減少していることも大きな要因だ。この理由は、トリステザ病に対して早急に対応するためだ。というのも、この病気に罹ると樹を伐採しなければならないからだ。そして、伐採された跡地にはネーブルオレンジではなく、マンダリンやナツツ類が植栽されているのだ」と語っている。

CDFA によると、サン・ホアキンバレーでは着果数が相対的に少なく、1樹あたりの着果数は273で、昨年よりも29%少ないとのことだ。この結果、果実は肥大が進み、過去15年で最高の5.95cmに達しているという。

果実サイズが大きいことは、1箱当たりの果実数が少ないということであり、こういったケースでは最終の出荷量は当初の予測を上回ることもある。2009/10年がその例の一つで、CDFAは当初7,800万箱と予測していたが、最終的には8,200万箱であった。一方、2013/14年の果実サイズは今年と似ているが、当初予測の8,500万箱から7,400万箱に減少した。ただし、この年は12月の寒波が減少要因だった。このように、この時期の予測は必ずしも最終値を正確に予測できるものではない。カリフォルニアの天候は安定しているとはとても言えないので、最終値がどうなるかは時を待つしかない。

Wollenmam 氏は、「今年のネーブルオレンジは業界としては扱いやすい。というのも、暑い夏を経験したため、果皮が丈夫になり貯蔵や出荷に当たって高品質を保てるからだ。昨年の冬の降雨で土壌水分が多く、熱い夏を耐えることを可能にしたのだろう」と語っている。

果実サイズが大きいため、望ましいとされるサイズ72や88の供給不足が懸念される。しかし、Suntreat Packing & Shipping 社で輸出を担当するGuitarrez 氏によると、「大多数の市場に供給するサイズ72と88の量は十分あると思う。しかし、シーズンを通してこのサイズのFOB価格は上昇する見込みだ」と語っている。

米国からのカンキツの供給は今後数ヶ月不足すると見込まれる。カリフォルニア州のネーブルオレンジだけでなく、フロリダ州では9月にハリケーン・イルマによる大きな被害があったからだ。

フロリダ州では、カンキツグリーニング病やその他の病害の影響で、栽培面積は1966年以来、最低の水準の減少している。ハリケーン・イルマの影響で生産量はさらに減少し、現在はどの程度減収するかの議論が行われている。

米国農務省が公表したハリケーン・イルマの来襲後初となる生産予測量では、オレンジで前年より21%減、グレープフルーツで同じく37%減というものであった。しかし、同州の生産者団体である、フロリダ・シトラス・ミューチュアル(FCM)は即座に反論し、「被害を踏まえた生産予測としてはあまりにも早すぎる公表だ」とし、「被害の全貌が判明するには数年を要する」としている。その後、米国農務省により修正されたオレンジ生産予測値の5,400万箱に対しても、FCMは「3,100万箱と見るべき」とコメントを出している(注:2014/15年の同州のオレンジ生産量は9,700万箱であった)。

フロリダ州のオレンジはジュース向けが大半であり、生食向けが大半のカリフォルニア州のネーブルオレンジとは競合しない。とはいっても、フロリダ州を襲った大損害は、世界のカンキツ供給量に大きな痛手をもたらし、生鮮果実のFOB価格をプレミア価格に押し上げることになるだろう。そして、これが解消するのは、南半球産が出回る2018年第2四半期まで待たなければならないだろう。

## 4.1. 2017年の中国のリンゴ市場分析

FreshPlaza 電子版 (2017年11月22日)

2017年の年末に当たり、リンゴの価格は前年同時期に比べてわずかに下回った。2017年の価格は、過去数年見られたような不安定さが原因で、下降傾向を示している。リンゴが市場に出回っても熱烈に歓迎されることではなく、バイヤーは様子見をしているため、過去2~3年では価格が低下している。

2012-2016年苹果年均批发价格（元/斤）



過去5カ年のリンゴの卸売価格を分析してみると、価格のピークは9月にある。生産地価格と卸売価格の差を見てみると、卸売価格のピークは際だって遅くなっている。この理由は、新シーズンのリンゴが市場に出回るようになって、産地市場に貯蔵されていたリンゴが6月末になくなり、その他の貯蔵リンゴも消費地の卸売市場に移送される。このため、6月から9月にかけてはリンゴの供給量が少なくなる。従って、貯蔵リンゴも含めて9月の価格が上昇するのである。

2017年は、気象条件の影響もあって、山東省のリンゴの品質は低下した。加えて、1級・2級都市における高品質リンゴに対する需要は増加している。切迫した需要の増加に対応し、輸送のスピードも速まっているが、高品質リンゴの価格はさらに値上がりしている。このように、高品質リンゴに対する需要は供給量を上回っているため、価格の上昇が見られるが、中程度以下の品質のリンゴに対しては、誰しも興味を持っていない。これは、中国の農産物市場で見られる傾向の一つといえる。つまり、中国では農産品は不足してはいないのだが、高品質な農産品は不足しているのである。

情報源: Yi Mu Tian ([www.ymt.com](http://www.ymt.com))

## 4.2. パナマ病TR4に耐性のあるバナナを開発

FreshFruitPortal 電子版（2017年11月15日）



ウガンダでビタミンAを豊富に含むバナナの試作を行っているオーストラリアの大学が、土壤を通した致命的なバナナの病気であるパナマ病TR4に耐性のあるキャベンディッシュバナナの開発に成功した。

TR4菌が大量に存在する土壤を使った世界で初めての野外遺伝子組換試験で、クーンズランド工科大学の研究者は、野生バナナの遺伝子を用いて形質転換したバナナの1系統が病気に対する完全な耐性を持つことを発見した。

加えて、試験を行った6系統のうち3系統のバナナで相当程度の耐性があることも発見した。

プロジェクトチームのリーダーである同大学の熱帯作物センターのJames Dale教授によると、大変に有益な研究成果だとしている。研究成果はNature Communicationsに掲載された。

野外試験は、パナマ病TR4に感染しているウガンダ北部のHumpty Doo近郊の商業生産用のバナナ園で行われ、土壤に病原菌を再感染させた条件で2012年から2015年にかけて実施された。

教授によると、非常に毒性の強いこの病気で危機にさらされているキャベンディッシュバナナは世界の貿易額の120億ドルを占めており、今回の成果は輸出ビジネスを守るために大きな一歩だという。「この病気から守るための解決策を発見したことと、今回の研究成果は大変にエキサイティングだ。規制が緩和されれば、汚染された土壤でもキャベンディッシュが栽培できる。TR4は土壤中に菌が40年以上も生存するが、効果的な化学療法はない。世界の多くの地域でこの病気でバナナ園が荒廃しており、アジアでは急速に拡大している」と話している。

研究者は試験で得られた病気に耐性を持つ4つのRGA2系統と遺伝子組換えを行ったキャベンディッシュ・グランド・ナインとウイリアムス(いずれも栽培品種名)を用いて、野外試験の範囲を拡大した。9,000の植物体を育成し、5年に渡って収量検査を行うことだ。

「目標は商業生産に向けて最良のキャベンディッシュ・グランド・ナインとウイリアムスを選抜することにある。オーストラリアではウイリアムスを栽培しているが、世界の多くの地域ではキャベンディッシュ・グランド・ナインの方が人気である」と語っている。

教授によるとRGA2遺伝子活性とTR4の抵抗性の間には相関が示され、これが研究の扉を開いたという。「RGA2遺伝子が野生の2倍体のバナナにおける病気耐性の基になっているとは断言できない。というもの遺伝子組換えを行ったキャベンディッシュの方が野生バナナよりも遺伝子活性は高かったからだ。しかし、相関関係は確認した。普通のキャベンディッシュにもRGA2遺伝子が存在することも確認した。ただし、それは活性が弱いものだった。我々は、遺伝子編集技術を用いて遺伝子活性を高めるスイッチを入れることを目指している。この研究は既に始まっているが、複雑で困難な過程を経なければならず、4~5年の期間が必要だ。加えてTR4以外の病気に耐性を持つ遺伝子を野生バナナから取り出すことも目指したい」と語っている。

今回の野外試験で得られたその他の成果は次の通りである。

- ・線虫から抽出されたCed9遺伝子をキャベンディッシュ・グランド・ナインに組み込み、9系統で栽培試験を行ったところ、1系統で3年間TR4に罹病しなかった。
- ・遺伝子組換えバナナと通常のバナナ(キャベンディッシュ)の間では収量に差はなかった。

## 4 3. 米国リンゴ協会は供給量が豊富との報告

The Packer 紙 (2017年11月20日)

レッドデリシャスの生産量は減少しているものの、他の新品種の生産量は拡大している。レッドデリシャスは二桁の減少となっているが、ハニークリスピは急速に増加している。

11月1日現在の全米の生鮮リンゴ現存量は1億4,330万箱(1箱42ポンド)で、前年を6%上回り、過去5カ年平均を15%上回っている。これは、シーズンで最初に公表された米国リンゴ協会の「貯蔵レポート」による数字である。

この報告によると、ワシントン州の生鮮リンゴ現存量は1億2,557万箱で全米の88%を占めている。

ヤキマにあるワシントン州果樹協会の会長によると、ワシントン州全体の生鮮リンゴ出荷量は1億3,850万箱で、先の予測の1億3,090万箱を上回っているとのことだ。11月上旬時点ではまだ収穫中のリンゴがあるため、この数字はさらに上昇する可能性があるという。現段階の数字ですら、2014年に記録した1億4,200万箱に次ぐ史上第2位となっている。

ニューヨーク州の11月1日現在の生鮮果実現存量は687万箱で全米の供給量の5%を占めている。

ミシガン州は同じく539万箱で全米の4%を占めている。

品種別に見ると、レッドデリシャスが11%減少するものの、(全米で)3,970万箱と依然トップの座を占めている。なお、一昨年に比べると2%の増加だ。果樹協会会長によると、他の品種のような生産量の増加はないものの、レッドデリシャスは他品種から取り残されたわけではないと言う。ワシントン州ではリンゴの生産量全体が増加する中で、レッドデリシャスの占める割合が減少しているとの見方だ。例えば、2008年のレッドデリシャスの生鮮出荷量は3,390万箱だったが、2017年のワシントン州の生産量と比べると、基本的に変わっていない。

果樹協会会長によると、ワシントン州におけるレッドデリシャスの占める割合は、2008年の30%から今年は24%に減少しているとのことだ。

反対に、ガラの今年の生産量は3,350万箱と、2008年の2,000万箱から増加した。2008年には18.5%のシェアであったものが、2017年には24%となっている。

ハニークリスピは2008年の157万箱から2017年には1,240万箱となっている。2008年のシェアが1.4%であったのに対し、2017年には8.9%に増加した。ウェナチーにあるワシントンリンゴ委員会の会長によると、知的所有権が付随するアンブロージア、パシフィックローズ、エンヴィ、ジャズなどの品種は、その割合が増加しているという。

## 44. 中国産シャインマスカット市場で最高評価

FreshPlaza 電子版 (2017年11月17日)



「シャインマスカットは日本で育成された品種で、数年前に中国に移入されて以来、各地で栽培され、増加している。この品種の果実は、橢円形でエメラルドグリーン、光沢のある果皮を持っている。果肉は張りがあり、ジューシーだ。このユニークな特性のため、市場では大変に人気があり、生産量は毎年大幅に拡大している」と青島 All-Fresh Agricul Products Co., Ltd. の Nie 氏は説明する。

「シャインマスカットは、同じく市場で人気がある巨峰に比べて3つの優れた点がある。まず第1に、栽培が容易であり収穫期間が2~3ヶ月と長いことだ。第2に裂果せず、収量が多く、脱粒もしない点だ。最後に、白腐れ(white rot)、ベト病、うどんこ病に強いことだ」と続けている。

「青島のシャインマスカットは9月下旬に収穫が始まり、出荷時期は2ヶ月間続く。今年は生産量が増加したが、多くの生産者が栽培したシャインマスカットは理想的とは言えない。果皮の色が正常ではないからで、これは旧式の栽培方法が原因と思われる。とはいえ、強い需要に支えられ、市場価格には満足している。現在の価格は、昨年よりもやや高い状況である」とのことだ。

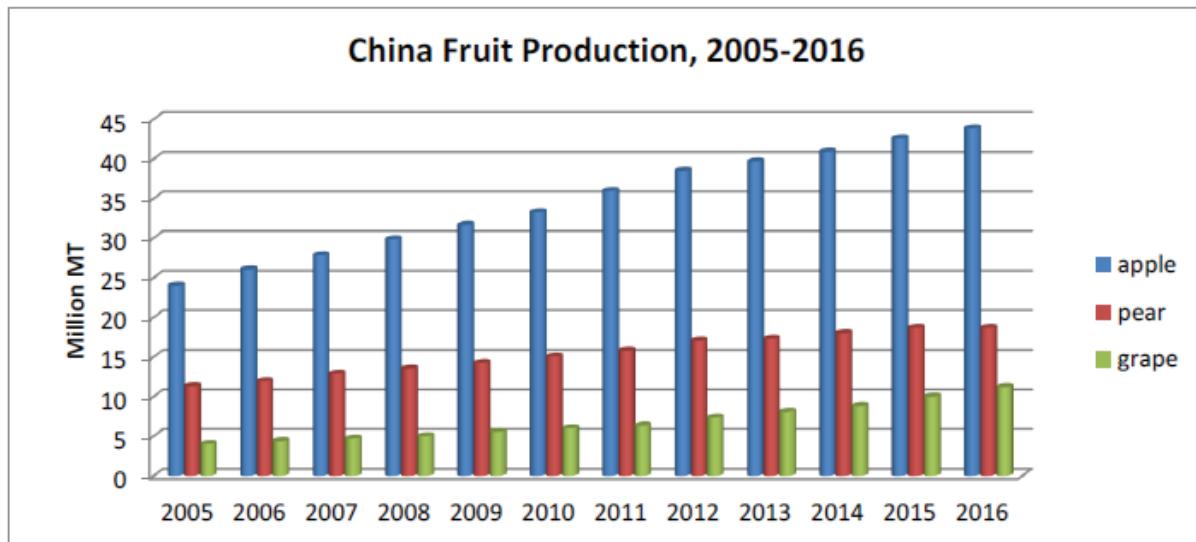
情報源: [Allfresh.en.alibaba.com](http://Allfresh.en.alibaba.com)



## 4.5. 中国の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情

米国農務省海外農漁局 GAIN レポート (2017年11月13日)

### 生産



Source: Ministry of Agriculture

### リンゴ

2017/18年(7月→6月)のリンゴ生産量は4,450万トンで、前年をわずか1%上回ると予測される。中国北部では春と夏に高温が長く続き、干ばつであったことから、山東省、河北省、遼寧省などの東部のリンゴ生産地帯で5~10%生産量が減少した。陝西省、山西省、甘肃省を含む西部のリンゴ産地では、比較的天候が順調であったことから生産量は引き続き増加し、東部での減少を補った。干ばつによる影響は特に東部の産地に現れ、果実サイズが小さくなかった。

2017/18年の栽培面積は232万haと推測され、前年をやや下回ると予測される。これは山東省で老朽化した果樹園が廃園となるためである。中国では数年続いた面積の増加は終わり、安定化したと見込まれる。中国農業部の統計によれば、10年以上続いた面積の拡大は、2016/17年に前年のリンゴ価格の低迷を受けて初めて減少に転じた。10月初~中旬に収穫されるふじが最も生産量が多く、全体の70%以上を占めている。その他の品種はガラ、レッドデリシャス、Guoguangなどである。

### 中国のリンゴ主産地



中国では2002年から生産量が増加を続けたが、供給が過剰となり、価格が下落している。品質にはバラツキがあり、高品質なものは少ない。業界の報告書によるとプレミアム品質の果実は全体の25%程度と推計している。品質向上させるため、いくつかの生産会社では近代的な果樹生産のための投資を行っている。また、農家と協同組合が一体となって品質の向上を図っている。中央政府から地方政府に至るまで、果実の品質向上のために資源を投入することに努めている。中国のリンゴ産業内部では、品種の多様化が必要であることを認識している。

## ナシ

2017/18年(7月→6月)の生産量は、前年に比べて2%増加すると予測される。高温と干ばつにより、東部のナシ生産地では生産量が減少したが、その他の地域で増加するためである。一部地域で干ばつの影響があるものの、果実の品質は良好である。

中国農務部の統計によると、リンゴと同様にナシの栽培面積も2016/17年から減少に転じた。これは2010/11年以来のことである。生産過剰により市場から得られる利益が減少している。2017/18年の栽培面積はさらに減少し、111万haと推測される。主に栽培されている品種はアジアナシであり、品種はSnow pear、Ya、Huangguan、Fengshui、Fragrant、Fengshui、Nanguoである。収穫時期は主に8月上旬から10月上旬にかけてである。



## 生食ブドウ

中国の生食ブドウ主産地



濃い色:生産量の10~20%(河北省、新疆、雲南省)  
薄い色:生産量の5~10%(遼寧省、浙江省、山東省、雲南省)

食ブドウは広範に栽培され、品種も多いことから、収穫時期は4月下旬から10月まで(温室の場合は11月まで)と幅が広い。

2017/18年の生産量は、1,120万トンで前年を4%上回ると予測される。これは天候に恵まれたためである。品質は、管理技術が向上したため、前年よりも良好である。

2017/18年の栽培面積は、前年よりも若干増加し、81.2万haと推測される。面積の急速な増加は終わり落ち着いたものとなっている。生産はチベットを含む全ての省で行われている。業界筋の情報によると、10%以上が温室で栽培されており、北部、北西部で増加しているとのことだ。

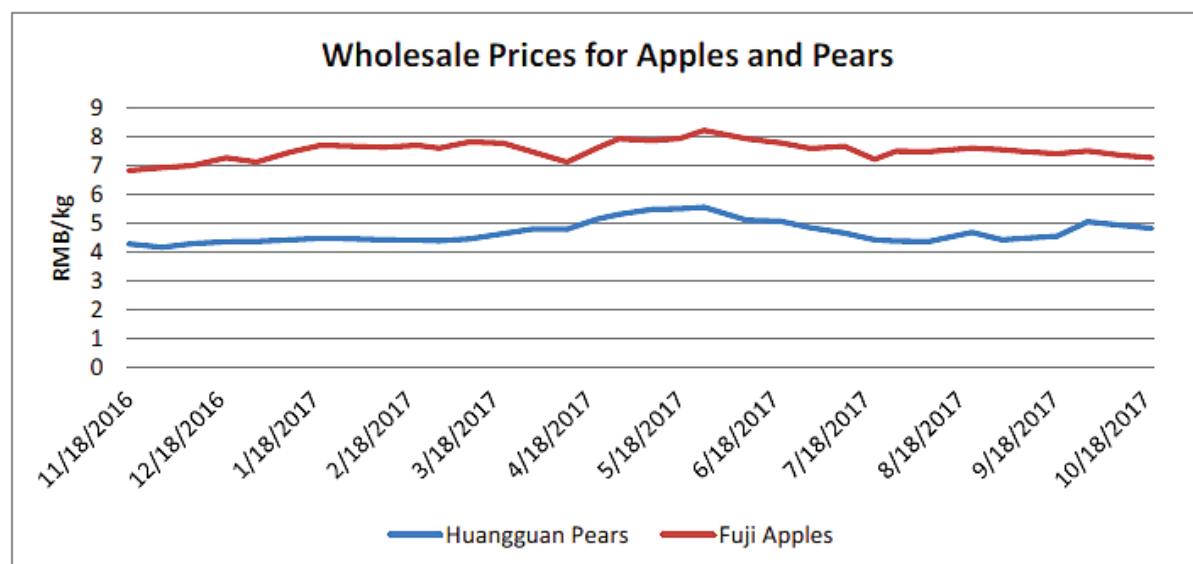
栽培品種は、従来からのレッドグローブ、巨峰、トネブソンシードレス、マスカットに加え、開発された多くの品種が中国全土で生産されている。生

## 価格

中国果実市場協会(CFMA)によると、最高品質のふじ(直径8cm以上)の10月10日の農場出荷価格は、中国全土平均でキロ当たり0.95ドルと前年の0.89ドルを上回った。業界によると、高品質リンゴの割合が昨年よりも少ないためだそうである。低位品質品の価格は低く抑えられている。リンゴの価格は、10年以上続いた生産の拡大の後に2015/16年に下落が始まった。

CFMAによると、ナシについては、収穫が始まった7月下旬には、Huangguanの価格はキロ当たり0.42ドルで前年の0.39ドルを上回った。業界筋によると、品質が向上したためのことだ。

生食ブドウも同様に品質が改善されている。このため、前年に比べると価格は高い。例えば、巨峰の農場出荷価格は8月時点できロ当たり1.1ドルと前年の1.0ドルよりも上回っている。2014/15年には価格が下落したが、2017/18年には回復している。これは品質の向上と、品種の多様化がもたらした成果と思われる。



Source: China Fruit Marketing Association (US\$1=RMB6.63)

## 消費

所得の拡大と健康志向から、高品質果実に対する需要は拡大している。消費者は、新鮮で味が良く、ブランドものの果実を求めている。輸入果実は高品質で安全であることから、特に国産品が出回らない時期を中心に好まれている。落葉果樹の一人当たり消費量は先進国の水準に近づいており、更なる拡大の余地は大きくない。特に、1級都市、2級都市ではその傾向がある。しかし、電子商取引、果実販売店チェーン、ウィーチャットによる商取引は果実の消費をより身近にし、便利にした。従って、3級都市、4級都市では更なる果実の消費拡大が期待できる。

リンゴは中国の中で最も人気のある果実である。しかし、品種が限られていること、他の果実の利用機会が増加していることから、人気に翳りがある。ナシはリンゴよりも人気がない。冷蔵貯蔵施設のお蔭でナシは年間を通して消費ができるが、冬の間はさほどの人気はない。生食ブドウは落葉果樹の中で、最近、最も好まれている果実であり、フレーバーに焦点が当てられている。中国南部の消費者は巨峰のようにジューシーな品種を好むが、北部の消費者はレッドグローブのような果肉の固い品種を好んでいる。品種が多様化していることと品質が向上していることから、生食ブドウの消費は引き続き増加すると見込まれる。

## 政策

ほとんどの果実で国内生産が充足していることから、中国政府は生産者に対して品質と安全性の向上に努めるよう誘導している。2017年始めに、中国農業部は「農産物に関する品質及び安全性向上強化に関する第13期5ヵ年計画(2016~20)」を公表した。この計画によると、リンゴはトレーサビリティーシステムを試行的に確立する作物の一つとされた。5つの省が2017年末までこの取組に参加することとなっている。2017年2月8日には、農業部から「果樹、野菜、茶生産における有機肥料利用に関するアクションプラン」が公表された。これにより100の主要な地域がこの計画に参加した。アクションプランの目標は、主要な果樹、野菜、茶の産地において2020年までに化学肥料の投入量を20%削減することである。中国の生産者は先進国に比べて化学肥料の投入量が遙かに多い。農業部の報告によると、単位面積当たりの果樹への化学肥料施用量は、米国に比べて6倍多いとのことだ。

中国政府は全ての農産品に対する付加価値税(VAT)を引き下げる決定した。これにより、2017年7月1日から、輸入品も含め税率が13%から11%となった。関税に関しては自由貿易協定を締結したオーストラリア等を除き変更はない。

中国のリンゴ、ナシ、ブドウに関する関税(%)

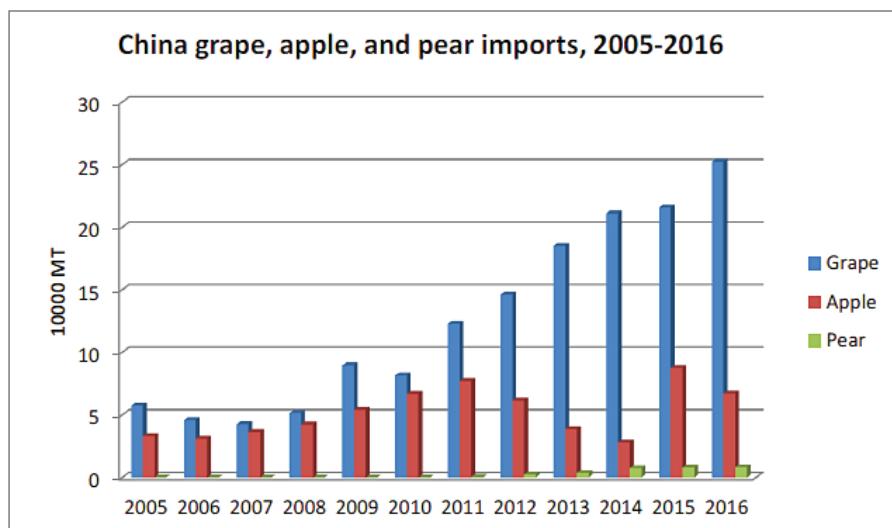
	米国	チリ	ペルー	オーストラリア	ニュージーランド	ベルギー	アルゼンチン	南アフリカ	
税率	13	0	リンゴ: 2 ナシ: 2. 4 ブドウ: 0	リンゴ: 4 ナシ: 4. 8 ブドウ: 5. 2		0	13	13	13

## 輸入

2017/18年の生食ブドウの輸入量は、25万トンと前年を5%上回ると予測される。中国のオフシーズンの需要が引き続き拡大しているからである。輸入先は主に南半球であり、チリ、ペルー、オーストラリアが3大輸入先国である。これらの国は、中国と自由貿易協定を締結し、関税がゼロ又は低く抑えられている。

2017/18年のリンゴの輸入量は、8万トンと前年を14%上回ると予測される。高品質なリンゴに対する需要が強いためである。既に記述したとおり、中国産リンゴは、干ばつにより高品質果実の生産に影響が及んでいる。米国、チリ、ニュージーランドが3大輸入先国である。

2017/18年のナシの輸入量は、前年を13%下回る6,000トンと予測される。輸入されるナシはアジアナシと異なっており、特に南部中国では馴染みがない。ナシの輸入は全体の消費量に比べると大変に少ないし、輸入量も減少している。主な輸入先は、ベルギー、アルゼンチン、米国である。



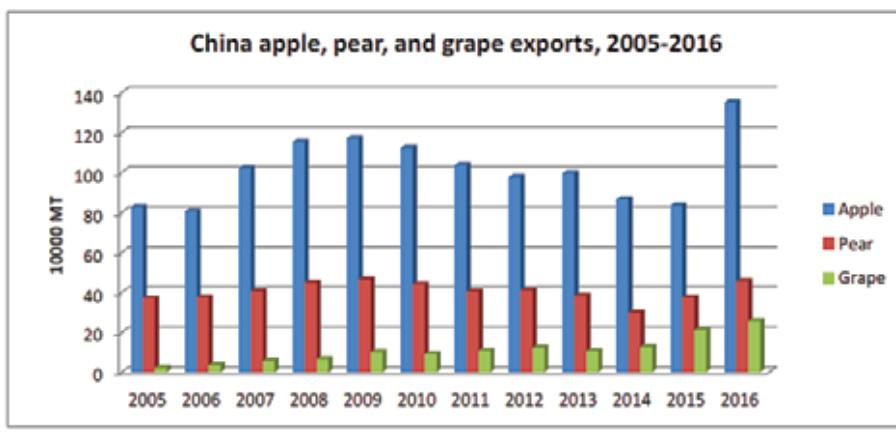
Source: China Customs Data

## 輸出

2017/18年のリンゴの輸出量は、120万トンと前年を13%下回ると予測される。これは、インドによる中国産の輸入禁止措置が継続される見込みだからである。インド政府は、2017年6月1日に中国のリンゴとナシに対し、有害病虫害が発見されたとして輸入禁止措置を講じた。2016/17年のインドに対する輸出量は19万トンで、輸出量全体の14%を占めていた。中国は近隣の南及び東南アジアにリンゴを輸出している。低価格を武器に、2016/17年の輸出量は新記録を更新した。

2017/18年のナシの輸出量は6%減少し、48万トンと予測される。国内価格の上昇が見込まれるため、価格に敏感な東南アジア向け輸出に影響が出ると考えられるからだ。インドは中国のナシに関して主な輸出市場ではないものの、輸入禁止措置による影響はあると見込まれる。

2017/18年の生食ブドウの輸出量は、前年を20%以上下回る20万トンと予測される。これは品質が向上するために輸出価格が上昇すると見込まれるからだ。このため、主に低品位の果実を輸入していた東南アジア諸国の業者は、輸入を大幅に削減すると考えられる。加えて、業者によると、最大の輸出先であるタイは、国内生産量が大幅に増加するため、輸入を手控えると予測している。



Source: China Customs Data

## マーケティング

輸入されたリンゴ、生食ブドウ、ナシは、ハイパーマーケット、スーパーだけでなく、中国中の伝統的な市場、家族経営の店舗で販売されている。加えて、電子商取引は、1級・2級都市において輸入果実の販売の重要な手段となっている。中国でのプロモーション活動を成功させ得るためには、鮮度、品質、栄養、味が鍵となる要素である。米国農務省海外農業局貿易事務所は、国内の貿易促進団体(例えば、ワシントンリンゴ協会、米国リンゴ輸出会議、カリフォルニア生食ブドウ委員会、米国ナシ協会)と協力し、中国全土で幅広くプロモーションイベント、セミナーを開催し、米国産果実をアピールしている。

中国南部は、長い間、落葉果樹の主要な市場であった。珠江デルタに位置する広州や深圳などは今でも主要な消費の中心である。一方、廈門、長沙、三亜などの2級・3級都市においても需要が拡大している。この他、中国における主要な市場は、上海、北京のような1級都市、重慶、杭州、蘇州、青島のような地域の拠点都市である。

中国では冷蔵貯蔵管理及びインフラ整備が急速に進展している。同時に、卸売市場が発展しその機能が向上している。貿易業者によると、3級都市でも、近年冷蔵貯蔵設備が急速に進歩しているとのことだ。

米国産果実に対する需要は引き続き強いものの、落葉果樹については中国市場で他の輸出国との競合、品質が改善された国産との競合が見られる。このため、米国産果実のイメージを強化し、市場シェアの維持・向上を進めるには、継続した市場活動(インストアショップ、オンライン販売、その他の革新的な行動)が不可欠である。加えて、1級・2級都市のみならず3級都市においても小売業者の競争が激しいため、地域のスーパー・チェーンや流通業者は、常に新しい製品を販売し、差別化を図ろうとしている。このため、米国の業者は、豊富な手持ちの資源を活かし、中国市場に新たな品種を供給する努力が必要である。

## リンゴ

2級・3級都市の小売チェーンが発展しているため、今や大部分のハイパーマーケット、スーパーで米国産リンゴが販売されている。米国産だけでなく、近年のリンゴ供給国であるニュージーランド、チリ、ポーランド産も同様である。このような競争にもかかわらず、米国産リンゴに対する需要は拡大し、これまで大きなシェアを獲得してきた。中国南部は米国産リンゴの主要な輸入地域であり、広東省の港で全体の60~70%の米国産リンゴが陸揚げされている。

レッドデリシャス、ガラ、グラニースミスが米国の主な品種であり、8月から3月まで販売されている。これら品種は中秋節、旧正月の贈答用として人気がある。頻繁に実施されるインショッププロモーションやアウトリーチ活動だけでなく、在中国の(米国農務省海外農業局)貿易事務所は、ワシントンリンゴ協会、米国リンゴ輸出会議と協力し、巨大オンラインショップ企業、中小の多くの電子商取引企業を通じて米国産リンゴをアピールしている。この活動を通じて協力関係が確立された企業によると、大規模小売業は常に米国産の新品種を求めているとのことだ。

## ナシ

米国産のナシは、中国市場で高い可能性を持っているが、中国産のナシ、他の輸入国(ベルギー、アルゼンチン、オランダ等)からの輸入品種と競合している。米国産ナシの主要な輸入港は、大連、広州、上海である。米国から輸入される3大品種は、Starkrimson、Red Anjou、Green Anjou である。これらは1級都市の高級スーパーで手に入れることができる。

業者によると、多くの小売業者(特に2級・3級都市)は米国産のナシの可能性、取扱い方法に関する知識が不十分だそうだ。在中国の貿易事務所は米国ナシ協会と協力し、新興市場においてアウトリーチ活動、セミナーを実施し、小売業者、貿易業者、消費者に対し、米国産品種の季節性、品質特性、取扱方法について普及活動を行っている。

## 生食ブドウ

米国産の生食ブドウは、8月から1月にかけ、全国の1級・2級・3級都市のスーパーや果実専門店で大変人気が高い。他の中国への輸出国はペルーとチリである。2016年には、約85%の米国産生食ブドウは南部中国の港(深圳、広州等)に陸揚げされた。

過去数カ年で、米国産の種子のあるレッドグローブは種無しのレッドグローブ、オータムロイヤル、トンプソン、クリムゾンに置き換わった。小売業者によると、この変化の理由は、消費者の高品質な種無しブドウに対する強いニーズに加え、米国産の種無しブドウは貿易業者にとって利幅が大きいためとのことである。

小売業者によると、輸入品の特性を前面に出したインストアの店頭販売促進活動により、売上が大幅に増加したことだ。また、中秋節や旧正月におけるプロモーション活動は効果的で、多くの消費者(特に1級都市)は高品質のプレミアム商品や新品種に対して高い購買意欲を示したという。在中国の貿易事務所は、カリフォルニア生食ブドウ協会、複数の国内小売チェーンと協力し、頻繁にインストアのプロモーション活動、教育セミナーを実施し、米国産ブドウが高品質であること、利用可能性が高いことをアピールしている。

中国のリンゴ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2015/15年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	2,328,000	2,324,000	2,320,000
販売生産量(トン)	42,600,000	43,900,000	44,500,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	42,600,000	43,900,000	44,500,000
輸入量(トン)	77,200	70,000	80,000
総供給量(トン)	42,677,200	43,970,000	44,580,000
国内生鮮仕向量(トン)	37,527,200	37,990,000	38,380,000
輸出量(トン)	1,150,000	1,380,000	1,200,000
加工仕向量(トン)	4,000,000	4,600,000	5,000,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	42,677,200	43,970,000	44,580,000

年産は7月-6月

中国のナシ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2015/15年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	1,124,000	1,113,000	1,110,000
販売生産量(トン)	18,700,000	18,700,000	19,000,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	18,700,000	18,700,000	19,000,000
輸入量(トン)	8,500	6,900	6,000
総供給量(トン)	18,708,500	18,706,900	19,006,000
国内生鮮仕向量(トン)	16,607,100	16,477,900	16,776,000
輸出量(トン)	401,400	509,000	480,000
加工仕向量(トン)	1,700,000	1,720,000	1,750,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	18,708,500	18,706,900	19,006,000

年産は7月-6月

中国のブドウ統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2015/15年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	800,000	810,000	812,000
販売生産量(トン)	10,000,000	10,800,000	11,200,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	10,000,000	10,800,000	11,200,000
輸入量(トン)	248,900	237,000	250,000
総供給量(トン)	10,248,900	11,037,000	11,450,000
国内生鮮仕向量(トン)	10,021,700	10,780,300	11,250,000
輸出量(トン)	227,200	256,700	200,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	10,248,900	11,037,000	11,450,000

年産は6月-5月

## 4.6. フロリダのカンキツ生産量予測はさらに減少

AMERICAFRUIT 電子版 (2017年11月13日)

フロリダ州のカンキツ業界は、連邦政府から緊急予算調達を検討しているところであるが、米国農務省は、ハリケーン・イルマによる被害がこれまでの予測よりも大きいとして、生産予測量を下方修正した。

米国農務省の新しい生産予測によると、2017/18年のカリフォルニア州のオレンジの生産量は5,000万箱で前年より27%減少するとしている。また、グレープフルーツは465万箱で、前年より40%減少するとしている。

フロリダ州カンキツ局事務局長によると、「残念なことだが、生産予測は今後さらに下方修正されると見込まれる。ハリケーン・イルマは、州のカンキツ産業に広範な被害をもたらし、生産者は困難な事態に対応している。強烈な風と豪雨による洪水で樹木を弱らせた。このため、果実を樹体に保持することが難しくなっている」と語っている。

「幸いにも、フロリダ州のカンキツ生産者は粘り強く勤勉な人達だ。これまで取り組んできたように、活路を見つけることだろう」と付け加えた。

フロリダの生産者の報告によると、ハリケーン・イルマが9月10日に上陸して以来、30~70%の果実が喪失したとしている。特に、南西部の地域では甚大な被害があった。

ハリケーンにより引き抜かれた樹もあり、最大3週間浸水した状態が続いた。このため、根系に大きなダメージをもたらした。

フロリダ州の農業・消費者局は、10月にハリケーン・イルマによる被害額を7.6億ドルと報告した。しかし、この数字は時期が遅くなるにつれて増加すると予想されている。

## 4.7. 世界のパインアップル市場

FreshPlaza 電子版 (2017年11月10日)



一般にパインアップルの価格は現在安く推移している。過去2カ年の高価格は過去のものとなっている。これは供給量が増加しているためである。中国市場が南米向けに解放されたが、まだ輸出量は多くない。新たにパインアップルを輸出する国が出現しており、間もなく世界市場へ向け輸出を開始する見込みだ。パインアップルのトレンドとしては、クラウンのないものの出荷、有機パインアップルが増加している。また、ブラジル産の赤色のパインアップルも市場に出ており次第に人気を得ている。

### コスタリカ

コスタリカは世界で有数のパインアップル供給国である。従来产品だけでなく、有機栽培のものクラウンのないものも輸出が進められている。数ヶ月前にニュースを賑わせたハリケーンや熱帯低気圧にもかかわらず、輸出が遅れたとか輸出量が減少したという影響はなかった。

ある会社ではクラウンのないパインアップルを世界の多地域に輸出する計画をもっており、年々輸出が増加している。スーパーでの皮を剥離する機械を改良することと合せ、クラウンのないパインアップルは消費を伸ばすものと考えている。

コスタリカの企業は効率的な生産を行う技術を持っており、ヘクタール当たりの収量も多い。また、国際市場で競争力を持つ上での良港も持っている。このため、ある企業によると、「コロンビアやエクアドルはコスタリカに追いつくことができない」と確信している。業界の中規模の会社では、欧州が主要な市場となっている。同時にロシア、トルコ、ルーマニアなどの東欧諸国へも輸出量を拡大している。

新たな挑戦は中国市場である。既に上海向けの直行輸出が行われている。成果を評価するには時間が必要だが、コスタリカにとって成功を認められる市場だと信じられている。

中国は国内の南部で多くのパインアップルを生産しているが、コスタリカにとって有望な市場だ。中国で生産される品種は、色や味もコスタリカ産のMD2ゴールデンパインアップルとは大きく異なる。コスタリカは、ここ数年、日本、韓国などにパインアップルの輸出を行ってきた。

中国市場ではフィリピン産と競合しているが、業者によると大きな問題ではないという。課題は、「いかに生

産量を拡大し供給量を多くするか」との話だ。現時点では米国向けと欧州向けの輸出はバランスがとられているそうだ。需要もそこそこで、価格も高い。このため、輸出業者としては、既存の市場(米国、欧州)に向けた生産も重要だとしている。生産量が更に増加すれば、アジア、中国市場向けの輸出を増加することができるを見ている。

なお、コスタリカのカルデラ港から上海までの輸送には25~28日間を要することから、中国市場における棚持ちは比較的短くなることに留意する必要がある。

## ドミニカ共和国

ドミニカ共和国では生産量が拡大しており、近い将来に生産量を倍増しようとしている会社もある。同国では生産条件が整っており、病害も少ない。国内には直接海外に通じる7つの国際空港を持ち、多数の港湾があり、労働力コストも高い競争力を持っている。

ある輸出業者によると、生産されるパインアップルは甘く、日持ちも良いため、海外で高い競争力があるとのことだ。多くの生産者は国内向けに販売を行っているが、少数の生産者は輸出認証を受け、新たな市場の開拓を進めている。

## ブラジルの赤いパインアップル

ブラジルの赤いパインアップルに対する需要は大きい。世界の輸入業者、卸売業者、小売業者はこのパインアップルを熱望している。世界の生産者も、この品種の試験栽培に関心を持っている。リオデジャネイロ州の農園で生産が進められているが、コスタリカやアジアの国でもこの品種を生産する可能性がある。

## アルゼンチン

アルゼンチンへのパインアップルの供給は主にエクアドルからである。アルゼンチンでの栽培面積は317haで生産量は12,100トンである。年間消費量は23,000トンであることから、残りはエクアドル、パラグアイ、ボリビア、ブラジルから輸入されている。

## キューバ

ハリケーン・イルマの影響で、シエゴ・デ・アビラにおける植栽が遅れた。しかし、外貨を獲得し、国内の経済力を強化するために輸出市場の開拓が進められている。シエゴ・デ・アビラでは2018年までに2,000haの栽培を計画しているが、既に1,459haでMD2とスペニッシュレッドの植栽が終わっている。スペイン、イタリア、フランスからの需要が高いため、欧州向けの輸出を拡大する計画である。

## ボリビア

グアラヨスの生産者は年間を通してパインアップルを生産することを計画している。同地では、新品種の植栽に取り組んでいる。自治体では、品質や食味を落とすことなく、早く熟成する新品種の植栽に向けて資金を投入している。

## ベルギー

ベルギーでは需要が強く、価格もかなり高い。輸入業者によると、気象の影響と大手企業が高価格を維持していることが原因だという。ベルギーでは輸入量の約半分はコスタリカ産である。

輸入業者によると、今週の価格は、コスタリカからの船の到着が遅れ、供給が少なくなったために価格が上昇しているそうだ。価格は1箱当たり9~10ユーロで取引されている。来週は2隻同時に入港することから、余剰が生じ、価格は1箱当たり6~7ユーロに下落すると見込まれる。

ベルギーではサイズ6から9までが一般的なサイズである。このうちサイズ7と8が最も人気が高い。ベルギーの小売業者はサイズ7の果実のカッティング機械が一般的であるため、サイズ7の価格が最も高い。サイズ8とサイズ7の価格差は0.75~1.25ユーロである。

## **オランダ**

2015年と2016年に得られた利益は2017年には期待できない。パインアップルに関する見通しは、今年は、これまでこの先も暗い。4月以降の需要は少なく、プロモーション活動も行われていない。過去2カ年の好調な消費は止まったようだ。8月には通常見られるような消費のブームがあつたが、商品が不足することもなく価格も上昇しなかつた。この期間、中国には大量の輸出があつたが、欧州市場には価格の上昇をもたらさなかつた。過去数ヶ月間、価格は原価を下回つたが、この先も年内は同じ状況が見込まれる。

自由市場での供給量は2週間前までは十分あつたが、今週に入ってスポット市場で出回る量は少ない。いくつかの輸入業者は最小限の取引契約を行つてゐるに過ぎない。残念なことに、自由市場の取扱量が少なくとも価格の上昇は見られず、コストをカバーできないでいる。現在、価格はサイズの大きいもので、品質とブランドにより異なるが5~6ユーロである。中小サイズ(サイズ8~10)は6.5~7.5ユーロで取引されているが、何れもコストをカバーできていない。全ての輸入業者は、今年の取引は赤字で終わると見込まれる。11月下旬から12月にかけては、価格は停滞し、動いたとしても8.5~9.5ユーロと見込まれる。今年は価格が10ユーロを超えることはない模様だ。

小規模輸入業者の活動が市場を乱している、と考えている業者もいる。しかし、好調だった年の後には、どのような果実であれ見受けられる現象である。2018年のキーワードは警戒と安定である。というのもコスタリカが増産を進めており、増加分が全て中国と米国に向けられるというわけにはいかないからだ。欧州は依然として最大の流通市場なのだ。

## **ドイツ**

ドイツ市場は、現在大部分がコスタリカ産のMD2で占められており、一部は南アフリカのビクトリア州産が流通している。しかし、南アフリカ産は空輸されており、数量は限られている。需要のピークは12月半ばと見込まれる。

スポット市場の価格は、現在1箱(12キロ)7.5ユーロである。通常の価格は若干高い1箱8ユーロであり、例年よりもわずかに安い。有機パインアップルの価格はかなり高く、1個4.4ユーロである。品質は一般的に満足できる状態であり、輸入業者は年末の休日に向け輸入量が増加することを期待している。

## **中国**

パインアップルは中国の輸入市場の中でも「熱い」果実の一つである。中国は、台湾、フィリピン、タイから輸入しているが、国内でも南部の海南で生産が行われている。今年は、コスタリカとマレーシアからの輸入が解禁された。台湾は中国市場への最大の供給国の一つであるが、昨年の台風の被害で生産量が10%減少した。特に高品質果実への影響が大きかつたために価格が高騰した。

コスタリカは7月初旬に初となる輸出を行つた。現時点では4社が輸出手会社として登録されている。コスタリカとしては、中国への輸入が解禁されても、現在の栽培面積である4.3万haが急速に拡大するものではないと考えている。しかし、季節的に見ると、1週あたり30コンテナで600トンに達した。しかし、輸送業者によるとこの数字は控えめだとのことだ。需要と供給がマッチしていないためである。中国のパインアップルの輸出市場は、今後3~4年以内に10億ドルに達すると見込まれている。

フィリピンのパインアップルは、甘い味と輸送期間が短いことから、輸入市場では人気がある。10月にはマレーシアからの輸入が解禁された。現在、3つの輸出手会社が中国への輸出の権利を獲得している。マレーシアの輸出量は、年間1.2万トン、960万ドルを予定しているが、2020年までには5,000万ドルに拡大することを見込んでいる。

## **米国**

現在、パインアップルの輸入量は昨年の同時期よりも増加している。コスタリカとメキシコが主な輸入先であるが、この他にもグアテマラ、パナマ、ホンジュラス、コロンビアからも輸入がある。ある輸入業者によると、現在の輸入はコスタリカカラが圧倒的に多く、消費者もコスタリカ産を好むために、他の国からの輸入を停止しているとのことだ。

10月に来襲したハリケーンにもかかわらず、収量には影響がなかった。ただし、内陸の道路が損壊し、輸送が遅れるという被害があった。しかし、通常の作業には影響は生じていない。

昨年に比べると、今年のパインアップルの価格は安い。昨年は入荷量が安定し、価格も適正な水準であったために、今年と単純に比較することはできない。今年はハリケーン・ハーベイがテキサス州に来襲し、メキシコ湾を航行していた果実運搬船が西海岸に迂回させられた。このため、通常以上に市場に果実が溢れ、これが数週間市場に留まっていたため、果実の品質は最高とは言えなかつた。こういった市場の混乱は未だに回復していない。今後3~4週間は市場流通量が減少することは見込めない。

## ガーナ

ガーナ北部のパインアップル業界は困難に直面している。市場には多くの競争相手があり、ひいては価格が引き下げられ、生産者、業者に厳しい状況をもたらしている。また、生産コストとともにパッケージや輸送コストも利益を圧迫している。販売価格は概ね3~3.5ユーロであるがパッケージだけで1ユーロのコストがかかるからだ。

ガーナは年間を通じてパインアップルを生産しており、欧州、北アフリカに輸出を行っている。現時点では北アフリカ市場は価格が安定している。輸出先は主にスイス、モロッコであり、前者は欧州市場への拠点、後者は北アフリカ市場への拠点となっている。

著者:Nichola Watson

## 48. 世界のリンゴ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年11月3日)



欧州は今年の気象により市場は大きな影響を受けている。霜害、雹害、熱波により生産量が減少したためである。さらに、果実のサイズが大きく、サイズの小さいものが不足している。しかし、結果的には全ての市場においてそれ程深刻な状況にはなっていない。オーストラリアは収穫時期にはまだ早いが、気象条件により悪影響があると見込まれる。米国の生産者は気象の影響を受けていない。ニューヨーク州では今シーズンに強い期待を持っている。インドでは消費者が様々な果皮の色の品種に親しみを増しており、市場の拡大が期待される。

### 欧州の生産量は減少

ポルトガルを除く全ての国で、過去の平均を下回る生産量である。ただし、いくつかの国では昨年よりも生産量が多い。今シーズンの生産量は920万トンであり、昨年よりも18%(209万トン)少ない。これは2007年以来最低の水準である。春先の霜害により生産量の減少を招いただけでなく、果皮への障害が発生し、外観が悪い果実が生産されている。東部及び南部の諸国では、霜害に続き7月には熱波による被害があった。イタリア、ポーランド、スペインでは雹害もあり、ハンガリーでは病害も記録された。

### イタリア: 生産量は少ないものの輸出対応は順調

生産量が少ないため、輸出に回る量は減少している。このため、生産量の大部分は国内市場に向けられている。しかし、輸出業者が暇というわけではない。ベトナムと台湾から、交渉中の輸出プロトコルを踏まえ、調査団が来訪した。また、中国もイタリアからのリンゴ輸入に関心を示している。さらに、韓国からの調査団の訪問も計画されている。

業者はシーズン後半には品薄となると考えており、これは価格に反映されると見ている。様々な輸出市場で貿易量が増加するのではないかとの報告もある。

### フランス: 9月の価格は上昇

10月1日に公表された生産予測によると、今シーズンの生産量は、不作であった昨年よりも4%減少し、平年収量よりも6%減少することだ。生育が早い南部では9月には収穫は終わろうとしている。夏果実の生産量が少なかったため、8月のリンゴの価格は堅調であった。新シーズンのリンゴが本格的に出荷される9月

には、昨年よりも価格が6%高く、平年よりも4%高い状態であった。

### **不足状態を利用しようとするスペイン**

スペインの生産者は欧州のリンゴ供給量の減少を好機ととらえている。自由市場では全ての品種で昨年の価格を10~20%上回っている。ただし、スーパーでの価格は変わっていない。グラニースミスには強い需要がある。ゴールデンデリシャスは既に売り尽くされており、イタリアからの輸入品に対して高い価格が付けられている。加工業界でもリンゴの不足から高値で取引されている。業者は国内市場よりも海外に目を向けており、「今年はカナダ市場に進出したい。インド市場にも参入する考えだ。中東、北アフリカ市場へも拡大したい」と考えている。他国と異なり、スペイン産のリンゴは国内市場では需要が少ない。国内で消費されるリンゴの半分は輸入されており、イタリア、フランスが主な輸入先である。

### **ベルギー：収量は少ないが食味は良好**

収量は昨年よりも20~30%少ない(訳注:世界リンゴ・ナシ協会の予測では前年より68%減少すると公表している)。これは春先の霜害によるものである。特徴的なことは、ジョナゴールドの方がゴールデンデリシャスよりも大きな影響を受けていることだ。今年は他国への輸出余力がないことから、生産地から半径500km以内に出荷が留まっている。

現在、価格はキロ当たり0.8ユーロから1ユーロ強の水準である。しかし、この水準では生産コストを十分に満たすことができず、1.5~1.8ユーロの水準が望まれる。業者によると、今後数ヶ月で価格は上昇するとしている。生産量は少ないものの、果実の食味は良好である。これは、収穫前の数週間で日照が多くかったためであり、果実の肥大も昨年よりは良い。

### **ドイツでは国産が好まれる**

ドイツの国内市場では国産リンゴが出回っている。特に、ボスクープ、エルスター、ジョナゴールドである。消費者からはコックスオレンジ、ロイヤルガラの需要が強い。イタリアから輸入されているものは、ロイヤルガラとゴールデンデリシャスである。フランスからはグラニースミス、ブレイバーンが輸入されている。ここ数日でハンガリーからもフランクフルト地域に輸入があった。品種はPinova、ジョナゴールド、Red Jonaprinzである。

輸入量が少ないとから、価格は先週と同様に高い水準で安定している。ミュンヘンに限っては、原産地にかかるわらず幾つかの品種では価格が低下している。現在の価格は、ボスクープが100キロ当たり129ユーロである。一方、最も価格が高いのは、フランスから輸入されるジャズで、202~208ユーロである。

### **英国では果実サイズが大きい**

4月の霜害により多くの果実が失われたため、残った果実のサイズは大きく、小さいサイズの果実が不足している。今シーズンは例年よりも1~2週間早く始まった。スーパーでは6個入のパックが多く販売されている。しかし、果実が大きいためパックするのに問題が生じている。業者によると、「欧州大陸からゴールデンデリシャス、グラニースミス、ピンクレディーが輸入されているが、同様に果実サイズが大きいという課題がある」とのことだ。このため、果実サイズの小さいものは、価格が上昇すると見込まれる。英国ではブレイバーンの収穫は終わっていないが、コックスオレンジ、ガラの収穫は終了した。果実サイズが大きいことから、中東への輸出の可能性もある。

### **ウクライナ：欧州の不作で利益**

ウクライナの業者は欧州各国からクラス1のレベルの果実の需要が強いことを承知している。しかし、全ての果実でこのクラスの要求を満たすことができないため、輸出の拡大は妨げられている。業者によると、収穫物の約半分しかクラス1ではないとのことだ。加えて、ウクライナでも霜害と雹害により生産量に影響があった。

輸出業者によると、オランダ、英国、チェコ、バルト諸国との間で取引があるそうだ。品種はグラニースミス、ふじ、ピノヴァ、ブレイバーン、ゴールデンデリシャスである。輸出業者によると、アジアからの需要もあるそうだが、現在は協定が締結されていないため輸出はできないとのことだ。価格は徐々に上昇しており、9月時

点のキロ当たり0.44ユーロから現在は0.48ユーロである。

### **心配はしていないポーランド**

ポーランドの生産量は前年よりも23%減少する見込みであるが、業者は輸出義務を果たせると述べている。キプロス、ギリシャなどの既存の市場ではポーランド産のリンゴを引受けてくれる見込みだ。加えて、フランスはポーランド産のロイヤルガラに対して関心を持っているようだ。業者によると、今シーズンはロイヤルガラに関しては不足が生じないとのことだ。ただ、シーズン後半になるとアイダレッド、ジョナゴールド、プリンスに関しては不足の可能性がある。

### **米国：販売に積極的ムード**

ワシントン州では良好なシーズンを迎えると報告されている。ハニークリスピは栽培面積が増加し、生産量も拡大している。このため、翌年の8月まで市場に出回る量があるだろうと予測されている。有機リンゴの重要性も益々高まっており、生産が増加する見込みだ。

ニューヨーク州では昨年よりも生産量が増加する。「昨年は干ばつのため生産量が少なかった。しかし、今年は状況が逆転している」と業者は語っている。10月の予測では、生産量は20%増加する見込みだ。

ミシガン州では政府の移民、移民労働者に関する政策に懸念を持っている。メキシコ国境に壁を建設するという計画がある中で、労働者の確保が困難になっているからだ。収穫労働力がなければ何百万ドルという損害が生じてしまう。今年の移民の雇用は45,000人であった。

### **オーストラリア：減産の見込み**

当初は生産量が増加すると予測されていた。しかし、一部地域では春の天候は低温で湿潤であった。夏には日焼けの発生も見込まれるため、生産量が前年よりも下回るのではないかと考えられる。品質が良く量が少ないにもかかわらず、クラス1の価格は昨年を下回る予想だ。

### **インドでは赤色のリンゴに馴染み**

業者は輸入リンゴに期待している。カシミール地方では国産リンゴが多く生産されているが、今年は雹の被害があった。消費者は次第に様々な品種や色のリンゴに慣れてきている。インドでは伝統的に赤色のリンゴに馴染みがあったが、次第に変化しているようだ。業者は輸入のルールを調整し、尊重すべきだと考えている。というのも偽の原産地を表示したリンゴが市場に多く出回っているからだ。

### **南アフリカ：継続する干ばつが最大の問題**

現在は生育の初期で、着果の時期であるが、重要な時期でもある。西ケープ州、東ケープ州では干ばつが継続している。生産者の中には、貴重な灌漑水を有効に活用するため、一部の園地を放棄するものも見られる。収穫は来年の1月からが始まるので、現時点での予測をするには時期尚早である。

著者:Rudolf Mulderij

## 4.9. 台湾の落葉果樹(リンゴ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年11月6日公表)

### 生産

台湾のリンゴ生産量は無視できるほど少なく、需要の大部分は輸入により賄われている。2017年のリンゴ生産量は1,500トンで、天候に恵まれたことから前年を若干上回った。2016/17年の栽培面積は204haである。台湾は亜熱帯に位置していることから、産地は限られており、高地で栽培されるだけである。気象条件に加え、輸入品との競合はもとより、労働コスト、輸送コストが高いことが国内での生産の足かせとなっている。国内産は需要量の1%に満たない。

### 消費

ふじが最も人気がある品種で、輸入リンゴの85%以上を占めている。一般に、大部分の輸入業者は、品質が良く、競争力のある品種が登場し、ふじに置換わると認めるまではふじの輸入を続けると思われる。米国、チリ、ニュージーランドは、台湾市場にふじ及び従来型の品種の輸出を続けている。しかし、近年、日本、ニュージーランド、米国はふじ以外の品種の輸出を始めている。その他の品種とは、オーロラ、グラニースミス、ガラ、ピンクレディー、アンブロージア、レッド&ゴールデンデリシャス等である。

### 貿易

2016/17年においては、台湾は米国にとって第3番目に大きい輸出市場である。2016/17年の台湾のリンゴ輸入量は16.8万トンであった。台湾の最大の輸入先は米国であり、そのシェアは36%である。次いでチリ(31%)、ニュージーランド(14.6%)、日本(12%)、南アフリカ(6%)の順である。2017/18年の米国の輸出量は6万トンと予測される。これは、リンゴの主産地で台湾向け輸出が全米の90~95%を占めるワシントン州の供給が安定しているためである。同年の台湾全体の輸入量は16.9万トンと推測される。

台湾のリンゴ輸入量

	リンゴ輸入量合計		うち米国からの輸入量		米国の シェア(%)
	トン	百万ドル	トン	百万ドル	
2014/15	156,007	238	64,264	78	41
2015/16	169,054	265	53,883	70	31
2016/17	168,109	265	59,939	85	36

輸入業者は供給者に関して幅広い選択肢を持っている(ただし、中国本土は検疫上の理由から輸入できない)。供給国が意欲的なプロモーション活動を行い、消費者を惹きつけるための予算を持っていることを考えると、市場におけるシェアの変動は、価格、品質、将来の可能性よってもたらされると考えられる。チリは米国に次ぐ第2の輸出国であるが、徐々にシェアを拡大している(2015/16年の26%から2016/17年には31%)。これは、主に価格競争力があること、チリ産果実を輸入する業者の間でチリに対する親近感が増していることが理由である。一方、日本はトキのようなニッチな品種を市場に投入し、プレミアムイメージを維持することで、高価格を維持し、成功を納めている。しかし、日本の輸入量は2015/16年から2016/17年にかけて27%減少した。主な理由は、福島原発事故による放射能汚染の可能性がある地域からの輸入食品に対する一般的な懸念からと考えられる。



## マーケティング

伝統的な市場、果実専門店、ハイパーマーケット、スーパーがリンゴの販売の主要なルートである。小売チェーンでは、米国産のリンゴの販売促進のための定期的なプロモーション活動を行い、消費者を惹きつけるために伝統的な市場よりも安い価格で販売することもある。しかし、伝統的な市場は、お年寄りや低所得者層にとって依然として人気が多く、生鮮果実の販売に当たり引き続き大きな役割を果たすと考えられる。また、ホームショッピング、E-コマース、テレビ・インターネットショッピングのような店舗を持たない販売方式も人気が始まっている。業者はテレビ・インターネットショッピング、ウェブサイト、その他 E-コマースの拡大のために投資を行っている。



左:E-コマースで日本の陸奥を6個(2.2kg)1,750台湾ドルで販売している。

右:ウェブサイトでニュージーランド産の有機栽培ふじ4.3-4.5kg入の箱を1,350台湾ドルで販売している。

## 流通経路

果実は大部分が生鮮で消費されている。年間を通じたリンゴの供給により、台湾の消費者は定期的にリンゴを消費する習慣を身につけている。販売量は着実に増加しており、間もなく成熟に達すると見込まれる。とはいえ、今後数年間は適度な市場の拡大が見込まれる。その際、供給国による厳しい価格競争により、販売価格の下落が見込まれる。ただ一つの例外は贈答用の市場であり、ここでは日本が占有し、高価格で販売を行っている。しかし、一般的なリンゴの消費に際しては、消費者は価格に敏感である。このため、米国産リンゴのシェアを維持するためには、たゆまぬプロモーション活動が必要であり、消費者に米国産リンゴに対する親しみを抱かせ、栄養面で優れていることをアピールする必要がある。

左:日本産のトキは高級スーパーにおいて2個288台湾ドルで販売されている。

右:日本産のリンゴは贈答用に販売されている。



## 検疫要件

台湾への輸出に当たっては、米国農務省動植物検疫局(APHIS)が発行する「病虫害がない」とする検疫証明が必要である。加えて、台湾当局によって「米国産リンゴの輸入検疫要件」に合致することを通関地から業者に渡る前に確認することが必要とされている。

## 50. チリの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年11月6日公表)

### <リンゴ>

#### 生産

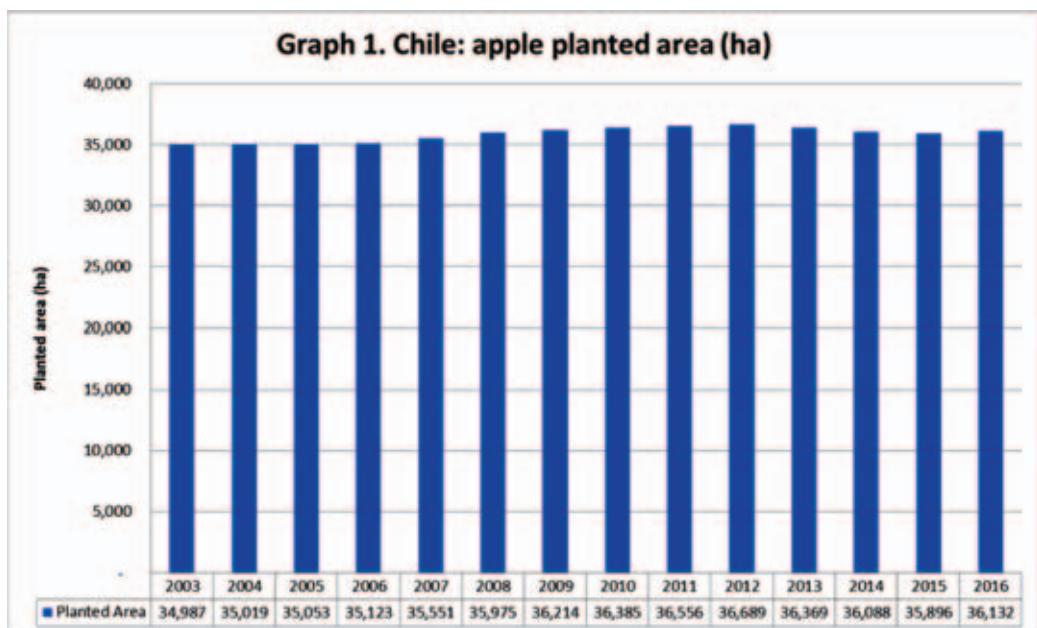
2016/17年(2017年1月から12月)のリンゴの栽培面積は36,132haであり、過去10年は約36,000haで推移している。栽培面積の86%をチリの中南部に位置するマウレ州、オイギンス州が占め、それぞれ22,015ha、9,155haである。マウレ州は2003年から2016年までに面積は0.5%増加し、オイギンス州では0.8%面積が減少している。南部のラ・アラウカニア州、ビオビオ州ではこの間に面積が5.3%、0.8%増加している。

チリではオイギンス州から南部の州に産地が移動している。これは、南部で灌漑用水が利用可能となったこと、全般に平均気温が上昇していること、南部で降水量が減少しているためである。これの理由から以前は生産が不可能であった南部地域で生産が可能となった。加えて、オイギンス州では収益性の高いサクランボ、クルミの生産にシフトしていることも理由の一つである。

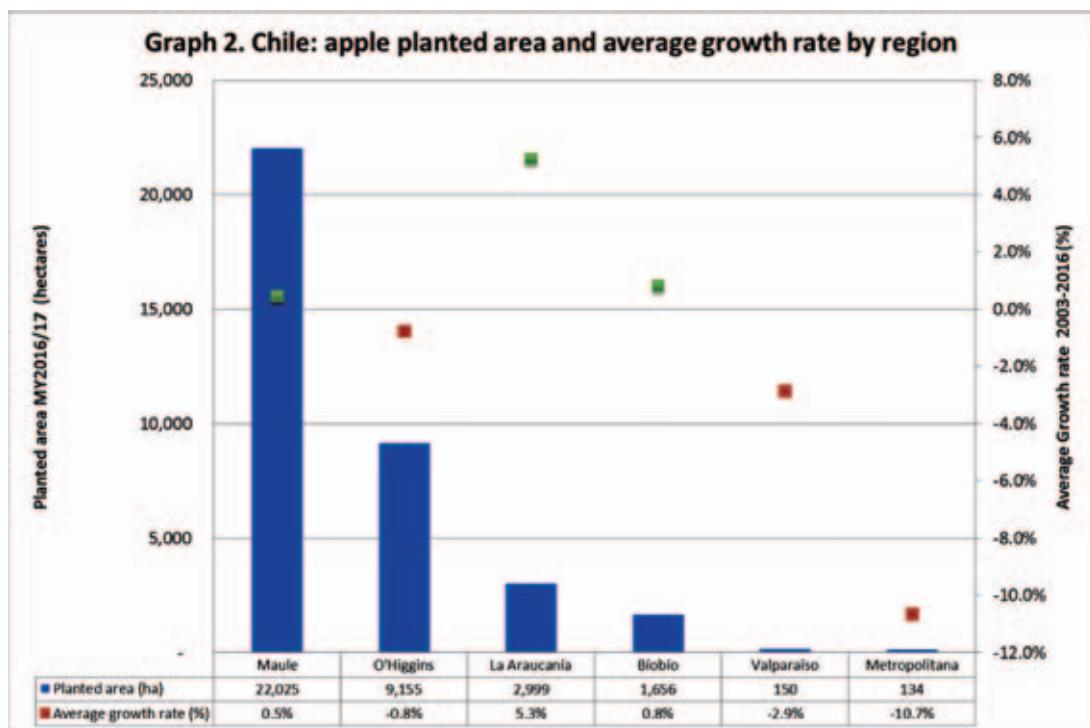
チリのリンゴ業界における課題は、老木園から生産性が高く輸出に有利な(高い冷蔵保存性を有する)新品种に転換し、品質(色、味、果実の大きさ、固さ)を向上させることである。

2017/18年はこれまでのところ気象条件に恵まれている。適度な降雨があったため灌漑用水が十分確保されており、冬期の低温も十分であった。春の気象条件も果実の生育にとって良好であるが、夏は乾燥して温度が高くなると見込まれる。これら気象条件を勘案すると、(販売)生産量は4%増加し、135万トンになると予測される。

チリのリンゴ栽培面積の推移(単位:ha)



### チリの州別リンゴ栽培面積と2003年から2016年までの増減率



### 消費

生産量の60%が輸出に向けられていると推測される。一般に輸出規格に合致しない(大きさ、色)果実は加工産業や国内消費に剥けられるが、安い価格で取引されている。

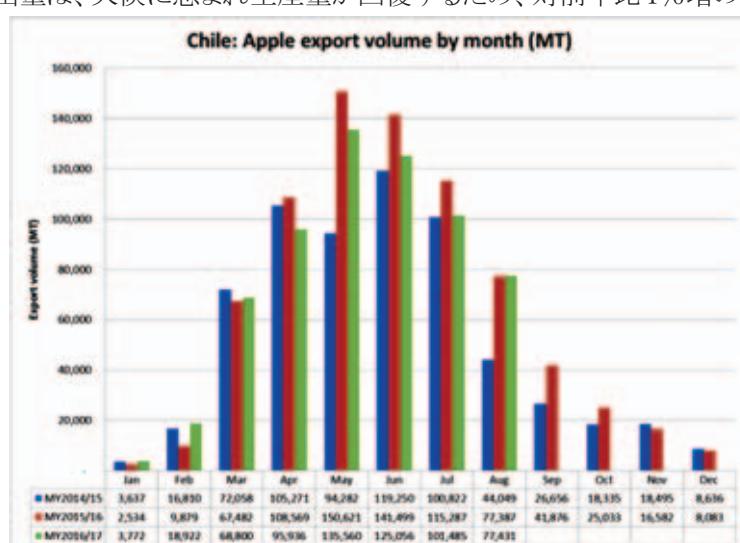
2017/18年の国内生鮮消費量は26万トンと推測され、一人当たりの年間消費量は14kgである。なお、チリの人口は2017年現在で18,373,917人である。

### 貿易

2015/16年の輸出量は764,883トンで、前年を22%上回った。チリの輸出先は多様であり、第1位は米国で14%を占めている。次いでコロンビア(9%)、台湾(8%)と続いている。

2016/17年(1月～8月)の輸出量は626,961トンで、前年同期を7%下回った。米国向け輸出が17%下回ったが、コロンビア、台湾向け輸出はそれぞれ4%、5%上回った。2016/17年の最終的な輸出量は75万トンに達すると見込まれる。

2017/18年の輸出量は、天候に恵まれ生産量が回復するため、対前年比4%増の78万トンと推測される。



輸出国	リンゴの輸出量			対前年比
	輸出量(トン) 2015/16	2016/17	構成比	
合計	673,259	626,961	100%	-7%
米国	104,935	87,230	14%	-17%
コロンビア	56,483	58,652	9%	4%
台湾	49,353	52,029	8%	5%
サウジアラビア	45,536	44,968	7%	-1%
オランダ	45,977	38,504	6%	-16%
ペルー	34,361	36,640	6%	7%
エクアドル	29,335	34,898	6%	19%
英国	26,808	27,970	4%	4%
ロシア	20,592	26,702	4%	30%
インド	32,189	24,102	4%	-25%
その他	227,690	195,266	31%	-14%
輸出国	輸出量(トン)			対前年比
	2014/15	2015/16	構成比	
合計	628,301	764,833	100%	22%
米国	78,290	105,039	14%	34%
ブラジル	35,820	86,261	11%	141%
コロンビア	75,593	76,392	10%	1%
台湾	39,332	49,899	7%	27%
ペルー	43,715	47,894	6%	10%
サウジアラビア	39,981	47,075	6%	18%
オランダ	42,943	46,164	6%	8%
エクアドル	41,348	37,898	5%	-8%
インド	19,997	32,189	4%	61%
英国	25,373	27,150	4%	7%
その他	185,909	208,872	27%	12%

2016/17の1月-8月は2017年1月-2017年8月を意味する。

#### チリのリンゴ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	35,896	36,132	36,000
収穫面積(ha)	33,400	33,600	33,500
結果樹数(千本)	38,900	39,000	38,950
未結果樹数(千本)	2,800	2,800	2,800
果樹数合計(千本)	41,700	41,800	41,750
販売生産量(千トン)	1,325,000	1,300,000	1,350,000
非販売生産量(トン)	10,000	10,000	10,000
生産量計(トン)	1,335,000	1,310,000	1,360,000
輸入量(トン)	2,014	2,000	1,000
総供給量(トン)	1,337,014	1,312,000	1,361,000
国内生鮮仕向量(トン)	252,131	255,000	260,000
輸出量(トン)	764,883	750,000	780,000
加工仕向量(トン)	320,000	307,000	321,000
総出荷量(トン)	1,337,014	1,312,000	1,361,000

年産は翌年1月-12月

### <生食ブドウ>

#### 生産

生食ブドウの栽培面積は、2008/09年以来減少を続けている。とはいものの、2018/17年の栽培面積は47,084haであり、チリの果樹の中では最も面積が大きい。

主産地はチリ中部のオイギンス州、バルパライソ州、首都圏州と早生品種を生産する北部のコキンボ州、アタカマ州である。オイギンス州、首都圏州、コキンボ州では、2003年から2016年にかけて栽培面積が減少しているが、アタカマ州、バルパライソ州では面積の変動はない。

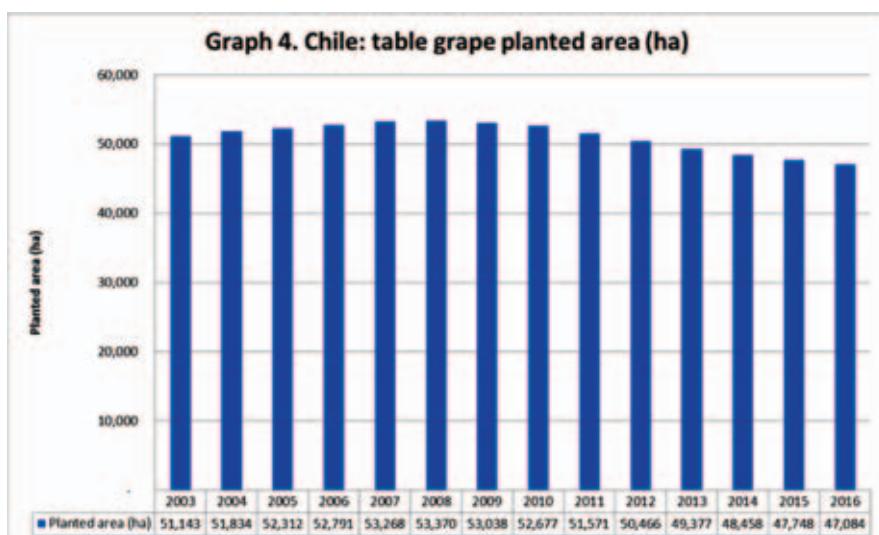
2016/17年には北部2州の生食ブドウは、収穫時期が早くなり他国との競合があつたために価格が低下した。コキンボ州では他に転換できる果樹がないため、栽培面積は7,743haと変動はないが、コキンボ州ではクレミ、オリーブ等、他の果樹へ転換が可能であることから、栽培面積は7,921haに減少している。オイギンス州、首都圏州では、クレミ、サクランボ、ナシ等の果樹への転換が見られる。

2016/17年の生産量は、高温に恵まれ、春から夏にかけて生育が進んだことから、前年を7.5%上回る91.1万トンであった。

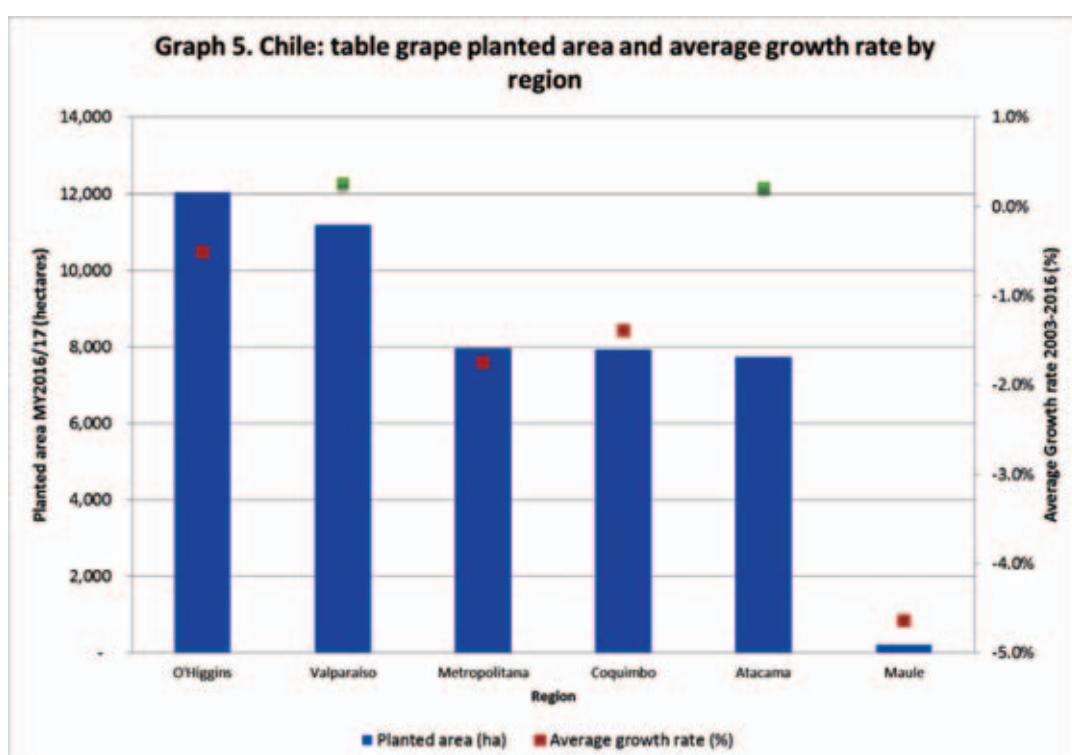
2017/18年は通常の気象条件であるため、収穫時期及び収量は平年並みと見込まれる。このため、栽培

面積の減少で若干の減少要因はあるものの、(販売)生産量は横ばいの91.5万トンと予測される。

チリの生食ブドウ栽培面積の推移(単位:ha)



チリの州別生食ブドウ栽培面積と2003年から2016年までの増減率



## 消費

生食ブドウの生産量の80%は輸出向けと見込まれ、残りが国内で消費される。2017/18年の国内消費量は18.7万トンと推計され、一人当たりの消費量は10.2kgである。

## 貿易

最大の輸出先は米国であり、2016/17年には輸出量の47%のシェアを占め、前年よりも10%増加した。生食ブドウ全体の輸出量は、2016/17年に731,156トンを記録し、前年よりも6%増加した。

第2の輸出先は中国であり、13%のシェアを占めている。しかし、2016/17年には前年よりも19%減少了。中国への果実輸出には30日間を要し、米国向け輸出の14日に比べると大幅に長い。2016/17年の夏

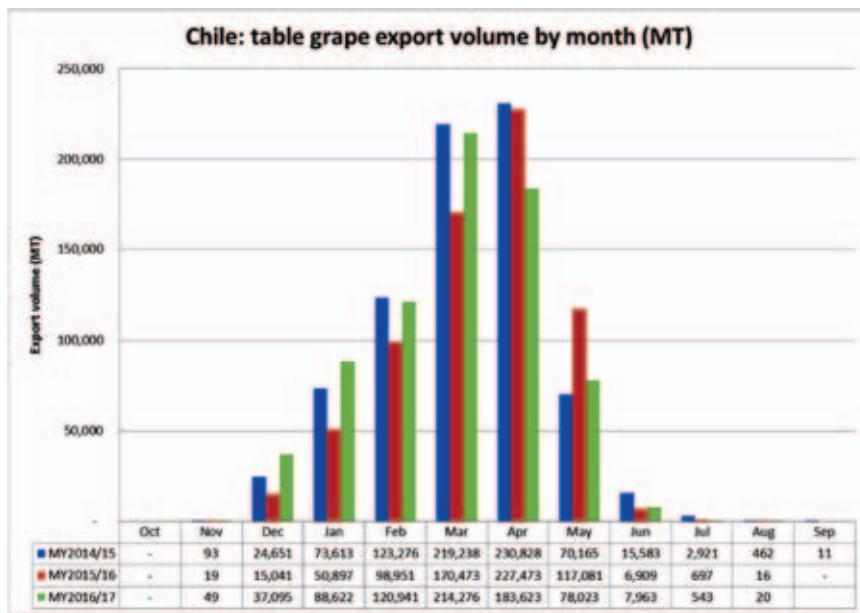
は高温で経過したため、果実の品質に悪影響が生じた。このため、中国が要求する輸出基準に合致した量が少なくなったことが輸出量の減少につながった。生食ブドウの輸出は、通常4月がピークであるが、2016/17年は高温のため収穫時期が早まり、3月がピークとなった。

第3の輸出先はオランダである。2016/17年には全体の6%のシェアを占め、前年よりも4%増加した。

2017/18年の輸出量は、生産見込量を踏まえ、前年と同程度の73.3万トンと推測される。

輸出国	生食ブドウの輸出量			対前年比
	輸出量(トン)10月-8月		構成比	
	2015/16	2016/17		
合計	687,559	731,156	100%	6%
米国	314,221	344,180	47%	10%
中国	120,259	97,334	13%	-19%
オランダ	43,806	45,728	6%	4%
韓国	33,857	34,343	5%	1%
英国	30,466	31,546	4%	4%
ブラジル	18,446	18,505	3%	0%
カナダ	13,132	17,527	2%	33%
ロシア	11,937	15,218	2%	27%
メキシコ	12,986	14,381	2%	11%
日本	9,255	10,526	1%	14%
その他	79,194	101,868	14%	29%
輸出国	輸出量(トン)			対前年比
	2014/15	2015/16	構成比	
合計	760,841	687,559	100%	-10%
米国	355,846	314,221	46%	-12%
中国	90,201	120,259	17%	33%
オランダ	61,163	43,806	6%	-28%
韓国	50,630	33,857	5%	-33%
英国	37,136	30,466	4%	-18%
ブラジル	24,583	18,446	3%	-25%
ロシア	16,456	11,937	2%	-27%
メキシコ	17,236	12,986	2%	-25%
カナダ	14,169	13,132	2%	-7%
日本	10,778	9,255	1%	-14%
その他	82,643	79,194	12%	-4%

2016/17の10月-8月は2016年10月-2017年8月を意味する。



チリの生食ブドウ統計(在チリ 米国農務省 農務官)	2015/6年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	47,784	47,084	47,000
収穫面積(ha)	47,200	46,100	46,000
販売生産量(トン)	847,800	911,000	915,000
非販売生産量(トン)	20,000	4,806	4,650
生産量計(トン)	867,800	915,806	919,650
輸入量(トン)	341	350	350
総供給量(トン)	868,141	916,156	920,000
国内生鮮仕向量(トン)	180,541	185,000	187,000
輸出量(トン)	687,600	731,156	733,000
総出荷量(トン)	868,141	916,156	920,000

年産は10月—翌年9月

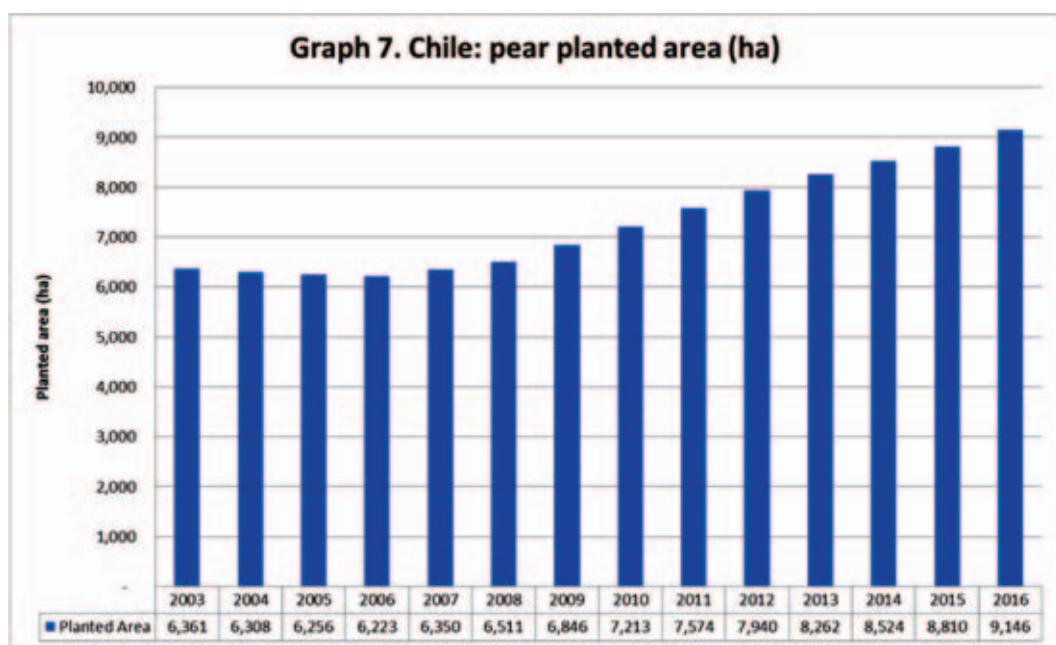
## <ナシ>

### 生産

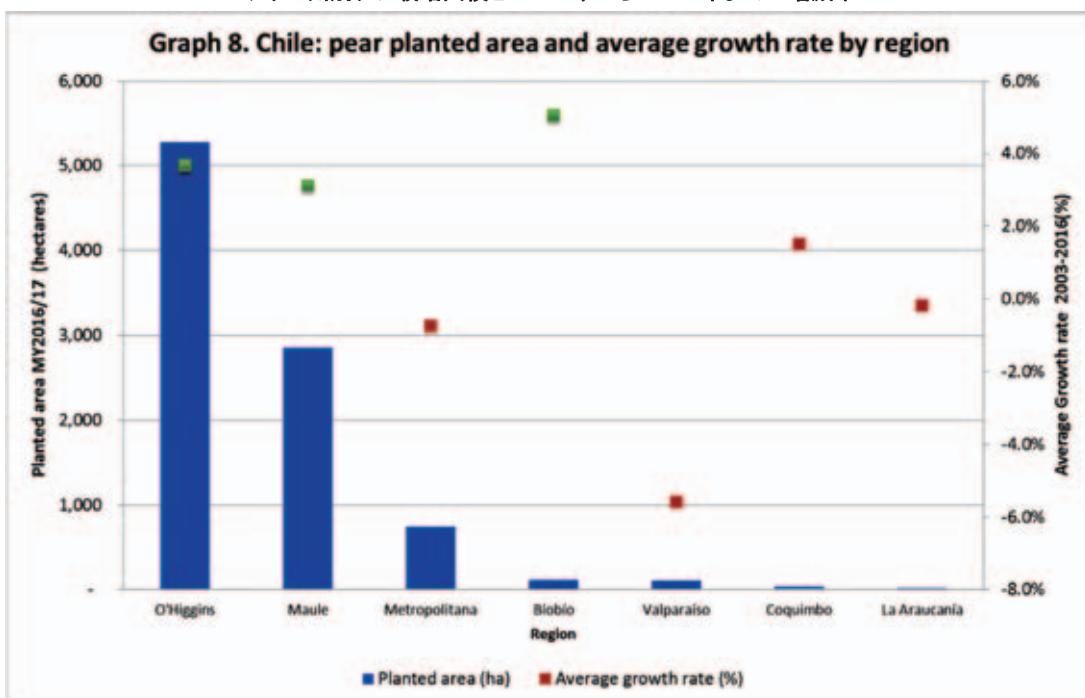
2016/17年のナシの栽培面積は9,146ha で、過去10年間は毎年4%ずつ増加している。主産地はオイギンス州、マウレ州で、2016/17年の全国の栽培面積に占める割合は58%、31%である。両州とも2003年から2016年の間に栽培面積が増加している。とはいえ、収益性の高いナシの品種の導入が難しいことから、価格は低迷しており、生産と輸出が低迷する原因となっている。

品種 Packam's triumph が最も栽培面積の多い品種であるが、収益をあげるために新たな品種の栽培や試験が進められている。これら品種には Abate Fetel、Forelle、Coscia などがある。しかし、これまでのところ劇的に収益をあげる品種は見つかっていない。

チリのナシ栽培面積の推移(単位:ha)



### チリの州別ナシ栽培面積と2003年から2016年までの増減率



### 消費

来年も国内消費が劇的に増加するとは考えにくい。国内で最も人気がある品種は Packam's triumph であり、その他の Abate Fetel のような品種は好まれていない。2017/18年の国内消費量は84,600トンで一人当たり消費量は4.6kgと推測される。

### 貿易

チリのナシの主な輸出先はEUであり、2016/17年には19%がオランダに、11%がイタリアに輸出された。輸出市場では、チリ産は、アルゼンチン産、南アフリカ産、欧州産と競合している。これは新技術の導入により、収穫後の出荷期間が延長されたためである。

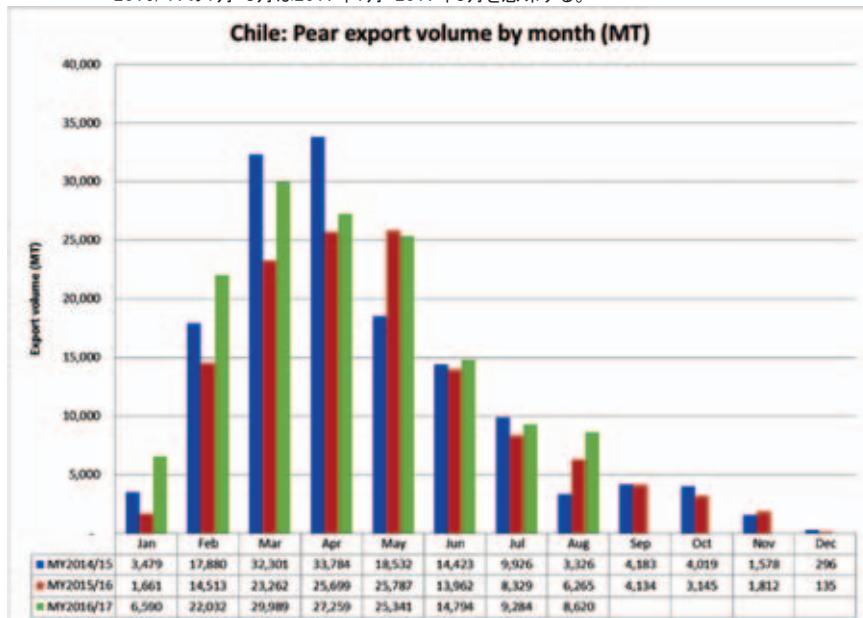
コロンビアは第2の輸出先で、2016/17年には13%のシェアを占めている。ロシアでは Abate Fetel の輸出に成功しており、2016/17年には12,938トンが輸出された。中国は将来の有望な市場と見込まれる。カナダも近い将来有望な市場となると見られる。

2017/18年の輸出量は、前年を3.3%上回る155,000トンと予測される。これは新植園が結果樹齢に達することと、これまでのところ気象条件に恵まれているためである。

なお、チリ政府は中国の市場開放に向けた交渉を2017年2月に開始した。

輸出国	ナシの輸出量			対前年比	
	輸出量(トン) 1月-8月		構成比		
	2015/16	2016/17			
合計	119,476	143,907	100%	20%	
オランダ	21,065	27,273	19%	29%	
コロンビア	16,864	18,785	13%	11%	
イタリア	13,814	15,616	11%	13%	
ペルー	10,915	14,161	10%	30%	
ロシア	6,260	12,938	9%	107%	
米国	13,896	12,638	9%	-9%	
エクアドル	7,560	10,767	7%	42%	
ドイツ	4,032	6,204	4%	54%	
スペイン	2,016	4,280	3%	112%	
ブラジル	2,758	3,951	3%	43%	
その他	20,296	17,294	12%	-15%	
輸出国	輸出量(トン)			対前年比	
	2014/15	2015/16	構成比		
	143,726	128,703	100%	-10%	
合計	26,676	21,065	16%	-21%	
オランダ	22,214	20,875	16%	-6%	
コロンビア	19,025	13,896	11%	-27%	
イタリア	16,725	13,814	11%	-17%	
ペルー	11,311	13,303	10%	18%	
エクアドル	9,580	8,981	7%	-6%	
ロシア	6,763	6,400	5%	-5%	
ドイツ	3,819	4,032	3%	6%	
ブラジル	4,258	3,047	2%	-28%	
サウジアラビア	3,156	3,027	2%	-4%	
その他	20,199	20,263	16%	0%	

2016/17の1月-8月は2017年1月-2017年8月を意味する。



チリのナシ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	8,810	9,146	9,300
収穫面積(ha)	7,400	7,900	8,200
結果樹数(千本)	7,770	8,295	8,610
未結果樹数(千本)	1,480	1,308	1,155
果樹数合計(千本)	9,250	9,603	9,765
販売生産量(千トン)	265,000	288,000	294,000
非販売生産量(トン)	2,000	2,000	2,000
生産量計(トン)	267,000	290,000	296,000
輸入量(トン)	600	600	600
総供給量(トン)	267,600	290,600	296,600
国内生鮮仕向量(トン)	83,200	84,000	84,600
輸出量(トン)	128,703	150,000	155,000
加工仕向量(トン)	55,700	56,600	57,000
総出荷量(トン)	267,603	290,600	296,600

年産は翌年1月-12月

# 5.1. ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ、ナシ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年11月2日公表)

## 概要

2016/17年(2017年1月から12月まで)のリンゴ・ナシの生産量等は、5月の報告(2017年5月18日公表:以下同じ)で示した高収量で過去最高の輸出量を見込んだ予測よりも少なくなる見通しだ。これは5月の報告では、自然落果が大幅に発生したことを見通せなかつたためである。この結果、リンゴ・ナシの生産量は554,940トンで、5月報告より5.5%少なく、前年よりも1.4%少なくなる。

この気象に関連した減収により、輸出量も減少し、2016/17年のリンゴ・ナシ輸出量は340,700トンとなり、5月報告より13%下回り、前年よりも3%下回る。

これにより、2016/17年のアジア向け輸出の増加速度は数量的にも輸出に占める割合も失速した。欧州市場で価格が回復したことにより、アジア向け輸出の一部が欧州に向けられたためでもある。しかし、長期的に見ると、アジア向け輸出が増加していることには変わりない。過去4カ年で新植された品種は、アジア市場が好むものであり、輸出は継続して増加する見込みである。

生産者の収益は10%近く減少した模様である。しかし、業界としては依然として収益率が高いことから、明るい将来を展望している。年間250~300haが新植され、改植により品種転換も進んでいる。

現在、2017/18年(2018年1月から12月)に焦点が移行しているが、リンゴ・ナシの生産量は586,000haと前年を6%上回ると予測される。栽培面積が増加していることと春までの天候が良好であったことによる。生産増を受け、2017/18年の輸出量は、前年を12%上回る380,150トンと予測される。

## 栽培面積

### リンゴ

当職(在ニュージーランド米国農務官)の見積もりでは、2016/17年のリンゴ栽培面積は9,600haと前年を4.3%上回り、2017/18年は9,825haに増加すると見込まれる。毎年、250~300haが増加する傾向があり、既存の果樹園も新品種への改植が進んでいる。2020年までには、栽培面積は10,500haから11,000haに増加すると見込まれる。過去5~6年続いた、着色系のロイヤルガラ、新系統のふじ、パシフィッククイーン、エンヴィの植栽は今後も続くと見込まれる。加えて、その他品種に分類されている新品種は、10年前には4%であったが、現在は10%に増加している。このように、近年は品種の多様化とロキットやハニークリスピに代表される知的所有権に保護された品種の増加が見られる。

### ニュージーランドにおける品種別栽培面積の推移(ha)

収穫年(暦年)	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
フレイバーン	2,246	2,034	1,869	1,740	1,589	1,504	1,381	1,352	1,303	1,239
コックス	295	281	248	236	203	178	150	134	121	111
クリップシンク/ピンクレディー	285	353	397	434	446	459	443	461	523	562
エン・ヴィ			88	174	272	285	315	346	416	544
ふじ	829	899	931	970	934	906	832	837	858	831
グラニースミス	286	282	267	256	256	246	240	219	233	231
ジャズ	768	917	977	983	943	905	869	855	825	821
パシフィックビューティー	162	149	135	127	120	113	92	84	83	71
パシフィッククイーン	212	220	263	291	351	456	622	730	827	878
パシフィックローズ	454	424	416	399	396	390	379	364	365	342
パシフィック小計	828	793	814	817	867	959	1,093	1,178	1,275	1,291
ロイヤルガラ及び関連系統	2,669	2,538	2,417	2,423	2,369	2,386	2,337	2,410	2,549	2,604
その他品種	332	389	421	376	385	484	709	790	707	930
リンゴ合計	8,538	8,486	8,429	8,409	8,264	8,312	8,369	8,582	8,810	9,164
ナシ合計	412	412	429	473	441	448	403	407	403	371
落葉果樹未登録分							383	320	413	465
落葉果樹合計	8,950	8,898	8,858	8,882	8,705	8,760	9,155	9,309	9,626	10,000
フレイバーンの割合	26.30%	24.00%	22.20%	20.70%	19.20%	18.10%	16.50%	15.80%	14.80%	13.50%
ロイヤルガラの割合	31.30%	29.90%	28.70%	28.80%	28.70%	28.70%	27.90%	28.10%	28.90%	28.40%

### ナシ

ナシの栽培面積は比較的安定しているようであるが、2016/17年の面積は400haで、前年を4.8%下回

る見込みだ。収穫面積は371ha で前年を8%下回る見込みだ。2017/18年の栽培面積は、前年と同じ400ha で収穫面積は若干増の375ha と予測される。ナシの面積の減少は2011年から継続しており、その理由は、リンゴの収益性が高いからである。

### リンゴの生産

2016/17年の生産量は542,400トンで、前年よりも1.2%少なく、5月の予測よりも4.8%少ない。表年にもかかわらず生産が予測よりも減少した理由は次の通りである。

- ・当初予測されたよりも大幅な自然落果が発生したために収量が減少した。落果は2016年12月から翌年1月までに発生したが、主要産地であるホークスベイで特に見受けられた。これは早春におこった低温と湿潤な気候により、樹体にストレスがあつためと考えられる。
- ・収穫が遅れ(晩生種では2週間)、濡れた状態で収穫を余儀なくされた。
- ・収穫前に日照が不足したため、晩生種では着色が遅れた。
- ・ホークスベイを襲った暴風(4月)により、パシフィックローズ、ピンクレディーに傷がつき落果があった。

2017/18年は前年の減収から大幅に回復すると見込まれる。このため、生産量は573,000トンと前年よりも5.6%増加すると予測される。2016/17年は表年であったにもかかわらず減収であったことから、生理的に樹体に活力が蓄積されたものと見込まれ、表と裏が逆転すると考えられる。増収の要因は以下の通りである。

- ・収穫面積が2%増加する。新植園が結果樹齢に達することから、0.5万トンから1万トンの增收をもたらすと見込まれる。
- ・冬期間の寒冷な気候が適度であったこと及び8月・9月の萌芽期に冷温に遭遇しなかったため生育が順調である。
- ・報告によると、開花期が順調で開花数も多く、短期間に開花が行われ、前年よりも2週間早かった。長期間の観測記録の中でも開花の開始時期が早かつた。
- ・報告によると、授粉は良好で着果数も多いとのことであった。
- ・気象予報によると、この先は平年並みが見込まれており、エルニーニョ、ラニーニャの発生も見られない。この結果、主要な産地のホークベイ、ネルソンでは通常の夏と秋を迎える、秋の収穫時には温暖で乾燥した気候が見込まれ、果実の成熟に適すると考えられる。

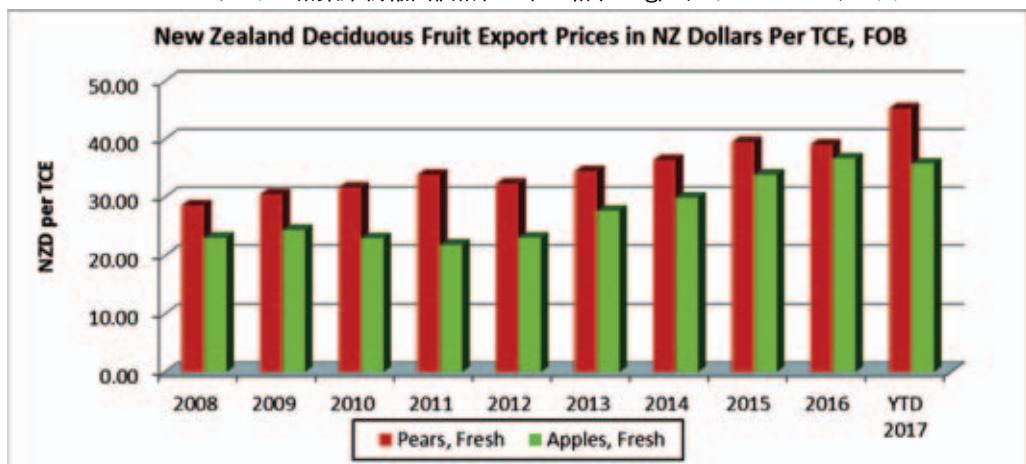
### ナシの生産

2016/17年のナシの生産量は、リンゴと同様の理由で、前年を10%下回る12,550トンである。2017/18年は、回復して前年を5%上回る13,200トンと予測される。

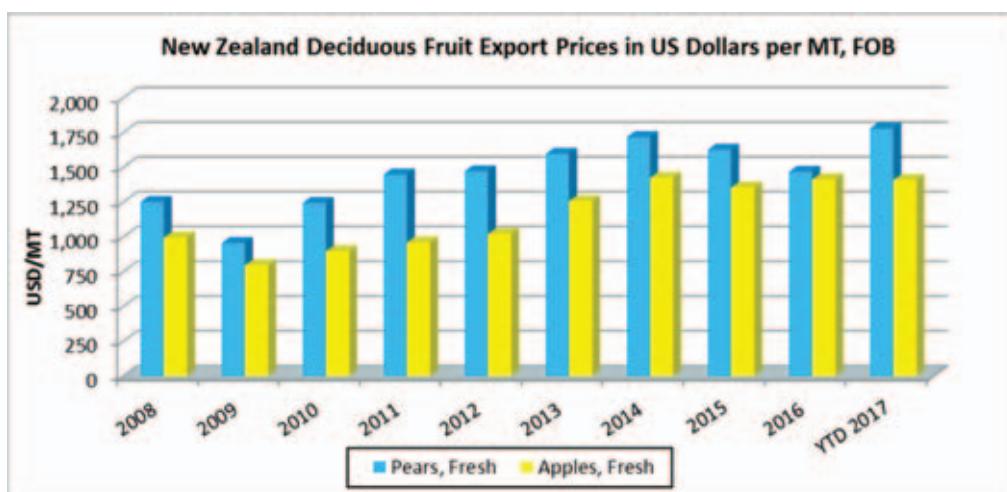
### 生産者手取り

以下の図はFOB価格の推移を示したものであり、農場手取り価格はこの数字から輸送費、貯蔵費等を差し引かなくてはならない。しかしながら、生産者にとって価格は毎年コンスタントであり合理的水準であることが読み取れる。2012年から2014年までの急激な価格上昇による利益は生産者に還元されている。2016/17年の年初来の市場価格(米国ドル換算を参照)は安定している。1トン当たりの価格は1,409ドルであり、前年を5ドル下回ったに過ぎない。一方、ニュージーランドドル換算の数字では、2016/17年のFOB価格は前年を2.5%下回った。加えて、ヘクタール当たりの輸出数量が7.5%下回ったため、生産者としては単位面積当たり概ね10%収入が下回ったことになる。とはいっても、業界としては依然として収益性が高いと考えている。

ニュージーランドの落葉果樹輸出価格(FOB) 1箱(18kg)当たりニュージーランドドル



ニュージーランドの落葉果樹輸出価格(FOB) 1トン当たり米国ドル



## 加工

2016/17年のリンゴの加工仕向量は140,000トンであり、5月報告を14%上回り、前年を1%下回る見込みである。これは収穫時に問題が生じたこと、風により傷果が発生したこと、晩生種で着色不良が生じたため輸出可能量が減少したことによる。この結果、収穫後期に加工に向けられる量が増加した。

2017/18年のリンゴの加工仕向量は131,500トンで、前年を6%下回ると予測される。これは、生産量は増加する見込みであるが、ホークスベイでは輸出に向けられる率が最近の水準まで上昇すると見られることによる。このため、加工に向けられる比率は低下する見込みだ。

ナシの2016/17年の加工仕向量は2,000トンで、2017/18年は10%減の1,800トンと予測される。

ニュージーランドのリンゴ統計(在新 米国農務省 農務官)	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	9,205	9,600	9,825
収穫面積(ha)	8,810	9,164	9,350
販売生産量(トン)	535,000	539,400	570,000
非販売生産量(トン)	14,000	3,000	3,000
生産量計(千トン)	549,000	542,400	573,000
輸入量(トン)	323	300	250
総供給量(トン)	549,323	542,700	573,250
国内生鮮仕向量(トン)	61,323	65,700	65,750
輸出量(トン)	346,913	337,000	376,000
加工仕向量(トン)	141,087	140,000	131,500
総出荷量(トン)	549,323	542,700	573,250

年産は1月→12月

ニュージーランドのナシ統計(在新 米国農務省 農務官)	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	420	400	400
収穫面積(ha)	403	371	375
販売生産量(トン)	13,731	12,350	13,000
非販売生産量(トン)	200	200	200
生産量計(千トン)	13,931	12,550	13,200
輸入量(トン)	3,231	3,900	3,500
総供給量(トン)	17,162	16,450	16,700
国内生鮮仕向量(トン)	10,750	10,750	10,750
輸出量(トン)	4,612	3,700	4,150
加工仕向量(トン)	1,800	2,000	1,800
総出荷量(トン)	17,162	16,450	16,700

年産は1月→12月

## 貿易

### リンゴの輸出

2016/17年の輸出量は、337,000トンで、5月の予測を12.6%下回り、前年を2.9%下回ると予測される。2017年の8月までの輸出量は、前年より7,400トン(2.2%)下回っている。輸出量の減少は、シーズン当初には考えられなかつことであり、生産量が減少したためである。加えて、ホークスベイを襲った風害により生産量に占める輸出の割合が減少した。

2017/18年は生産量が増加し、加工仕向量が減少するため、生産量の増加率5.6%を上回る輸出の増加率が予想される。この結果、輸出量は過去最高であった2004年の358,327トンを上回ると見込まれる。

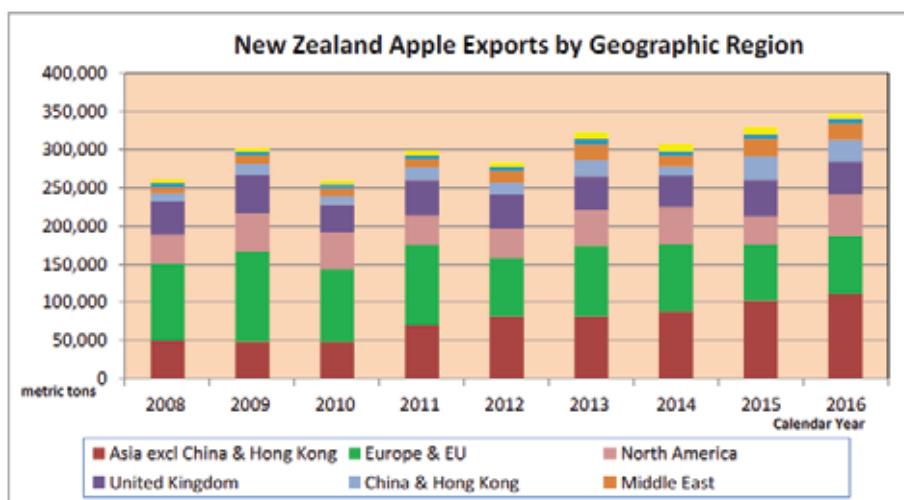
**生鮮リンゴ輸出量(1月-8月)(2015-17年)**

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2017年の 対前年比
	2015	2016	2017	2015	2016	2017	
EU(英国を除く)	70,231	72,568	77,094	21.91	21.45	23.30	6.24
英國	47,236	42,777	49,237	14.74	12.65	14.88	15.10
米国	32,050	48,624	38,080	10	14.37	11.51	-21.68
台湾	21,995	31,994	23,346	6.86	9.46	7.06	-27.03
タイ	27,392	22,936	20,409	8.55	6.78	6.17	-11.02
中国	20,246	17,470	16,544	6.32	5.16	5.00	-5.30
アラブ首長国連邦	17,706	16,875	15,641	5.52	4.99	4.73	-7.31
香港	10,100	9,287	12,245	3.15	2.75	3.70	31.85
ベトナム	4,060	8,065	12,120	1.27	2.38	3.66	50.27
インド	14,881	13,232	9,419	4.64	3.91	2.85	-28.81
その他	54,602	54,449	56,741	17.04	16.10	17.15	4.21
合計	320,499	338,277	330,876	100	100.00	100.00	-2.19

**生鮮リンゴ輸出量(2014-16年)**

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2016年の 対前年比
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
EU(英国を除く)	88,707	73,327	76,117	28.81	22.29	21.94	3.80
米国	40,345	32,070	48,625	13.10	9.75	14.02	51.62
英國	41,548	47,236	42,925	13.49	14.36	12.37	-9.13
台湾	19,876	22,096	32,183	6.46	6.72	9.28	45.65
タイ	20,220	30,141	24,889	6.57	9.16	7.17	-17.42
アラブ首長国連邦	11,422	18,764	17,785	3.71	5.70	5.13	-5.22
中国	1,966	20,331	17,491	0.64	6.18	5.04	-13.97
インド	12,487	15,007	13,253	4.06	4.56	3.82	-11.69
香港	10,670	10,599	10,183	3.47	3.22	2.94	-3.92
シンガポール	8,747	8,336	9,070	2.84	2.53	2.61	8.81
その他	51,905	51,124	54,392	16.86	15.54	15.68	6.39
合計	307,893	329,031	346,913	100.00	100.00	100.00	5.43

**リンゴの地域別輸出量の推移(単位:トン)**



## ナシの輸出

2016/17年のナシの輸出量は、これまでの輸出実績から見て3,700トンと見込まれ、前年に比べ20%、5月予測に比べて18%減少する。これは生産量が減少したためと輸出向けの果実が確保できなかつたためである。2017/18年の輸出量は、前年に比べて12%増加し、4,150トンに回復すると予測される。

生鮮ナシ輸出量(1月-8月)(2015-17年)

輸出先	輸出量(トン)		
	2016	2016	2017
台湾	846	1,662	1,226
米国	1,102	1,121	1,072
中国	151	45	326
英国	644	280	282
EU(英国を除く)	174	239	184
シンガポール	121	103	117
カナダ	250	112	105
トンガ	41	50	83
香港	466	471	69
斐ジー	96	184	81
その他	176	188	134
合 計	4,067	4,455	3,679

生鮮ナシ輸出量(2014-16年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2016年の対前年
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
台湾	682	846	1,662	12.70	20.20	36.04	96.50
米国	2,265	1,102	1,121	42.17	26.32	24.32	1.76
香港	293	467	471	5.46	11.15	10.21	0.89
英国	623	644	280	11.60	15.37	6.06	-56.54
フジー	116	119	251	2.16	2.83	5.45	111.81
EU(英国を除く)	519	174	239	9.66	4.16	5.18	37.36
カナダ	261	250	112	4.86	5.98	2.44	-55.06
シンガポール	217	121	103	4.04	2.89	2.22	-15.27
ポリネシア	71	62	93	1.32	1.48	2.03	50.77
その他	325	402	280	6.05	9.60	6.07	-30.35
合 計	5,372	4,187	4,612	100.00	100.00	100.00	10.15

## ナシの輸入

輸入に関しては、2008年以降、3,000トンから4,000トンの間で推移してきた。数字の変化は、国内生産量の多寡に依存している。この傾向は現在でも同様であり、2016/17年は3,900トンと前年を21%上回る見込みだ。2017/18年は、生産量が増加することから前年を10%上回る3,500トンと予測される。

生鮮ナシ輸入量(1月-8月)(2014-17年)

輸出先	輸出量(トン)		
	2015	2016	2017
オーストラリア	1235	1043	1427
中国	61	129	234
米国	177	26	95
韓国	6	28	16
合 計	1479	1225	1772

生鮮ナシ輸入量(2014-16年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2016年の対前年
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
オーストラリア	1,929	2,839	2,108	52.15	68.75	65.23	-25.75
米国	1,233	777	513	33.34	18.83	15.86	-34.07
中国	365	423	505	9.88	10.25	15.63	19.27
韓国	100	89	106	2.71	2.16	3.29	19.01
ニュージーランド	0	0	0	0.00	0.01	0.00	-100.00
アメリカ領サモア	71	0	0	1.92	0.00	0.00	0.00
合 計	3,699	4,129	3,231	100.00	100.00	100.00	-21.74

## 貿易政策

市場アクセス交渉や貿易障壁の問題に、SPS協定に基づく食品安全性、植物防疫の観点から取り組んでいる。落葉果樹関係では、現時点で市場アクセスに関する大きな問題は生じていないが、輸入国における新たな、また、増大する懸念に対しては遅れずに対応している。同時に、業界としては輸入国の作物保護に対する課題に技術革新を持って対応し、市場アクセスが容易に達成できるように努めている。

## 5.2. 米国の人一人当たり果実消費量が増加

The Packer 電子版 (2017年11月1日)

リンゴ、いくつかのカンキツ、ブルーベリー、熱帯果実のお蔭で、2016年の米国の人一人当たり果実消費量は前年に比べて3%増加した。

米国農務省のフルーツ・イヤーブック・レポートによると、2016年の米国の人一人当たりの果実消費量は116.05ポンドで、112.5ポンドだった2015年に比べて3%増加した。

2016年の一人当たりのカンキツ消費量は24.02ポンドで、前年の22.73ポンドから6%増加した。

カンキツ以外の生鮮果実の一人当たり消費量は92.03ポンドで、2015年の89.81ポンドから2%増加した。

2016年における主な果実の生鮮果実消費量と対前年増加率は次の通りである。

➤ レモン：	4.15ポンド	(+15%)
➤ ライム：	3.48ポンド	(+15%)
➤ マンゴー：	2.96ポンド	(+14%)
➤ ブルーベリー：	1.77ポンド	(+10%)
➤ パパイヤ：	1.43ポンド	(+8%)
➤ リンゴ：	18.55ポンド	(+7%)
➤ オレンジ：	9.17ポンド	(+6%)
➤ パインアップル：	7.28ポンド	(+4%)
➤ イチゴ：	8.03ポンド	(+4%)
➤ ナシ：	2.76ポンド	(+4%)
➤ ブドウ：	8.08ポンド	(+3%)
➤ タンゼリン	5.28ポンド	(+1%)
➤ アボカド：	7.08ポンド	(-2%)
➤ バナナ：	27.55ポンド	(-2%)
➤ モモ：	2.86ポンド	(-5%)
➤ グレープフルーツ：	1.94ポンド	(-14%)

## 53. フィリピンが日本にバナナ等の関税の引き下げを要請

ASIAFRUIT 電子版 (2017年11月1日)

フィリピン政府は、日本に対して幾つかの果実に関する関税引き下げを要求している。これは、競合する南米諸国に対抗するためである。

フィリピンスター(Philippine Star)紙によると、フィリピンのドテルテ大統領の訪日に当たって、農産物輸出に係るゼロ関税を提案することが重要な議論のポイントだという。ゼロ関税を求める品目は、バナナ、パインアップル、マンゴーを優先しているという。

「大統領の初の訪日の際、日本の農林水産大臣とフィリピンの果実に関する関税について議論した。特にバナナだ。しかし、交渉自体は遅々として進んでいない」とフィリピン農業長官(Secretary)はスター紙に語った。

「財務長官からは、これまで日本政府との間で交わした果実に関するゼロ関税要請に関する文書を全て提供するようアドバイスがあった」とも語っている。

日本はフィリピンのバナナに対して最高で18%の関税を課している。

スター紙によると、フィリピンはかつて日本市場に対するバナナ供給者として90%のシェアを占めていたという。しかし、ここ数カ年でエクアドルが輸送コストの削減と、有利な貿易協定を活かしてフィリピンのシェアを蚕食しているそうだ。

「エクアドルはバナナ生産大国だ。日本への輸出に当たって関税はゼロである。日本の消費者はフィリピン産バナナの方が好きなはずだが、貿易会社は経済的理由からエクアドル産にシフトしようとしている」と農務長官は語っている。

## 54. ペルーの生食ブドウ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年11月1日公表)

### 生産

ペルーの生食ブドウ統計(在ペルー 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	29,500	30,000	30,000
収穫面積(ha)	27,000	28,000	28,500
販売生産量(トン)	435,000	490,000	520,000
非販売生産量(トン)	105,000	115,000	118,000
生産量計(トン)	540,000	605,000	638,000
輸入量(トン)	2,600	5,000	5,000
総供給量(トン)	542,600	610,000	643,000
国内生鮮仕向量(トン)	238,100	301,000	250,000
輸出量(トン)	290,000	300,000	300,000
市場隔離量(トン)	14,500	9,000	13,000
総出荷量(トン)	542,600	610,000	643,000

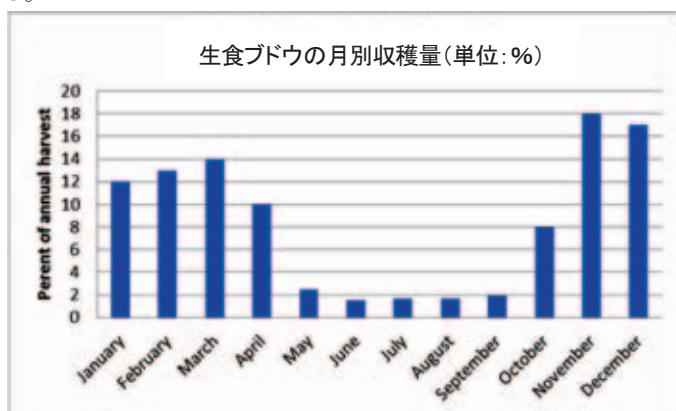
年産は10月-9月

生食用ブドウはペルーで最も輸出量が多い農産物である。エルニーニョの影響で2017年始めには豪雨や不安定な気温変化があったため、生食ブドウの収穫が遅れた。この結果、近隣の生産国であるチリと出荷時期が競合し、供給が過剰となったため価格が下落した。

アンデス山脈によりもたらされた豪雨と、Piura、Trujillo 地方で見られた異常な高温は、生食ブドウの生産に様々な面で影響を及ぼした。高温により大粒系の晩生種レッドグローブにおいては着色不良を生じ、品質低下により市場での価値が引き下げられた。豪雨は生食ブドウに病害をもたらし、農薬散布を余儀なくされた。ただ、早生品種で小粒系の生食ブドウではエルニーニョの影響は免れた。

通常年では、ペルーの沿岸部は乾燥し、気温も安定している。この気候を活かし、精密なドリップ灌漑を行うことで、ペルーは近隣の生産国に比べてブドウ樹の生育を55%早めることが可能である。主な産地は Ica (全国の41%)、Piura (同22%) で、収穫面積は2.8万 ha と推測される。

2017/18年(10月から翌年9月)の生産見込量は63.8万トンと推測される。生産量の増加は、強い輸出需要により導かれたものであり、新規植栽園が結果樹齢に達していること、成園における生産性が高いことによる。



栽培品種の大部分は依然としてレッドグローブである。レッドグローブは成長著しい中国市場で人気のある品種であるが、生産者は他の市場への輸出も見込んで、より価値の高い品種への転換を進めている。現在、世界中の消費者に対応するため20以上の品種が栽培されている。レッドグローブ以外の品種で人気が高いのは Crimson seedless、Flame seedless、Surgeon、Thompson seedless である。

## 生産コスト

新規植栽を行う際の初期投資費用は、土地代を除くと1ヘクタール当たり約3.8万ドルである。これは小規模農家にとってはかなりの支出である。しかし、高品質品種を植栽すれば、投資に対する収益率はかなり高い。

生食ブドウは労働集約的であり、維持管理コストも高く付くので、ペルー農業界の中では大規模な雇用を創出する産業である。生産が盛んな Ica などでは、労働力需要が高いため完全雇用を達成している。

1ヘクタール当たりの初期投資額(単位:米国ドル)	
土壤改良費	6,237
トレリス資材費	10,296
防鳥ネット費	3,944
苗木費	5,459
ドリップ灌漑設備費	5,500
農業機械	4,354
その他	1,789
合 計	37,579

## 消費

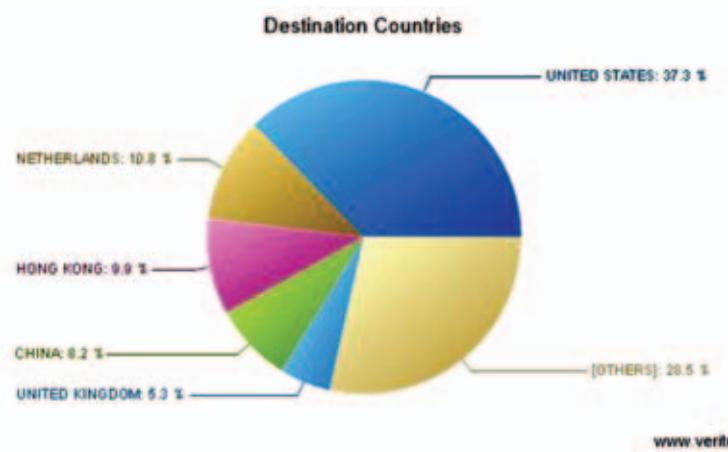
2017/18年の国内消費量は25万トンと推測される。前年よりも減少するのは、輸出需要が旺盛で国内への供給が少なくなるためだ。国内市場向けのブドウは輸出向けよりも大幅に安い二級品であり、緑色のイタリアブドウが主体である。

ピスコ(ブドウからつくる蒸留酒)業界も重要な消費者である。産業省の推計によると、2017年のピスコの製造量は1,100万リットルとのことで、チリと米国が最大の顧客である。ピスコの90%は Ica とリマで製造されている。

## 貿易

2017/18年の輸出量は38万トンと予測される。これは業界の予測より10%少ないが、エルニーニョによりもたらされた豪雨の影響が残るためである。米国が最大の輸出先であり、次いでオランダ、中国である。

生食ブドウは最大の輸出農産物であり、ペルーの税関当局によると2016年(暦年)の輸出額は6.6億米ドルであった。輸出価格は、競合国との関係、気象条件により変動するが、米国への第2位の輸出国として価格変動を監視することは重要である。



## 政策

ペルーは米国、中国、EUを始めとして多くの国と自由貿易協定を結んでいる。自由貿易協定を踏まえ、ペルーで最大のブドウ関係団体であるPROVID及びペルー国立農業衛生検疫機関(SENASA)が、SPS協定に基づく国際ルールの下で輸出が行われるよう努めている。

## 55. EU28カ国の落葉果樹（リンゴ、ナシ、生食ブドウ）事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート（2017年10月30日公表）

### <リンゴ>

EUの生食リンゴ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	529,700	525,660	522,435
収穫面積(ha)	515,560	512,912	511,530
販売生産量(トン)	11,305,086	11,335,034	9,240,980
非販売生産量(トン)	1,147,572	1,256,209	780,000
生産量計(トン)	12,452,658	12,591,243	10,020,980
輸入量(トン)	450,485	422,592	600,000
総供給量(トン)	12,903,143	13,013,835	10,620,980
域内生鮮仕向量(トン)	7,544,162	7,704,074	6,318,780
輸出量(トン)	1,589,791	1,487,809	1,000,000
加工仕向量(トン)	3,600,500	3,728,400	3,301,200
市場隔離量(トン)	168,690	93,552	1,000
総出荷量(トン)	12,903,143	13,013,835	10,620,980

年産は7月-6月

### 生産量

2017/18年の販売生産量は920万トンと予測され、前年を18%下回り、2007年以降では最低となる見込みだ。ポルトガルを除き、全ての国で過去5カ年平均生産量を下回っている。オーストリア、スロベニア、スロバキア、ハンガリー、ブルガリアでは、生産量が極端に少なかった2016年を上回ったが、過去5カ年平均よりも下回る予測である。

EU28カ国は生産量、消費量ともに世界で最大の地域の一つである。生産量の上位5カ国は、ポーランド（2017/18年生産量の29%）、イタリア（同19%）、フランス（同15%）、スペイン（同5%）、ドイツ（同6%）で、EU全体の販売生産量の76%を占めている。

EU28カ国の栽培面積は徐々に減少している。これは、ポーランドにおいてロシアによる輸入禁止措置を受け、古い果樹園の廃園が進んでいるためである。加えて、オランダにおいて収益性の高いナシに改植が進んでいる。しかしながら、老木園（特にポーランド）の生産性は、新しく植栽された果樹園に比べると低いため、EU全体の生産力は衰えていない。

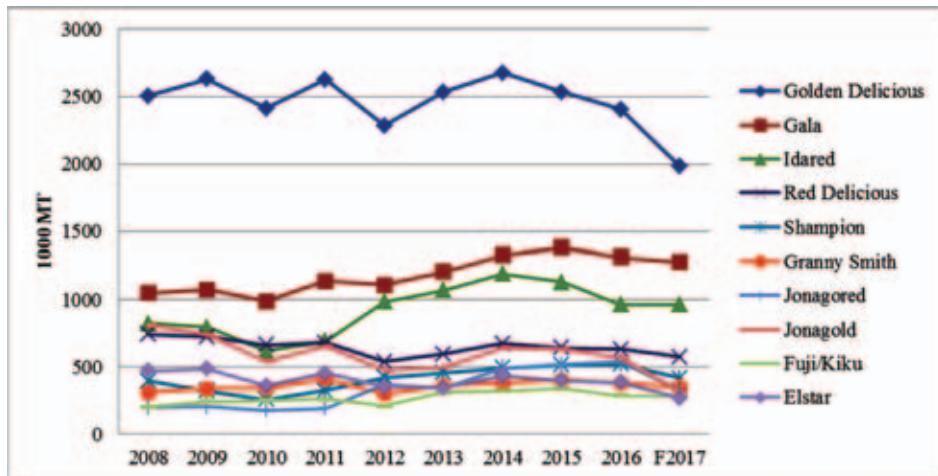
欧州では3月に気温が高かったことから、開花期は平年に比べて2週間早かった。しかし、4月後半の開花期に厳しい霜害に襲われた。霜害は生産量の減少を招いただけでなく、果皮にも傷跡を残した。「フロストリング」と呼ばれる傷により、内部品質の悪化はまぬがれたものの、外観が悪くなつたことから加工向けにしか利用できないものが発生した。さらに、南部及び東部の諸国では7月に熱波に遭遇したため、生産量が更に減少した。加えて、イタリア、ポーランド、スペインでは地域的に雹害に襲われた。一方、ハンガリーではventuria inaequalis 菌による疥癬病及びコドリン蛾による被害もあった。

EU内で1万トンを超える品種は25にのぼる。この中ではゴールデンデリシャス、ガラ（関係種を含む）、アイダレッドが有力品種だ。しかし、国によって品種構成は異なる。ゴールデンデリシャスはイタリア、フランス、スペインで第1位であり、ドイツとオランダではエルスターが第1位。アイダレッドはポーランドとハンガリーで第1位品種だ。対照的にガラはどの国でも第1位品種ではない。多くの国で生産されているが、第2位品種という位置づけだ。新品種ではピンクレディー、カンジ、ルーベンス、テンテーション、キクが増加している。オランダでは新品種の割合が全体の10%に達している。

リンゴの国別販売生産量(単位:トン)

国名	2015／16	2016／17	2017／18 (予測)	17/18の前年との比較	17/18の構成比
ポーランド	3,046,000	3,504,000	2,700,000	-23%	29%
イタリア	2,286,628	2,272,027	1,756,780	-23%	19%
フランス	1,600,000	1,502,000	1,425,000	-5%	15%
スペイン	568,098	592,500	567,600	-4%	6%
ドイツ	973,462	998,900	555,000	-44%	6%
ハンガリー	333,890	360,090	385,000	7%	4%
ルーマニア	350,000	360,000	330,000	-8%	4%
ギリシャ	278,438	297,594	282,000	-5%	3%
ポルトガル	308,990	228,010	277,000	21%	3%
オランダ	327,600	317,000	234,000	-26%	3%
英国	183,000	183,000	137,000	-25%	1.50%
オーストリア	216,092	60,808	110,000	81%	1.20%
チェコ	155,361	126,434	98,340	-22%	1.10%
ベルギー	276,450	227,000	71,800	-68%	0.80%
スロベニア	83,855	42,739	70,000	64%	0.80%
クロアチア	96,182	70,000	65,000	-7%	0.70%
ブルガリア	50,000	40,000	41,500	4%	0.40%
リトアニア	46,000	50,000	40,000	-20%	0.40%
スロバキア	46,250	20,722	31,560	52%	0.30%
デンマーク	24,000	24,000	19,000	-21%	0.20%
スウェーデン	21,000	20,000	18,000	-10%	0.20%
アイルランド	18,790	21,810	15,000	-31%	0.20%
フィンランド	6,000	6,400	6,400	0%	0.10%
ラトビア	9,000	10,000	5,000	-50%	0.10%
合 計	11,305,086	11,335,034	9,240,980	-18%	

EUの上位10品種の推移(単位:千トン)



## 貯蔵量

世界リンゴ・ナシ協会によると、2017年7月1日の貯蔵量は471,221トンと前年を18.8%上回っている。貯蔵場所は国より異なり、生産者団体が主体である国、卸売市場及び生産者団体である国に分かれる。市場年度末の在庫量は新年度の価格の影響を及ぼす。この報告書では在庫量は「域内生鮮仕向量」の内数として扱っている。

## 消費

リンゴはEU各国で最も多く消費される果物である(ただし、カンキツが第一位のスペインを除く)。しかし、近年、一人当たりのリンゴ消費量は減少している。これは、ソフトフルーツ(モモ等)へ消費が転換している

(英國等)、生鮮果実の消費が全体的に減少している(ドイツ、ハンガリー等)のためである。また、地元産及び有機農産物を購入する動きが多くの加盟国で見られるが、全体の割合から見ると、まだ少ない。

## 加工

2017/18年の加工仕向量は前年に比べ減少し、2011/12年以降で最低となると見込まれる。しかし、加工仕向量の減少幅は販売生産量の減少幅に比べると小さい。これは、上述の霜害により「フロストリング」の影響で、本来は生鮮市場に向けられるリンゴの多くが加工に向けられるためである。

加工向けリンゴの用途としては、果汁、濃縮果汁、リンゴ酒、ワイン/ブランデー、ソース、缶詰、チップス、パイがある。加工向けの割合は国により大きく異なり、0%のギリシャ、スカンジナビア諸国から60%のハンガリーまで区々だ。加工仕向割合は年によって変動するが、2017/18年の割合は31%と見込まれる。加工仕向量が多い国は、順番に、ポーランド、ドイツ、ハンガリー、イタリア、ルーマニア、フランス、英国、オーストリア、スペイン、チェコである。

## 貿易

大部分はEU域内で貿易が行われている。過去5カ年では、平均で約230万トンが域内の貿易量であり、域外からの輸入量は43~65万トンである。域外からの輸入量は、リンゴ総供給量の3~5%に相当する。

2017/18年には、域内の貿易量は生産量が減少することから少なくなると見込まれる。

## 域外との貿易

### 輸入

2017/18年の域外からの輸入量は、生産量の減少を補うため、42%増加すると予測される。南半球における生産量が平均よりも多い場合は、輸入量は更に増加することが見込まれる。

2016/17年においては、域外からの輸入の70%は上位3カ国からであり、何れも南半球の国である。輸入の大部分は欧洲におけるオフシーズンに行われている。輸入量の多い国は英国、オランダで、両国でEUの輸入量の56%を占めている。なお、オランダに輸入されたリンゴの多くは他国に転売されている。

米国からの輸入は、年間を通して行われているが量は少ない。これは、2014年3月にジフェニルアミン(DPA)の残留農薬基準が引き下げられたためであり、現在ではDPAを使用していない出荷施設からのリンゴしか輸入されていない。しかしながら、2017/18年のEUにおける生産量の減少は、間接的に米国のリンゴ産業に好影響をもたらすと見込まれる。というのも、特にアラブ首長国連邦、サウジアラビア、インドなどEUと競合関係にある市場で米国産が有利に立つからだ。

国別リンゴ輸入量(単位:トン)

国名	2014/15	2015/16	2016/17	16/17の前年との比較	16/17の構成比
ニュージーランド	113,498	109,019	121,268	11%	29%
チリ	113,379	120,863	119,063	-1%	28%
南アフリカ	96,391	96,520	87,480	-9%	21%
セルビア	827	23,648	27,751	17%	7%
ブラジル	31,849	24,029	18,382	-24%	4%
アルゼンチン	14,712	15,328	15,515	1%	4%
マケドニア	10,805	35,888	15,172	-58%	4%
アルバニア	211	7,190	4,684	-35%	1%
ウルグアイ	2,245	2,399	4,348	81%	1%
米国	6,918	5,356	2,295	-57%	1%
オーストラリア	95	699	1,361	95%	0.30%
ウクライナ	20	63	1,333	2016%	0.30%
中国	654	2,071	934	-55%	0.20%
その他	8,743	7,412	3,006	-59%	0.70%
合計	400,347	450,485	422,592	-6%	100%

### 輸出

2017/18年の輸出量は、前年より49万トン(率にして33%)減少すると予測される。これは生産量が減少するためである。

2016/17年の輸出量は前年よりも6%減少した。これは、ウクライナ、ブラジル、インドなどで増加したものの、アルジェリアへの輸出が大きく減少したためである。アルジェリアは2015年後半に輸入承認制度を大幅に強化したことによる。この結果、2016年にはアルジェリア向け輸出が大きく減少し、2016年12月には輸出がストップした。輸入承認制度が強化される前の2014/15年には、アルジェリア向けの輸出量は全体の9%を占めていた。

ロシアの輸入禁止措置に対抗するため、EUでは他の輸出先(東欧、北アフリカ、中東、ブラジル)の開拓を行い、程度の差はあるが成功を納めている。成功例としては、様々な品種の組合せ(ガラ、グラニースミス、ゴールデンデリシャス、レッドデリシャス)による輸出、新規市場の開拓努力があげられる。新規市場の事例には、イタリア、ベルギー、フランスによるインド市場の開拓がある。また、2014年10月に始まった「プリクリアランスプログラム」によりイタリアとフランスは米国への輸出が可能となった。さらに、ポーランドはベトナム及びその他アジア諸国と輸出協定を結んだ。

主要な輸出先は、ペラルーシ、エジプト、カザフスタンである。また、主要輸出国5カ国で輸出量の90%を占めている。5カ国は、ポーランド(主にペラルーシ、カザフスタン、セルビア、エジプトへ輸出-以下同様-)、イタリア(エジプト、サウジアラビア)、フランス(アラブ首長国連邦、サウジアラビア)、ギリシャ(エジプト、ヨルダン)、リトアニア(ペラルーシ、カザフスタン)である。

EUと米国が競合している市場は次の通りである。アラブ首長国連邦(フランス産、イタリア産と競合-以下同様-)、サウジアラビア(イタリア産、フランス産)、インド(イタリア産、ベルギー産、ポーランド産、オランダ産、フランス産)。

国別リンゴ輸出量(単位:トン)

国名	2013／14	2014／15	2015／16	15/16の前年との比較	15/16の構成比
ペラルーシ	636,188	563,497	533,678	-5%	36%
エジプト	186,932	252,580	141,653	-44%	10%
カザフスタン	85,496	75,421	98,876	31%	7%
サウジアラビア	63,074	80,171	84,363	5%	6%
アラブ首長国連邦	69,413	66,445	64,446	-3%	4%
セルビア	37,783	57,745	63,564	10%	4%
ブラジル	27,105	17,735	58,520	230%	4%
インド	18,160	23,836	43,908	84%	3%
ヨルダン	28,583	40,732	42,407	4%	3%
ウクライナ	63,113	25,107	41,732	66%	3%
ノルウェイ	38,528	40,092	37,537	-6%	3%
ボスニアヘルツェゴビナ	41,080	21,684	32,504	50%	2%
スイス	12,009	12,827	16,627	30%	1%
リビア	50,233	32,728	14,235	-57%	1%
イスラエル	8,788	19,907	13,001	-35%	1%
アルバニア	11,932	9,197	12,459	35%	1%
イラク	6,217	6,111	12,322	102%	1%
コロンビア	6,683	11,750	11,559	-2%	1%
トルコ	18,081	8,170	11,537	41%	1%
アルジェリア	159,799	88,891	3,854	-96%	0%
その他	222,785	135,165	149,027	10%	10%
合計	1,791,982	1,589,791	1,487,809	-6%	100%

### 市場隔離

EUでは、通常、市場隔離策(市場介入策)は講じていない。しかし、2014年のロシアによる輸入禁止措置に対抗し、例外的措置としてEU委員会は市場隔離策を講じた。ロシアによる輸入禁止措置が延長されているため、この措置も延長され、現在は2018年6月31日までが期限となっている。この措置には、収穫放置、熟期前の早期収穫、廃棄、慈善団体への寄付(幼稚園、フードバンク、病院、刑務所)が含まれている。しかしながら、2017/18年は生産量が減少することから、この措置を活用するのは最小限にとどまる見込まれる。オランダだけがごく僅かの量を活用する模様だ。2016/17年にはポーランド、ベルギー、オランダ、クロアチアがこの措置を活用した。

## <ナシ>

EUのナシ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/15年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	121,644	120,484	119,815
収穫面積(ha)	112,446	111,065	111,168
販売生産量(トン)	2,385,360	2,239,358	2,232,564
非販売生産量(トン)	128,109	100,813	103,205
生産量計(トン)	2,513,469	2,340,171	2,335,769
輸入量(トン)	223,696	206,740	207,000
総供給量(トン)	2,737,165	2,546,911	2,542,769
域内生鮮仕向量(トン)	2,048,336	1,941,692	1,967,589
輸出量(トン)	309,625	308,160	309,000
加工仕向量(トン)	355,955	296,059	264,180
市場隔離量(トン)	23,249	1,000	2,000
総出荷量(トン)	2,737,165	2,546,911	2,542,769

年産は7月-6月

## 生産量

EUは中国に次ぐ生産地域である。2017/18年の販売生産量は前年を0.7万トン(0.3%)下回る220万トンと予測される。子細に見ると、地域により事情が異なっている。南部欧州では生産は増加し、北部欧州では減少する見込みである。特に、ポーランド、ハンガリー、ドイツでは生産に大きな打撃を受ける(推計40%の減収)模様だ。

EUでは、上位6各国の生産量が全体の90%を占めている(下表を参照)。

イタリアはEUの中の最大の生産国で栽培面積は3.2万 ha であり、主産地はエミリア・ロマーニヤ地方である。生産見込量は71.9万トンで、前年より6%増加するものの、過去3カ年平均と比べると1%の増加にとどまる見込だ。主力品種は Abate Fetel であるが、全品種で前年を上回る模様だ。ベネト州ではイースター後に霜害に遭遇し、エミリア・ロマーニヤでは雹害があった。その後、北部イタリアでは、6月と7月に熱波と干ばつに見舞われたが、収穫されたナシの品質と食味は良好である。果実のサイズは幾分小ぶりだ。

スペインでは生産量は34.5万トンと低水準であった昨年と同程度と推測される。カタルーニャが最大の产地である。主要な品種は Conference、Limonera(カタルーニャ、アラゴン)、Ercolini(ムルシア、カタルーニャ)、Blanquilla(カタルーニャ、アラゴン、ムルシア)である。ナシの栽培面積は過去10カ年で減少している。これは収益性の良い核果類への転換が進んでいるためだ。

オランダでは栽培面積が3%増加するものの、生産量は32.7万トンと収量が多かった前年に比べて12%減少すると予測される。オランダ南部で、開花期の後に霜害に遭遇し、生育初期には気候が冷涼で乾燥したため減収が見込まれるためだ。主要品種の Conference は8月と9月に日照が多く、降雨もあったため品質は良いと見込まれる。

ベルギーでは栽培面積が増加しているものの、生産量は29.35万トンと4年連続して減少する見込みだ。開花期の前後に低温の遭遇したことと、生育期に乾燥していたことから、減収となり果実も小さい。食味と品質は総じて良好のようだ。生産地はフランダースに集中しており、栽培面積は拡大している。

ポルトガルでは、2年間続いた減収から回復する模様だ。同国的主要品種の Rocha は、前年に比べて6%増加し、18.4万トンと推測される。開花期及び生育期間を通じて天候に恵まれたためだ。

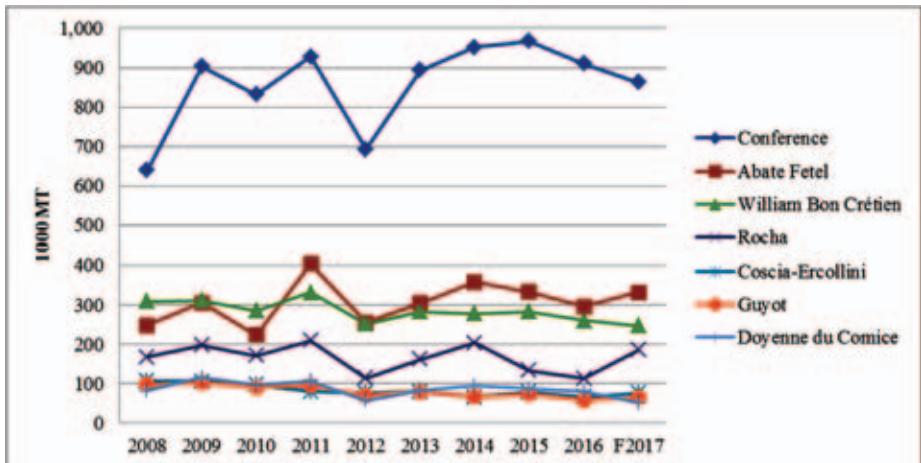
EUの栽培面積は、前年と同程度の11.6万 ha と推測される。イタリアとスペインでは収益性の高い核果類への転換が進んでいるため面積は減少しているが、オランダ、ベルギーでは主力品種の Conference がリンゴの収益を上回るため、栽培面積は引き続き増加している。

EUで栽培されている品種の40%は Conference で、主にベルギー、オランダ、スペインで生産されている。その他の主要品種は Abate Fetel(イタリア)、William Bon Crétien/Bartlett(イタリア、スペイン、フランス)、Rocha(ポルトガル)である。

ナシの国別販売生産量(単位:トン、%)

国名	2014／15	2015／16	2016／17	2017／18 (予測)	17/18の前年との比較	17/18の構成比
イタリア	736,000	764,000	681,000	719,000	6	32.2
スペイン	369,280	350,755	345,655	345,000	0	15.5
オランダ	340,275	345,000	370,000	327,000	-12	14.6
ベルギー	362,780	357,500	313,000	293,500	-6	13.1
ポルトガル	207,909	139,190	111,020	184,000	66	8.2
フランス	133,000	141,000	129,000	127,000	-2	5.7
ギリシャ	73,488	72,417	68,529	78,000	14	3.5
ポーランド	69,200	59,878	75,500	45,000	-40	2
英國	24,000	25,000	28,000	25,000	-11	1.1
ハンガリー	17,660	31,249	34,950	23,015	-34	1
ドイツ	44,972	43,071	34,625	19,000	-45	0.9
ルーマニア	21,000	17,000	19,000	18,800	-1	0.8
その他	30,287	39,300	29,079	28,249	-3	1.2
合計	2,429,851	2,385,360	2,239,358	2,232,564	0	100

EUの主要品種の推移(単位:千トン)



## 消費

ナシは価格次第で毎年の消費量が上下する。EUにおけるナシの一人当たり消費量は概ね4kgである。一人あたり消費量の多い国はナシの主産国で、イタリアでは約10kg、次いでポルトガル、オランダ、ギリシャ、スペイン、ベルギーである。消費量の少ない国(2kg以下)は、ハンガリー、スロバキア、ポーランド、リトアニアである。2017/18年の域内消費量は、前年と同程度の200万トンと見込まれる。

各国で人気のあるナシの品種は地元で生産されるものである。小売業者レベルで常時販売されているナシの品種は2~4程度である。業界によると、味、価格、食味、外観がナシの購買理由だそうだ。地元産、有機の消費は伸びている。

## 加工

形、サイズ、品質において生鮮果実に向かないものは加工に回される。用途は缶詰、ジュース、パイ用である。また、可食にならないものは餌、発酵のために利用される。2016/17年の加工仕向量は29.6万トンであった。

2017/18年の加工仕向量は約26.4万トンと見込まれる。前年より量が少ないのは生鮮果実の価格が高いと予測されるためだ。イタリア、スペイン、ポーランドは加工仕向量が多く、この3カ国でEUの約半分を占める。イタリアではジュースに向けられ、その他の国ではジュースの他、ゼリー、缶詰に向けられる。

## 域外との貿易

### 輸入

域外からの輸入を行う国はイタリアとオランダで、両国でEU全体の70%を占めている。その他の輸入国は、英国、ドイツ、フランスである。輸入の主要港であるオランダのロッテルダムからは域内各国に転送される。一方、イタリアの輸入品は主に国内で消費される。

輸入先は主に南半球であり、同地域で収穫が行われる2月から輸入が始まり、ピークは4月で7月に終了する。主な輸入品種は Packham、Williams Bon Crétien、Forelle、Abate Fotel である。2016/17年の輸入量は前年を下回った。これは、いくつかの輸入国がEUを経由せず、直接南半球から輸入を行ったためと南アフリカが干ばつで生産量が少なかったためである。

中国は品種 Ya を輸出する唯一の国であり、EU 在住のアジア人に消費されている。米国からは品種 Anjou が輸出されているが、地元産との競合で、4年前の1,823トンから24トンに減少している。欧州北部の消費者は Anjou よりも Conference を好むようだ。

2017/18年の輸入量は、域内の生産量が前年と同程度であるため、20.7万トンと前年同と見込まれる。

ナシの国別輸入量(単位:トン、%)

国名	2014/15	2015/16	2016/17	16/17の前年 との比較	16/17の構 成比
南アフリカ	93,396	96,656	87,947	-9	43
チリ	55,326	47,679	56,115	18	27
アルゼンチン	59,249	64,323	45,862	-29	22
中国	7,883	10,909	10,876	0	5
トルコ	722	1,568	1,833	17	1
ウルグアイ	1,323	285	1,679	489	1
ボスニアヘルツェゴビナ	187	303	842	178	0
セルビア	91	343	676	97	0
ニュージーランド	858	537	413	-23	0
ベラルーシ	181	534	101	-81	0
韓国	118	84	84	0	0
イスラエル	0	0	66	n.a.	0
スイス	148	92	61	-34	0
ペルー	94	74	60	-19	0
インド	21	0	49	n.a.	0
合 計	220,798	223,696	206,740	-8	100

### 輸出

ロシアの輸入禁止措置により2年間輸出が落込んだが、現在は安定している。輸出先はベラルーシが最大であり、主な品種は Conference である。輸出先国はカザフスタン、アゼルバイジャンからボスニアヘルツェゴビナ、セルビア、ウクライナにシフトしている。2017/18年の輸出は上記諸国に向けては安定して推移すると見込まれる。2016/17年のブラジル向け輸出は低迷したが、2017/18年はポルトガルの Rocha の豊作を受けて増加すると見込まれる。

中東への輸出は利益があり安定している。サウジアラビア、ヨルダン向け輸出は徐々に増加する見込みだ。2016/17年は香港向けが減少したが、代わりに中国向けが増加した。香港市場は飽和していると見ているが、中国向けはまだ増加すると期待している。

ロシアの輸入禁止措置により、アジア、中東、南北アメリカの新市場の開拓を進めているが、新規市場では目にしたこともない欧州産品種が受け入れられるには数年を要すると考えられる。

### 価格

ロシアの輸入禁止措置にも拘わらず、生産量は前年と同程度のため、今年のナシ価格は堅調と見込まれる。業界としては引き続き新規市場を開拓すると思われる。

ナシの国別輸出量(単位:トン、%)						
国名	2014／15	2015／16	2016／17	16／17の前年 との比較	16／17の 構成比	
ペルルーシ	184,321	148,297	149,064	1	48	
ブジル	69,172	42,813	43,321	1	14	
モロッコ	20,549	15,272	21,219	39	7	
ノルウェイ	18,117	17,264	17,074	-1	6	
ボスニアヘルツェゴビナ	6,907	9,365	10,544	13	3	
カザフスタン	14,489	10,189	8,172	-20	3	
イス	4,403	6,019	6,271	4	2	
サウジアラビア	3,028	5,863	5,145	-12	2	
ロシア	25,944	1,723	4,748	176	2	
セルビア	2,407	2,145	4,413	106	1	
イスラエル	4,521	5,263	3,739	-29	1	
香港	5,631	4,475	3,670	-18	1	
アラブ首長国連邦	4,251	4,381	3,639	-17	1	
中国	2,499	3,130	3,252	4	1	
メリリヤ	2,915	2,843	2,545	-10	1	
リビア	11,769	6,779	2,255	-67	1	
アルバニア	3,095	2,259	1,991	-12	1	
ウクライナ	2,479	1,544	1,941	26	1	
ヨルダン	603	2,202	1,739	-21	1	
アゼルバイジャン	4,227	2,234	1,629	-27	1	
カナダ	1,874	2,014	1,623	-19	1	
その他	23,496	13,551	18,330	-35	6	
合 計	416,697	309,625	308,160	0	100	

## <生食ブドウ>

EUの生食ブドウ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2015/16年	2016/17年	2017/18年
栽培面積(ha)	97,566	96,489	96,755
収穫面積(ha)	93,591	92,093	92,778
販売生産量(トン)	1,743,863	1,659,331	1,442,000
非販売生産量(トン)	9,104	6,822	8,000
生産量計(トン)	1,752,967	1,666,153	1,450,000
輸入量(トン)	614,969	642,701	647,000
総供給量(トン)	2,367,936	2,308,854	2,097,000
域内生鮮仕向量(トン)	2,279,967	2,221,648	2,011,100
輸出量(トン)	87,119	86,506	85,900
市場隔離量(トン)	850	700	0
総出荷量(トン)	2,367,936	2,308,854	2,097,000

年産は6月-5月

## 生産量

EUは世界で最大の生食ブドウ生産地であり、イタリア、ギリシャ、スペインの3カ国でEU全体の93%を占めている。2017/18年の販売生産量は、前年を13%下回り、約140万トンと予測される。これは、イタリアで秋に遭遇した豪雨の影響で生産量が前年を25%下回るためである。他にも、フランスで20%、ルーマニアで3%下回る見込みだ。一方、ギリシャでは14%、ブルガリアでは49%前年を上回る見込みだ。スペインとポルトガルでは、前年と同程度と見込まれる。過去10年間で栽培面積は大幅に減少したが、2017/18年の栽培面積は前年と同程度と予測される。過去の栽培面積の減少は、生産コストの上昇で収益性が低下したこと、域外との競合が激化したことによる。

イタリアが生食ブドウの最大の生産国で、次いでギリシャ、スペインである。イタリアの生食用ブドウは南部で生産され、プツリヤ州(70%)、シチリア(25%)が主産地である。主な品種は Italia、Victoria、Red Globe で、これらで68%を占めている。ここ数年、EU内外の市場の需要に応じ、種無しブドウが増加している。Sugraone、Crimson が最も人気のある品種で、Thompson、Sublime が続いている。早生品種は Black Magic、Vittoria で5月から7月に販売される。中性、晩生品種は Italia、Palieri、Pizzutello、Bianca、Red Globe でシチリア、アブルッツォ、プーリア、バジリカータ、サルデニーナで生産され、8月から12月に収穫される。

ギリシャの栽培面積は1.7万 ha で、主産地はペロポネソスのコリント、マケドニアのカバラ、クレタ島のイラクリオンである。主な品種は、Sultana (Thompson Seedless)、Victoria であるが、販売時期を10～11月まで延長するために品種を多様化することが目下の課題である。

スペインの栽培面積は1.4万haである。今年は、約6,000ha(原文ママ)の新品種が古い品種の跡地に植栽された。主産地はムルシアで、生産量の90%を占めている。アリカンテも主要な生産地になりつつある。栽培品種は50を超えるが、主な品種は Aledo、Ideal、Muscatel、Dominga、Napoleon である。種無しブドウは全体の30%である。

生食用ブドウの国別販売生産量の推移(トン)

	2015/16	2016/17	2017/18	17/18の前年との比較	17/18の構成比
イタリア	1,044,607	1,000,000	750,000	-25	52
ギリシャ	311,048	279,731	320,000	14	22
スペイン	270,742	271,600	270,000	-0.6	19
フランス	45,616	49,494	39,600	-20	3
ルーマニア	36,500	34,000	33,000	-3	2
ブルガリア	16,320	10,066	15,000	49	1
ポルトガル	19,030	14,440	14,400	-0.3	1
合計	1,743,863	1,659,331	1,442,000	-13	100

## 消費

EUにおける生食ブドウの消費量は不況の影響も受けず安定して推移してきた。しかし、2017/18年はイタリアにおける減収から、前年を9.5%下回る200万トンと推計される。6月から12月まではEU域内で生産されるブドウが消費されるが、年の上半期は南半球から輸入されるブドウが消費され、その割合は全消費量の概ね25%である。

生食ブドウの最大の消費国はイタリアで、次いで、ドイツ、英国、ギリシャ、フランス、スペイン、ルーマニア、チェコ、ポルトガル、オーストリア、ブルガリア、スロバキア、クロアチア、スロベニアの順である。現時点ではイタリア産の種のある品種は市場で受け入れられているが、域内の消費者は次第に種無し品種(Sugraone、Crimson、Thompson、Regal、Summer Royal、Centennial、Sublime)に嗜好を移しつつある。このため、生産者は種無し品種に転換しつつある。また、夏果物が少なくなる時期に供給できるよう晩生品種(Crystal、Princess)の生産にも力を入れている。

## 輸入

EUは生食ブドウの純輸入地域である。2017/18年の輸入は、域内の生産量が減少することから、若干増加すると見込まれる。2016/17年の輸入量は642,701トンであり、前年を4.5%上回った。主な輸入先は南アフリカ(前年より8%増、輸入全体に占める割合33%)、チリ(同5%増、17%)、インド(同13%増、14%)である。続いて、ペルー、エジプト、トルコ、ブラジル、ナミビアである。主な輸入国はオランダ、ドイツ、英国であるが、オランダは中継貿易基地として機能している。

生食ブドウの国別輸入量(単位:トン、%)

国名	2014/15	2015/16	2016/17	16/17の前年との比較	16/17の構成比
南アフリカ	203,650	197,669	213,789	8	33
チリ	118,601	103,071	108,083	5	17
インド	40,387	82,290	92,646	13	14
ペルー	70,935	64,058	61,993	-3	10
エジプト	51,871	54,997	49,577	-10	8
トルコ	28,208	24,344	31,380	29	5
ブラジル	23,920	29,324	27,798	-5	4
ナミビア	19,454	18,070	18,567	3	3
モルドバ	13,094	11,730	12,313	5	2
マケドニア	3,923	6,394	10,632	66	2
モロッコ	7,551	8,093	6,923	-14	1
米国	9,073	6,401	4,374	-32	1
合計	604,348	614,969	642,701	5	100

## 輸出

2017/18年の輸出量は、域内の生産量が減少することから、幾分減少する見込みである。2016/17年の輸出量は86,506トンで、前年を1%下回った。主な輸出先はスイス、ノルウェイで、輸出量全体に占める割合はそれぞれ34%、18%である。更に、北アフリカ、中東、中国での市場開拓を進めている。

生食ブドウの国別輸出量(単位:トン、%)

国名	2014／15	2015／16	2016／17	16/17の前年 との比較	16/17の構 成比
スイス	26,729	29,143	29,737	2	34
ノルウェイ	13,810	14,222	13,518	-5	16
ベラルーシ	9,387	7,419	5,556	-25	6
アラブ首長国連邦	4,440	6,474	5,405	-16	6
ロシア	10,595	2,783	4,296	54	5
サウジアラビア	2,136	4,192	3,444	-18	4
南アフリカ	2,382	2,539	2,715	7	3
ボスニアヘルツェゴビナ	3,320	2,056	2,416	17	3
アルバニア	3,088	2,154	2,390	11	3
ウクライナ	3,396	1,929	1,918	-1	2
ブラジル	1,598	1,213	1,022	-16	1
ヨルダン	203	616	1,014	65	1
合 計	101,373	87,119	86,506	-1	100

## 5.6. 世界のカキ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年10月27日)



世界のカキ市場は急速に拡大している。いくつかの国では生産量が増加しており、需要の拡大も認められる。スペインは欧州では最大の生産国であるが、熱波の影響を受け、収量の減少が見込まれる。同国の生産会社はペルーでの生産に投資をしており、出荷期間の延長を期待している。米国では生産の拡大が見込まれ市場も堅調のようだ。イスラエルの生産も増加する見込みであるが、競争が激しいため、新規市場の開拓を目指している。アジア市場は順調ではない。中国と韓国で生産が減少すると報告されている。

### スペイン：熱波の影響で生産量が減少

エチレンを用いて熟成プロセスを加速化し、8月には市場出荷を始めた生産者もいるが、主産地のバレンシアでは出荷が始まって1ヶ月たったところである。今週、ウエルバで収穫が始まつたが、エストレマドゥーラ州では初となる出荷である。出荷量が増加しているため、現在、価格は下落気味である。供給のピークは10月と11月であり、生産量の90%は品種 Rojo Brillante だ。

スペインカキ協会によると、初夏に発生した熱波の影響を受け、生産量は15~20%減少する見込みで、当初の生産見込量の40万トンは32万トンに下方修正したことだ。多くの生産者は、新規植栽園が成園化するために生産量の減少はないと見込んでいたが、実際には減収することになった。熱波の影響を受けやすい成園の減収割合は、未成園の4~5倍あるためだ。

最大の産地であるバレンシア州では、果実のサイズは大きい。一方、ウエルバでは熱波の影響は受けなかったが、小径の果実が多い。近年、カキの市場は成長を続けている。協会によると、栽培面積の増加は前年に比べると少ないようだ。とはいえ、育苗会社ではカキの苗木が引き続き販売されている。

2014年のロシアの輸入禁止措置により、カキの市場価格は25%下落した。生産者の中には、生産コストを下回って販売しているものもあるようだ。このため、業界では欧州以外の新規市場の開拓を行っている。スペイン政府は中国市場への売り込みを支援している。主要な輸出先は欧州で、ドイツが最大の市場である。この他、北米、アジア、中東、南米へも輸出されている。

## **ペルー：植栽が進む**

カキは南米諸国でも生産が行われている。スペインの生産会社ではペルーでの生産に投資を行っているが、まだ収穫には至っていない。スペインとしては、同国の生産を補完し、春に出荷を可能とすることで、10月から3/4月まで販売期間を延長しようと考えている。

## **米国では生産も市場も拡大**

生産者と流通業者は、今シーズンの生産の拡大を増加しており、年々拡大する市場に備えようとしている。カリフォルニア州では、富有と蜂屋の出荷が数週間前から始まっており、収穫は南部から北部に移動している。カリフォルニア州では熱波の影響は限定的であったことから、生産量の増加が見込まれている。生産の増加は需要の拡大と軌を一にしている。カキはどんなスーパーでも販売されており、生産者は需要の拡大に対応するために、生産の増加が進められている。生産者は、ここ数年栽培面積が大きく増加したにもかかわらず、供給過剰には陥っていないと考えている。

## **オランダ：大きなサイズのカキが優勢**

スペイン産のカキの販売が本格化している。出回っている果実は生育が良いことから、サイズの小さい果実はほとんど見られない。スペインとしては高価格を期待しているだろうが、オランダ市場ではそれを許さない状況だ。現在、オランダ市場では大きなサイズのカキと、クラス2レベルのカキで溢れている。価格はクラス1でキロ当たり65～85セント、クラス2で45～60セントである。

スペイン産の90%を占めるバレンシア州産の販売は9月下旬から始まった。スペイン南部のウエルバでも生産が始まったことから、出荷時期は1月まで延長可能である。近年、カキの生産量は拡大を続けており、2020/21年には、スペインのカキ生産量は65万トンに達すると見込まれている。この結果、欧州としては、消費の面でピークを迎えつつある。

いずれにせよ、カキの需要は拡大を続けている。バルト諸国の市場は現在最も活況を呈している。また、ロシア市場は輸入禁止措置を講じる前は、輸出量の20%を占めていた。英国は最も成長を遂げている市場である。ドイツ、オランダ市場も成長している。更に、輸出業者としては、アジア市場に関心を寄せている。小売業者としては、年間を通じてカキの供給を行うことを目指している。従って、南半球からの輸入を目指している。

## **ベルギー市場は通常通り**

現時点では、カキ市場はそれほど良くない。4.5キロ箱が3～4ユーロで取引されている。業者の話では、市場流通量が多すぎることだ。ここ数年におけるスペインでの新規植栽は多すぎると考えているようだ。

## **イタリア市場は静か**

第42週から出回り量が増加している。このため価格は下降している。市場は平静を保っており、需要もほどほどである。業者によると、「品質は大変素晴らしい、果実の大きさは平均以下であるが、数量は近年の動向と一致している。価格は良くもないが悪くもない」とのことだ。

品種 Tipo の収穫はほぼ終了しているが、Rojo Brillante の収穫は最盛期である。特筆すべきことは、有機カキの需要が増加していることだ。スペイン産のカキの出荷時期は長く、販売に有利であるため、イタリアとしては11月より前に収穫を終える必要がある。

イタリア産のカキにとっては国内市場が重要ではあるが、オーストリア、スイス、北欧への輸出も行われている。

## **フランスではカキの人気はそれほどない**

カキのシーズンは1ヶ月前に始まり、現在は最盛期である。当初の価格は高かったが、次第に下落してきた。出荷量が増加するにつれ、通常、10月下旬から11月上旬にかけて価格は安くなる。業者によると、品質は良好で販売も順調のことだ。フランス市場ではカキはスペインから輸入される。国内生産もあるが、大部分は輸入により賄われている。業者は、「フランスではカキはそれほど人気がないので需要の高まりもない」と話

している。

### **イスラエル: 生産は増加するも競合を懸念**

安定した市場と根強い需要が国内市場、海外市場で認められるため、イスラエルの生産者、輸出業者は Sharon (登録商標名で品種名は Triumph) のお蔭で利益をあげている。過去15年間で、国内市場における価格はキロ当たり1~3ユーロ、海外での価格は2~4ユーロであった。現在の価格は、これを少々上回っているが、依然として平年の水準にある。

この成功の一端は、栽培方法が改善されてきたことと取扱い業者数が限定されていることがある。栽培面積は1,400haで、85%が中央沿岸地域に位置している。平均して3.5万トンが収穫され、このうち1.5万トンが9月から3月にかけて輸出される。輸出量の90%が4つの主要会社により担われている。

ロシアが主な輸出先であり、40%を占めている。欧州は2番目に大きな市場で35%を占める。この他、アジア、北米にも輸出されている。Sharon の需要はEUで拡大してはいるが、スペイン産、モロッコ産との競合が見られる。このリスクを踏まえ、イスラエルとしてはマレーシア、シンガポール等の南アジア、アラブ諸国への輸出の拡大を目指している。

### **中国: 生産量の減少**

中国のカキ生産の70%は同國中部の福建省で行われている。果実は11月、12月に市場に出回る。過去1年間の気象条件は果実生産に適していなかった。数ヶ月続いた寒さと降雨の後に、暑さと干ばつの影響を受け、生産に支障が生じた。このため、今年は生産の減少が見込まれ、果実の肥大も悪い。生産者の中には、収穫量が半減することを恐れるものもいる。この結果、価格は上昇すると見込まれる。価格上昇の原因は、生産量の減少だけでなく、梱包、運送、物流のコストが上昇したことでも要因としてあげられる。

今年、ニュージーランド産のカキの輸入が解禁された。第一陣の輸入は、ニュージーランド産のシーズンが終わりに近づいた8月に行われた。来年は、輸入量の増加が見込まれる。

### **韓国では供給量の不足**

韓国の流通業者によると、収穫が進行中であるため終了しない場合は正確な数字は分からぬものの、10~20%の不足が見込まれるとしている。出荷は10月14日から始まり、輸出も含め、1月まで続く。業者によると、品質は、降雨による影響を受けた昨年よりも良好のことだ。ただ、果実のサイズは小さいようだ。国内市場では、大きいサイズのカキが不足していることから、価格は上昇している。中程度のサイズの果実は、香港、タイ、フィリピンへ、小さいサイズの果実はシンガポール、マレーシアへ輸出されている。

### **オーストラリア: 供給量は増加、市場を開拓中**

カキの生産量は2,500トンであり、世界の生産量の1%にも満たない。クイーンズランド州が主要な産地である。1970年代に同州にカキが導入され、現在では全国の生産量の90%を占めている。出荷シーズンは2月から6月まである。同国のシーズンオフには輸入も行われている。

生産量は急速に増加すると見込まれているため、市場の開拓が急務である。2015/16年には、国内市場で販売促進活動が行われた。

### **南アフリカ: 次期シーズンは干ばつの影響**

シーズンの到来にはまだ時間があり、現在開花期を迎えていている。Sharon を生産するグレイトン、カレドンでは干ばつが見られるが、スウェレンダム近辺では干ばつはそれほどではない。いずれにしても、次期シーズンの生産には干ばつの影響が見込まれる。

著者: Rudolf Mulderij

## 5.7. フランス政府が食品価格決定の仕組みの変更を提案

EUROFRUIT 電子版 (2017年10月20日)

食品価格の引き下げで苦しんでいる農業生産者を支援するため、フランス政府は生産コストに応じて食品価格を設定する方策を提案している。

ロイター通信によると、フランスのマクロン大統領は、生産コストに応じて食品価格を設定する旨の法改正を提案しているとのことだ。

この改正は、価格マージンを搾り取られ、また、熾烈な小売業界の価格競争の影響を被っている、フランス政治の重要な構成員である農業生産者を支援するために考えられたものである。

農業相互支援協会(Agricultural Mutual Assistance Association (MSA))によると、昨年の調査ではフランスの生産者の1/3は月額(農業)所得が350ユーロ以下で、最低賃金の1/3であったという。

大統領は、「生産者は補助金に頼ることなく、実際に働いた分に見合った公平な所得が得られるようになるべきだ」と語っている。

この動きには、農業生産者、製造業者、小売業者が一様に歓迎している。つまり、これまでのように製造業者や小売業者が価格決定を行うのではなく、食品を販売する側によって開始値の決定が行われるようにするものである。

しかし、大統領は、小売業者により店内で販売する際の最低小売価格を引き上げるとする提案については決定を延長したと述べた。

大統領によると、小売価格の上昇を最小限に抑えると同時に農業生産者の所得向上、農産物の品質向上を実現することを確保するため、決定は年末まで延期することだ。

## 58. Kissabel ブランドによる果肉の赤いリンゴ新品種

FreshPlaza 電子版 (2017年10月19日)



は黄色である。収穫時期は、早生の品種はロイヤル・ガラと同時期で、晩生種はクリプス・ピンクと時期が重なる。最初の商業生産用の果樹園は2016年の春に植栽された。

Kissabel ブランドとしては、最初に Rouge、Orange、Juane の3品種を選定したが、この他にも果肉が赤色、ピンク色で果皮色も様々な品種の商業生産を検討しているという。



Kissabel Rouge は果皮が濃い赤で、果肉の赤さとマッチしている、果肉は新鮮で、パリパリ感があり、強烈な風味がありベリー類を思い起こさせる。(左)

Kissabel Orange は一見するだけで区別がつくが、ピンクがかつた赤い果肉を隠している。果肉は固くジューシーで、甘さと酸味のバランスは完璧だ。(右下)



Kissabel Jaune は黄色の斑点がある果皮を持ち、甘くてデリケートなピンク色の果肉を包んでいる。貯蔵性が高い。(左下)



「これら新品種の育成には20年の歳月をかけている。Kissabel としては単に新品種を提供するだけではなく、リンゴに新しい分野を切り開くという考えで市場に打って出たい」と関係者は語っている。

IFORED プロジェクトは13カ国の14のパートナーとともに進めているものであり、5.5万haで生産される300万トンのリンゴが関係している。

著者:Heather Wicks

参考情報:[www.kissabel.com](http://www.kissabel.com)

## 5.9. 米国ワシントン州のリンゴ生産情勢

ASIAFRUIT 誌 (2017年9月号)

2017/18年産のワシントン州のリンゴシーズンが迫っていたこの夏、業界の多くの人達は「今年は史上最高の生産量になる」と信じていた。ワシントン州全域で高収量性の品種が植栽され、結果樹齢に達しようとしている中で、この予測は十分に当を得たものであった。

なにせ、過去数カ年にわたり、州の産業を代表していた品種、例えばゴールデンデリシャス、ブレイバーンの改植が進み、夏の気候も暑く雹害にも遭遇しなかつたからだ。

リンゴの大豊作を予測した理由の一つには、サクランボの大豊作があげられる。リンゴ園の近くで生産されているサクランボは、2017年に史上最高の生産量を記録した。米国北西部のサクランボは、これまで最高であった2014年の2,320万箱を15%上回る生産量であった。

こういった条件が重なったことから、シーズン当初の話として、これまでの最高記録であった2014年の1億4200万箱を上回るか否かより、どの程度上回るかといったことが議論されたことは不思議ではない。

しかし、8月の始めになつてワシントン州果樹協会は、突然、「史上最高の生産量か」という議論を中止し、2016年とあまり変わらない1億3,100万箱という予想に転換したのである。何が起つたのだろうか。

### 理由

生育の始めの時期、太平洋岸の北西部は異常なほど寒く湿潤な春を迎えた。このため細胞分裂が抑制され、これがひいては果実の大きさを決定づけ、果実が小さくなり、出荷箱数も少なくなると予測された。実際、当時の報告書には2016年よりも1サイズ小さい果実の生産が予測されていた。しかし、結果的には売りにくいくらい果実の肥大は進み、生産者には朗報となった。

別の要因としては、自然のサイクルとして発生する隔年結果があげられる。前年(2016年)の生産量1億3,200万箱は史上第2位の記録であったが、その前の年の2015年は1億1,500万箱と少なかつた。その前の年である2014年は1億4,200万箱と史上最高だった。過去4年間の変動率は約20%に達する。

もし、2016年と2017年の関係が隔年結果ということであるなら、ワシントン州の生産量の増加傾向は継続して進行中ということになり、2018年の生産量が1億6,000万箱ということであつても不思議ではない。

### 労働力不足の中での生産拡大

ワシントン州のリンゴ生産量を拡大要因の最たるもののは、生産コストの上昇である。そしてコスト上昇の最大の原因是、国境管理の厳格化に伴うほ場労働力の減少だ。ほ場労働力の不足はワシントン州に限つたことではなく、多くの農業州で直面している課題であるが、毎年、収穫労働者に支払われる賃金は増加している。

果樹園での労働者を確保するために、ワシントン州のリンゴ業界は、連邦政府が定めた厄介な外国人労働力雇用に関する制度に従わざるを得ない。H-2A として知られる雇用制度により、「お客様」の労働者に対して数年前に比べて高い賃金を支払わなくてはならないし、健康な居住環境の提供のための投資、祖国(大半がメキシコ)との間の交通費などの支出が求められている。報告書によると、ワシントン州は収穫のために1.5万人の労働力を導入したという。しかし、問題はその数では足りないということだ。

### 密植栽培

ワシントン州におけるリンゴの生産コストの上昇は、労津力不足が問題となる前から発生していた。今世紀の初めの上昇要因はエネルギーであった。より最近になってからは、数百万ドルもするコンピューターで制御された光センサーによる果実の選別・包装システムを導入するために資金投入を余儀なくされた。加えて、過去数年にわたる果樹産業の高収益により、土地の価格も上昇している。

業界側のコスト上昇に対する対応は、可能な限り単位面積当たりの収量を増加させるというものであった。このための対策として、面積当たりの植栽本数を増加させる方法がとられた。この結果、数十年前には想像できないくらい単位面積当たりの収量が増加したのである。

米国農務省農業統計局ワシントン事務所の統計によると、1986年の1エーカー当たりの植栽本数は190であったが、2006年には434に上昇し、2011年には562に達している。この数字は多数を占める古い品種で樹齢が20年以上の果樹園も含めた平均の数値であることを考慮しなければならない。

例えば、象徴的品種であるレッドデリシャスは1エーカー当たり325本で、ゴールデンデリシャスは350本だ。しかし、2011年には、先の統計に2色系の新品種が登場し、栽培方式が見直されたことが反映するようになった。例えば、今や非常に人気が高いハニークリスピは765本であり、クラブ制品種のパシフィックローズは790本、ジャズは972本である。最近、東南アジア市場で人気が高いアンブロージアはなんと1,268本である。このような単位面積当たりの植栽本数を増やす傾向は衰えを見せていない。ワシントン事務所の調べによると、1986年の栽培面積は16.1万エーカーであるのに対し、2016年は16.5万エーカーと面積の拡大はわずかなのである。

### 多いことは必ずしも良いことではない

先に述べたように、2016/17年の出荷量は非常に多く、FOB 値格の下落に繋がった。レッドデリシャスは特に影響が大きく、シーズン当初から生産増に伴う価格の下落が顕著であった。

米国農務省のマーケットニュースによると、レッドデリシャスの FOB 値格は10月の1箱(18kg)25ドルから、11月中旬には17ドルに下落した。この傾向は冬期を通じて継続し、3月には13ドル、5月は底値の11ドルとなった。

ガラもそれほど良い価格ではなく、5月の時点で15ドルから21ドルの間で推移した。生産者によれば、1箱当たり15ドルを下回ると収益が赤字になるとのことだ。ふじとグラニースミスは相対的に供給量が不足していることから、シーズンを通して何とか1箱当たり20ドルを上回った。

一方、ハニークリスピは、再び生産者にとって最も収益が高い品種となり、6月までの FOB 値格は60ドルを超えた。

Oneonta Starr Ranch Grower 社の Reinholt 氏は「昨シーズンの生産量は確かに多すぎた。しかし、全ての在庫が完売し、今年産の販売にスムーズに繋がることを願っている」と語っている。

### 本年産の収穫の遅れ

2016年産のワシントン州のリンゴの在庫は8月初旬までに大体販売が終了した。唯一の例外はレッドデリシャスであり、550万箱の在庫が残った。幸いにも2017年の収穫のスタートが数週間遅れたため、夏の終わりまでには在庫がはけることが期待されている。

Rainier Fruit 社の Howard 氏は、「今年の取引の進捗は、昨年に比べて明らかに遅れている。ガラの収穫は8月中旬まで待たなくてはならない。これは昨年よりも2~3週間の遅れだ。南半球からの供給が少ないため、本来ならガラに対する需要は強いはずなのだが」と述べている。

報告によると、レッドデリシャスの収穫のスタートも9月中旬まで待たねばならないようだ。

### 最大品種の交替

ワシントン果樹協会が8月第1週に公表した報告によると、レッドデリシャスは引き続きワシントン州で最大の品種であり、生産見込量は3,100万箱と州の24%を占める見込みである。僅差でガラが続き2,950万箱(22.5%)、ふじが1,830万箱、グラニースミスが1,660万箱となっている。ハニークリスピは前年よりも25%増加するが1.05万箱である。

Reinholt 氏は、「レッドデリシャスの人気は国内市場では衰えている。冬の間に他品種への改植が進むことから、来シーズンは更に減少するだろう。従って、ガラが最大品種になる時期が何時であっても不思議はない」と語っている。とはいえ、その他品種が輸出を牽引する中において、レッドデリシャスはワシントン州からアジアへ輸出されるリンゴの中では未だに最も人気がある。

Howard 氏は、「レッドデリシャスの輸出用の積み荷の中でふじ、ガラ、グラニースミス、時にはピンクレディーが混載されるケースが年々増加している。品種に関しては、輸出市場は北米市場に遅れをとっているが、新しい品種に対する需要も構築されつつある」と述べている。

## レッドデリシャスは依然として大きな比重

ワシントン州におけるレッドデリシャスの生産量は減少しているが、今後数カ年はメジャーな品種として君臨することは間違えない。こういったことを踏まえ、ワシントンリンゴ委員会(WAC)は、この先数年間はガラとともにレッドデリシャスの販売促進活動も進めることを計画している。

WAC の国際市場部長の Lyons 氏は、「委員会としては、メキシコ、中国、インド、ベトナム、インドネシアを5つのターゲット市場として位置づけた。これらは何れも将来が見込める大市場であり、うち4つはアジアに位置している」と説明している。

## より奥地へ

Lyons 氏によると、鍵を握るアジア市場に対する新たな取組を計画しているという。その一つとして、WAC は、近年コールドチェーンに関するインフラ整備が進んできた中国内陸部でレッドデリシャスを販売しようと考えている。「成都は最も典型的な例だ。7百万人の人口を有しているが、これまで近代的な流通チェーンが確立されていなかった。しかし、インフラが整備されたことで状況は変化し、ワシントン州のリンゴを状態の良いまで提供できるようになった」とのことだ。

同様の計画はインドやベトナムに関しても中国と同様に進められようとしている。「かつてはリスクが高かつたが、今やより奥地の都市まで販路を開拓することが可能となった。ベトナムでは、ホーチミンとハノイで伝統的な市場の枠組みを超える活動を進めるとともに、ダナンやメコンデルタにも進出している」と Lyons 氏は説明している。

インドネシア市場は政府の輸入枠制度により縛られ、自由な貿易が妨げられている。「しかし、レッドデリシャス、ガラ、グラニースミスにとっては絶好の市場だ。インドネシアはワシントン州のリンゴを大量に購入してくれるお得意様の市場」であるようだ。

## 60. 中国のクリ輸出価格は下落

FreshPlaza 電子版 (2017年10月17日)



日照萬洪食品有限公司の Wang 氏によると、「今年の中国のクリの生産量は、昨年に比べると10~20%多い。また、品質は昨年よりも良好だ。中東への輸出量は昨年よりも若干減少しているが、米国、カナダ、欧州への輸出量は昨年と同程度だ。一方、輸出価格は昨年よりも20%低下している」とのことだ。

「昨年に比べて今年の我が社のクリの生産量は倍増した。今年の輸出量は約1万トンである。ここ数年間、中国のクリの海外での価格は低かった。しかし、品質は良好であるため、海外の消費者の間で人気が上昇している。今年の輸出に関しては、昨年に比べて満足いくものではない。それは、市況が低調であるためだ。しかし、我が社としては心配していない」と語っている。

「我が社のクリのうち高品質製品の20~30%は広州と河南の代理店に販売し、残りの70~80%は青島港から米国、中東、オランダ、スペイン等の欧州諸国に輸出している。品質が高いとの評価を得ているので、海外の顧客基盤は安泰だ。現在の販売先の拡大を着実に進めているが、将来的には新たな販路を開拓したい」とのことだ。



情報源:<http://www.wanhongfoods.cn/>

## 6.1. カキ、カリフォルニア州で生産拡大、スペインでは減収

### カリフォルニア州でカキの生産が拡大

FreshPlaza 電子版 (2017年10月17日)



毎年、生産と市場需要が拡大しているため、カキの生産者、流通業者は喜んでいるが、カリフォルニア州では富有と蜂屋の収穫シーズンを迎えた。

「カリフォルニア州のカキのシーズンは数週間前に始まり、南部から北部に北上している。南部のベーカーズフィールドから、遠くフレスノ、マデラまで産地は広い。栽培品種は富有と」蜂屋だが、両品種とも上々の出来だ。天候が鍵を握るが、熱波の影響で幾分果実の肥大に影響があった産地もあった。しかしサン・ホアキン・バレーでは豊富な降雨があり、生産に好影響があった」と Stellar Distributing.社の Cappelutti 氏は語っている。

### 堅調な需要で高値の市場

カリフォルニア州ではカキの生産が増加しているが、堅調な需要に支えられている。全ての消費者が最優先で購入する農産物ではないものの、今では広く販売されており、生産者は需要に応えるために生産を拡大させている。

「過去5年程度でカキの栽培を240エーカー拡大し、販売数量は3倍になった。しかし、それで供給過剰ということはない。10年前に比べれば、カキの人気は確実に上昇している。富有は生鮮果実として消費され、蜂屋は一般に料理用に用いられる。両品種とも市場が拡大しており、今やほとんどのスーパーで販売されている」と Cappelutti 氏は語る。

「現在、カキ市場は健全で市況は積極的である。価格は堅調だがバランスはとれている。サプライチェーンに携わるもの全てにとって、持続的で堅実な市場といえる。カリフォルニア州では労働費が高く、生産コストが上昇しているという面はあるが、今までのところ、市場がこれを吸収してくれている。Stellar Distributing.社は1月中旬まで高品質のカキを消費者に供給できることを楽しみにしており、このような状態が継続することを願っている」と Cappelutti 氏は締めくくった。



著者:Dennis M. Rettke

参考資料:<http://cataniaworldwide.ca/stellar/>

### スペインのカキ生産は見込みよりも20%減収

FreshPlaza 電子版 (2017年10月16日)

スペインカキ協会によると、国内全土で初夏に遭遇した熱波の影響を受け、カキの生産量は15~20%減収する見込みとのことだ。今シーズンのカキ生産量は40万トンとの見込みであったが、実際には32万トンのようである。

カキ協会の会長によると、「多くの人が、新植樹が結果樹齢に達することで、熱波による減収を相殺すると考えていたが、実際には熱波による減収は見込みよりも大きかった。しかし、カキの肥大は順調であり、果実の

サイズは大きい。従って、昨年よりも市場に出荷できる割合が多い。昨年は小さいサイズの果実が多かった」とのことだ。

カキの脱済方式が開発されて以降、生産と需要は同じペースで拡大してきた。しかし、会長によると、今年の栽培面積は供給と需要を調整するために拡大が減速しているという。「種苗会社には購入されなかつた苗木が残っているのは確かだ。しかし、それは栽培面積の拡大が止まるということは意味していない。過去5年間の拡大のペースではないということだ」と話している。

カキの生産のピークは10月下旬から11月であるが、現在はカキの価格は次第に下落している。

### ロシアの輸入禁止措置により価格は25%低下

バレンシア農民協会(AVA-ASAJA)の報告によると、カキの産地価格は、過去3カ年で平均25%低下したとのことだ。中には生産コストを割り込んでいるケースもあるという。これはロシアによる生鮮果実の輸入禁止措置の影響とアジア、アメリカにおける新規市場開拓の遅延によるものとしている。

カキの収益性は、2014年8月に施行されたロシアの輸入禁止措置の影響を強く受けている。ロシア市場は果実サイズが小さい二級品を受け入れてくれる市場として、欧州市場の飽和状態を防ぐ役割を果たしてきた。

AVA-ASAJA会長は、「モスクワの決定が非常にマイナスの影響を及ぼすことは分かっていた。スペイン政府とEUは、その埋め合わせのために新たな市場の開拓を約束したが、これまでのところ約束は果たされていない。我々は、市場の開拓がなされなかったことに加え、被害を被った生産者に補償措置がとられていないために二重の苦しみを受けている」と語っている。

農業指導者によると、味と栄養成分などのお蔭でカキは大きな可能性がある果実だ、と強調している。「現在閉じられている国際市場が開放されたなら、カキの生産は3倍に拡大できる。カキに対する消費者のニーズをタイムリーに満たすよう市場を開拓してくれる政治家の出現を願っている。なにせ、農業分野と関係のないところで(ロシアによる禁輸措置という)問題が生じ、その解決策が未だになされていないのだ」と主張している。

産地価格の低下と同時に生産コストの上昇も発生している。生産者はバレンシアの地にカキが定着して以来、コナジラミなどの虫害や生理障害の発生に対応しなければならなくなつた。また、果実の成熟の速度に応じた脱済処理や大規模流通組織が要求する厳格な基準に的確に対応するためにコストがかかる。このようなコストの増加が、価格の低下と同時に発生しているのだ。

## 62. 2016/17年産の米国のかんきつ生産見通し

米国農務省統計局（2017年10月12日）

米国のカンキツ生産予測—米国農務省統計局2017年10月12日公表—単位：千トン

	生産量			2017/18年
	2014/15	2015/16	2016/17	10月予測
<b>ネーブル等非バレンシア</b>				
フロリダ	1,935	1,474	1,347	939
カリフォルニア	1,415	1,713	1,426	1,270
テキサス	45	52	42	52
全米合計	3,395	3,239	2,815	2,261
<b>バレンシアオレンジ</b>				
フロリダ	2,023	1,862	1,459	1,266
カリフォルニア	334	410	399	399
テキサス	11	13	11	12
全米合計	2,368	2,285	1,869	1,676
<b>オレンジ合計</b>				
フロリダ	3,958	3,335	2,807	2,204
カリフォルニア	1,749	2,123	1,825	1,669
テキサス	56	65	53	64
全米合計	5,763	5,523	4,685	3,937
<b>グレープフルーツ</b>				
フロリダ計	497	416	299	189
白色種	125	96	57	35
赤色種	372	320	242	154
カリフォルニア	174	138	145	152
テキサス	154	174	174	192
全米合計	826	728	619	534
<b>レモン</b>				
カリフォルニア	748	762	744	762
アリゾナ	73	58	60	58
全米合計	820	820	804	820
<b>タンゼロ</b>				
フロリダ	27	16	NA	NA
<b>タンゼリン等</b>				
フロリダ計	98	61	70	43
早生種	62	34	26	NA
ロイヤル	NA	NA	9	NA
ハニー	35	27	23	NA
タンゼロ	NA	NA	12	NA
カリフォルニア	679	787	867	835
アリゾナ	6	NA	NA	NA
全米合計	782	848	937	878

注) 公表数字は箱で示されているが、トンに換算した。

### フロリダ州のオレンジ生産量は5,400万箱(220.4万トン)

フロリダ州の2017/18年産のオレンジ総生産量は5,400万箱(220.4万トン)で、前年の確定生産量を21.5%下回ると予測される。総生産量は非バレンシア(早生、中生、ネーブル)の2,300万箱(93.9万トン)とバレンシアオレンジの3,100万箱(126.6万トン)から構成されている。

結果樹は4,890万本で、2014年以前に植栽された果樹は結果するものとした。結果樹数の現地調査は2017年6月に実施された。最終的な結果樹数は、将来予測モデルに基づく減耗率を勘案した。

2017/18年産の生育当初には干ばつは見られなかった。1月に入って干ばつ傾向が見られるようになつ

た。2月に入り開花が始まったが、地域によっては順調な開花で、一部地域では開花数が少なかった。3月に入り、北部では干ばつ傾向は弱ましたが、南部地域では異常な干ばつがあった。干ばつ傾向があつたため、産地では灌漑を実施する必要が生じた。シーズンの大部分を通じて気温は平年よりも高かった。夏に入り降雨があったため干ばつは解消された。9月になってハリケーン・イルマがフロリダ州のマルコ島に上陸し、カンキツベルトの西側に沿って北上した。ハリケーンにより洪水が発生し、果樹園を水浸しにした。

比較的目的で、この報告書では過去10年間の数値と対比している。過去10年を見ると、平均収量は1億2,400万箱である。また、当初予測と最終確定値の乖離は平均6%となっている。内訳は、当初予測よりも最終生産量が上回ったのが8カ年、下回ったのが2カ年であり、2%の減少から19%の増加の幅にある。

以下、ここで使う「最大」、「最小」、「平均」等は過去10カ年の最大、最小、平均のことを意味している。

### **フロリダ州の非バレンシアオレンジの生産量は2,300万箱(93.9万トン)**

非バレンシアオレンジの生産予測は2,300万箱(93.9万トン)で前年を30%下回っている。ネーブルを除く結果樹数は1,960万本で、1樹当たりの結果数は741個と推計される。これは前年よりも3%下回る。果実の大きさは平均を下回っており、90ポンド箱の収納数は推計289個である。落果率は48%で過去最大値を大きく上回る見込みだ。以上の果実数の推計から、西部地域では昨年に比べて421万箱の減収、その他地域では579万箱の減収が予測される。

ネーブルの生産量は60万箱で、前年を25%下回ると予測される。この数字はネーブルを単独で調査するようになった1979/80年以来、最低のものである。結果樹数は91.3万本で、前年を2%下回った。1樹当たりの結果数は252個で、前年を15%上回る見込みだ。果実サイズは平均を若干上回っており、90ポンド箱の収納数は139個と推計される。落果率は49%と過去最大値を大きく超えている。

### **フロリダ州のバレンシアオレンジの生産量は3,100万箱(126.6万トン)**

バレンシアオレンジの生産予測は3,100万箱(126.6万トン)で前年を13%下回っている。結果樹数は2,840万本で前年を2%下回っている。1樹当たりの結果数は510個と推計される。これは前年よりも13%上回る。果実の大きさは平均を下回っており、90ポンド箱の収納数は推計237個である。落果率は45%で過去最大値を大きく上回る見込みだ。以上の果実数の推計から、西部地域では昨年に比べて320万箱の減収、その他地域では155万箱の減収が予測される。

### **フロリダ州のグレープフルーツの生産量は490万箱(18.9万トン)**

グレープフルーツの生産予測は490万箱(18.9万トン)で前年を37%下回っている。このうち白色種は90万箱(3.5万トン)で赤色種は400万箱(15.4万トン)である。結果樹数は356万本で、前年を6%下回っている。白色種の生産予測量の90万箱は、前年を39%下回っている。結果樹数は前年よりも13%少ない。1樹当たりの結果数は396個と推計される。これは前年よりも4%下回る。果実の大きさは平均を下回っており、85ポンド箱の収納数は推計112個である。落果率は53%で、過去最大であった前年の43%を更に上回る見込みだ。

赤色種の生産予測量の400万箱は、前年を36%下回っている。結果樹数は前年よりも4%少ない。1樹当たりの結果数は385個と推計される。これは前年よりも3%下回る。果実の大きさは平均をやや下回っており、85ポンド箱の収納数は推計117個である。落果率は54%で、過去最大であった前年の40%を更に上回る見込みだ。

### **フロリダ州のタンゼリン等は100箱(4.3万トン)**

タンゼリン等の生産予測量は100万箱(4.3万トン)で、前年を38%下回ると予測される。この中には、タンゼリン、タンゼロと認められる全ての品種が含まれている。

(**訳注**)この公表数字に対して、「フロリダ州オレンジの生産量は5,400万箱ではなく3,100万箱程度しかない」とするフロリダ・シトラス・ミューチュアルのコメントが出されている(ANERICAFRUIT 電子版10月13日)

## 6 3. 世界のザクロ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年10月6日)



9月から市場に出回っているインド産やエジプト産は、それぞれ異なる理由で難しい状況に陥っている。方や降雨によるものであり、方や熱波による影響である。かつてはそれ程人気がなかったザクロだが、過去数カ年でスーパーフードとして人気が高まってきた。このような状況でなければ市場は安定しているのかも知れない。これから収穫を迎える国にとっては、状況は少し好転し安定すると見込まれる。生産量は史上最高とはいかないだろうが、期待ほど収量は多くなくとも品質でカバーすると思われる。

### インド:豪雨による生産の減少

数ヶ月前に豪雨に見舞われたため、ザクロの生産は減少した。このため先週から市場価格は30~40%上昇している。それ以前は生産過剰であったため、市場は山と谷を経験している。

インド産のザクロに対する世界的な需要は大きいが、特にドイツ、オランダで強い需要がある。高品質で知られているからだ。インドの業者は、生産技術への投資を続けていることが他の生産国に対して優位にある理由だ、と経験に踏まえて理解している。

インドのザクロに対する需要は12月から3月までがピークである。

生鮮ザクロはインドの生産者に対し収入の機会を提供している。インド産のザクロは米国、欧州のような新市場において毎年成長を続けている。生鮮ザクロの最大の魅力は食べやすいという点である。このため消費者に好まれ、市場での人気は高い。

### エジプト:熱波によりやや品質低下

インドと違って、エジプトは過去2ヶ月の間に熱波に遭遇した。品質は昨年よりも良好ではあるが、果実の日焼け等の品質上の問題が少々ある。

エジプト産の市場は、現在のところ、マレーシア、シンガポール、ロシア、ウクライナ、欧州諸国である。

インド産とは出荷時期が重複していることからエジプト産のアジア市場進出の障害となっている。問題を困難にしているのは、インド産の方がアジアの消費者にとって馴染みがあるという点だ。このため、エジプトはア

ジア諸国での評判を高めることが必要である。マレーシア、シンガポールサイズでは大きい果実や高品質果実に対して高い対価を支払ってくれるため、エジプトにとって魅力的な市場である。

### **イスラエルも熱波に遭遇**

イスラエル産の早生品種が欧州市場に出回っているが、輸入業者によると価格は安いとのことだ。これは熱波の影響を受け果実サイズが小さく品質が劣るためである。

### **南アフリカはシーズン開始前**

現在ザクロは開花期にあり、シーズンを予測するには早すぎる。西ケープ州、北ケープ州の生産者は昨年よりも15%の増産を期待している。

今シーズンの栽培に当たっては、生産者は特別な注意を払う必要があった。というのも、EUがコドリンガに関する規制措置を講じたからである。ザクロ生産者はカンキツや核果類生産者と緊密な連携を保ち、新たな果樹園の防疫システム、モニタリング、防除に関する新たな方式を導入し、食品に付着する化学物質を削減する努力を行った。EUは南アフリカにとってザクロの最大市場であり、生産物の50%がEUに輸出されることから、今回の変更は大変に重大なことであった。

### **ベルギー及び周辺市場は難しい状況**

ベネルクス諸国では小さいサイズのザクロが好まれる。しかし、小さいサイズの果実は安値で取引されており、販売としては厳しい状況だ。品種ワンドフルが最も主要な品種であるが、同品種が供給されなくなると、Acco、Emek、Herkovitz en Bagwaといったその他の品種が輸入される。

輸入業者を悩ませるのは、国によって好まれる果実のサイズ、輸出国が異なることだ、一般にベネルクス諸国、スカンジナビア諸国では小さいサイズが好まれ、ドイツはトルコ産を好む。大きいサイズのザクロは東欧諸国で好まれている。

### **米国: カリフォルニア産は収穫が遅れるが販売は好調の見込み**

ザクロの収穫は、昨年(10月16日)よりも1週間から10日遅れる見込みで、生産量も少ないと予測されるが、生産者によるとその分「より大きく、甘い」果実が生産されると見ている。

通常の年であれば、全米で600万箱の生鮮果実が収穫される。当初の見積もりでは、今年の収穫量は平年よりも10~15%少ないとされている。

過去2カ年は干ばつの影響で、樹木にストレスが生じたが、今年は地下水に代わり雨水が利用できることから樹木を健全に保つことができる模様だ。しかし、収量が回復するには2年程度はかかると見られる。

### **イタリア: 需要が増加する見込み**

イタリア産のザクロに対する需要は増加している。イタリア国内では国産の他イラン産、エジプト産が流通しているが、消費者は価格が高くても国産を好んでいる。全般に品質的が良好である場合は、原産国を見て購入されている。

イタリア(主にシチリア)では生産量が増加している。しかし、業者はイスラエル産、トルコ産、スペイン産との競合により北欧市場に参入することは難しいと見ている。とはいっても、有機栽培の果実は商機があると考えている。

今年は全ての流通チャンネルでザクロの対する需要や関心が強くなっているようだ。これは生鮮果実に留まらず加工品にも及んでいる。加工品としては特にジュースの人気が高まっている。なお、ジュースは他の果実と混合される場合が多い。

### **フランス: 気象条件は良好**

フランスでは、生産物は主に加工(ジュース)に向けられている。しかし、最近、ザクロが健康に良いとの報告が公表されたため、ジュースも生鮮果実も需要が増加している。生産量は毎年増加しているが、国内生産

量はまだ少なく、主な生産者は3~4名で、生産量は100トン程度である(少なくとも国内生産量の10倍から20倍が輸入されている)。

### **オーストラリア:まだ生産は新しい**

他の生産国に比べると、オーストラリアでのザクロ生産の歴史はまだ新しく、世界全体に占める割合もわずかである。生鮮果実は3月から9月に販売されている。同国の最大の生産者によると、ザクロは健康に良いスーパーフードとされていること、食味が良いことから徐々に需要は拡大しており、消費者への露出も増加しているという。しかし、生産者は、生鮮果実だけでなく、添加物や防腐剤を使用しないジュース、冷凍乾燥果実、パウダーなどの付加価値のある製品への投資も行っている。

オーストラリアの他の農産物と同様に、ザクロの生産が拡大すれば、北半球と季節が逆になることからアジア市場への輸出が期待される。

### **中国:チュニジア産ザクロで人気が生まれる**

チュニジア産のザクロが中国市场に出回った1986年以降、同国産のソフトな食感により、高級果実として中国内で普及してきた。現在、中国の主な産地は河南省、雲南省、四川省であり、市場への出回り時期はそれぞれ、10月上旬から11月中旬、8月下旬方10月上旬、7月下旬方10月上旬である。

毎年の生産量は比較的安定しており、価格は2016年においては前年の10%高であったが、2017年は前年と同程度と見込まれている。

バナナやリンゴのような普通の果実に比べると、チュニジア産のザクロはよく知られていない。また、価格も高いため、購入者は中流階層と上流階層の消費者に限られている。

著者:Heather Wicks

## 64. 台湾、ベトナムに輸出を目指すイタリア産リンゴ

EUROFRUIT 電子版 (2017年10月10日)

イタリアのリンゴ業界は、台湾とベトナムへの市場アクセスを実現するため、両国からの調査チームを輸出関連施設へ受け入れるとともに、来シーズンの市場開放に向けた活動をしている。

10月の第1週には、台湾の植物検疫チームの代表者2名が、ピエモンテ州の Rivoira Giovanni & Figli を訪問したほか、南チロルのトレントにある輸出業者の V.I.P Val Venosta, Melinda を訪問した。

イタリアのリンゴ組織であるアソメラ、フェラーラに拠点を置くイタリア青果物協同組合(CSO)、国の出先機関及び中央政府、貿易グループの ICE、現地の検疫機関などの協力を得て、台湾当局による非関税障壁の撤廃のための二国間によるプロトコルの制定に向けた前進があった。

また、9月18日から22日にかけ、ベトナム当局も同様の視察を行い、ベトナムへのリンゴ輸出の解禁に向けた進展がなされた。

これら調査チームは、ピエモンテ州の Rivoira、エミリア・ロマーニャ州の Salvi Unacoa、南チロルの Vog にも立ち寄った。

「調査チームはイタリアのリンゴ生産会社を訪問し、自らの手で様々なことを実感したはずだ。つまり、包装施設や世界に冠たる生産モデル、台湾側が求める品質の果実の提供が可能であること、などだ」とアソメラの部長は語っている。

一方、ベトナムに関しては、伝統的に中国産のリンゴが主体であるが、最近フランスとポーランドが市場参入を果たしている。

「ベトナムの人は欧州産のリンゴに興味を持っている。こういった中でイタリア産のリンゴは他の競争相手と比べて品種や品質の面で差別化を図ることができる。この点はベトナムや東南アジア諸国への輸出にとって有利だ」と話している。

CSO の新規市場開拓責任者 Rubbi 氏は、「安全性、トレーサビリティー等に関しては、イタリア産のリンゴは台湾が求めている方向に沿ったものとなっている。従って、台湾当局が求める輸出リンゴに対する条件をクリアすることはそれほど困難なことではないだろう」とコメントしている。

一方、ベトナムに関しては、キウイやナシと同様に、市場アクセスを実現する手前まで来ているようだ。「ベトナムとの間で他の農作物を含めた市場アクセスのアプローチを促進する上で、リンゴに関する活動は間違えなく重要である」と Rubbi 氏は話している。



## 65. 中国で「日本アオモリリンゴ」が消費者に美味しさを提供

FreshPlaza 電子版 (2017年10月10日)



「日本のアオモリリンゴ (Japanese Aomori apples)は1980年代に登場した。日本の農業者により、青島とその周辺に導入された。当初からそのパリパリ感、ジューシーさ、甘さ、果皮の薄さで消費者に人気があった。過去数年にわたり流通業界が急速に発展したため、この独特なリンゴを南部の都市でも販売することが可能となり、消費者から好評を博している」と廈門新魏の香港貿易有限公司(Qingdao Aomori Future Fruit Industry)のWei 氏は語っている。

「産地の気候のために、アオモリリンゴは毎年9月20日に収穫が始まり、約1ヶ月続く。この時期はふじが市場に出回る前の空白期間であり、市場の隙間を埋めることになる。国民の祝日(中秋節)の直前に市場に出回り、その蜂蜜のような甘さでアオモリリンゴの販売に対しては大変に楽観的な見通しを持っている」



「中国で生産されているアオモリリンゴは青島の南西部を中心にわずか4ha(38mu一)に過ぎない。青島の農業局の技術チームが、それぞれの生産物に対して品質保証を行っているため、生産量は限定されている。このため、高級品種として見なされている。現在、北京、広州、上海、福建の流通業者やスーパーに販売しているが、販売先では記録的な売行きだ」との話である。

## 66. ハリケーン・イルマでカンキツに7億6千万ドルの被害か

The Packer 電子版 (2017年10月5日)



ハリケーン・イルマの影響で、フロリダ州のカンキツ産業の損失は7億6千万ドルと見積もられている。

フロリダ州農業・消費者局の報告によると暴風雨の被害を受けたのは42万エーカーにのぼるとのことだ。

最も被害が大きかったのは、Collier 郡、Hendry 郡で、9.4万エーカーの農地にエーカー当たり平均2,500ドルの被害あったという。次いで11郡において25.4万エーカーの農地にエーカー当たり1,750ドルの被害があり、Polk 郡、

Martin 郡では7.2万エーカーの農地にエーカー当たり1,100ドルの被害があったとのことだ。

報告によると、被害を受けた農地は、収穫を数週間前に控えていたという。

果実の被害とインフラの被害に加えて、生産者は樹木の損失についても心配をしているが、樹木の被害はこの被害額には含まれていない。

なお、フロリダ州のカンキツ産業は、過去10年にわたりカンキツグリーニング病による被害を被っているが、依然として10億ドルの産業規模を誇っていた。

### その他の農産物被害

ハリケーン・イルマは、フロリダ州の他の果樹や野菜にも1億8千万ドルの被害をもたらし、16.3万エーカーに影響を及ぼした。

多くの作物では栽培を始める直前であったため、被害の多くは既に散布された農薬の効果が薄められたことによる生育期間の短縮、市況への影響、収量の低下などであり、この分の被害が7,200万ドルであるとのことだ。

また、農地に塩水が浸入したことによる被害が3,000万ドルと見込まれ、風で農地に運ばれたゴミの清掃に2,700万ドル、農地のドリップ灌漑施設等の被害が4,000万ドルと見込まれている。

### 大局

フロリダ州の農業被害は、第一次評価として25億ドルと見込んでいる。フロリダ州の農務長官の話では、「将来の農業生産へ与える影響やインフラの被害を加えれば、より大きな経済的損失が算定される可能性が高い。ハリケーン・イルマによる荒廃からフロリダ州の農業を普及するために、可能な限りの支援をしていきたい」とのことだ。長官は被害を受けた生産者への支援の先頭に立っているが、その第一歩は被害額の算定を行うことにある。

## 6.7. 米国食料品小売市場の将来見通し

AMERICAFRUIT 電子版 (2017年10月5日)

米国の食品小売市場はオンライン業界とディスカウント業界の大幅な成長により、2022年までに1兆7,220億ドルの規模に達するとの予測が、国際的な食料品研究グループのIGDから公表された。

アナリストによると、米国の食料品市場は2017年から2022年までに年率3.6%の成長をすると予測している。一方、オンライン業界の成長テンポは、年率18.1%で、今後5年間で最も急成長するとし、IGDでは200億ドル拡大すると見ている。

ディスカウント業界も、ワンドルショップや強力な安売り業態により急速な成長を遂げるとしている。

一方、ハイパーマーケットやスーパーは、ディスカウント業界やオンライン業界との競争に直面して合理化を迫られ、そのシェアを縮小すると見込んでいる。

食料品業界では、ますます価格に敏感になり、デジタルの時代になることに適応するために、継続した投資が必要である。

IGDの北米プログラムディレクターSamuel氏は、2桁成長が見込まれるオンライン業界の成長を促進するいくつかの重要な鍵を指摘している。「オンライン業界は、米国内の様々な分野で成長を遂げている。多くの大手小売業は20年に渡りオンライン業務を継続しているが、過去3カ年で投資と活動の加速化が進んでいる。今後5カ年でオンラインによる食料品販売は200億ドル増加し、米国における食料品小売業界の成長の牽引役となるであろう」と語っている。

### 新分野への拡大

Samuel氏によると、拡大の基礎をなす要素がいくつかあるという。多くの小売業界では、成長を促進するため、店舗のネットワークを使って無料または低料金で便利に集配できるオプションを提供しており、買い物客からの人気は高い。この他、急速に成長している分野には、ApronやHello Freshなどの専門企業が継続して拡大しているような食事キットの提供サービスがある。これに対応してWalmartやKrogerのような既存スーパー・チェーンでも同様のスキームを構築し、eMeals社と共同で集配サービスを行っている。この他、Samuel氏は、最近Albertsons'社がPlated社を買収したような新しいタイプの流通モデルの重要性を強調している。

また、食料品小売業界では、InstacartやShiptのような異業種の会社と提携することにより、比較的少ない投資でオンライン業界に参入する傾向があることを指摘している。「頻繁に購入する製品の受注をより容易にし、オンライン販売を可能な限り便利にすることが小売業界にとって鍵を握る領域である。この分野で重要な役割を果たすのは新技術である。音声による注文などで革命をもたらすだろう。技術は商品の受注にとって重要なだけでなく、注文の履行や配送にとっても大きな役割を果たす。例えば、ロボットを使って商品を出し入れし、ドローンを使って空輸することなどはオンラインの食料品市場の経済性を高める例である」と語っている。

### 更なる展開

Samuel氏は更なる米国食料品市場の展開を強調している。「ディスカウント業界は米国で牽引力を増している。ワンドルショップチェーンは拡大のペースを上げており、毎年、数百の新たな店舗を増加させている。また、ディスカウント業界は生鮮食料品の分野に力を入れている。Aldiは2022年までに米国で2,500の店舗を持つこととしており、Lidlも市場への参入を目指している。ディスカウント業界は米国の中で益々主流となってきつつある。また、コンビニエンスストアも安定しており、セブン・イレブンやCouche-Tardは進めてきた統合がこれからも継続すると見込まれる。一方で、ハイパーマーケットやスーパーは益々難しい時代に突入しようとしており、今後5カ年でそのシェアが低下することが見込まれる。しかし、ハイパーマーケットやスーパーは技術革新によりデジタル世界と現実世界を融合し、新たに顧客を招く努力もするだろう。例えば、健康増進の拠点となったり、総菜や持ち帰りの食事を提供することに投資したり、それらの情報を提供し、買い物客を惹きつけるといったことが考えられる」と述べている。

## 68. 中国のクリ 北南市場での大きな違い

FreshPlaza 電子版 (2017年10月3日)



秋風が立ち始めると、中国ではクリの香りが漂う。食通にとっては甘くて火の通ったクリを食べるには絶好の季節である。

今年のクリは昨年よりも1ヶ月早く出回り始めた。しかし、価格は昨年ほど良くはない。統計によると、今年の価格は全国的によくないようである。

現在、ほとんどのクリは河北省、山東省、湖北省、河南省、広西省から出荷されている。毎年、7月下旬から10月下旬にかけて中国全土の市場にクリが出回る。

中国のクリは需要も供給も多く、9月中旬が需給のピークとなる。

地理的分布に基づくと、北部のクリの価格は高く、河北省の吉祥郡の栗の販売価格が最も高価である。だいたいキロ当たり20元(2.56ユーロ)だ。山東省の臨沂市と日照市は価格的には中間に位置し、キロ当たり9~10元(1.15~1.28ユーロ)である。最も価格が安いのは南部であり、湖北省の黄岡市のクリは4~6元(0.51~0.76ユーロ)といった具合である。

現時点での市場は、販売側も購入側も動きが激しく、商品は迅速に販売されている。中秋節がやってきて、Qianxi(河北省)、丹東市(遼寧省)、皇崗口岸(湖北)のクリがよく売れている。中秋節が過ぎると次第に入荷が少なくなり、市場は終盤を迎える。

需要、供給ともクリに対する人気が下火になるにつれ、価格は安定するものと予想されている。

## 69. スペイン産のカキのシーズンが始まる

FRESHPRODUCE 電子版 (2017年10月3日)

スペインのカキのシーズンは、英国市場でのスペイン産の食品販売支援活動とともに始まり、販売を強化している。

Ribera del Xúquer 地方で生産されたカキは原産地名称保護制度の対象(参考:名称は Kaki Ribera del Xúquer)となっている。昨年は小売促進活動、ソーシャルメディアでの宣伝、消費者・貿易業者を対象としたプロモーション活動が積極的に行われ、販売を拡大した。

昨年の(Ribera del Xúquer 地方における)生産量は10万トンを超え、80%が輸出された。このうち英國市場へは3,500トンが向けられた。

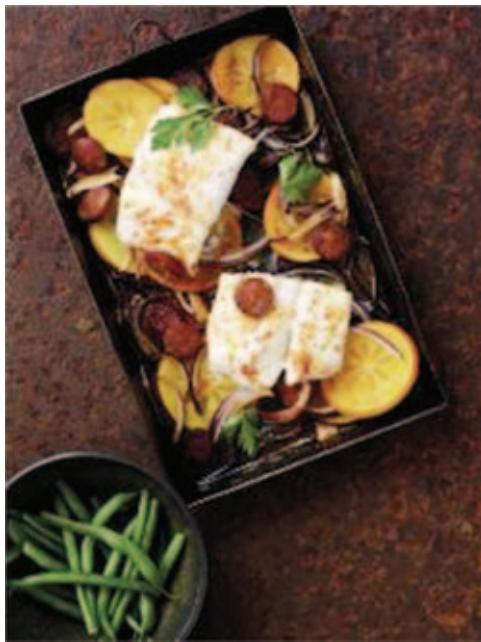
原産地名称保護制度の対象となるカキは英国で販売されたカキの3／4を占め、生産と販売活動は Kaki de la Ribera del Xúquer 規制委員会により行われた。

原産地名称保護制度の対象となるものは、Ribera del Xúquer で生産されたカキ品種 Rojo Brillante に限られ、生産者がトレーサビリティ試験を行うことが要件となっている。

小売業者に対するサポートと併せて、スペイン産の食品に係る販売活動では、シェフやジャーナリストと協力して、レストランや雑誌で「独自の販売の提案」を行っている。

規制委員会の責任者である Perucho 氏は、「市場をバックアップすることは大変に重要だ。カキは消費者に対してあまり知られていない。販売促進活動を通じて果実を理解してもらい、購入してくれることを期待する。加えて原産地名称保護制度の対象となっているこのカキは、マンチェゴ・チーズ、セラーノ・ハム、リオハ・ワインと並ぶ最高品質のものだ。消費は毎年増加しており、消費者の認識も向上している。販売促進活動はまさしくこの流れを加速させるものだ」と語っている。

「総じて昨シーズンは順調に推移した。11月の降雨で収穫が難しかったが一昨年よりも生産量が増加した。今年も生産量は同様で、昨年よりも10%増加すると予想されている。果実のサイズも大きいようだ」と締めくくった。



レシピの提案とともに販売促進活動を行っている

## 70. 米国今シーズンの果樹生産見通し、カキの輸入

FreshFruitPortal 電子版 (2017年10月3日)

今シーズンの仁果類、オレンジ、ブドウ、クランベリーは減収の見通し、との予測を米国農務省(USDA)農業マーケティング局(AMS)が公表した。

今回の見通しは、9月28日に「果樹及びナツツ類の展望報告」として公表されたもので、現時点の情報を集約したものである。

これによると、米国のリンゴ生産量は前年を7%下回る104億ポンド((472万トン)であるが、2000年以降では豊作の部類に入る。

「前年を下回る生産量で価格の上昇が期待されるところだが、前年産の在庫が豊富であることと、2016/17年産の後半の価格が低価格であることから、今シーズンの初期のリンゴ価格は軟調に推移するのではないか」とAMSは報告している。

ナシの生産量は4年連続して減少して14.1億ポンド(64万トン)と予測し、前年より4%減少するとしており、価格は堅調との見方である。ワシントン州の減収が全国の生産量の減少を招いていると補足している。

ブドウの生産見込みは前年を2%下回る150億ポンド(681万トン)と予測しているが、レーズン用が減少する主産地のカリフォルニア州の減収割合と同程度の予測である。一方、生食ブドウに関しては、「カリフォルニア州では減収は1%未満であり、過去5カ年と同程度の生産量と予測され、需要に見合った十分な供給が可能」としている。

カンキツに関しては、昨シーズン(2016/17年)の最終生産予測を777万トンとし、前年を11%下回ったとしている。2017/18年の予測に関しては、カリフォルニア州のネーブルオレンジは前年に比べ10%の減少と予測し、「ハリケーン『イルマ』による被害は調査中だが、被害前の予測によるとフロリダ州の生産量も2016/17年を下回る」としている。

クランベリーに関しては前年を6%下回るもの、史上第2位の生産量と予測している。AMSでは生産量が連続して増加し、初期在庫も潤沢であることから価格上昇は抑えられると見込んでいる。

クルミに関しては、3年連続して豊作であったもののカリフォルニア州のクルミは2017/18年は減収が見込まれるとしている。

一方、アーモンドに関しては、「2016/17年を上回る記録的な豊作であり、昨シーズンの在庫が潤沢であることから2017/18年の価格は抑えられる」と見込んでいる。

### ニュージーランドからのカキの輸入を解禁

米国当局は、ニュージーランドからの生鮮カキの輸入を一定の規制の下で許可することとした。

米国農務省動植物検疫局(APHIS)は、果樹園の認証、病害虫防除、収穫後の処理、被害果の除去、履歴の追跡、サンプリングを要件とするとしており、「加えて温水で処理し、空気組成を換えた環境で冷却してハマキ蛾を完全に死滅させることが必要」としている。

更に、「規則通りの方式で生産され検疫対象の病害虫がないとする検疫証明が必要」としている。

この最終規則は2017年10月3日に公表され、30日後の11月2日から効力が発揮される。

ニュージーランドカキ産業会議によると、ここ数年のカキの輸出量は、12,800トンを前後しており、2016年の主な輸出先は、オーストラリア、タイ、シンガポール、香港のことだ。

## 71. リンゴ新品種アンブロージア収穫始まる

FreshPlaza 電子版 (2017年9月29日)



コロンビア・マーケティング・インターナショナル社(CMI)は昨年よりも4週間近く遅れてアンブロージア(Ambrosia™)の収穫を行っているところであるが、消費者からは何時購入できるのかという問合せがひっきりないだそうだ。

CMI社の販売担当副社長のHarter氏によると、「アンブロージアの収穫量が増加することは消費者にとって良いニュースだ。生産量は昨年よりも20%増加する見込みだ」とのことだ。

「今年のCMI社のアンブロージアは色も味も素晴らしい、言わばビンテージものように最高の出来だ。経験上、消費者への販売が促進されるだろう」との現場からの報告に副社長は興奮しているそうだ。

同社のシニア・ストラテジストのLutz氏によると、ニールセンの調査では昨シーズンはアンブロージアの販売が急上昇し、全米で第8位の品種に躍り出たとのことだ。「ニールセンのデータによると、昨シーズンはマッキンタッシュを抜いて小売販売額で第8位に上昇した」と語っている。

「まだまだ販売拡大の余地がある。ニールセンの調査では全米で15,000を超えるスーパーで販売されていた。アンブロージアの売れ行きは順調だが、まだ小売業者の55%でしか販売されていない。今年の生産量が20%増加することでこれまで販売できなかつた小売業者もこのホットなリンゴ品種を販売することができるようになるだろう」とLutz氏は述べている。

副社長によると、昨年はジャンボサイズのリンゴだったが、今年はポーチバッグで沢山のリンゴを販売することができるだろうと期待している。「昨年はリンゴのサイズが大きかったので、丁度良い大きさの販売用バッグを準備できなかつたが、今年は大丈夫だ。2015年には2ポンド入のポーチバッグの販売で全米第2位であった。また、ポーチバッグ全体の販売でも第2位の記録を作った。昨年は果実サイズが大きくて思うに任せられなかつたが、今年は果実サイズが丁度良いのでポーチバッグの販売は盛り返すだろう」と語っている。



情報源:www.cmiorchards.com

## 72. ハリケーン「イルマ」によるカンキツ被害

FreshPlaza 電子版 (2017年9月27日)

ハリケーン「イルマ」が9月初旬にフロリダ州及び周辺を襲ってから未だ日は浅いが、同州のグレープフルーツ生産者は被害の深刻さに直面している。

フロリダ州ベロビーチの Seald Sweet International 社の Brocksmith 氏によると、「どの生産者も25~40%の被害を受けている」と3つの生産地(リバー、リッジ、湾岸地域)を指して話している。このうち、リバーと湾岸地域はグレープフルーツの生産にとって重要な地域である。

同じくベロビーチの Premier Citrus 社の Haller 氏によると、「リバーの20%からと湾岸地域の80%から何らかのことを聞いている。私の感じるところによると、フロリダ州の全ての果樹園で、程度の差こそあれハリケーンの影響を受けている」とのことだ。



### 湾岸地域の被害

イルマにより何時間も風速100マイル以上の風が吹き荒れた湾岸地域では、被害はより深刻である。Brocksmith 氏によると、「50~70%の果実が喪失したのではないか」と語っている。「湾岸地域が最も深刻で、次いで内陸地域、(インディアン)リバー地域だ。ただ、最も根深い問題は河川沿岸だ。ハリケーンの影響で16-21インチの深さの浸水があったとの報告もある」そうだ。

フロリダ州カンキツ局の Bartow 氏によると、「被害の全容を把握するには時期尚早だ。しかし、初期段階の推計ではフロリダ州のグレープフルーツの被害は50%かそれ以上であった」とのことだ。(フロリダ州のカンキツ全般に関しては、地面に果実が接触した樹の割合は30~70%と見込まれている)

### 輸出に打撃

全体的に見て供給不足は輸出に大きな影響を与える、と Brocksmith 氏は考えている。「輸出量は随分少なくなるだろう。Seald Sweet 社では、輸出と国内出荷を併せて30万箱を見込んでいたが、グレープフルーツは被害が最も大きい湾岸地域で多く栽培されているため、出荷できるものは5~7万箱又は当初の見込みの半分以下だろう」と述べている。(フロリダ州のグレープフルーツは、日本、韓国、台湾、フランス、英国、ベルギー、ドイツに輸出されている)

困ったことは、Seald Sweet 社にしろ、Premier Citrus 社にしろ、ハリケーンの来週時に収穫の準備が整っていたという点だ。「まさにハリケーンが来襲した週かその次の週に収穫を始めようとしていた。しかし、集出荷施設などのインフラを守ることが優先されて、収穫や選果・梱包ができなくなった」と Brocksmith 氏は語っている。

### その他の懸念

果実の被害は直近の課題であるが、長期的視点からの問題も大きい。「樹木が枯死しないか心配している。湾岸地域では浸水した場所も多くあり、ポンプで排水することも難しかった。50から96時間浸水していた果樹園もある。また、96時間を超えて浸水した果樹園も多い。浸水による被害がどの程度かは不明だ」と Brocksmith 氏は語っている。フロリダ州カンキツ局の事務局長 Shepp 氏によると、衰弱した果樹から更に落果もあるだろうとのことだ。

## **価格への影響**

当然のことではあるが、フロリダ州のグレープフルーツは価格が上がるという話しがある。「人々を脅かすつもりはないが、大変量が少なくなっているので価格は上昇するだろう」と Brocksmith 氏は語っている。例年、シーズンの始めにはグレープフルーツの価格は高騰し、3~4週間で大幅に価格は低下する。「今年は、需要が供給を大幅に上回るため、シーズンを通して高価格であることが期待できる」と氏は述べている。

とはいえるものには限度というものもある。「今年は生鮮果実やジュースに対して顧客は高い金を支払ってくれるだろうが、市場価格の高騰に我を忘れてはならない。価格が上昇すると販売量が少なくなることがあるのだ」と Haller 氏は述べている。

## **回復への支援**

復興への努力が進むにつれ、生産者は米国議会に復興に必要な支援を求める事になるだろう。「今回の自然災害では生産者が継続的に復旧努力をすることは困難である。作物保険では生産に必要な経費は対象になるが、果実の損失に対する支払いはない。生産者に改植を促すための仕組みが必要だ。業界はフロリダ州に多くの資金を提供するだけでなく、被災家族への支援も行っている。生産者にとっては、既にカンキツグリーニング病で生産量が減少している上に今回の危機を乗り越えるにはハードルが高すぎる」と Haller 氏は語っている。

著者:Astrid van den Broek

## 73. 韓国のリンゴ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年9月26日)

2017/18年(7月→翌年6月)の韓国の生鮮リンゴ生産量は、前年の576,369トンから2.8%減少して56万トンと見込まれる。これは、主産地の慶尚北道で6月初旬に発生した雹害によるものである。栽培面積は前年に比べて0.9%増加する見込みである。単位面積当たりの収量は雹害と1樹当たりの着果数の減少で、前年に比べて減少する。

韓国のリンゴ業界によると、雹害があった慶尚北道では、1.1万トンの減収とみており、雹害を受けたリンゴ面積は3,000haとしている。

韓国の果実生産量は約270万トンであり、カンキツ(タンゼリン等)の割合が最も高く、2014-2016年の3か年平均で692,000トンである。次いで生産量が多いのはリンゴであり、同じく540,000トンである。リンゴ生産量は全果実(582,000トン)の中で21.6%を占めている。

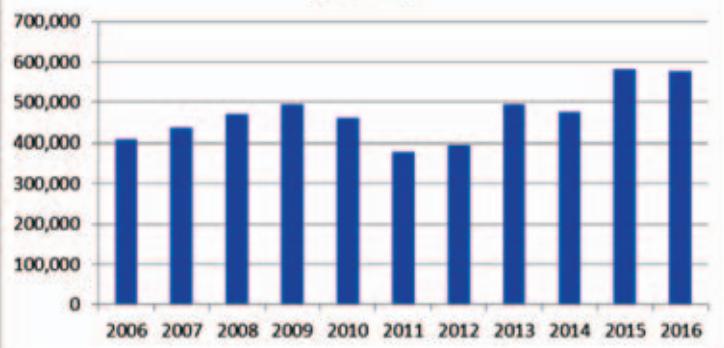
韓国の果実生産量(単位:トン)

	合計	リンゴ	ナシ	ブドウ	タンゼリン	カキ	モモ	その他
2010	2,489,134	460,285	307,820	305,543	614,786	390,630	138,576	271,494
2011	2,458,489	379,541	290,494	269,150	680,507	390,820	185,078	262,899
2012	2,374,247	394,596	172,599	277,917	692,186	401,049	201,863	234,037
2013	2,522,616	493,701	282,212	260,280	682,801	351,990	193,243	258,389
2014	2,696,676	474,712	302,731	268,556	722,325	428,363	210,335	289,654
2015	2,696,862	582,845	260,975	258,950	672,045	384,525	237,711	299,811
2016	N/A	576,369	238,014	218,000	N/A	126,000	260,000	N/A

資料:韓国農業食料農村部

2012/13年及び2012/13年にリンゴの生産量が減少しているが、これは台風による落果等のためである。しかし、2015/16年及び2016/17年は豊作で、50万トンを超えている。これは栽培面積の増加と気象条件に恵まれたためである。

Korea's Apple Production by Year  
(Unit: MT)



栽培品種の中ではふじの割合が最も高く、全体の70%を占めている。ふじは優れた特性を持っており、パリパリ感がありジューシーであり、貯蔵性が高い(180日間貯蔵できる)。ふじは韓国消費者の中で最も人気高く、11月に収穫され、翌年の7月まで流通する。Hongro とつがるが第2位と第3位の品種であり、シェアは15.7%、4.5%を占めている(2016/17年)。

韓国のリンゴ 品種別栽培面積 単位:ha

	つがる	Hongro	Yangkwang	Gamhong	ふじ	その他	合計
2012	1,613	4,285	733	521	21,654	1,927	30,734
シェア(%)	5.2	13.9	2.4	1.7	70.5	6.3	
2013	1,534	4,414	709	535	21,330	1,928	30,449
シェア(%)	5	14.5	2.3	1.8	70	6.3	
2014	1,501	4,558	687	539	21,442	1,977	30,702
シェア(%)	4.9	14.8	2.2	1.8	69.8	6.4	
2015	1,486	4,820	680	572	21,988	2,064	31,620
シェア(%)	4.7	15.2	2.2	1.8	69.6	6.5	
2016	1,496	5,239	678	635	22,985	2,266	33,330
シェア(%)	4.5	15.7	2	1.9	69	6.8	

資料:韓国農村経済研究所

収穫時期は品種により異なる。早生の品種であるつがるの収穫は7月、8月(原文のママ)であり、中生の品種の Hongro、Yangwang は9月、10月に収穫される。

最近、Hongro の栽培面積が着実に増加している。これは、韓国の休

日である中秋節の贈答用として用いられるためである。



### 栽培面積

2017/18年のリンゴ栽培面積は、前年より0.9%増加し、33,600haと見込まれる。リンゴの主産地である慶尚北道と忠清北道ではそれぞれ0.5%、1.5%栽培面積は減少しているが、江原道と全羅北道では、地球温暖化によるリンゴ産地を移動させるという地域戦略に即し、それぞれ11.9%、7%面積が増加する見込みであるためだ。韓国のリンゴ業界では、今後とも江原道に産地が移動すると見込んでいる。

地域別に見ると、慶尚北道の栽培面積が最も多く、20,178haと全体の60%を占めている。次いで忠清北道が4,024ha、12%、慶尚南道が3,387ha、10%となっている。

リンゴの栽培面積全体は、2009/10年の31,000ha から2016/17年には33,000ha と増加している。これは新植が進められていること、古いリンゴ園を改植する農家が増加しているためである(原文のママ)。加えて、数年前にチリ及び米国と締結された自由貿易協定により、ブドウ栽培農が、リンゴ栽培に転換していることも増加の要因となっている。

ここ数年、栽培面積には大きな変動はないが、生産量は気象条件に応じて変動している。2012/13年は降雨と台風により褐斑病が多発し、収量は10a当たり1,900kgに留まった。2014/14年、2014/15年は天候に恵まれ、台風、病害の影響はなかった。2015/16年は開花期に好天に恵まれ、また、表年であつたことから収量が高かった(10a当たり約2,600kg)。2016/17年は単位面積当たり収量が前年を9%下回る10a当たり2,414kgであった。

### 地域別リンゴ栽培面積 単位:ha、%

	2015/16年	2016/17年	2017/18年	対前年増加率
江原道	721	831	930	11.9
忠清北道	3,984	4,087	4,024	-1.5
忠清南道	1,283	1,600	1,574	-1.6
慶尚北道	19,247	20,083	20,178	0.5
慶尚南道	3,444	3,339	3,387	1.4
全羅北道	2,223	2,360	2,525	7
その他	718	1,000	982	-1.7
合計	21,620	22,300	22,600	0.9

	2012/13年	2013/14年	2014/15年	2015/16年	2016/17年
結果樹面積(ha)	21,600	21,600	21,400	22,000	23,900
未結果樹面積(ha)	9,100	8,800	9,300	9,700	9,400
面積合計(ha)	30,700	30,400	30,700	31,600	33,300
単位面積収量(kg/10a)	1,824	2,285	2,218	2,654	2414
生産量(トン)	395,000	494,000	475,000	583,000	576,000

消费

韓国の1人当たりリンゴ消費量は、生産量と連動しており、2011/12年から増加している。2015/16年の1人当たりリンゴ消費量は、カンキツ(タンゼリンで13.2kg)に次いで第2位となっており、11.4kgである。2017/18年は生産量が減少することから、若干減少し10.9kgと見込まれる。



韓国のリンゴ業界では、果実の大きさを重要視している。これは、韓国の2大祝日である、2月の旧正月と9月又は10月の中秋節の贈答用にリンゴが使われるからである。リンゴは、大、中、小の3つのサイズに分類される。大は251gから350gであり、中は151gから250g、小は51gから150gである。韓国農村経済研究所の最近の調査によると、大部分の消費者は、家で消費するリンゴは中のサイズを選択するが、贈答用には大のサイズを選択している。

かし、過去数カ年で急速に単身世帯が増加しているため、中、小サイズに対する需要が増加しており、この傾向は今後も継続するものと見込まれる。国内の流通業者も、贈答用にはサイズの大きいリンゴは引き続き需要があるものの、家庭での日々の消費には中、小サイズの果実の需要が高まると見ている。

2016年9月28日に施行された腐敗防止法及び贈収賄禁止法に伴い、5万ウォン(44ドル)を超えるリンゴやナシを含む贈答用の果実の需要は目に見えて減少した。こういったことから、今後数年間は、大きいサイズのリンゴを含む贈答用の需要は減少すると見込まれる。反対に、消費者の需要の変化に対応して中、小サイズの果実生産が増加すると見込まれる。

**果実の1人当たり消費量**

	果実合計	ナシ	リンゴ	ブドウ	カンキツ*	カキ	モモ	その他
2005	62.7	8.7	7.5	8.2	13.1	4.8	4.6	13.2
2011	62.4	5.5	7.6	6.3	13.6	3.3	3.7	22.4
2012	61.8	3.1	7.9	6.6	13.8	3.3	4	23.1
2013	63.2	5.2	9.8	6.3	13.5	3	3.8	21.4
2014	66.5	5.5	9.4	6.5	14.3	3.7	4.2	22.9
2015	66.7	4.7	11.4	6.4	13.2	3.3	4.7	23

\* : カンキツには輸入オレンジを含む

## 加工

2017/18年の加工仕向量は、6.5万トンに増加すると見込まれる。これは、腐敗防止法及び贈収賄禁止法により在庫量が増加したこと及び2017年6月の雹害により被害果が加工に回るためである。一般に、韓国では市場流通に乗せられない果実が果汁用として加工に向けられる。2015/16年には約5.7万トンのリンゴが加工に向けられたが、これは2000年以降で最高の水準であった。

**リンゴの加工仕向量の推移**

	2000	2005	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
加工仕向量(トン)	37,971	29,368	28,087	36,594	38,566	35,559	40,151	57,439	-
同上の割合(%)	7.8	8	6.1	9.6	9.8	7.2	8.5	9.9	-

## 輸出

韓国では、国内で販売されるリンゴの価格は輸出される場合よりも高く取引されるため輸出に興味を持つ生産者は少ない。年間輸出量は、生産量の約1%程度であり、2016年(暦年)の輸出量は約4,000トンであった。輸出先は台湾が60%を占め(2,389トン)、次いで、シンガポール(10%)、香港(11.6%)であった。

台湾への輸出は2010年の7,300トンが過去最高であったが、2011年には2,000トンに減少した。これは台湾当局により基準値以上の残留農薬が検出されたことによる。このため、2011年当初以降、台湾当局から検査割合は20%に引き上げられたが、2015年以降は通常の検査割合に引き下げられた。

**韓国の生鮮リンゴ輸出量(暦年) 単位:トン、%**

	2000	2005	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
輸出総量	2,320	3,167	8,437	3,132	1,694	2,788	2,217	3,502	3,947
台湾への輸出	-	3,040	7,296	2,082	1,001	1,662	892	2,071	2,389
同上の割合	-	96	86.5	66.5	59.1	59.6	40.2	59.1	60.5

韓国から米国への生鮮リンゴの輸出は、2009/10年に検疫協定が合意されるまで認められていなかった。

**国内価格と米国への輸出価格の対比(暦年) 単位:kg当たり**

	2014	2015	2016	3年平均
国内卸売価格	ウォン	5,400	4,100	3,800
米国への輸出価格	ドル	2	2.4	2.27
為替レート	ウォン/ドル	1104.33	1172.24	1182.28

しかし、合意後も輸出量は極めて少ない(2010/11年:65トン、2011/12年31トン)。これは、米国動植物検疫局が求める検疫プロトコル(1.1度で40日間

処理すること、臭化メチル処理を行うこと等)が厳格であるためでもある。

## 輸入

韓国は約1万トンのリンゴ加工品(果汁、ドライフルーツ)を輸入しているが、生鮮果実については検疫上の理由から輸入を認めていない。輸入に際しては、韓国の検疫当局が定めた8段階に渡る輸入リスクアセスメントをクリアしなければならない。現在、米国と日本は第5段階、ニュージーランドは第3段階、中国とイタリアは第1段階にある。

## 74. 褐変しない遺伝子組換えリンゴ米国で販売

AMERICALFRUIT 電子版 (2017年9月25日)



Okanagan Specialty Fruits (OSF) 社は、「この秋、世界で初となる褐変しないリンゴの商業販売に取組んでいる。

北極リンゴ(Arctic Apples)というブランドで販売されるこのリンゴは、遺伝子組換えにより、カットしても果肉が褐変しないリンゴであり、今年の初めに試験販売店で扱われて以降、全米で話題を呼んできた。

このリンゴは遺伝子サイレンシングという技術を用い、ポリフェノールオキシダーゼ(PPO)の働きを抑えるものであり、カットしたり、果実が傷ついた場合であっても酵素の働きが抑えられて褐変が起らないという仕組みである。

カナダのブリティッシュコロンビア州サマーランドに本社を置く小さな企業である OSF によると、この技術は果実のそれ以外の特性を一切変更しない、一点集中の遺伝子改変技術であるという。

現在、ワシントン州で80ha が栽培されており、来年には倍増すると見込まれている。Carter 社長によると、「初期の販売量は9,000トンを計画しており、世界の大手小売業界や食品サービス産業からの需要を満たすまで生産を拡大するつもり」とのことだ。

これまで、褐変しない品種として3つ(ゴールデンデリシャス、グラニースミス、ふじ)が米国政府から承認されており、ガラが承認待ちとなっている。更に品種の追加が控えている。

今シーズンは10オンス入のバッグ(写真)で販売されるが、付加価値を付けた新たなパッケージの開発も進められている。「このバッグの形状は、褐変しない、防腐剤の入っていないという特性を強調するもので、消費者が求める利便性を提供するものだ。加えて、研究によると、子供達はリンゴをスライスすることで劇的に摂取量が増えたそうだ」と社長は語っている。

リンゴは10月から12月まで数十の店舗で売り切れるまで販売される。しかし、社長は食品サービス業界とのチャンネルの強化を熱望している。ブランドの認知を高める上で、ソーシャルメディアキャンペーン、トレードショーへの参加、その他のイベントへの参画は大いに役に立っている。

最終的に OSF は北極ブランドを世界中に広めたいと考えており、米国での販売に次いでカナダ市場でのキャンペーンを考えている。長期的には、規制当局からの認可を得て、幅広く販売することを目指しており。現在は遺伝子組換え作物が事実上禁止されている欧州にも販売を行いたいと社長は願っている。「バイオテクノロジーにより改変された食品に対しては、各国は独自の規制を設け、独特の承認方式を持っている。現時点では欧州で承認を得るための取組は始めていないが、可能性を諦めたわけではない」と社長は述べている。

同時に、年間供給を可能にするため、南半球での生産も視野に入れているが、現時点では取組は進んでいない。

## 75. アジア市場を狙うニュージーランドのリンゴ2品種

ASIAFRUIT誌(2017年9月号)



新品種ブリーズ(Breeze)

世界のリンゴ市場には新品種で溢れているが、Freshco社はアジア市場で拡大の余地がある2つの新品種ブリーズ(Breeze)とソーニヤ(Sonya)を所有している。

ブリーズは、ニュージーランドで最初に収穫される早生品種の一つで、「赤く甘く、食べるとパリパリ感がある」とゼネラルマネージャーのPool氏は説明している。一方、ソーニヤはNavis育種計画により育成された品種で、デリシャスとロイヤルガラの交配によるものである。「とても甘いリンゴでアジアの消費者にぴったりだ。また、独特の腰高の形状をしている」とのことだ。

Pool氏は市場で新品種が多く出回っていることは承知の上で、知的所有権を有するこの2品種の商業販売に向けた投資を進めようとしている。

「生産面にも力を入れる必要はあるが、市場の開拓が重要だ。だから、アジアに事務所を設けた。これら新品種のプロモーションのため、輸入業者、小売業者のパートナーを支援していく考えだ」と語っている。Freshco社のマーケティングマネージャーのCross氏は、2年前に拠点を日本に移し、市場関係者とより密接な連携に取組んでいる。

ブリーズは10年かけて開発した品種であるが、Freshco社がニュージーランドで商業生産を開始して2年が経つ。「今年は10万箱を生産したが、我が社と協力者により5~6年後には生産量を3倍に増やしたい。数年以内に30万本の植栽を行うつもりだ」と語っている。

生産の観点からは、ブランドを確立するためには周年供給が鍵となる。Freshco社では、米国の生産・選果・販売業者であるSage Fruit社とパートナー関係を結び、ニュージーランドのオフシーズンにおける生産を進めている。「今年中には米国でブリーズの出荷を始めたい。Sage Fruit社の生産環境は我々とよく似ている」とPool氏は語っている。

Freshco社の販売量はニュージーランド国内で120万箱に達する。この内、約40%は自社の園地で生産したものだ。「今年は生育環境に問題があったため、昨年よりも生産量がやや少ない」そうだ。同社が知的所有権を有するリンゴの生産量は15%であるが、今後数年内にその割合を拡大したいとしている。



新品種ソーニヤ(Sonya)

Freshco社では、数年来、ソーニヤを米国、ロシアに輸出してきたが、最近はアジア市場、特に中国、ベトナム、タイに輸出している。「中国での販売拡大は目覚しいものがある。消費者への認知度を高めるため、輸入・販売業者Yunsun社と連携している最中だ。オンライン販売にも力を入れている。というのも、ソーニヤについては市場で親しまれているような鮮やかな果皮の色を持たないためだ」と語っている。

Freshco社の新品種に限らず、ニュージーランドのリンゴはベトナムでも良い成果をだしている。「ベトナムでは消費者は品質を重視している。近代的な小売業者は販売に当たり大きな役割を果たしている。従って、ベトナム市場への期待は大きい」とPool氏は考えている。

Freshco社の発展にとって、この他に重要な市場は、臭化メチル燻蒸という面倒な検疫上の要件が課されているものの日本である。「販売上の観点から見ると、日本の消費者はニュージーランドのリンゴを理解しており、商業的に十分な機会があることは疑う余地がない。課題は植物検疫上のプロトコルであるが、日本側に理解してもらえるよう、努力を積み重ねている」とのことだ。

伝統的には、リンゴを切ってデザートとして分からち合って食べるというのが日本のスタイルであるが、スナックとしてリンゴを食べるようになり習慣が変化している。「日本側パートナーの加工業者が、皮を剥きカットしてパックに詰めて、セブンイレブンで販売している。日本での販売は4年が経過した。今年は市場の求めに応じて20コンテナを輸出した」とPool氏は説明してくれた。

## 76. 世界のキウイ市場

FreshFruitPortal 電子版 (2017年9月22日)



需要は世界的に増加しているものの、供給は悪天候の影響を受けています。業者によると、「ニュージーランドでは暖冬と豪雨により生育環境が悪い」とのことだ。加えてチリの生産量も減収が見込まれる。現在イタリア産が市場に出回り始めるが、産地によっては霜害と夏の乾燥で生産量は少ない見通しだ。「この結果、需要は引き続き増加傾向にあるものの、供給量の確保は大変厳しい」と業者は話している。

### ニュージーランド: ゼスプリは新規市場を開拓

ニュージーランドのキウイ輸出組織であるゼスプリは、今シーズン、力強い成長を見せている。日本、中国市場などではサンゴールドが引き続き増加している。東南アジア、インド、北米市場でも同様である。欧州市場でも同じように拡大しており、年間を通じて需要が伸びている。今シーズン、最も販売が多いのは日本市場で2,300万箱であり、次いで中国市場は2,200万箱である。

一方、北半球産では販売が間に迫っている。イタリアの生産量は5百万箱と見込まれ、増加は著しい。ゼスプリ社としては需要の伸びが供給よりも上回ることを目指しているが、これは成功するものと見られる。この結果、市場に関して優先順位を設ける必要が生じている。今後数年内に、栽培面積は、欧州で1,800ha 増加し、ニュージーランドでは400ha 増加する見込みだ。同社としてはサンゴールドの生産拡大に力を入れていることから、緑色と黄色キウイの割合は、近々 50:50になるものと見られる。

### 米国: カリフォルニア州では生産量が安定

カリフォルニア州の生産予測が9月の始めに公表された。生産量は前年と同程度と見込まれ、昨年の31,324トンに比べ、今シーズンは30,449トンと予測されている。ただ、消息筋によると、これは控えめな数であるとのことだ。同州は全米の98%のキウイを生産しており、80%が国内向けである。わずかな量がメキシコ、カナダ、日本に輸出されている。市場への出荷は9月下旬に始まり、シーズンは4月まで続く。

国内産が出回る時期においても、少量がイタリア、ギリシャから輸入されている。ゼスプリ社ではイタリアがサンゴールド生産の拠点となっているからだ。3月から10月にかけてはチリ及びニュージーランドから輸入さ

れている。今年もキウイに対する需要は根強い。緑色キウイに対する需要も強いが、黄色品種に対する需要により成長がもたらされている。

### **市場の品薄を利用したいギリシャ**

先週(9月中旬)、グリーンライトなどの早生の緑色品種の収穫が始まった。未だ量は少ないが、ヘイワードの収穫は10月中旬から始まる。その頃から、出荷量は昨年並みになると見込まれている。現時点での入手可能な量は限られているものの、輸出業者としては、ニュージーランド及びチリ産のキウイの出荷が早く終わった市場状況を活かして収益を得たいと考えている。従って、現時点での需要は強く価格は高い。加えて、イタリアで霜害があったため、業者はイタリアに対する競争力も強いと見込んでいる。また、今シーズンはアルゼンチン市場への輸出も期待している。とはいえ、欧州のキウイ生産国にとって最も魅力的な市場はアジアである。特に広州、上海などの中国市場では需要が大きい。

黄色キウイの生産量は限られている。収穫は政府がライセンスを発行してから始まる。業者によると、収穫を始めるには糖度を測定しなければならないそうだ。ある会社では9月14日に収穫の許可が下りたそうで、収穫は10日間続くそうだ。黄色キウイの供給量は限られているものの、今後数年で生産は拡大する見込みだ。しかし、業者によると市場からどのように評価されるかを予測するのは難しいと言う。黄色キウイはアジア市場を目指している。

### **スペイン:供給よりも需要が強い**

現時点ではチリからの輸入品が市場に出回っている。国内産の供給は10月下旬～11月初旬に始まる。輸入業者によると、チリ産の品質は良好のことだ。この業者によると、チリ産の品質はここ数年で改善されているとのことで、以前のチリ産は安く取引されていたが、現在は他の生産国と価格は同等だそうだ。欧州ではチリ産に対する需要は拡大しているが、チリとしては中南米やアジア市場に目を向けている。価格は堅調に推移しているが、大きなサイズの果実は不足している。輸入業者に言うには、より多くの輸入先を開拓することが必要とのことだ。というのも、スペインでのキウイの消費量は年間13万トンであるが、国内で生産されるものは2万トンに過ぎないからだ。輸入先の一つは、スペインへ輸出を期待するポルトガルである。同国では、9月末には収穫が始まる。

スペイン産のキウイは、昨年よりも15%増加すると見込まれる。これは昨年が不作であったことと新規植栽園が結果樹齢に達しているためだ。果実の品質は、乾燥した夏と低温の秋のお蔭で良好の見込みだ。ただ、果実のサイズは小さいと見込まれる。

### **国内生産で賄うフランス**

フランスでは国内市場に出回るキウイの大部分は国産品である。一部はイタリア、ギリシャから輸入される。ニュージーランドから輸入される量はもっと少ない。というのも、欧州産のキウイは、年間約11ヶ月は販売可能であるからだ。

大部分の産地は同国南部に位置しており、収穫は12月から5月初旬まで行われる。冷蔵貯蔵により、7～9ヶ月は保存可能である。国内向け出荷に加え、量は少ないがアフリカへの輸出も行われている。最も多い品種はヘイワードであり、黄色品種との競合はほとんどない。生産サイドとしては、まだ拡大の余地があるとのことだ。

欧州産のキウイのシーズンは需要の強い環境の中で始まったばかりである。夏の期間は夏果実との競合があるため、キウイ需要は減退する。実際、キウイの競合果実は、夏はベリー類で冬はリンゴ、ナシである。一般に年間を通して需要は安定しており、価格はサイズ、時期、原産国に応じて2.50～3ユーロの間である。

### **イタリアは不安定なシーズン**

気象条件が悪かったため、ヴェネト州での生産量は20%減少する見込みだ。加えて、果実サイズは、中～小である。ただし、品質に関しては良好だと生産者は満足している。カラブリア州では生産量は不確実である。黄色品種も緑色品種も減収が見込まれている。収穫は10月25～28日頃からと予想されている。

収穫開始時期は依然として重要な課題である。収穫が早すぎると消費者にとって品質が悪く不評であるからだ。研究者によると緑色品種の収穫基準は黄色品種には当てはまらないとしている。緑色品種は糖度が7で収穫されるが、黄色品種は最低8度が必要とのことだ。

カナダがイタリアの植物検疫プロトコルを受け入れ、イタリア産のキウイの輸入を承認した。当初はいくつかの不確定要素があったが、最終的に了解されたものである。業者によると、「カナダはキウイにとって難しい市場だ。というのも、しばしば公開価格で取引され、市場の状況に応じて価格が設定される(予め価格を設定できない)からだ」とのことだ。イタリアの生産会社にとっては、この方式では、予め利益がどの程度か予測することができないため問題だ、と語っている。また、メキシコに対しても試験輸出が行われた。市場が完全に開かれるためには最終的な植物検疫プロトコルの承認が必要となっている。

### **ベルギー：ニュージーランドからの供給は十分**

「需要は堅調であり、ニュージーランドからのサンゴールドの供給も10月上旬までは十分ある」とゼスプリの広報担当者は説明している。その後はフランス及びイタリアからの輸入に切り替わる。ニュージーランド産の緑色のキウイは11月末までで終了する。この時点での州産に切り替わるが、移行は切れ目なく進むとのことだ。

### **チリ：供給量の減少でシーズンは終了**

既に今シーズンの販売は終了した。数量は前年に比べて3.4%減少した。輸出量は179,393トンであった。最大の市場は欧州であり、71,206トンを占め、次いで中南米の38,593トン、極東の34,149トンである。

昨シーズンは今年初めにスタートした。当初の生産予測では、果実サイズは小さいものの前年と同程度というものであった。シーズン当初の中国への輸出は低価格で始まった。輸出業者によると、これは異常な状態であったという。というのも、中国では国産品の出回り末期には品質問題で苦戦を強いられ、チリ産はこの影響で利益を得るというが通常だからである。ただ、欧州市場向けは堅調であり、高値で推移した。

### **純輸出国への転換を目指す南アフリカ**

国内産のシーズンは終了したが、市場には輸入品が出回っている。輸入はニュージーランド、イタリア、ギリシャ、フランスから行われている。国産は大部分が緑色のキウイである。主な生産地はリンポポ州である。3月から4月にかけては英国に輸出も行われている。輸出業者は極東への輸出を期待している。南アフリカの消費者の間ではキウイベリーの人気も上昇している。

大規模生産者では、同国におけるキウイを純輸出産業にしようとする動きがある。このため、黄色品種の生産拡大に向けた投資が行われている。目標は、ニュージーランド産が出回る前の2月～3月に生じるギャップを埋めるために輸出することにある。

著者：Rudolf Mulderij

## 77. チリの果実貿易

FreshPlaza 電子版 (2017年9月21日)

PAISES DE DESTIN	TEMPORADAS		%
	2015-2016	2016-2017	VAR
1 USA	792,634	869,296	9.7
2 CHINA	233,474	231,647	-0.8
3 HOLANDA	225,076	186,704	-17.0
4 COLOMBIA	107,523	109,428	1.8
5 INGLATERRA	106,863	107,859	0.9
6 BRASIL	138,902	99,116	-28.6
7 RUSIA	56,454	72,912	29.2
8 PERU	68,498	72,712	6.2
9 TAIWAN	66,572	70,447	5.8
10 ECUADOR	52,662	65,697	24.8
11 ARABIA SAUDITA	60,287	57,491	-4.6
12 ALEMANIA	23,431	57,181	144.0
13 CANADA	52,270	55,637	6.4
14 ESPANA	37,503	47,933	27.8
15 COREA	43,887	45,726	4.2
16 ITALIA	35,228	39,693	12.7
17 ARGENTINA	25,583	38,549	50.7
18 HONG KONG	51,577	37,470	-27.4
19 JAPON	29,361	33,909	15.5
20 FRANCIA	22,002	33,219	51.0
21 MEXICO	36,303	32,443	-10.6
22 INDIA	35,425	29,203	-17.6
23 BOLIVIA	24,561	23,427	-4.6
24 EMIRATOS ARABES	25,205	21,621	-14.2
25 COSTA RICA	15,772	16,821	6.6
26 GUATEMALA	11,112	11,610	4.5
27 BELGICA	5,184	11,244	116.9
28 PORTUGAL	13,131	9,897	-24.6
29 EL SALVADOR	7,364	8,972	21.8
30 PANAMA	8,588	8,658	0.8
OTROS	79,324	91,235	15.0
TOTAL	2,491,757	2,597,756	4.3

チリ果実輸出協会(ASOEX)によると、2016年9月1日から2017年8月31日までの果実輸出量は、前年を4.3%上回る2,597,756トンであった。

協会会長のコメントでは、「輸出量は増加したもの、霜害や豪雨などの悪天候のせいで、生産量、輸出量にも悪影響があった。さらに、販売に当たっては、全ての品目に渡り生育が進んだため、収穫が2~3週間早まり、輸出先の国産品や第3国産品との競合があった。このため、例年の市場環境とは異なり、苦しい展開となった。特に米国市場では難しい販売となつた」とのことだ。

また、輸出量は前年を上回ったものの、これまでの最高であった2012/13年の265.4万トンを上回ることができなかつたことも強調した。

地域別に高い伸びを示したのは、米国(+9.7%)、カナダ(+6.4%)、欧州(+8.7%)であったが、減少したのは極東(-0.6%)、中南米(-2.2%)であった。さらに、中東は8%減少したが、サウジアラビア(-5%)、アラブ首長国連邦(-14%)の減少が響いた。

### 品目別・輸出先別

品目別に見ると、最も輸出量が多かったのは生食ブドウで、前年を6.5%上回る732,498トンであった。これは、過去の霜害、洪水、豪雨による被害から回復し、生産が順調だったことを意味する。第2位はリンゴで616,694トン、キウイが第3位で179,393トンであった。

また、アボカドが36.5%増加し、ナシが17%、サクランボが13.8%、ブルーベリーが13.7%増加したことでも特筆すべき点だ。

輸出先を見ると、上位5カ国で全体の60%を占めている。第1位が米国で869,296トン、以下、中国(香港を含む)が269,117トン、オランダ186,704トン、コロンビア109,428トン、英国107,859トンである。米国は引き続き輸出第1位を占め、前年に比べて9.7%増と高い伸びを示している。

一方、中国(香港を除く)が輸出先の第2位の地位を固めている。会長によると、「中国市場は、果実業界にとって最も関心のある市場であり、実際、業界及び公的機関のお蔭で中国市場における生鮮果実の最大の供給国の地位を固めた。この事実を祝い、中国のチリワードとアジア・フルーツロジスティカに組織的に参画した」と語っている。

### 米国

チリの最大の輸出先国であり、869,296トン、前年対比9.7%増と地域別に見て最大の伸びを示した。最も多い輸出品目は生食ブドウ(345,275トン)で、次いでリンゴ(69,120トン)、ブルーベリー(65,012トン)、アボカド(33,179トン)、キウイ(26,525トン)、ナシ(11,446トン)である。

## 欧州

欧州への輸出は596,891トンで、前年に比べて8.7%増加した。この伸びは昨年に比べて拡大しており、伸び率では2番目に高い地域となった。

オランダが主要な輸出先港で、欧州全体の輸出量の31.7%を占めている。次いで英国(18.2%)、ロシア(12%)となっている。

最も多い輸出品目はリンゴで全体の25.1%、以下、生食ブドウ(21.3%)、アボカド(15.8%)、キウイ(12%)、ナン(12%)である。

PRODUCTS	US	CANADA	EUROPE	FAR	MIDDLE	LATIN AMERICA	COMPARATIVE VOLUMES	2016-2017	2015-2016	%
				EAST	EAST		2016-2017			
1 TABLE GRAPES	345,275	19,414	128,022	172,340	11,083	56,363	732,498	687,766	6.5	
2 RED APPLES	69,120	18,677	146,273	91,392	60,186	231,047	616,694	652,150	-5.4	
3 KIWIS	26,525	2,753	71,206	34,149	6,167	38,593	179,393	185,709	-3.4	
4 AVOCADOS	33,179	0	95,334	15,154	89	19,844	163,600	119,887	36.5	
5 PEARS	11,446	241	71,816	662	4,566	60,209	148,940	127,217	17.1	
6 BLUEBERRIES	65,012	2,972	23,158	12,575	77	103	103,897	91,412	13.7	
7 PLUMS	22,879	1,547	20,192	31,983	2,256	20,594	99,452	114,080	-12.8	
8 CHERRIES	6,118	320	2,602	82,495	137	3,670	95,342	83,765	13.8	
9 LEMONS	44,371	137	13,532	22,819	0	1,667	82,526	72,949	13.1	
10 GREEN APPLES	16,058	2,116	7,656	1,103	4,284	48,203	79,421	81,642	-2.7	
11 ORANGES	70,701	1,636	686	1,076	1,010	2,809	77,919	75,192	3.6	
12 MANDARINS	70,967	2,690	2,126	3	0	187	75,973	55,432	37.1	
13 NECTARINES	24,095	1,521	10,294	13,755	0	12,439	62,107	57,421	8.2	
14 CLEMENTINES	40,111	529	107	46	0	162	40,955	43,057	-4.9	
15 PEACHES	16,030	952	1,118	21	0	7,923	26,045	29,054	-10.4	
16 POMEGRANATES	3,592	53	1,794	3	212	43	5,697	6,685	-14.8	
17 ASIAN PEARS	1,253	0	157	26	0	575	2,011	1,953	3.0	
18 GRAPEFRUITS	0	0	164	0	0	1,328	1,491	1,547	-3.6	
19 APRICOTS	671	55	21	0	0	172	919	627	46.5	
20 PLUMCOT	360	20	62	2	0	142	586	336	74.5	
21 PLUOTS	340	0	62	0	0	0	402	934	-56.9	
22 QUINCES	237	0	34	0	49	58	379	391	-3.1	
23 KAKIS	370	0	3	0	0	0	373	431	-13.5	
24 SARSAPARILLA	0	1	347	6	0	7	362	243	48.5	
25 CHERIMOYAS	325	0	0	0	0	26	351	155	127.0	
26 TANGERINES	67	0	43	0	0	4	114	1,491	-92.4	
27 BABY KIWI	42	3	54	7	1	1	108	95	14.0	
28 FIGS	54	0	24	0	0	0	78	70	12.5	
29 KUMQUATS	33	0	0	0	0	0	33	2	1,360.3	
30 RED CurrANT	28	0	0	0	0	0	28	27	2.9	
OTHERS	37	1	1	1	0	23	63	35	80.6	
Total 2016-2017	869,296	55,637	596,891	479,620	90,117	506,191	2,597,756	--	---	
Total 2015-2016	792,634	52,270	549,190	482,421	97,929	517,314	--	2,491,757	---	
% VAR	9.7	6.4	8.7	-0.6	-8.0	-2.2	--	--	4.3	

## 極東

輸出量は479,820トンで前年を0.6%下回った。これは香港への輸出が、中国本土へ直接輸出するようになったため、減少(-27.4%)したことによる。

「このシーズンは極東において大変良いニュースがあった。中国へネクタリンを輸出することが可能となり、インド市場ではブルーベリーとアボカドの輸出が解禁された。加えて、ナシの中国市場向け輸出解禁の交渉が始まった。また、韓国向けのアボカド輸出も交渉も始まった。ASOEX としては、積極的に輸出解禁に当たり、専門家や技術スタッフが参加し、農業省や関係機関と一体となって努力している」と会長は述べている。

これにより、中国(香港を含む)は、極東におけるチリからの果実輸出先の第1位としての地位を固め、輸出量は269,117トンであった。次いで、台湾が7万トン以上、韓国(4.5万トン以上)、日本(3.3万トン以上)、インド(29,361トン)の順である。

品目別には、生食ブドウ(全体の36%)が最多く、次いでリンゴ(19%)、サクランボ(17.2%)、キウイ(7.

1%)、スマモ(6.7%)の順であった。

## 中東

輸出量は90,117トンで、数量が回復した前年を8%下回った。このうちサウジアラビアが全体の63.8%を占め、次いでアラブ首長国連邦(24%)、クウェイト(4%)である。リンゴが60,186トンと全体の67.2%を占め、次いで生食ブドウが11,083トンと12%を占めている。

## 中南米

輸出量は506,188トンである。国別には、第1位がコロンビアで109,428トンと前年を1.8%上回った。第2位はブラジルであるが、前年はリンゴの輸出を中心に第1位であった。今回は、前年を28.6%下回る99,116トンであった。第3位はペルーで、72,712トンと前年を6.2%上回った。

品目別には、リンゴが第1位で全体の45.6%を占め、次いで、ナシ11.9%、生食部ブドウ11.2%、キウイ7.6%、スマモ4.7%である。

## 輸出港

バルパライソが最も重要な果実輸出港であり、150万トン以上の輸出が行われ、前年を40.1%上回った。一方、サンアントニオは前年に比べて38.9%減少し、543,593トンであった。第3位はロスアンデスで、129,521トンであった。

特筆すべき点は、コキンボ港からの輸出が200%増加したことである。これは地震と津波により損壊した施設が復旧したことによる。また、コロネル港も30.5%増加したが、これは近隣のカブレロに植物検疫施設が完成したことによる。

「カブレロに植物検疫室が開設されたことで、業界の競争力が強化され、物流コストの低減に繋がった。また、地域レベルでの活性化にも貢献している。この施設ができたのは、33年の歴史を持つ農業畜産公社(SAG)、米国植物動物検疫局、ASOEX の3者の連携の賜である。この施設のお蔭で、米国に輸出する前の段階で事前の植物検疫が可能となった」と会長は強調した。

## 78. 世界のマンダリン市場

FreshPlaza 電子版 (2017年9月15日)



南半球では販売のピークは終了した。一方、地中海沿岸諸国では新シーズンの始まりを控えている。既にスペイン産のマンダリンは市場に出回っている。生産の見通しはどこも芳しくない。スペインとイスラエルでは減産の見通しである。エジプトは販売拡大のチャンスと見ており、イタリアは例年通りの模様だ。カリフォルニア州では例年よりも早いシーズンの始まりを見込んでいる。中国では、高品質な輸入品の需要が増加している。市場ではクレメンゴールドの評価が高く、南アフリカの生産者は有利に販売する術を心得ている。中国は世界最大のマンダリン生産国であり、2,800～3,000万トンの生産量があり、世界の24%を占めている。これに次ぐのは、ブラジル(14%)、米国(7%)、インド(7%)、メキシコ(6%)である。

### 新市場を開拓中の北キプロス

北キプロスではマンダリンの生産量が増加している。生産しているマンダリンの品種の大部分はマンドラ(Ortanique)及びダブルマーコットである。今シーズンはマンドラの生産量は3万トンに達すると見込まれる。現在、輸出はトルコ、イラン、イラク、アラブ首長国連邦、ロシア、ウクライナ、EU諸国に向かっているが、将来的にはロシアとトルコが有望な市場と見込まれる。さらに、輸出業者は、マレーシア、香港、バングラデシュ、日本を含む極東の市場も狙っている。

### 增收を見込むエジプト

新シーズンは11月に始まる。生産している品種は幾つかあるが、主な品種は、マーコット、クレメンティン、フリーモントである。今年はマンダリンの生産量は増加すると見込んでいる。欧州が最大の市場であるが、特にロシアは新年を控えて重要な市場である。また、英国も重要な市場である。輸出業者は他国との競合の心配はしていない。業者によると市場の規模は十分大きく、ロシアに関しては特に良好な市場だという。ただ、為替レートはマイナスの影響があると見られる。

### **イスラエル: 品種 Orri は減収見込み**

Orri の収量は、昨年に比べて 20~25% 減収する見込みだ。理由の一つは前年の豊作の反動で隔年結果を起こしているからだ。業者も「収量の多かった翌年は減収する傾向が強い」と指摘している。加えて、生産者はグレープフルーツのような収益性の高い作物に転換する傾向にあるため、面積もわずかに減少している。

### **スペインでは 30% 減収の見込み**

公式の生産予測は未だ公表されていないが、生産者、業者の報告によると、バレンシア州の生産量は前年を 25~30% 下回る見込みだ。この主な原因は、春と夏に襲われた熱波によるものである。全ての品種で熱波の影響を受けたが、中でも最も人気がある Clemenules の被害が大きい。

岩崎温州、尾張温州、興津温州のような早生種は既に収穫が始まっている。市場に出荷されている。業者によると、市場では量の減少に敏感に反応しており、前年に比べて価格は高いとのことだ。9月第1週においては、興津温州が前年の 17% 高、尾張温州が 10% 高で、岩崎温州は同程度とのことである。

近年、多くの生産者が温州ミカンから他の着色の良い品種やカキのような他品目に転換している。また、南半球からの輸入品により市場のシェアを奪われている。スペイン産の主な販売市場はスカンジナビア諸国と英國である。

### **イタリアは平年並みを期待**

カラブリア州、バジリカータ州、プッリヤ州ではクレメンティンの収量は平年並みと見込んでいる。第1回目の収穫予測では、5~7% の減収とされたが、新規植栽が進展していることから相殺されると見込まれる。この状況はクレメンティン以外の早生種、晩生種に共通である。

イタリアの業界は、スペイン産、トルコ産、ギリシャ産、北アフリカ産と競合関係にある。しかし、一般に、販売は良く組織化されており、主な輸出先は欧州市場である。市場の状態は冷静であり、ピアナ、シーバリ、カラブリアではクレメンティンはキロ当たり 0.30~0.35ユーロで取引契約が締結されているものもある。バジリカータやプッリヤでは収穫の状況を見守っている段階で、販売契約は未だ行われていないが、15日以内には締結される見込みだ。カラブリアの会社は、シーズンの開始は 10 月中旬と発表している。熱波の影響で果実のサイズは小さめである。

### **オランダ: スペインから岩崎温州が入荷**

先週と今週、スペインから岩崎温州が入荷した。例年よりも数週間早い入荷である。シーズン当初のマンダリンには十分な注意が必要である。というのも酸味が多い可能性があるからだ。輸入業者によると、オランダでの需要は既に堅調のようだが、ドイツでは果皮の色や味が重視されるため、需要が出てくるまでには少々時間がかかるそうだ。4週間後にはクレメンティンが温州ミカンに続いて入荷する。

世界的に見ると、マンダリンの生産は特に南アフリカで急速に進展している。また、それ程ではないもののペルーでも生産が進んでいる。輸入業者によると、今後数年で輸入量は 30% 以上増加すると見ている。従って、市場としては、販売を促進するための努力が求められている。

### **ベルギー: Nadorcott の人気が高まる**

Nadorcott の人気が高まっており、供給も安定している。業者によると、皮が剥きやすい品種の中で Nadorcott は最も優れており、「価格もよく、消費者も価格が高くても購入してくれる」とのことだ。キロ当たりの価格は 2 ユーロ程度である。Nadorcott は南アフリカから供給されており、2ヶ月は入荷が続くため、シーズンは 9月末までである。

南アフリカ産のシーズンは、干ばつのため不足気味で始まった。「当初は入手が難しく、開始も遅れた。販売の二期目になると通常量になったが、価格は堅調なまま」とのことだ。現在、市場は沈静化しており、スペイン産の販売開始を待っている状況だ。

ベルギーの市場は季節性がある。4月から 7 月まではマンダリンはほとんど入荷せず、他の果実が市場に出回っている。業者としては、世界的に皮が剥けやすいマンダリンの栽培面積が拡大していることに懸念を

持っている。「従来販売されていなかった月にもマンダリンを販売しようとは考えていない。ベルギーでは他の果物が十分あるからだ。消費者が年間を通してマンダリンを食べるとは思えない。シーズンというものを考慮する必要がある」と語っている。

### カリフォルニアでは早めのシーズンスタート

カリフォルニアではマンダリンのシーズンは例年より早く始まる模様だ。業者によると、10月中旬の温州ミカンからスタートすることだ。晩生の温州ミカンも合せて12月まで十分な量が確保される模様だ。「果実の生育は良好でサイズも十分だ」と業者は興奮気味だ。とはいっても着果数が多く、果実サイズは例年より小さめである。また、セントラルバレーでは夏の暑さで、早生種のマンダリンの果皮に日焼けの斑点が認められる。

マンダリンの需要は増加している。キシュウミカンも堅調な品種である。キシュウミカンは温州ミカンに似ているが、サイズは小さく、ゴルフボール程度であり皮を剥きやすい。業者によると、消費者からの反応は良いとのことだ。キシュウミカンのシーズンは11月中旬まで続き、その後はデイジーなどの品種が出回る。

### 輸出拡大を見込むペルー

昨年はマンダリンの輸出が前年(2015年)より20%増加した。世界中で高まっているマンダリンに対する需要により、ペルーは利益を得ている。ペルーにとってマンダリンは高い可能性を秘めている作物である。というもの、現在、輸出に向けられているのは生産量のわずか28%だからである。主な産地は、リマ(56%)、イカ(25%)、フニン(13%)である。収穫期間は数ヶ月続くが、ピークは4月から8月までであり、この間に85%が収穫される。主な栽培品種は温州ミカン、クレメンティンである。輸出は米国向けが多く、40%を占めている。次いで英国が25%を占め前年に比べ18%増加している。3番目はオランダで12%のシェアであるが増加率は小さく1%である。

### ウルグアイは中国に向け輸出

7月の終わりに中国との間で合意が締結され、マンダリンの輸出が可能となった。最初に輸出されたマンダリンはClemenvillaで上海に到着した。同品種の果皮は厚いものの、味はそれを補って余りあるとのことだ。中国市場では1箱当たり140~150元(17~19ユーロ)で取引されている。

### 活気溢れる南アフリカ

クレメンゴールドのシーズンは第25週に始まり第36週まで続く。業者によると、「豊作であるが需要を賄うには十分ではない」とのことだ。特に、中国市場への輸出は成功しており、クレメンゴールドにとって最も成長が著しい市場だ。クレメンゴールドの輸出が認められて2年目になるが、需要は特に旺盛のことだ。クレメンゴールドに関してはプロモーション活動を熱心に行っており、スーパーでの試食等の宣伝を進めている。また、オンライン市場においても有望とのことだ。既に果実の収穫は終わり梱包されているが、3週間で中国市場に到着する。

クレメンゴールドに関しては干ばつの影響をほとんど受けていない。主な産地は北部ムプマランガとリンボポであり、両地域とも平年並みの生育環境で推移した。南アフリカに次いでモロッコ、スペイン産のクレメンゴールドが市場を引き継ぐことになり、幾分の時期的ギャップが生まれるが、今後の目標としては、年間を通して供給することにあるという。

南アフリカではマンダリンの生産量は合計で、過去10年間に88%増加した。中でもタンゴ、Nadorcott、Orri、Valley Gold、Leanriのような晩生のマンダリンは良い成果をあげている。既にシーズンはほぼ終了しており、梱包された1,290万箱(1箱15kg)のうち、1,220万箱は今週(9月23日)までには出荷が終わることになっている。

南アフリカでは品種のシーズンごとに、また南部と北部で、生育条件が大きく異なっている。東ケープ州のGamtoos Valley/Patensieでは温州ミカンが「信じられないくらい良好」で、シーズン当初は、市場に品がなかったことから高価格で取引された。クレメンティンとノヴァも順調に推移したが、次第に市場が飽和状態となつた。なお、インドネシアにも史上初となる輸出が行われた。

一方、西ケープ州では主にフランスで需要がある Orri に対しては不満があるようだ。この北部の生産地では、生育環境に課題があったとのことだ。新たに生産を始めた生産者が多いこの地域では、暑さと風の影響で最大20%の損失が出たとの報告がある。また、Senwes にある会社によると、温州ミカンの販売が破局的であったとのことだ。というのも、果実が大きくなりすぎ、品質にも大きな問題があつたためらしい。しかし、晩生の品種は風害こそあつたものの、販売は順調であったようだ。いずれにせよ、かつては被害果を輸出していたロシア、中東、東南アジア市場でも、最近は品質を重視するようになってきた。また、早生種と晩生種の出荷が重なる時期は、市場で価格が低く抑えられる状況にある。

### **アジアで伸びるオーストラリア**

ここ数週間で質の良いマンダリンが供給されている。小売業者はオンラインでハニー・マーコットの販売促進活動を展開しているが、価格はしばらく下落しないと見られる。多くはアジア市場に出荷されている。

業界では輸出に力点を置き、収益性の高い品種の栽培に投資を行っている。アジアではマンダリンに対する需要が大きく、中国だけでなくフィリピン、タイ、ベトナム市場も活況である。

マンダリンのシーズンは4月から10月までである。国内市場向けは7万トン程度だ。最も人気のある品種はインペリアルである。しかし、ニュー・サウス・ウェールズでは、今年の生産量は多すぎて、市場では価格が抑えられている。

### **中国では輸入が増加、国内生産は停滞**

昨シーズンは、気象条件が悪かったこととカンキツ・グリーニング病のため生産量は少なかった。今シーズンも生産量は回復しない模様だ。収穫は11月に始まる。現時点では、主にオーストラリア、ペルーから輸入されており、イスラエル、南アフリカからも輸入がある。マンダリンの輸入は、国内生産の停滞と、高級品に対する需要の高まりから、毎年10%増加している。特に Jaffa Orri、クレメンゴールドに対する需要が高まっている。

### **パキスタンではキノーの栽培が増加**

昨年に比べて品種キノーの輸出が増加している。今年は生産量の増加が期待される。輸出業者は新規輸出市場を開拓しているが、主な輸出先は従来からの市場であるイラン、ロシア、湾岸諸国である。インドネシア、フィリピンは魅力的な市場であるが、フィリピンでは中国産と競合している。しかし、価格面ではパキスタンの方が有利である。ロシアではトルコ産、エジプト産と競合しているため、従来のように市場環境は良くない模様である。これまで、欧州向けに700~800コンテナを輸出してきたが、昨年は200コンテナに届かなかつた。しかし、輸出業者はウクライナの輸入に期待している。

著者:Rudolf Mulderij

## 79. フロリダ州のカンキツ被害、カリフォルニア州のオレンジ生産予測

The Packer 電子版 (2017年9月13日)



業界首脳と連絡をとったところによると、ハリケーン・イルマによるフロリダ州の農産物被害は深刻なものであり、ジョージア州モートリーでも収穫を控えた野菜の被害も厳しいものとなるようだ。

フロリダ州カンキツ局のShepp 事務局長によると、「未だ被害の全容は把握できていないが、同州のカンキツへの被害は非常に大きなものである。ハリケーンの到来前は、7,500万箱以上のオレンジの収穫を見込んでいたが、現時点では相当減少する見込みだ」とEメールで語っている。

事務局長によると、生産者の中には(農機が入らず)地面から果樹を扱っている人もいるそうで、「このような自然災害に対しては、農業の緊急事態宣言が必要だ」とも述べている。

フロリダ州果樹・野菜協会の公報部長が13日にEメールで伝えるところによると、生産者からの報告では、地域により50から70%の被害を受けた場所もあるとのことだ。

カリフォルニア州食料農業局と米国農務省によると、来シーズンの同州のネーブルオレンジの生産量は7,000万箱のことだ。

この数字は9月12日に公表され、2017/18年産の第1回目の生産予測であり、有機栽培と慣行栽培の合計数で、特殊な品種であるカラカラやブラッドオレンジを含むものである。このうち、セントラルバレーの生産予測量は6,800万箱(40ポンド入)、栽培面積は11.5万エーカーとされ、昨年実績の7,560万箱、12万エーカーを下回っている。

カリフォルニア州食料農業局の予測によると、1樹当たりの果実数は273で、前年の384を下回っている。その分、果実の直径は大きく、9月1日時点で2.34インチと昨年の2.21インチを上回っている。

なお、セントラルバレーには、フレズノ、テュレア、キングス、カーン郡が含まれている。

今回の予測は、毎実施されるネーブルオレンジ計測調査によるもので、540の果樹園を対象としたものである。

## 80. 米国が日本からのカキの輸入を認可

FreshFruitPortal 電子版 (2017年9月12日)



る。

APHISによると、「今回の措置は、日本からガク付きの生鮮カキの輸入を認めるものだが、引き続き病害虫の侵入を食い止める措置を講じる」とのことだ。

米国ではカキの生産は大部分がカリフォルニア州に集中しており、2013年の生産量は約35,700トンで生産額は4,000万ドル、生産量は2011年に比べると3倍に増加している。

米国のカキの輸入は2014年に1,757トンで、300万ドル。このうち200万ドルがイスラエルからで、40万ドルがスペインからの輸入である。

APHISによると、日本のカキの生産量、栽培面積は過去10年で減少しており、2014年の輸出量は、生産量の1%未満の578トンであったとのことだ。

さらに、日本産カキの平均輸出価格は、カリフォルニア産の農場渡し価格の約2倍であることも説明している。

「日本から輸入されるカキは高く、(米国の)輸入品やカリフォルニア産とは価格差が大きいことから、日本産カキの米国内での競争力は限られたものになるのではないか」と指摘している。

日本の農林水産省は、初年度の輸出量は30~50トンと見込み、その後も同程度もしくは増加すると見ていいのではないか、と APHIS は説明している。

(参考)9月12日に農林水産省から「米国向け日本産かき(柿)生果実の輸出解禁について～日本から米国へのかき(柿)生果実の輸出が可能となります～」とのプレスリリースがありました。

## 8.1. リンゴのクラブ制の功罪

Australian Fruitgrower 誌 (2017年8・9月号)

本稿は AgFirst 社(オーストラリア)の John Wilton 氏の寄稿によるものである。



ピンクレディーは着色系統が出現して以来、果皮色基準が厳しくなっている。左は着色系統の Lady in Red、右は通常のクリップス ピンク

30年前に西オーストラリアで開発された品種クリップスピングがピンクレディー(PinkLady®)として商標登録されて以降、「マーケティングクラブ」というコンセプトが開拓された。その後に開発された新品種の多くはクラブ制品種として管理されている。

クラブ制品種は、通常、知的財産権が保護される商標登録され、何らかの形でライセンスが付与されて生産や販売に当たって保護を受ける。そして、理想的にはこれがブランド化されるものだ。

新品種を導入するためには通常はロイヤリティーを支払わなくてはならないが、クラブを管理しブランドを保護するためには、ブランドの所有者に対して、果実の販売に応じた追加のロイヤリティーを支払うことになる。

いくつかのクラブ品種では、単一の会社がライセンス(権利)を所有しているものがある。著名なものはニュージーランドの T&G 社が権利を所有するジャズ(Jazz™)、エンヴィ(Envy™)である。この他の方法の代表例は、国際的な生産、販売が行われているピンクレディーであり、登録商標は組織が所有し、契約上の要件を満たしていれば商標の利用を可能とするよう、世界中の生産者や関係業者にライセンスを付与する方法である。

### 先駆者としてのピンクレディー

国際的にピンクレディーは大変に成功した事例と言える。中国を除く世界のリンゴ生産量の2. 23%を占めるに至っている(品種名クリップスピングで比較)。

ピンクレディーの商標は APAL(オーストラリア・リンゴ・ナシ会社)が所有しており、特定の地域でブランドを販売するためのライセンスを付与された事業者のネットワークが管理を行っている。

APAL のグローバルブランド責任者の Chester 氏によると、ピンクレディーブランドの世界総販売量は60万トンを超え、推定の小売販売額は約20億ドルに達している。

ピンクレディーは、消費者の意識を捉えるためのプロモーション活動費を大規模な食品ブランドに匹敵する規模で集めることに成功している。資金は、ライセンスを取得してないで商標を使用する者から保護するため

の活動、品質を維持するための活動、APAL が世界規模で行う商業的活動に必要な経費にも充当している。

西オーストラリア州の農業食料局(DAFWA)は品種保護に関する権利を保有しており、品種開発したクリップスピンクに関する品種保護を行っている。同局では、品種利用の代理人としての企業を選択し、権利を与えて利用料金を収入としている。その後、当初の品種よりも着色の良い系統が発見され、個々に品種保護に関する権利が発生し、権利の対象広がった。そのうちの2つは、Rosy Glow、Lady In Red であるが、APAL によりピンクレディーの下で販売することが認められた。

ピンクレディーブランドのクリップスピンクが成功した理由は、他の品種とは異なる次に様な際だった特徴による。

- ・独特の果皮の赤さ
- ・糖度と酸味のバランスの良さ
- ・他にない貯蔵性の良さと特に出庫後の日持ちの良さ

その他の重要なファクターは、洗練されたブランドとして管理された最初の品種であり、厳密なガイドラインの下でブランドの設計、使用が行われ、販売活動に伴うプロモーション資料の作成などに取組んだことである。

### クラブ制りんごを長期的に成功させる道

長期的な成功のためには、商標登録された品種が消費者から信頼され、失望を受けないように高い水準の品質を持ち、その品質が均一であることが求められる。Spark 氏は、2017年6月に行われた、「フューチャー・オーチャード・ウォーク」でクラブ制品種が成功を納めるための望ましい特性を次に様に要約した。

- ・品種を確立するための早い段階での投資
- ・市場の開拓とブランド化
- ・品種の特性を發揮させるための生産者マニュアルの作成
- ・貯蔵の最適化
- ・品種特性と市場可能性の最大限の発現
- ・品質改善を行うためのたゆまぬ研究開発と新品種に付随する問題点の解決
- ・他の品種と異なる目立つ特性の保持(味、色、食感、大きさ、収穫時期、貯蔵特性等)
- ・品質基準を維持するための規律
- ・プレミアム価格を維持し、市場での存在感を保持するための強力なマーケティングスキル

ピンクレディーは以上の全てを備えており、この結果として、30年経った今でもノーブランド商品よりも優れたプレミアムを保持している。長年に渡り、特に色に関する基準は、着色系の系統が発見されて以降、引き上げられてきた。この結果、疑いもなく市場でのプレミアムを維持するのに貢献し、当初の品種よりも着色を求める市場に更なる浸透をもたらした。世界のピンクレディーの品質基準、即ち色、硬度、糖度に適合せず、欠陥を持つものはクリップスピンクとして販売されている。このことは、ピンクレディーを高い品質を持つ商品として維持させることに貢献している。一般にクリップスピンクによる収益は、ピンクレディーの半分程度となっているのだ。



非ブランド品のクリップスピンクは相当量存在している。ピンクレディー(PinkLady®)はクリップスピンクの1.6倍の価格で販売されている。

## **考慮すべきその他のクラブ制品種**

ピンクレディーは、国際市場の中で最も古く、最も成功したクラブ制リンゴだと言えるが、この他にも成功しているクラブ制品種はある。

この中の一つは、米国のハニークリスピ(Honeycrisp®)だ。米国での生産量は800万箱に達している。ワシントン州立大学の育種学者だった Barrett 氏によると、現在の生産量は上限であり、これを超えると価格は低下するが、現在では高い価格のままだと言う。他にも T&G 社の Jazz™、Envy™ や Smitten™、Ambrosia™、Rockit®、Kanzi™、一般品種の中から高い着色系統としてブランド化されたふじの Kiku®、Morning Mist™、ロイヤルガラのいくつかの系統などがある。これらブランド化された品種は、ピンクレディーとクリップスピンクの関係のように、非ブランド商品に比べて高いプレミアム価格を保持している。しかし、ブランド化された品種が成功するか否かは時が経たないと分からぬ。プレミアムラベルのワインのように、将来成功するかどうかの鍵は、ブランド化されていない兄弟に対して、いかに差別できる品質を維持できるかに係っている。

## **クラブ制品種は成功を約束されていない**

将来を見た場合に、ほとんどの新品種はピンクレディーが国際市場の中で辿ってきた道である商標登録によるブランド化を進めるだろう。とはいえ、ピンクレディーが得た最初の開拓者としてのメリットを享受できるわけではない。

世界では80以上のリンゴ育種計画が進められており、新品種の数は随分多いことから、クラブ制品種としての失敗が予想される。特に、ピンクレディーがなし得たような国際規模で大量の生産ができなくて、小規模でニッチな品種になる可能性もある。おそらく最も重要なことは、ほとんどのクラブ制品種が、価格を維持するために供給量を管理し、制限せざるを得ないということだ。逆に、消費者はパッケージ化された商品のように、年間を通じて一貫して供給されることを望んでいる。ピンクレディーのモデルは特異例として両方の要件を満たしたのだ。

多くのクラブ制品種は、将来の成功に必要な初期投資を行うことが高いハードルとなっている。多くが初期投資の財源に充てるために、既存の販売市場から資金を調達しようとしている。しかし、私の考えでは、これは将来に向けて良いことではない。何故なら、初期には品種の供給量あまりにも少なすぎて必要な金額を確保できないからだ。無理に資金を調達しようとすれば、生産者の利益を過度に縮小させ、収益があげられなくなり、植栽の拡大ができなくなる。このことは、先駆的な生産者が、初期に果樹園から得られる利益を犠牲にすることを意味し、一方で後から生産を始める生産者が利益を得ることになって必ずしも成功を納めるために不可欠な資金を拠出しないといった事態を招く。こういった事態を避けるためには、収益に比べて初期投資の必要額が膨大になる資金を予め確保するとともに、後発の生産者が初期投入資金を公平な形で負担するような方法を模索する必要がある。

クラブ制品種として長期に渡り成功を納めるために最も必要なことは、ブランドの所有権者が投資能力を持つこと、ライセンスを供与する者に対するマーケティング、プロモーション、果実の品質保持に関する規律を遵守せることにつきなのだ。

## **いくつかのブランド所有形態**

ブランドの所有形態にはいくつかある。国際的なピンクレディーの取組は、生産とマーケティングに当たつて複数のライセンスを提供する方式であるが、紛れもなく成功した事例であり、APAL による強力なブランド管理が行われている。また、ライセンス提供者に対する厳密な規律保持は、国際ピンクレディー連盟(IPLA)によるフォーラム等を通じて実現している。APAL はマーケティングで大きなメリットをもたらした最初のブランド品種を確立した。また、ピンクレディーブランドのプロモーション活動が大変に効果的であったため、迅速に初期生産量の拡大を進めることができ、強力な収入源を確保する道を拓くことができた。

今やブランド品種となる候補が増加する中で、商標の所有者がより良く組織化され、組織の中で規律が厳密に保持され、資金が潤沢でない限り成功するのは難しい。もし、初期生産量が少なく、ニッチな品種と見なされる場合は、多国籍企業と単一のライセンス契約を結ぶ方が良いモデルといえよう。というのも、この場合は品種の拡大とマーケティングに専念し、その成果としての収益を単独のライセンス契約者と分かちあつた方

が良いからである。私の見解では、この方式は商標に対して複数のライセンス契約を結ぶモデルよりも良い結果をもたらしている。具体的な例としては、T&G 社のジャズ(Jazz™)、エンヴィ(Envy™9と ゼスプリ社のキウイフルーツである。



普通のふじは誰もが生産できる品種となり、価格低下に苦しんでいる。

### 世界的に生存率を考える

長期的視点に立てば、オーストラリア市場は小さすぎて多くのクラブ制品種を国内で受け入れることは困難である。従って、クラブ制品種を成功に導くためには、世界規模でマーケティングを行わなければならない。しかし、知的所有権を世界規模で保護するためにはコストがかかりすぎる。従って負担を分かち合い、高品質な果実の年間を通した供給ができるようにするため、北半球のパートナーと連携をとることが必要である。

今まで、誰もが生産できる品種は多く成功を納めてきた。例えば、ロイヤルガラ、ふじ、グラニースミス、初期のブレイバーンである。私は、誰もが生産でき、販売できる市場モデルは、今や時代遅れとなったのではないかと考えている。ブレイバーンは適期に収穫されればとても良い品種であるが、ロイヤルガラのような世界規模で人気を博すような品種ではない。このため、誰もが生産できる品種と同じ価格に陥るのには時間がかかるなかつた。ブレイバーンの生産量は、今や半減したため、価格は回復し収益をあげられる程度に達した。しかし、クラブ制品種として管理される程には収益はあげられないし、いずれにしても過剰生産による価格低下を経験してしまった。

また、ロイヤルガラとふじから派生した高級ブランド品種が登場したという事実を目の当たりにすると、誰でも生産できる品種のモデルは終わりに近づいていることを示しているようだ。商標登録されたクラブ制品種は間違えなく将来の姿である。量的管理や品質管理が行われない誰でも生産できる品種は、結果として、最低価格が品質に関する唯一の決定要因となる品種になってしまうのである。品質の管理計画がなければ、コンスタントな果実を供給することができなくなり、買い手と消費者の信頼を失ってしまうからだ。

もう一つ認識すべき点は、商標化されたクラブ制品種は、クラブの厳密な品質基準に適合する果実だけが商標の下で販売され、プレミアム価格を享受すべきであるということだ。しかし、このことは基準に合致しない、即ち差別化に適合しない果実を安い価格で販売してはならない、ということを意味するものではない。現に、国際市場の中では、APAL は低位品質のクリップスピンクを、「クリップスピンク」として販売することを認めているのだ。



高着色系統のふじは普通のふじより3倍の価格で取引されている。

## 8.2. オーストラリアでのリンゴ品種 Kanzi の販売

Apple & Pear Australia 電子版 (2017年9月6日)



高級リンゴ品種とされる Kanzi は、今年、オーストラリア国内で1,600トン出荷され前年の2倍であった。

生産者で、出荷業者でもある Cathels 氏によると、生産が増加したにもかかわらず、予定の出荷期間であつた4月初旬から7月初旬までの12週間で販売が完了したそうだ。Kanzi の新鮮さ、歯ごたえ、独特の香りを差別化し、年間を通して販売するリンゴではなく、時期限定のリンゴとして販売することに成功したことだ。即ち、「樹からもぎたて」として、7月までの販売に限定したのだ。

果皮の赤い Kanzi は、甘さとピリッとした香りが特徴的でジューシーで歯ごたえが良い。甘さのあるロイヤルガラとピリッとした香りのブレイバーンの自然交配により誕生した品種である。

今年は大手小売業の販売網を通じて、スーパー や 果実専門店で販売された。消費者からの需要、洗練された商品、焦点を絞ったプロモーションが功を奏し、供給量が増加したにもかかわらず売り切ることができた。

消費者からの需要が強いことは、反復購買が多く、問合せが多いとの小売業者からの報告で明らかだ。別の出荷業者によると、2018年も出荷量はさらに増加するそうだが、販売に課題があると考えるよりも、増加する需要に見合った販売に期待をしているようだ。生産の拡大に応じ、2018年は貿易業者、小売業者、消費者に向けたプロモーション活動を強化することだ。

一方で、2018年は一つの区切りの年である。予定されていたオーストラリア国内での75万本のリンゴ樹の植栽をこの年に達成するからだ。今後数年で生産量が拡大し一定規模に達するにつれ、Kanzi は様々な品種が混在するオーストラリア国内で、季節を限定したプレミアム品種としての地位を固めることになるだろう。

注) Kanzi は商標名で品種名は Nicoter。ベルギーで開発された。欧州市場に出荷されたのは2006年からとされる。

## 8 3. 米国で開発中の火傷病対策技術

FreshPlaza 電子版（2017年9月6日）

二百年以上もの間、りんごなどの生産者は、科学者の言うところによると最も古く、最も深刻で、最も複雑なバクテリア病から樹木を守る努力をしてきた。その病気とは「火傷病」である。その名前は、枝が乾燥し、焼け焦げたようになることから命名された。

世界中の植物病理学者は、火傷病の流行を抑制する効果的な方法を模索し続けてきた。コネチカットでの最近の研究は、生産者に病気を抑える方法を提供することになるかも知れない。

1950年、研究者は火傷病を抑制するための抗生物質であるストレプトマイシンを発明した。この薬は良く効いて、20年以上に渡り有効であったが、その後、病原バクテリアは抗生物質に対する耐性を獲得し始めた。その後、植物病理学者は火傷病を防除する技術の模索を続けている。

コネチカット農業試験場の植物病理学・細菌学者の Cheng, 氏は、「植物病理学者として、大きな経済損失をもたらす病気から生産者を守ることは使命だと考える」と語っている。リンゴだけでも140億ドルも国民経済に貢献しているが、火傷病による損失は1億ドルを超えると見られる。

Cheng, 氏は火傷病の新たなタイプの制御法を証明した論文の著者7名の一人である。「手短に言えば、動物の病原に対抗するための古くからのアイデアと、植物に関する新たな視点を組み合わせた技術だ」とのことだ。つまり、アンチセンスペプチド核酸-細胞浸透ペプチド (Antisense Peptide Nucleic Acid- Cell Penetrating Peptide) という物質を活用するものだ。

これはペプチド核酸(PNA)の特別な鎖を持っている。そしてあたかも DNA のように見える。PNA の働きは、病原バクテリアの中に侵入し、その DNA を全て写し取り、バクテリア細胞を生存させるため必須の遺伝子を見つけだす。「必須遺伝子に分子を結合させると、遺伝子が破壊される」という作用らしい。

この手法は、抗生物質が全てのバクテリアを死滅させるのとは異なり、悪いバクテリアだけを標的にすることができます。このような選択性をもつことで、火傷病バクテリアが耐性を獲得する可能性を低くできるのだとう。しかし、例え耐性を持ったとしても解決はたやすい。「この技術の美しさは、(DNA の)配列を設計できることだ。バクテリアが耐性を獲得した結果として(DNA の)配列を換えたとしても、新たな配列を読み取って、コードを書き直すことができる」と Cheng, 氏は説明している。

Cheng, 氏は冷凍庫に2つのサンプルを持っている。それらは小さなチューブで透明な液体が入っている。小さな氷のかけらのように見えるが、数百ドルの費用がかかるかけらだ。そして火傷病を防ぐことによりコストダウンに導く物質だ。

「まだ最初のステップだ。実験室から果樹園の現場で使われるまでには長い工程が必要だ。最終的にはスプリンクラー用の薬剤タンクの中にこの物質が入るようになって欲しい」と語っている。例え生産者の手元に渡るまで時間がかかるとも、この技術の有効性は証明できたので、他の多くの植物病理学者が利用できるようになった。「病害管理の新しい扉を開いた。様々な恐ろしい病害への対策の可能性が広がった」と締めくくった。

Cheng, 氏らの論文は、Journal Frontiers in Microbiology 誌の2017年4月号に掲載されている。

(参考) 火傷病(かしょうびょう)は植物病原細菌が植物に感染して発生する病気。果樹では、セイヨウナシ、ニホンナシ、リンゴ、ビワ、マルメロ、鑑賞植物では、ピラカンサ、サンザシ、コトネアスターなどのバラ科植物に火傷病が発生する。火傷病は、北アメリカ、ヨーロッパ、北アフリカ、中近東、ニュージーランドのセイヨウナシやリンゴの果樹園に発生して、大きな被害を与えている。幸いなことに、火傷病は日本では発生していない。

## 84. 中国から米国に有機モモを輸出

FreshPlaza 電子版 (2017年9月5日)

「Li マネージャー、去年は買付けることができませんでしたが、今年はお願いしますよ」と、深センから来た買人の Linbo 氏は語りかけた。彼は、山東省龍山の沂水県にある農業団地に取引をするためにやって来た。

今年は1箱6個入の龍山のモモは198元(25.5ユーロ)で売られている。1個だと33元(4.2ユーロ)もする。この値段は市場価格よりはるかに高いが、手に入れるのが難しい。既に、広東省、海南省、深セン市のクライアントが農業団地に注文をしているそうだ。「現在マーケティングに関する心配をする必要はない。良いモモを生産することに集中するだけだ。販売を気にする必要はない」と Li マネージャーは自慢げに説明してくれた。



龍山の農業団地は、李川と孟山の美しい景観の中に位置している。資源豊かな環境の中で、有機農業の厳しい基準をもって、中国国内だけでなく、EU、米国へ出荷することが可能となっている。この農業団地は有機農業基準を厳しく遵守している。有機肥料製造のための施設を持っており、養分補給のための作業場も備えている。また、大豆を栽培し、有機肥料に関する独自の研究施設も所有している。6つの水源を有し、噴霧器で散布できる灌漑施設を有している。ソーラーパネルを用いた200の殺虫用のライトも整備し、開花から収穫までの状況を把握するための60の高精度カメラレコーダーも有している。

バイヤーはQRコードを通じて、全ての生産工程を追跡することが可能だ。さらに、土壌、資材、生産物などを独自に検査し、試験できる施設も整備している。このように厳密に生産管理が行われていることを保証できる体制となっている。従って、有機農業基準に反する資材が混入でいないようになっている。このため、有機農作物とは見なされないものは農業団地から出荷できないようになっている。こうやって、100%有機を実現した。

昨年6月に龍山のモモは有機であることの認証を受けた。今年の6月には、このモモが EU からも有機の認証を受けた。そして数日前、「白桃」を米国に輸出するに当たっての認可が得られた。必要な書類は全て完了したことになり、この10月には晩生のモモが EU と米国に輸出される見込みである。

## 85. フロリダのカンキツに新たな脅威

FreshPlaza 電子版 (2017年9月1日)

フロリダ州ではカンキツグリーニング病が大問題となっているが、新たな脅威が発生した。それはシトラス・ブラック・スポット病である。

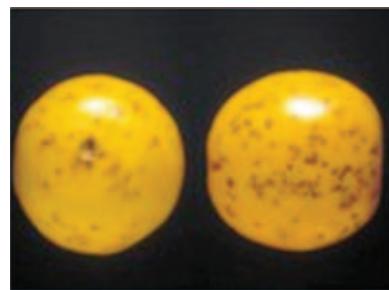
連邦当局は、既にコリアー郡、ヘンドリー郡、ポーク・ハイランド郡に対して果実輸出に当たっての検疫体制を敷いている。

現在、シトラス・ブラック・スポット病は広がりを見せており、米国農務省はこの新たな脅威に関する情報を収集していることである。

病原菌は黒い斑点やシミを果実につけるため、生鮮果実としては販売ができなくなるとともに、罹病した果実は早期落果を引き起こす。

フロリダ大学カンキツ研究センターの植物病理学者 Dewdney 氏によると、「ひどい場合は、20~30%の収穫被害を起こす病気だ。既にカンキツグリーニング病でダメージがある中、新たな病害は生産者の脅威になる」と話している。ただ、シトラス・ブラック・スポット病は治癒できないまでも、殺菌剤の散布により制御することは可能のことだ。

「抜根し、果樹を除去しない限り病気を除去することはできないが、病害の程度を低く抑えることはできる。適切な対応を行えば、病気は計測可能な範囲に抑えることができる。カンキツグリーニング病については、これほど酷い病気はない。カンキツ全体を壊滅させる恐れのあるカンキツグリーニング病と比較すれば、大きな問題ではないと言える」と語っている。



## 海外果樹農業情報 刊行物一覧

No.	調査報告書名	発行年月日
77	海外果樹関係データ集 2003 年版	03. 12
78	ポーランド共和国におけるリンゴ及びリンゴ果汁の生産・流通事情調査報告書	04. 3
79	西欧のくだもの消費事情調査報告書	04. 6
80	中国山東省におけるオウトウの生産・流通事情調査報告書	04. 7
81	米国における果実消費動向及び生食用果実流通実態調査報告書	04. 8
82	欧米のくだもの消費事情調査報告書	04. 9
83	オーストラリアにおけるリンゴ及びオウトウの生産・流通事情調査報告書	05. 3
84	中国におけるリンゴの生産・流通事情調査報告書	05. 6
85	タイにおける果実の流通・販売の実態に関する調査報告書	05. 6
86	日米におけるフードガイドの新たな動きについて（くだもの編）	05. 7
87	インドネシアにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	06. 1
88	海外の果実生産・貿易状況 2006 年版	06. 4
89	台湾における果実の生産・流通・消費事情等に関する調査報告書	06. 6
90	スペインにおけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	06. 10
91	ベトナム・韓国・インドネシア・台湾における果実の生産・流通事情調査報告書（補遺版）	06. 10
92	チリにおける落葉果実等の生産・流通事情調査報告書	07. 2
93	台湾における果実の輸入関連制度に係る調査報告書（付 果実の生産・流通状況）	07. 5
94	アラブ首長国連邦・インド・タイにおける果実の生産・流通・消費事情調査報告書	07. 7
95	ニュージーランドにおける果実の生産・流通・消費事情等調査報告書	08. 3
96	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	08. 6
97	韓国における主要果実の生産及び輸出入等に関する実態調査報告書	08. 7
98	ドイツ・オランダにおける果実・果実加工品の生産・流通状況調査報告書	09. 2
99	台湾における日本産果実の生産・流通・消費実態調査報告書	09. 6
100	世界の主要果実の生産・貿易概況 2009 年版	09. 11
101	中国におけるポンカンの生産・流通実態調査報告書－福建省及び浙江省を中心として－	09. 11
102	米国におけるリンゴの加工品等実態調査報告書	10. 2
103	ロシアにおける日本産果実の販売可能性及び同国の果樹農業・政策基礎調査報告書	10. 7
104	米国連邦行政組織による果実消費拡大に向けた取組みに係る調査報告書	10. 8
105	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	10. 8
106	グローバリゼーション下の米国の果汁産業及び新たな生産流通システム実態調査報告書	10. 8
107	インドにおける日本産果実の販売可能性及びインド産ブドウの対日輸出可能性調査報告書	10. 10
108	カナダの果樹農業・政策実態調査報告書	11. 3
109	米国カリフォルニア州におけるオウトウの生産・流通事情調査報告書	11. 6
110	台湾における果実の生産・流通・消費等実態調査報告書	11. 6
111	中東における日本産果実の販売可能性調査	11. 8
112	ブラジルにおけるオレンジ及びオレンジ果汁を中心とした生産・流通事情調査報告書	11. 9
113	中国の主要都市における日本産果実の販売可能性及び中国のオウトウ産地調査報告書	11. 10
114	世界の主要果実の生産・貿易概況 2012 年版	12. 3
115	台湾における日本産果実の流通状況等実態調査報告書	12. 6
116	中国におけるブドウの生産・流通・消費調査報告書	12. 10
117	韓国の対米国 FTA 締結による韓国果樹産業への影響等調査報告書	12. 11
118	台湾における東日本大震災後の日本産果実等流通状況実態調査報告書	13. 3
119	中国におけるモモの生産・流通・消費調査報告書	13. 3
120	世界の主要果実の生産概況 2013 年版	13. 10
121	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入に関連する規制等に係る調査報告書	14. 3
122	世界の主要果実の貿易概況 2013 年版	14. 3
123	世界の主要果実の生産概況 2014 年版	14. 10
124	世界の主要果実の生産概況 2015 年版	15. 3
125	台湾における日本産果実の流通及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	15. 3
126	ニュージーランドの果樹農業及び香港の日本食品・果実事情調査報告書	15. 8
127	海外の果樹産業ニュース 2015 年度版	16. 3
128	台湾における日本産食品の輸入規制強化にともなう日本産果実の流通への影響に係る調査報告書	16. 3
129	海外の果樹産業ニュース 2016 年度上期版	16. 10
130	世界の主要果実の生産概況 2016 年版	17. 2
131	海外の果樹産業ニュース 2016 年度下期版	17. 3
132	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	17. 3
133	海外の果樹産業ニュース 2017 年度上期版	17. 9
134	世界の主要果実の生産概況 2017 年版	18. 2

